んあ〜!? 谷川EP、「FEG危機説」を断固否定!!

kamipro

紙のプロレス

MMA & PRO-WRESTLING MAGA

enterbrain MOOK



大会速報、選手ブログは携帯で!
kamiproMove

2010
147
特別定価940yen

青木敗北! 北米の脅威に
日本の志士たちが立ち上がる!!

川尻達也

榊原信行
桜井“マッハ”速人
菊野克紀
アンデウソン・シウバ
ヴァンダレイ・シウバ
JJサニー千葉
ビビる大木
ファイヤー原田
サスケ×アンヴィル
語ろう! 山口日昇

出でよ、マット界の坂本龍馬!
幕末的格闘時代をサバイブせよ!!

開国するぜよ!

ANNIVERSARY 10th thanks! eb!



あれから20年・・・

三沢タイガー、ラストマスク登場!

当館にて展示販売中! ¥945,000-（税込）

1990.5.14東京体育館で試合中に脱ぎ本人が場外へ投げたマスク。
2代目タイガーマスクと訣別し、レスラー・三沢光晴として新たなスタートを切った
衝撃の瞬間から、ちょうど20年。
TV「開運なんでも鑑定団」にも出品（96年放送）。

三沢さんの追悼を兼ね、一周忌を過ぎる6月末までは予約が入った場合も
展示させていただく予定です。

※最後に投げたマスクに関しては諸説あるようですが、当館が今回改めて鑑定した結果、このマスクで間違いないと判断いたしました。

テレビ東京系
「開運!なんでも鑑定団」
に当館長が鑑定士として出演

高価買取・格安販売

マスク,ベルト,Tシャツ,ビデオ,本,雑誌,パンフ,CD,フィギュア他…50,000点!

闘道館 検索
詳しくはWebで!

▼携帯からも注文できます!

http://www.toudoukan.com 毎日夜9時、連日約100点新入荷商品を更新しています!!

〒101-0061
東京都千代田区三崎町
2-9-9ナガヤビル5F&6F
（JR水道橋徒歩3分）
03-3512-2080
午前11時～午後9時（年中無休）



格闘技プロレス買取販売!世界最強の品揃え!
闘道館

2010 No.147 CONTENTS

kamipro

表紙写真／タイコウクニヨシ



特集 幕末PON!

ニッポンの未来を考える!

MMA&K-1

004 川尻達也
010 桜井“マッハ”速人
014 青木真也の北米論
016 菊野克紀
022 小見川道大
026 榊原信行 元PRIDE代表
113 アンデウソン・シウバ
120 アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ
122 ヴァンダレイ・シウバ
126 ハファエル・コルデイロ
128 レナート・ババル
136 ファイヤー原田
140 才賀紀左衛門

BAKUMATSU

034 リング派orケージ派アンケート
036 シーザー・グレイシー
040 髙阪剛、ケージとリングの違いを徹底解説!
044 堀辺正史の幕末論
049 谷川貞治 FEG代表
054 『SRS-DX』から柳沢忠之を考える
060 菊地成孔「“ガラパゴス”とは何か?」
065 JJサニー千葉
070 ビビる大木
076 三又又三

PRO-WRESTLING

081 ハッスルとマッスル
中村祥之 ZERO1代表／鶴見亜門
097 女子プロ変態座談会 with 玉袋筋太郎&椎名基樹
104 鶴見五郎
130 アンヴィル with ザ・グレート・サスケ

Columns

103 椎名基樹の『サムライ三昧』
109 花くまゆうさくの『豆リングの汁』／金原弘光の『どこまでやるの!?』

友
論

am
に出
る。
しく

ージ
日本

12』
にな

終始
めの

直、
説自

は、

かぎ
MA

リン

にせ

はど
とい



日本の夜明け前
幕末的格闘技
北米黒船と開国論

青木真也が完敗を喫した4・17ナッシュビル決戦直後から、私ジャン斉藤もツイッター（アカウント名kamipro_saitou）上でのツイットキャスティング配信（ツイッターの音声配信サービス）や、トークイベントに出演して多くを語ってきているのですが、ファンや関係者間で「ケージorリング論争」の議論が活発化している。

興行的にも競技的にも文化的にも、北米の後塵を拝している"ジャパニーズMMA"の今後のあり方が激しく問われているのだ――。

議論のテーブルに出されたさまざまな意見を大きく二つに分けるとすれば、「日本のメジャー団体もケージ導入し、ルール等を含めて北米仕様にすべき」という開国派。そして「無理に北米に向き合うこともなく、日本のリング文化を高めるべきだ」という鎖国派になる。

そして5月29日に行なわれる『DREAM.14』が青木の敗戦を受けて、従来のリングではなく『DREAM・12』で使用されたホワイトケージのもと実施。こうして「鎖国か、開国か」の幕末的論争がさらに加熱することになった。

本誌は議論勃発直後から、リングやケージの一長一短を再確認する機会としながらも、単なる二元論に終始してはいけないと訴えてきた。求められるべきものは「日本は今後どうすべきなのか？」であって、そのためのリングorケージ論である。

谷川貞治氏や佐藤大輔氏のツイッターで展開された"ケージ否定から導き出されるリング万歳論"は正直、受け入れがたい。たとえば「ケージだと膠着する」という漠然としたイメージで語るんだから、もうその言説自体が膠着してるのだ。

リングだって膠着するし、ケージにだってエキサイティングな試合はあるよ！　一刻も早く開国すべきは、凝り固まった格闘技界の常識や前提なのかもしれない……。早く開国するぜよ!!

こんなふうに吠えてると、「『kamipro』はケージ派か……」と思われるかもしれないが、私ジャン斉藤にかぎっていえば、リングでもケージでも、どちらでもかまいません。しかし、ケージは興行的にも競技的にもMMAの代名詞になりつつあるのは否定できない。

本誌携帯サイトで連載中のブロガーMMA IRONMAN氏（ツイッターアカウント名Captude71）は、リングorケージ問題をビデオの規格戦争にたとえていかのようにツイートした。

「リング派、ケージ派、KOK派とかどれがおもしろいかじゃなくてシェア戦争で負けたんだからケージにせざるをえない。いくらベータで良質なソフトをリリースしてもVHSには太刀打ちできませんよ」

――そういうことなのだ。ケージや北米ルールではなく、北米そのものが黒船なのだ。この黒船に我々はどうように立ち向かえばいいのか。まだ救いがあるのは、まだリングは完全にベータになったわけではないということだ。秋にはDREAMが起死回生の大仕掛けを放つという未確認情報もある。

今回の議論は、ケージやリングだけに収まらず、日本格闘技界そのものを考えるものである――。



世紀の敗戦を受けて開国まで待ったなし！
日本MMAの〝維新の志士〟が出撃宣言!!

達也

「青木くんが負けたいま落ち着いてなんかいられないとにかくケージで闘いたい」

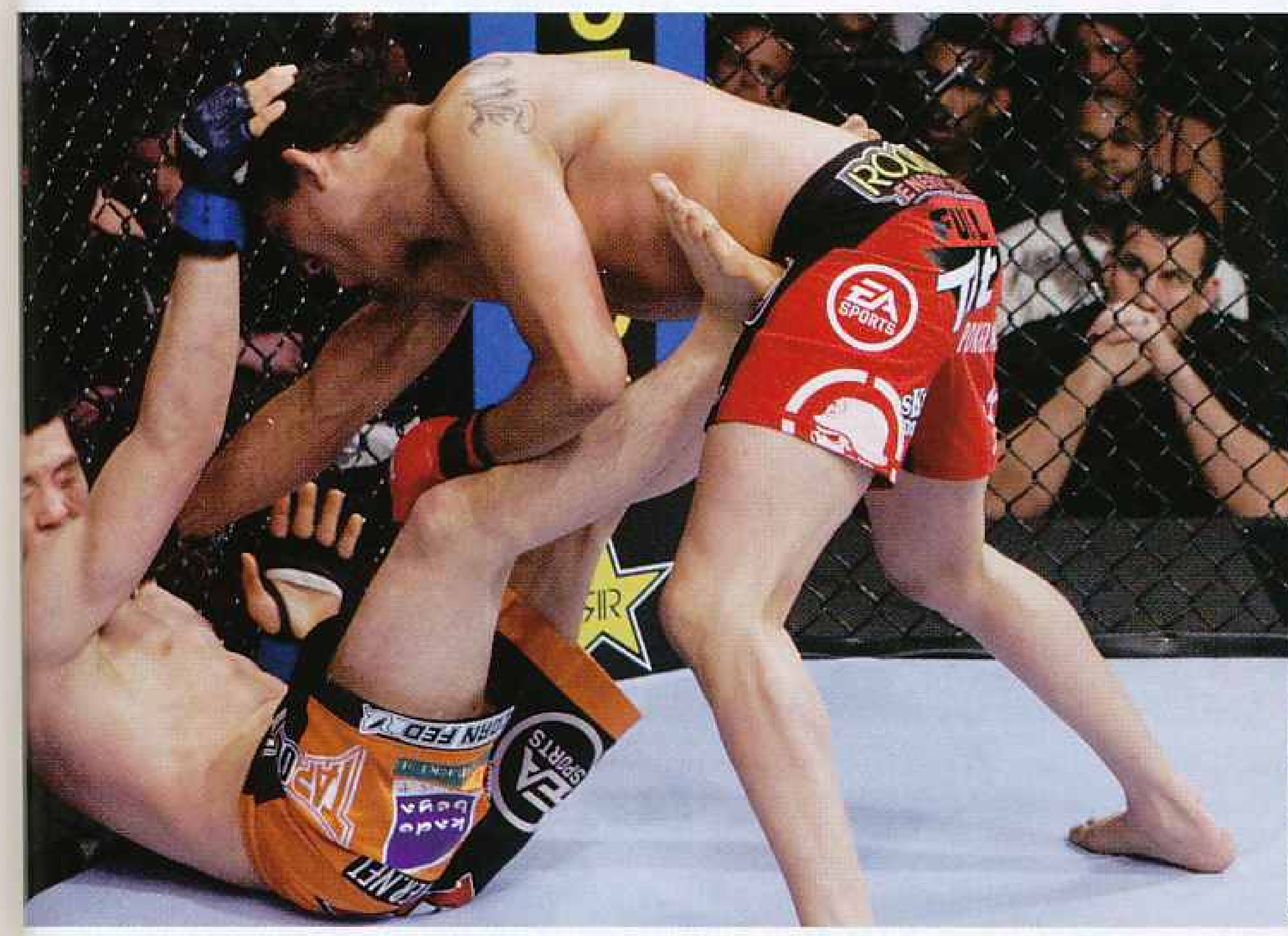


「俺がメレンデスをブッ倒すしかないでしょ!」
混沌とするDREAMのなかでいち早くアクションを起こした川尻達也。
しかし、現時点（5月14日）で5.29『DREAM.14』への出場は未発表。
日本MMAの新しい夜明けをこの男はどのように迎えようとしているのか?

聞き手／ジャン斉藤、鈴木佑　撮影／タイコウクニヨシ
試合写真／Esther Lin（STRIKEFORCE）、乾晋也

川尻

—前回のインタビューから2週間しか経ってないんですけど、あらめて青木真也vsギルバート・メレンデス戦を振り返って思うところはありますか？
川尻 まぁ、単純に「もっとMMAを突き詰めないと日本人は勝てないんだろうな」って思いましたね。オフだからって腹が出てるような状態で練習するんじゃなくて、常にベストコンディションを目指して高強度の練習をする必要性というか。
—いつでも試合ができるぐらいに？
川尻 そうですね。そもそもMMAファイターの絶対数が日本よりアメリカのほうが断然多いじゃないですか？ そのなかで島国の日本が対抗するには、僕は常に動ける状態をキープしておいて、そこから絞って闘ったほうがもっと強くなれると思うんですよね。
—5月の『DREAM・14』はホワイトケージでやることになりましたけど、それを聞いたときの率直な気持ちというと？
川尻 いや、もう「俺を出すしかないでしょ」って（笑）。このタイミングだったら、周りも僕のケージの試合が観たいんじゃないかなって思うし。
—ここで川尻さんが出なかったら、あまりケージの意味合いがないんじゃないかって気はしますよね。でも今日現在（5月5日）で出場予定は……？
川尻 ないです（笑）。
—ククククク。
川尻 だけど、僕は5月に出るつもりでずっと準備してきたし、ナッシュビルが終わってその気持ちはより強くなったし。最近、「日本最弱か？」とか言われてますけど、こういうときは守りに入ったら負けだと思うんですよ。「苦しいときこそ攻めてなんぼだろ！」っていう気持ちが強いんで、個人的には「もうやるしかない」って感じなんですけどね。





ケージの中でライバルを完封した相手は、かつて自分が死闘の末に判定負けを喫した男。ストライクフォースのスコット・コーカーCEOは「メレンデスとカワジリの再戦を組みたい」とコメントを残している。

「日本最弱」って言われてますけど守りに入ったら負けだと思うんです

川尻達也

—ですよねぇ。DREAMというステージって、青木さんと川尻さんが実質引っぱってきたじゃないですか。一方の雄である青木さんが負けたいま、川尻さんが何かしらを示す必要はあると思うんですよね。
川尻 はい。青木くんが負けたから僕がチャンスということじゃなくて、彼が負けて悔しいという意味で「俺がやってやりてえな、アメリカに一太刀かましてやりてぇな」っていう気持ちですよ。
—いま「ケージ・リング論争」みたいなものが、ファンや関係者のあいだで起こってます。川尻さんはどう思います？
川尻 そういえば佐藤大輔さんからメールが来ましたよ、「リングとケージ、どっち派？」って（笑）。
—何をやってるんですかね（笑）。
川尻 僕は「どっちでもいいです」って答えましたけどね。やっぱりどっちでも勝てるのがファイターだと思うし、秋山（成勲）さんとか岡見（勇信）くんは両方で結果を出してるじゃないですか？ どんな場所でどんなルールでも勝てるのが本当に強いファイターだと思うから、リングだろうがケージだろうが関係ないんじゃないですかね。
—ファンのなかには「日本もケージにするべきだ」という意見が多いんですけど、一部では「感情的にはリングのほうが」という声もあるんです。青木さんが負けたり、UFCが盛り上がってるなかで日本がケージに追従することに寂しさを感じてるというか。そういうファンの感覚って理解できます？
川尻 う～ん、理解できなくはないけど、いちファイターとしてはどっちでもいいですね。あの、べつにリングに対する思い入れはないんですよ。DREAMやPRIDE、修斗への思い入れはあるけど、リングがどうこうっていうのはないです。なんか「ケージだ、リングだ」って問題よりも、もっと僕も含めて選手はやるべきことがあるんじゃないかなって思うんですよ。単純にケージ対策にしても努力する必要があるだろうし。
—今後ファイターとして生きていくうえで、現状では「俺、リングが好きだからケージには上がらない」っていう選択は難しいですよね。
川尻 だから、どっちでもできる状態で練習もしてかないといけないし。そもそもリングやケージっていうのは主催者が決めることですからね。まぁ、「俺、ケージだったら出ない」って言えるくらいの力があればいいんですけど（笑）。
—ご自分にはまだそこまでの発言権はないですか（笑）。
川尻 でも、このタイミングでの金網はホント燃えますよね。
—ホント、川尻さんには出てほしいですけどね。対戦相手の問題もあるんでしょうけど。
川尻 「闘いたいならアメリカに来い!!」

って言われたりね（笑）。まぁ、いまは僕もDREAMも踏ん張りどころって感じで

A」という言葉がありまして……。
川尻 （さえぎるように）なんですか、ガ

対的に違いますよねぇ。あと、日本人は「努力が美しい」っていう精神論的なものが重

値の数が違うから練習相手に困ることはないだろうし、ジムが広いから周りを気に



「日本は練習場所がないからケージに向いてない」っていうのはおかしいですよ

って言われたりね（笑）。まぁ、いまは僕もDREAMも踏ん張りどころって感じですよね。あの、僕は誰が相手でも絶対勝つつもりでいるんですよ。ただ、これまでに五味（隆典）戦やメレンデス戦、大事なところで取りこぼしてるのも事実だから、「信用してくれ」とは言いたいけど「信用できない」って気持ちもわかるし。でも、いまは自分が変わったっていう自信があるから……とにかくケージで闘いたいですね。

――それでですね、最近「ガラパゴスMMA」という言葉がありまして……。

川尻　（さえぎるように）なんですか、ガラパゴスって？（笑）。ガラパゴス諸島？

――要はいろんな分野で日本は独自の文化が発展したけれど、世界標準とはかけ離れてしまったという意味で、日本のMMAもそういう傾向にあるんじゃないかって言われてるんです。たとえば、川尻さんもアメリカにセコンドで行ったりしたときに、環境とか含めてそういう違いを感じたりしました？

川尻　やっぱりジムの大きさや規模は絶対的に違いますよねぇ。あと、日本人は「努力が美しい」っていう精神論的なものが重視されがちですけど、アメリカはもっと効率を重視して、少ない努力で勝つための練習方法って感じがしますね。根本的に量より質というか。

――川尻さん自身もそういう練習にシフトしてます？

川尻　そうですね。フィジカルでいえば、もうダラダラ長く走るようなこともしてないし。練習を始めて間もない人は、基礎体力アップのために毎日10キロ走るとか必要だと思うんですけど、僕は一定の体力はついてるから、あとは競技に適した鍛え方に取り組んでますね。

――アメリカは日本とジムの質もかなり違うって言いますよね。

川尻　向こうはジムにケージとリングが二つあったりね。でも、AKA（アメリカン・キックボクシング・アカデミー）なんかはリングしかないんですよ。だけど優秀な選手を輩出してるわけだし、そういう面で練習環境がどうとか、そんなに関係ないんじゃないかとも思うんですよね。もちろんアメリカは強い選手の絶対値の数が違うから練習相手に困ることはないだろうし、ジムが広いから周りを気にして練習することもないでしょうけど。まぁ、なんにしろ「日本は練習する場所がないからケージは向いてない」っていうことはないと思いますよ。

――まぁ、そうは言ってもどうですか、川尻さんが茨城にメガジムを作るっていうのは？

川尻　また簡単に言いますね～。いや、そりゃ作りたいですよ。現役引退するまでは作る気はないですけど、やっぱりいろんな設備が整ってるっていう意味でメガジムは魅力ありますから。なかなか都内だと難しいでしょうしね。

――秋山さんのところも思ったよりは広くないみたいですね。まぁ、都内一等地の広尾にジムを建てること自体が凄いですけど（笑）。川尻さんが住んでる田舎のほうだと作りやすいんじゃないですか？

川尻　失敬な、ウチはそんな田舎じゃないですよ！（笑）。

――失礼しました（笑）。あと、最近のMMAの風潮として、観る側が「日本は世界から取り残されてる」って感じるのはなんでだと思います？

川尻　それはもう、PRIDEが休止したからじゃないですか？　PRIDEがUFCに取られたっていうことが、日本がアメリカに屈したっていうイメージにつながってるんじゃないですかね。

――そのPRIDE時代を引きずってるファンもまだけっこう多いと思うんですよ。たとえばDREAMのカード発表が遅れると、関係者や選手にすれば裏側の事情も知ってるからある程度は「しょうがない」ってなりますけど、ファンからすれば「なんで発表しないんだ」ってなるでしょ

うし。そういう部分で川尻さんは、PRIDEがなくなった瞬間から「もういままでの日本とは違うんだ」っていうふうに意識は切り替わりました？

川尻　あの、僕のなかで考え方がガラっと変わったのってエディ・アルバレスに負けてからなんですよ。あのときから誰かに飯を食わせてもらうんじゃなく、「自分でこのリングを盛り上げていかないと」って思い始めたんです。PRIDEのときはミルコ（・クロコップ）や（エメリヤーエンコ・）ヒョードルたちにおんぶにだっこって部分がありましたけど、いまのDREAMだと僕や青木くんがコケたらその存続自体が危うくなる。そういう意味で「自分たちがなんとかするしかない、もうそういう立場なんだ」って意識したのはあの試合のあとでしたね。

――プロ意識としてのターニングポイントになった、と。

川尻　そうそう。それによってもっと自分の本質を知ろうと思ったし、勝てる方法を探して練習してきたし。だから、青木くんが負けちゃったいま、とても落ち着いてなんかいられないですよ。そんなことしてたらDREAM自体がなくなっちゃうかもしれないし、そしたら『kamipro』もなくなっちゃうかもしれないでしょ？（笑）。

――可能性はゼロではないです（笑）。

川尻　こんなときこそ攻めないとダメでしょ。「ひよってる場合じゃねえだろ」って思うんですけどね。



昨年は魔裟斗のK-1 MAX最終試合の相手を務めた川尻。DREAMという自分の居場所を守るため、日本MMAを盛り上げるために他流試合にまで臨んだ川尻だけに、いまの「日本最弱」という風潮には忸怩たる思いがあることだろう。

川尻達也

――川尻さんのなかでは周りが落ち着いちゃってる感じがするわけですか？

川尻　なんか僕だけ熱くなってるかもしれない（笑）。やっぱりちょっと温度差は感じますよね。

――たとえば？

川尻　……現時点で試合が決まってないこととか（笑）。

――もうその話はいいです（笑）。で、今回は「幕末」特集として、鎖国か開国かで国が揺らいでる時代と、いまの日本のMMAの現状を照らし合わせてるわけなんですが、客観的に川尻さんはいまの格闘技界をどういうふうに見てます？

川尻　なんか、単純に「全部一つになればいいじゃん」って思いますけどね。

――ホントに!!

川尻　選手としてはそのほうが手っとり早いっていうか、観てるほうだって誰が一番強いかわかりやすいし。まぁでも、もちろんそれが難しいのもわかりますけどね。だから、せめてメジャーといわれるイベントだけでも結託してうまくやっていければいいんですけど。

――どうしてそうならないんですかね？

川尻　それは「俺が俺が」って人が多いからじゃないですか？（笑）。

――PRIDEとK―1が対峙してるときはビジネス的にも切磋琢磨してたと思うんですけど、いまはそういう状況でもないですよね。

川尻　その頃とは興行の規模とかも違うし、もういがみ合ってる場合じゃないって思うんですけどね。

――川尻さんがその思いを上に直訴するっていうのはどうですか？

川尻　……僕が東京湾に浮いてもいいなら（笑）。

――ダハハハ！　また物騒なことを（笑）。

川尻　まぁ、僕は嫁を守っていかなきゃいけないんでね（ニヤリ）。

――そういえば、なんで結婚式に『kamipro』のことを呼んでくれなかったんですか!?

川尻　いやいや、身内だけでやったんですよ。というか、呼んだってどうせ来ないでしょ？

――いやいや、行きますよ！　青木真也と一緒に。

川尻　それだけはマジで勘弁してください（笑）。

――どうですか、新婚生活は？　前にお宅訪問企画をお願いしたら断られちゃいましたけど。

川尻　……ていうか、あの企画にOKした人いたんですか？

――いましたよ、ターザン山本！さん。

川尻　いやいやいや、一緒にされても（笑）。まぁ、一人暮らしだったら全然いいんですけどね。

――なんでダメなんですか？　あ、川尻さんの普段のイメージと違ったメルヘンな家だったりするとか？

川尻　いや、普通になんのおもしろみもない家ですよ。僕のパネルが飾ってあるくらいで。

――自分のパネルを、ですか？

川尻　そうそう。テレビの上に飾ってあるんですけど、CMのときにちょっと上を見れば僕がいるみたいな（笑）。それは嫁が飾ったんですけどね。まぁ、おかげさまで順調ですよ。

――なんでも新婚旅行は沖縄に行かれたとか？

川尻　はい。僕が海外嫌いなんですよ。な

そういう意味で「自分たちがなんとかす
しょ。「ひよってる場合じゃねえだろ」っ
川尻　……僕が東京湾に浮いてもいいな
川尻　はい。僕が海外嫌いなんですよ。な

「アメリカ、アメリカ」って周りに言われるとイラっとくるんです

んか言葉が通じないとすべてにイライラするじゃないですか？　あと、嫁も僕も飛行機が苦手ってこともあって。

――でも格闘技を抜きにして、川尻さんって外国人に憧れてたりしませんか？　以前、ダン・ホーンバックルを意識した髪型にしてましたし、いまはヒゲを含めてニック・ディアスっぽいじゃないですか？

川尻　ニック・ディアス？　僕がニック・ディアスですか？　え、ニック・ディアス？（素っ頓狂な声で）。

――何度も連呼しないでくださいよ（笑）。前に川尻さんが「ニック・ディアスがカッコいい」って言ってたから、意識してるのかなって。

川尻　いやいや、違いますよ。パフォーマンスがカッコいいって言っただけで、べつに外見は意識してないですよ。僕の髪型は大沢ケンジさんをパクったんですから（笑）。

――あ、そうなんですか。ニック・ディアスみたいなワルっぽいのに憧れてのことかと思ってました。

川尻　全然違います！（キッパリ）。まぁ、ニック・ディアスくらい手が長かったら僕ももっと強かったとは思いますけどね……。

――髪型と関係ない話になってますね（笑）。外見の話でいうと、今回の坂本龍馬のコスプレはどうでした？

川尻　ああ、意外と楽しかったですよ。

――川尻さんは「趣味が格闘技以外にない」ってことでしたけど、今回をきっかけにコスプレっていうのはどうですか？　川尻〝自演乙〟達也みたいな（笑）。

川尻　そうですね、また『kamipro』でやってください（棒読みで）。

――なんか投げやりな口調だな～（笑）。で、やっぱり奥さんの『kamipro』登場はNGなんですか？

川尻　絶対無理です！（キッパリ）。

――でも、『情熱大陸』のテレビ取材だったら出演OKしますよね？



かわじり・たつや■1978年5月8日、茨城県出身。04年修斗ウェルター級王座に君臨。PRIDEを経て08年からはDREAMを主戦場とする。09年7月には魔裟斗のK-1 MAX最終試合の相手を務める。昨年大晦日のSRCとの対抗戦では横田一則に完勝。ツイッターでファンの質問にもちゃんと答えるマメな32歳。171cm、69.9kg。

川尻　……それだったら出すかもしれない（笑）。ていうか、話が脱線しすぎてません？

――まぁとにもかくにも、今年の川尻さんや青木さんの試合は凄く重要になってきますよね。

川尻　なんですか、その適当に締めようとする感じは（笑）。

――もう負けられないですよ！　川尻さん‼

川尻　うん、もう負けられないですよね。青木くんとのタイトルマッチにしろ、アメリカに行ってメレンデスとやるにしろ。個人的にどっちでもやるのはかまわないですけど。

――要は魔裟斗戦のときもそうですけど、DREAMや日本格闘技界が盛り上がるのであればどんな試合でも全然問題ない、と。

川尻　そうですね。あと最近思うのは、個人的に「アメリカ、アメリカ」って周りに言われるのがイラッとくるんですよ。「そんなすげえのかよ」っていう。

――やっぱり「うぜえ」って思います？

川尻　メッチャ思いますね。たとえばPRIDEのときに、『HERO'S』の選手のほうが知名度が高いことに対して、「テレビには出てないけどPRIDEのほうが絶対強い」って思ってたのと似てますね。みんなやたらとアメリカって言ってるけど、「絶対俺のほうが強い」って気持ちはありますよ。

――気持ち的には内に閉じこもらずに出撃するっていうことですよね。

川尻　そもそも閉じこもったほうがいいっていう人もいるんですか？

――やっぱりファンのなかには日本の文化として、リングはリングで別モノだから「開国はしないほうがいい」っていう声もありますよ。それもわかるんですけど、青木さんが負けちゃったあとに「あれは別モノだから」って扱うのも、気持ち的にひっかかる部分があるというか。

川尻　メジャーリーグに挑戦して「本業はソフトボールですから」って言ってるようなもんですよね、「ルール違いますから」って。

――川尻さんは『HERO'S』に持ってたような思いがアメリカにあるわけですね、目標みたいなものが。

川尻　まぁ、目標というか単純に気に入らないなって。

――なるほど。ちなみに奥さんからも『HERO'S』の選手のほうが有名よね」みたいなのはあったんですか？

川尻　いや、ないですよ。僕の試合や雑誌をパラパラ見たりするくらいで、格闘技自体にあんまり興味ないんで。まぁ、格闘家の妻として食事面のサポートとかは凄くやってくれてますけど、DREAM以外には興味ないですから。DREAMも僕が出てるからだし……なんかね、僕のことが凄く好きみたいですよ（笑）。

――あ～、いまのは原稿ではカットしますから。

川尻　ハハハハ！

――いやいや、笑いごとじゃないですから。

川尻　まぁ、とにかく「リングだ、ケージだ」って騒ぐよりも「そんなのに関係なく強い俺を見てろ！」って感じですよ……。というか、こんなインタビューでいいんですかね？（笑）。

――いいと思いますよ。「俺の嫁みたいにファンも俺を見てろ」ってことで（笑）。

【10年5月5日／都内・『kamipro』編集部にて収録】



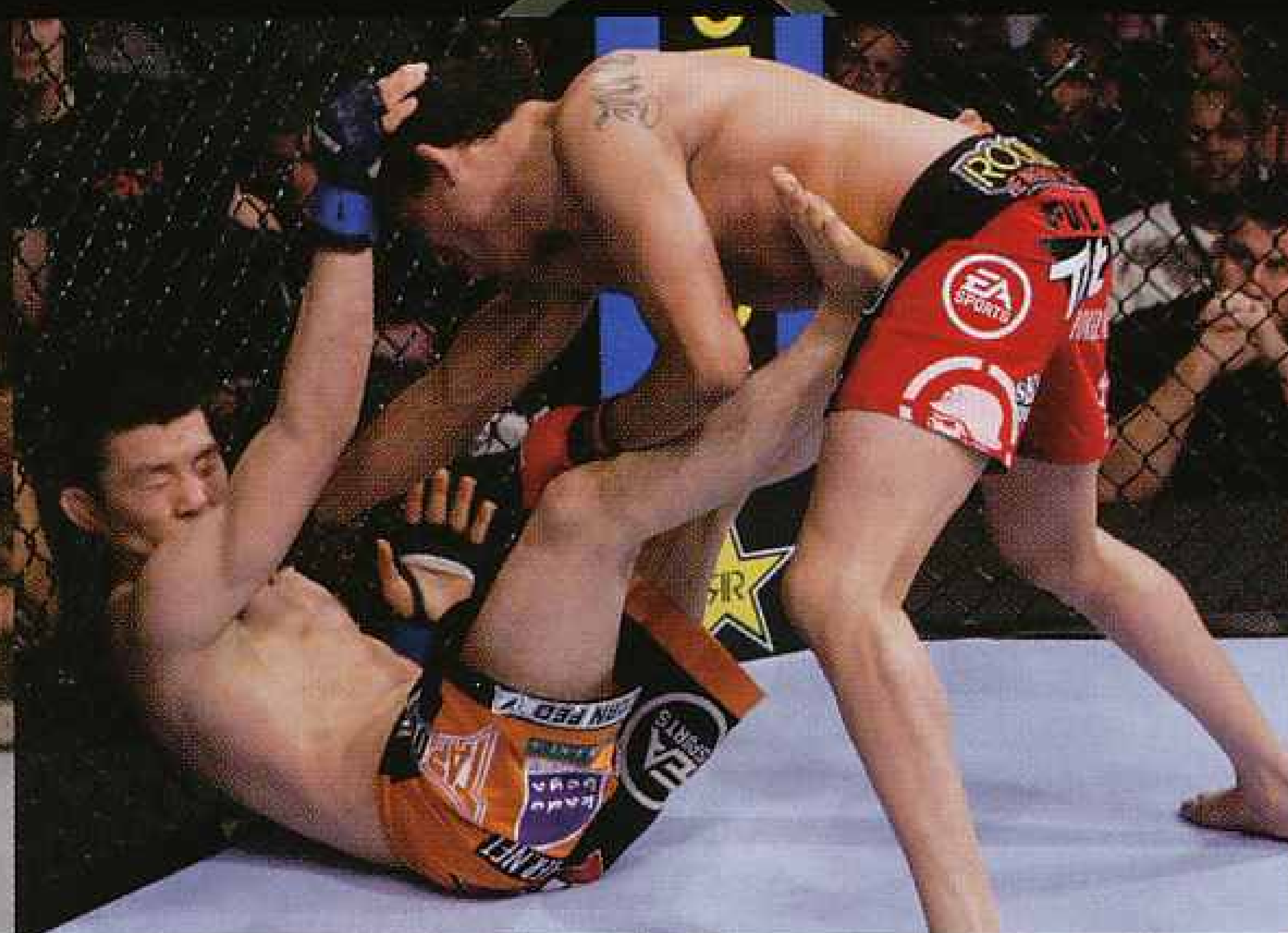
5・29 DREAM・14

ストライクフォース第2の刺客
〝暴力柔術〟ニック・ディアス戦へ

覚悟の出陣！

桜井"マッハ"速人

日本人みんな負けちゃってさ
もうケージで勝つしかないでしょう!

4.17ストライクフォース・ナッシュビル大会での青木真也vsギルバート・メレンデス戦に続いて、DREAMvsストライクフォース頂上対決第2弾というべきカードが実現する。5.29『DREAM.14』での桜井"マッハ"速人vsニック・ディアス戦がそれだ。メレンデスと同じシーザー・グレイシー軍団の一員でストライクフォース世界ウェルター級王者でもあるニック。この難敵を倒し日本格闘技界を守るべく、現在、マッハはシアトルに出向きトレーニングキャンプに入っている。そんなマッハに国際電話で意気込みを聞いた。

聞き手／堀江ガンツ　試合写真／乾晋也、Esther Lin（STRIKEFORCE）

—もしも〜し、マッハさん聞こえてますか？

マッハ　はいはい。聞こえてますよ。

—そちらはいま何時ですか？

マッハ　いまは朝10時すぎですね。

—ちなみに日本はいま深夜3時すぎです（笑）。

マッハ　ハッハッハ、大変ですね。

—じゃあ、このまま電話でインタビューを始めて大丈夫ですか？

マッハ　大丈夫ですよ。ただ、このケータイ、ジョージってヤツの電話なんですよ。

—あ、他人のケータイなんですか？　マッハさんのケータイは？

マッハ　なんか、どっかいっちゃって見当たらないんで。

—またなくしちゃったんですか（笑）。

マッハ　なんかないなって。ケータイは日本でもなくすからね。まあ、こうやって連絡も取れるし、大丈夫でしょう。ハッハッハッハ！

—じゃあ、ジョージさんのケータイで始めさせていただきます（笑）。試合まで3週間ですが、調子はどうですか？

マッハ　調子はいいっすよ。

—シアトルにあるマット・ヒュームのジムでの練習は、試合前の恒例となってますけど、今回はどんなことに重点を置いてトレーニングしてますか？

マッハ　普通ですよ。いつもどおり。でも、練習しかやることないんでね。疲れてはいるけど、調子いいですよ。

—では、5月29日のニック・ディアス戦に向けて順調に仕上がっている、と。

マッハ　普通ですけどね。大丈夫ですよ。

—そのニック・ディアス戦ですが、先日ケージで行なわれることが発表されました。これはマッハ選手が希望したとのことですが、ケージでニックと闘おうと思った理由はなんですか？

マッハ　いやあ……なんでしょうね？

—自分でもわかりませんか（笑）。

マッハ　まあ、ゲージ（マッハ用語のケージ。以下「ケージ」に自動変換）でもリングでも一緒だと思ってるんで。

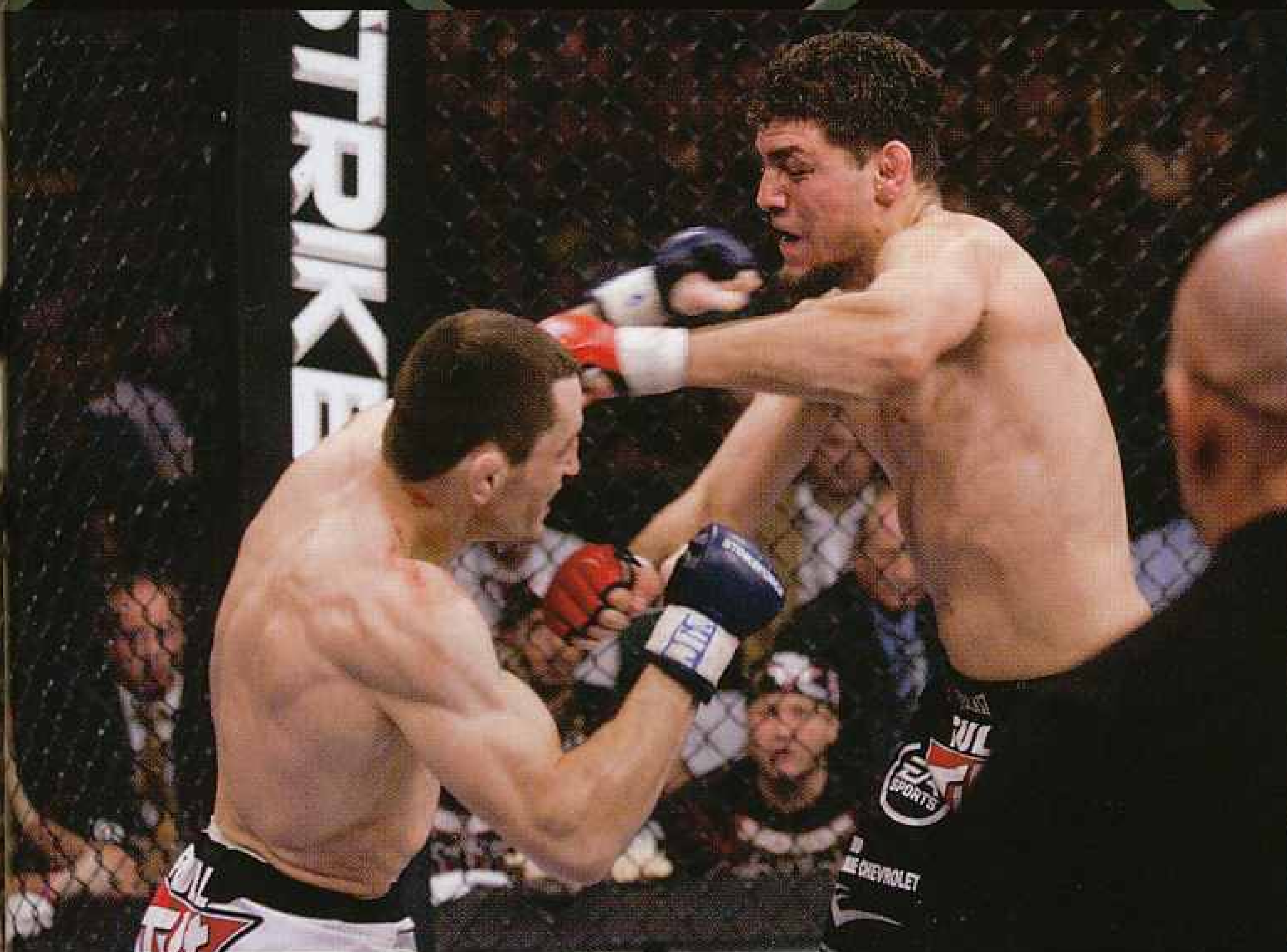
—ほう、一緒ですか。

マッハ　ケージで勝つことで、それが証明できるかなって。あとは向こうはストライクフォースっていう、ケージでやってる団体のチャンピオンなんでね、それに挑戦するっていう気持ちもあるし。あと、日本人がケージで負けが続いてるんで、やるしかないでしょう！

—やはりケージのチャンピオンにはケージで勝たなきゃっていう思いもありますか。

マッハ　そうですね。そこにチャレンジするってことなんで。まあ、リスクは高い

ですけどね。
——マッハさん、ケージで闘うのは、マット・ヒューズ戦（02年3月22日『UFC36』で行なわれたUFC世界ウェルター級タイトルマッチ）以来ですか？
マッハ　そうですね。
——あのときって、リングとケージの違いって感じました？
マッハ　感じましたね。
——やっぱり違いを感じてるんじゃないですか（笑）。
マッハ　いや、闘うってことはケージもリングも同じだけど、広さもかたちも違うんでね。UFCは広かったですよ。でも、DREAMのケージは狭いですからね。
——そうでしたっけ？
マッハ　ストライクフォースとかDREAMは狭いですよ。
——では、UFCは広さがやりづらかったけど、DREAMのケージはやりづらさはない、と。
マッハ　そうですね。でも、実際はどんだけ広いのかわからないんですけどね。
——広いかどうか、ホントはわからないんですか（笑）。
マッハ　正直、DREAMのケージを見てないんでわかんないし、それ以外にもわかんないこといっぱいあるんですけど、挑戦したいって気持ちで頑張りたいってことですよ！
——シアトルではケージ用の練習とかもされてるんですか？
マッハ　多少はやってますね。ケージに押しつけられたときの対応とか、立つ練習とかね。こっちはUFCに出てる選手とか、普段ケージで試合してる選手が多いんで。こっちでは普通の練習がケージの練習なんで、とくにケージのことばかり考えてるわけじゃないんですけどね。


2007年のPRIDE活動休止後、当時UFC参戦が噂され実際に会場でダナ・ホワイトと握手も交わしているマッハ。このときからケージでの闘いは視野に入っていたか。

昨年DREAMウェルター級GPでマッハを破ったザロムスキーも今年1月、ニック・ディアスに1ラウンドKO負けを喫している。打撃、寝技ともに強いニックはまさに難敵だ。

俺はDREAMの選手だからどっちが好きかと言えばリングが好きですよ

——マッハさんが、ニック・ディアスとケージでやるって言ったとき、ジムの周りの人は何か言ってましたか？
マッハ　べつに「ケージ？」って聞かれただけですよ。「そうなんだ、へぇ～」みたいな感じで（笑）。こっちは普通ですからね。俺はあんまりやったことないから、普通じゃないかもしれないけど。
——今回、ケージでニックに勝とうと思ったのは、先日の青木選手の負けというのも関係していますか？
マッハ　青木くんに勝ったメレンデスっていうのはストライクフォースの選手だし、ニック・ディアスと同じシーザー・グレイシーのとこの選手なんで、それはもちろんありますね。いまストライクフォースとDREAMが提携してやってるじゃないですか。そのなかでDREAMが負けっぱなしなんでね、やっぱりストライクフォースに勝たなきゃいけないでしょ。
——DREAM代表として負けられない。
マッハ　俺はDREAMの選手だから。やっぱりケージとリング、どっちが好きかって聞かれたら、リングが好きですよ。でも、DREAMを守るためには、負けっぱなしじゃダメだから。向こうのケージで勝たなきゃダメだなって思いますからね。
——青木選手の試合はライト級のトップ同士、そして今度のマッハ選手とニックの試合は、ウェルター級のトップ同士の試合ですもんね。
マッハ　だから連続で負けるわけにいかないし。「日本最弱」とかね、あんまり言われたくない言葉がまた出てきちゃってるんでね。青木くんが負けて、その前にはザロムスキーも負けて、「DREAMのチャンピオンって、こんなに弱いのか」って世界で思われてもいけないし。だったらチャンピオンを獲れなかった俺が、向こうのルールで向こうのチャンピオンに勝てば、DREAMとか日本人は弱くねえんだぞっていう証明にもなるんでね。リスクありますけど、本気出しますよ。
——青木選手とメレンデスの試合って、アメリカのテレビでご覧になりました？
マッハ　観ました。
——どんな感想ですか？
マッハ　やっぱりメレンデスの完勝でしたね。青木くんのいいところを全然出させなかったんで。やっぱり強いんだなって思いました。メレンデスも凄く成長してるなって思ったし、昔はただガムシャラに前に出て、勢いとスタミナで相手を倒すような感じだったけど、いまは試合がうまくなったし、無駄な動きをしなくなりましたね。
——予想とは違う展開でしたか？
マッハ　そうですね。あとシーザー・グレイシーのとこの選手はやっぱり強いですね。だってダン・ヘンダーソンとジェイク・シールズの試合だって、「ダン・ヘンダーソンの圧勝だろ」って思ってたのに、ふたを開けてみたらテクニックが全然違いましたもんね。
——2ラウンド以降はワンサイドでしたよね。

習なんで、とくにケージのことばかり考え

マッハ　だから連続で負けるわけにいかないよね。



マッハ　グレコ（ローマンスタイル）で二度オリンピック出てるダンヘンから、タックルをいとも簡単に決めてしまうジェイク・シールズって恐ろしかったですね。どっちがレスラーだよってね。

——そして今度はマッハさんが、そのシールズと同門で、同じくストライクフォースのチャンピオンであるニック・ディアスとやるわけですからね。あらためて大変な試合だなって思いました？

マッハ　まぁ、これまでもそういうヤツとよくやってきたんで。修斗のときはジェイク・シールズともやってますからね。だから強い相手とまたできるってことで、逆に楽しみですけどね。

——今回、ニック戦に向けてのコメントのなかで「もし負けるようなことがあったら、今回の試合が最後になるかもしれない」というものがありましたが。

マッハ　それぐらいの覚悟でってことですね。それぐらい意味がある試合だと思うし。

——それは相手がニックだからですか？　それともこのところの流れですか？

マッハ　もちろん流れもあるし、勝たなきゃいけない試合だってわかってるんでね。覚悟をもって挑むってことですよ。

——では、ニック・ディアス戦に向けて……。

マッハ　（さえぎって）あ、なんかジョージが「いつまで電話かかるんだ」って言ってるんですけど。

——そろそろ返せ、と（笑）。では、最後にあらためて意気込みを聞かせてください。

マッハ　頑張ります。それだけですよ。勝ちます！

——頑張ってください。期待してます！

【10年4月30日／国際電話にて収録】

さくらい・まっは・はやと■1975年8月24日、茨城県出身。96年に修斗でデビュー。修斗四天王の一人として世界ミドル級王座に君臨する。03年末からPRIDEに参戦。PRIDEライト級GP2005で準優勝。昨年、DREAMウェルター級GPではベスト4に終わった。171cm、77kg。

さかナンバーワン格闘技雑誌
州によって、ジャッジに微妙に違い
がずっといて、不正がないように常に
方向での減点法なのだ。ここが一番
れがいまはUFCというだけなんだ。

AOKI KAKUTOGI


[アオキ格闘技]

★玄人ぶった素人ライター
青木真也さん

青木完敗——。

“北米最強”なのか!?

されど青木の原稿を見よ!



まさかナンバーワン格闘技雑誌の『kami-pro』で記事を書けるとはっ！

だいぶ感動なのですが、いくら感動したところで格闘技は玄人ですがライターは素人。ということで、〝玄人ぶった素人〟にならぬよう正々堂々とライター素人として選手目線で書きたいと思いまーす。

さてさて編集長からの依頼は北米ルール。

何から語っていいのか難しいところなのですが、北米ルールを語るうえで外せないのがアスレチック・コミッションの存在なのだ。

アスレチック・コミッションはジャッジやレフェリーに代表される競技運営機関なのだけども、日本と大きく違うのは団体側に雇われていないという点。簡単に言うと、アスレチック・コミッションはお役所なのである。各州にアスレチック・コミッションがあって、試合が行なわれる地区のコミッションが試合を裁くということなのであーる。

日本の場合だと、レフェリーもジャッジも団体側なのでいくら公明正大にやっていても穿った見方をされてしまうけども、北米ルールでは団体とは別の組織が試合を裁くことで、そのような問題はなくなる。

いまの説明だと凄まじく完璧な組織のように思うかもしれないが、アスレチック・コミッションはMMA以外のボクシング等の競技も運営しており、つまりMMA専門の組織ではない。そこで噴出しているのが、MMAに理解がないジャッジの判定問題等なのである。実際に現地で闘ってみて感じるのは、非常にボクシング色が強い。そして大会が行なわれる州によって、ジャッジに微妙に違いが出てくるというのもポイントであーる。

実際、五味選手や宇野選手が出場したノースカロライナ州シャーロットのUFNでは試合当日も計量（体重がリカバリーしすぎないように）があったようだし、州によって微妙に違う。統一ルールのはずが統一でないという不思議な感覚だ。

ここまででアスレチック・コミッションとはどんなものかというのが大まかにわかってもらえたでしょうか。それでは試合を行なうまでの流れを追ってみましょう。

試合をするうえで選手はコミッションが要求するメディカル検査の結果を提出してライセンスを取得しなければならない。テネシー州のコミッションはそこまで難しいことはなく、指定された検査を日本でクリアしてコミッションに提出。日本との違いは目の検査が細かくあったくらいでさほど変わらずであるが、これはあくまでテネシー州でのことであり、他州で試合をした選手からは「大変だった」との声も聞く。州によってまちまちなのであろう。

そして試合の前日に選手のライセンス申請とセコンドのライセンス申請を行ない、ライセンスのお金を徴収されるのである。計量の前にメディカルチェックをするがこれも日本との差はない。

計量後にはルールミーティングがあり、全体での説明で試合を裁くレフェリーから細かいポイントを言われる。これもそれといって日本と違いはない。

試合をするうえでの日本との違いは、まず控室にはコミッションの人間がずっといて、不正がないように常に監視している。そして試合前のバンデージチェックはコミッションの人間の前で行なう。バンデージを巻いてからは水以外のものをとってはいけないのである。日本ではバンデージは選手の任意であるのに対して、北米ルールでは巻かなければいけない。

入場ではケージに入る直前、顔にワセリンをコミッションの人間に塗ってもらう。このときにシャツなどはすべて脱ぎ、試合をする格好でボディチェックを受けてケージに入る。

ここからが肝心なのだけど、日本との違いという点から見てみるのがわかりやすいと思う。

まず北米ではケージでの試合がある。これは団体によってかたちが違う。UFCはオクタゴン、ストライクフォースはヘキサゴン。リングはコミッションが認めたらオッケーのようだ。PRIDEラスベガス大会やIFLはリングであったし、アフリクションもリング（もうすべてありませんが……苦笑）

そして北米ルールはヒジでの攻撃が認められている。ストライクフォースではスタンドでのヒジ攻撃は認められているが、グラウンド状態での頭部へのヒジ攻撃は認められていない。これもルールに対して制限を設けるのは団体によって違うようだ。

まだまだある大きな違い。グラウンド状態における頭部への蹴りが一切認められていない。よって蹴り上げもなくなるし、サッカーボールキックもないし、ヒザ攻撃もなし。ただ、グラウンド状態の選手がスタンド状態の選手を蹴るのは認められている。

一番大きな違いは判定方法。北米ルールは極力ラウンドマストにする方向での減点法なのだ。ここが一番の違い。10対9・9の場合でも「10対9をつけます」ということ。全体を見て判定する日本と、ラウンドマストの北米判定が日本のファンからは難しく見えるところであると思う。

ここまでで説明したことが北米ルールの大まかなものである。

北米ルールと日本ルールとどっちのほうがいいと優劣を決めることはできないし、どちらがいい悪いで語るのはナンセンスであると思う。決められたルールの中で勝敗を決めるのがスポーツであるし、何が有利不利というのも一概に言えないものなのであるから、選手は決められたルールの中でベストをつくすしかないのである。

でも、僕は聞いてみたい。

北米ルールに統一するべきなのだろうか？　北米ルールに統一して日本の格闘技は繁栄するのだろうか？

ラウンドマストで微差を競う試合が増え、グラウンドでのトップキープに時間が割かれるような試合を観て日本のお客さんは楽しめるのだろうか？

プレイヤーである僕はおもしろくてたまらないし、凄さもわかる。でも、お客さんはわかるんだろうか？

北米ルールでお客さんが変わらず楽しめ日本のMMAが繁栄するのであれば北米統一も良いと思う。そうでなくて正論としてだけの北米統一であるならばやめたほうがよい。

結局、ビジネスとして繁栄しているところがメジャー。PRIDEは間違いなくメジャーだった。PRIDE時代はPRIDEルールがメジャールール。結局、メジャー団体のルールがメジャールールなわけで、それがいまはUFCというだけなんだ。

だからこそ日本は日本のMMAを大事にして、コツコツと日本MMAをメジャーにするよう頑張っていくしかないと思う。

そこで最後に日本を主戦場とする日本人選手がいかにして向こうで勝つのかということを考えてみたい。というか考えなくちゃならんっ。

まずはケージに慣れていかないといけないというのがある。

これは壁や金網際での攻防を重要視して練習するということが必要であろう（実際にやっている）。ケージを使った攻め、守りのバリエーションを増やし対応していくのが大切だと思う。

あとは試合場をいかにうまく使うかということである。相手をケージに押しつける。ケージから離す等々……常に考えてやっていくことが大切。

あと一番大切だと思うのは判定基準を理解するということ。皮膚感覚で「このラウンドは取った」と感じることができるというか、10対9・9を取ることができるかということが大切なんではないだろうか。

これは書くのは簡単だが、実際に身につけるには現地で試合を繰り返さねばだろうし、何回も試合を観て研究しなくてはいけないと思う。でも、結局思うのは格闘技としての本質をしっかりと見て強くなることが大切に思う。テスト対策も大切だけども格闘技としての強さ。最後に思うのは選手としては決められたルールで闘い、勝つというだけだ。以上、押忍!!

P.S.　またPRIDEルールやってみたいですね（観たいですよね？）。





――ＧＷは鹿児島へ帰って、九州各地で



ライト級第三の男が
DREAMに動乱の風を巻き起こす!?

「青木選手と川尻選手に言いたい 潰すならいまのうちだぞ」

現在進行形の空手最強幻想

菊野克紀

青木真也の敗戦により混沌としてきたDREAMライト級戦線。川尻達也の目も世界に向くなか、虎視眈々と浮上を狙っているのが“第三の男”菊野克紀だ。リングのみならず活動の幅を広げる“野心家”はいまいったいどんなことを考えているのか？　その胸中を直撃！

聞き手／長谷川亮　構成／鈴木佑　撮影／菊池茂夫　試合写真／乾晋也

――GWは鹿児島へ帰って、九州各地で活動されていたそうですね。

菊野　4月20日から5月6日まで16日間、も～目が回りましたね（苦笑）。僕、東京にいるほうがラクなんですよ。ほんとたくさんの方にお世話になってるので挨拶回りと、自分でやってる会社を前に進めるためであったり、セミナーやイベント、メディア出演もして、盛りだくさんの日々でした。

――なんでもチャリティプロレスにも参加されたとか？

菊野　あれはアクシデントです（苦笑）。僕はそんな気はなかったんですけど、悪役の止めに入ったら急に絡まれてしまって。でも金的食らって倒されました（笑）。ただ初体験でしたけど、いい経験になりましたね。「プロとしてお客さんを沸かせるためにどうしたらいいか」ということを一生懸命されてるんですよね。そういうところは本当に勉強になりました。僕らも強いのは当然ですけど、やはりプラスアルファというのが大事だと思うので。そういうのはやっぱり意識したいと思います。

――そういうプロ意識的なものって、菊野さんはいつから持っていたんですか？

菊野　僕はもともと柔道と極真空手でアマチュア競技をやってきて、チケットが売れようが売れまいが正直関係なかったんですけど、プロとしてファイトマネーをいただくようになってからは、やっぱり興行が成り立たないと僕らもお金をもらえないですし、お客さんに楽しんでもらわないとそのあとのチケットの売り上げやファイトマネーにも響くんで、真剣に考えるようになりましたね。

――DEEPで後楽園ホールに出たときなんか、完全に一角が“菊野シート”化して埋めつくされていましたもんね。



昨年4月、菊野は松本晃市郎を破ってDEEPライト級王者に君臨。試合前にすでにDEEP王者としての名刺を発注するほどの予告勝利だった。

「鎖国か開国か」と問われたら正直どっちでもいいって感じです

菊野　最高で330人集まったんですけど、あれは一人の選手が呼んだDEEPの後楽園大会の記録だったそうです。やっぱりチケットが売れるか売れないかというのは自分の価値だと思うので意識してますね。

――しかもそのなかには鹿児島から応援に来た人たちも含まれていたとか。

菊野　はい。それこそ極真のときの先生や木山先輩（木山仁。極真の元世界チャンピオン）も来てくださって。あとはこっちにも県人会とかがあるので、そういう鹿児島のつながりの方がやっぱり多いですね。

――帰省しての活動であったり普段の発言を見ても、菊野さんには地元愛の深さが感じられます。

菊野　やっぱり鹿児島に育てられましたし、大好きです。

――さて、今号の特集テーマは〝幕末〟ということなんですけど、いままさに日本格闘技界はリングの上位概念になってしまったケージに対し、鎖国すべきか開国すべきか判断を迫られていると思うんです。そこで現代の〝薩摩の志士〟ともいうべき菊野さんは、この問題についてどう思っているのか、と。

菊野　なるほど、『kamipro』らしいですね（笑）。うーん、鎖国したほうがいいのか開国したほうがいいのかは、正直どっちでもいいっていう感じです。僕は選手なので、たとえば青木選手や五味選手が勝とうが負けようが、これも正直どっちでもいいんです。僕が日本の格闘技界を盛り上げたいし、世界のトップになりたい。僕が最後に勝てばいい、そう思ってます。

――では菊野選手としてはケージであれリングであれとくに問わない、と。

菊野　どっちもいいところと悪いところがあるじゃないですか？　僕はアメリカのケージのルールには物足りない気持ちもあるんです。下からの蹴り上げがない、グラウンドでのヒザ蹴りがない、踏みつけがないというところだったり。やっぱりレスラーとボクサーが有利なルールですよね。〝たら・れば〟を言うべきではないでしょうけど、下からの蹴り上げがあれば青木選手もどうだったかわからないですし。だからどっちがいい、悪いというのは正直なくて、ただ、いまは向こうがメジャーとされていて資本も選手も集まっている現実があるから、いずれ向こうで闘って勝ちたいという気持ちはあります。

――その青木vsメレンデス戦についてはどんな感想をお持ちになりましたか？

菊野　さっきの〝たら・れば〟じゃないですけど、ルールにうまくやられたというか。メレンデスもガンガン倒しにいったかというとそうではなくて、ルールを最大限利用して青木選手の強さを封じ込めた。これは青木選手も言ってると思いますが、ルールありきの競技だし、結果メレンデスが強かった。メレンデスのゲームだったし、完璧だったと思います。

――同じDREAMの仲間が負けて悔しい思いはありませんでした？

菊野　僕はずっと青木選手と闘いたいっ

青木選手と闘ったら武士が刀で斬り合うような感覚を味わえると思う

て言ってるし、やっぱり青木選手が勝ち続けてくれたほうが勝ったときの価値が上がるじゃないですか？　だからそういう意味で勝ってくれたほうが〝おいしい〟っていうのはありましたよね。まして大晦日からの流れもありましたし。青木選手というのはヒールじゃないですけど、大魔王的というか（笑）。だから勝ち続けてほしかったっていうのはありますけど、負けてしまったことに関してはべつにどうという感情はないです。

――たとえば川尻選手の場合はこの結果を受けて青木戦よりまず打倒メレンデスを優先しなければ、という気持ちになっているようですけど、菊野さんも標的が青木選手からメレンデスに移るということはないですか？

菊野　それがないんですよね。僕のスタイルっていうのは〝一撃〟を目標にしてるんです。「カーン！」とゴングが鳴ったら何もさせず、最初の一発で相手を倒したい。それが僕の理想で、青木選手の理想もおそらくそういうものだと思うんです。まさに〝一撃の寝技〟を使う選手じゃないですか。相手に何もさせず、自分が一方的にパタっと極めるっていう。廣田瑞人戦がそうだったと思うんです。そういうスタイルというのが共感を持てる部分もありますし、あのスタイルに勝つことで僕の打撃の一撃を試したいというか。凄く緊張するんです。どっちが先に自分の一撃を持ってくるのか。本当に武士が日本刀で斬り合うような感覚を味わえるんじゃないかなって。だからいつか青木選手とそういうヒリヒリした、どっちかが一瞬でやられるっていう試合をしたいと思いますね。

――では、メレンデスより青木選手にこだわりたい、と。

菊野　願望としてはそうですね。そういうゾクゾクする闘いをやりたい。メレンデス選手とやるときはたぶん削り合いになる気がします。

――そういう思いがあるのであれば、なおさら青木選手の敗戦は残念だったんじゃないですか。

菊野　そうですね、おいしさはちょっと落ちたかなっていう。でもいまでも青木選手のことを尊敬してますし、青木選手とやりたいっていう気持ちはまったく変わらないです。

――ではDREAMライト級トップ2のもう一角、川尻選手についてはいかがでしょうか？

菊野　なんか「自分とやるのは100万年早い」って言われてたみたいで（笑）。

――あぁ、川尻さんがPPVの解説で菊野さんに対して言ってましたね（苦笑）。でも、菊野さんも川尻さんに対してはわりと辛らつなところがないですか？

菊野　いや、僕はべつにそんな気はないですよ（苦笑）。でも、僕のほうがアンドレ・



Katsunori
KIKUNO

ジダ戦のときなんかは下っ端ですし、あまり大人しくしててもおもしろくないなっていう。やはり下の者は上の者に噛みついてナンボだと思いますし。もちろん川尻選手もPRIDEからずーっと頑張ってきた選手だし、結果も出してるから尊敬してます。あとは好みの問題で、さっき言ったような試合をしたいから僕はよく青木選手のことを口に出しますけど、もちろん川尻選手も倒したい相手の一人です。

――では、弘中戦も幻想をよみがえらせる勝ちっぷりでしたし、次回あたりで川尻戦を？

菊野　いえ、まだ僕が川尻選手とやるには役不足というか。僕はまだ、たかだか2勝1敗なんです。川尻選手はもう何戦してるかわかりませんし、もうちょっと実績を積んでからのほうが失礼に当たらないんじゃないか、と。まだ倒すべき外国人とかいると思うんで、僕はそれからでもいいです。それに川尻選手のほうも僕とやりたいと思ってほしいですね。世間も求めて、川尻選手も僕とやりたい、勝ったらおいしいと思う状態でやりたいです。いまはたぶんまったく思ってないんじゃないですか（苦笑）。

――そこは謙虚な感じなんですね。

菊野　でも、たとえばあと僕が1勝したらどうかっていうのは思います。あと僕が1勝して、川尻選手がまだ物足りないっていうのかどうかは見たいですね。だから次が勝負じゃないかなとは思ってます。次もう一人倒してから、世間と川尻さんがどう思うのか。3勝1敗になれば、しかもジダ選手と勝てなかったけどアルバレス選手、弘中選手、そんなに役不足でもなくなるんじゃないかと思いますし。それに僕もまだ自分の理想には全然届いていないんです。だから正直、あとになればなっただけ彼らには不利になると思ってます。「潰すならいまのうちだぞ」と（笑）。僕はそう思ってますね。

――今年は7月のDREAMに出て、10月のDEEP50回記念大会でタイトルの防衛、そして大晦日に出るという青写真をブログのなかで明かしていましたね。

菊野　出たいですね、それで勝ちたいです。今回も鹿児島に帰ってたくさんの人たちに啖呵を切ってきたので、大晦日は絶対出ます。それに僕が7月勝つのを前提で、夏のイベントの企画とかも進んでるんですよ（笑）。だから恐ろしいですけど、凄くいいモチベーションになってます。正直アルバレス選手とやったときは〝全力を出せばいい〟みたいにプレッシャーから逃げた部分があって。それって凄いラクなんです。〝絶対勝たなきゃいけない〟という状況と、〝全力を出して結果は問わない〟っていうのは、もう天と地の差がある。アルバレス戦のときはちょっとそっちへ逃げてしまって、全然力が出せなかったので悔しかったです。

――〝全力を出せばいい〟というほうへ逃げてしまうと、かえって力を出せない、と。

菊野　出せなかったですね。それで弘中戦のときは追い込んで追い込んで、凄いプレッシャーのなか試合をして勝てたんで、いい自分も出せたし、ちょっとつかめた部分はあります。

――やはりプレッシャーから逃げず向き合うことが必要なんですか？

菊野　そうです。だから今回もそういう



意味で、わざといっぱいプレッシャーをいただいてきました（笑）。次も真正面からプレッシャーを受け止めて、緊張して臨みたいと思います。そのやり方っていうのはアルバレス選手に負けて弘中選手に勝つことで違いというのがわかったし、あとは本を読んだりしてわかりました。

――本というのはどんな本を読んだんですか？

菊野　『Ｎｏ・１理論』っていう本で、「脳が身体を支配している、だからいいパフォーマンスを生み出すには脳をうまく使えるかどうかだ」と。たとえば好きなことと嫌いなことだと、好きなことのほうが全然いいパフォーマンスが出せるじゃないですか？　あと、脳はイメージを実行しようとする。自分がイメージしたとおりに脳は働くらしいので、だから僕は今回ずっと弘中選手のアゴとレバーを打ち抜くイメージをしていたんです。それでそのまま試合に臨んだら、本当にそのとおりになって。自分のイメージを実践しようとして身体が動くみたいなんです。それを精神論ではなく科学的にそういう仕組みになっているというのをその本が教えてくれたので、いままでの僕の感覚や経験と合致して、「なるほど」と。

――お話を聞いていると、なんだか須藤元気さんみたいですね（笑）。

菊野　先日、元気さんとも雑誌の企画で対談させてもらったんですけど、同じようなことを言ってました。「思いは実現する」、これは成功者がみんな言うことです。「〜する！」と強く思い、言葉に出し、行動すれば現実化するとか、だいたい皆さんおっしゃるので、やっぱり真実というか。

――では、たくさん思ったりたくさん口にすることで、現実のものになる、と。

菊野　そうですね。そうすることで自分の力がそのぶん出るし、周りもそういうふうに動いていくんだと思います。そうすると運勢だったり気も含めて、いろいろ引き寄せるんじゃないですか。

――何かそういう〝言葉のチカラ〟、つながりではないですけど、菊野さんは講演活動も積極的に行なっていますよね。これについてもお聞きしたいのですが、具体的にどういったものなんですか？



昨年の10.25『DREAM.12』ではアルバレスに肩固めで敗戦を喫した菊野。その敗因を「緊張から逃げて楽しもうとしてましたね。心と身体がリンクしてなかった」と語る。

菊野　たとえばこないだは建材会社の1000人ぐらい集まる会に招待していただいて、これは知り合いのツテで「話をしてくれないか」と言われたんですけど、その前は税理士さんの集まりに呼んでいただいたり。そうやってちょっと興味を持った方に声をかけていただいて、それでまた評判がよかったりすると呼んでいただいたりとか。経営者の方たちにお話ししたりするんですけど、僕は経営のことなんかお話しできないので、自分が格闘技を通して学んだこと、感じたことをお話しします。それこそ今回のようなことですよね。前回負けて今回勝って、なんで勝てたのか、なんで負けたのか。そういうさっきの〝思いを実現する〟っていうことは経営者の方も「ワクワクするような会社のビジョンを持たないと社長はダメだ」とか、だいたい同じようなことを言っているので、それを格闘家の立場からお話しして、皆さんに感じてもらうっていう感じです。

講演会の途中で話に詰まったら「質問タ〜イム！」って逃げてます（笑）



そして今年の3.22『DREAM.13』で〝第三の男〟の座を賭けて弘中と対戦した菊野は、1Rで鮮烈KO勝利！　極真幻想を見事に復活させ、ライト級トップ戦線に生き残った。

――菊野さんは昔から話上手だったんですか？

菊野　いやいやいや、正直話はいまでもヘタですよ。でも何ていうんですかね……テンション（笑）。やっぱり経営者の方たちって、僕みたいな若造が理論的に話すことはあまり求めてないんですよ。だからもう、暑苦しくブサイクに、土臭く。途中で話に詰まるんですけど、そしたら手を挙げながら「質問タ〜イム！」ってやって、お題をください、と（笑）。

――三日月蹴り以外にそんな技も持ってるんですね（笑）。

菊野　ハハハハ。もう、ヘタにカッコつけないで、そういう逃げ道を覚えました（笑）。母校の30周年記念式典でやったときも1000人ぐらい子どもがいて、ちょうどインフルエンザ対策でみんなマスクをしていたんです。そしたら表情が見えないからリアクションがわからなくて圧倒されちゃって（苦笑）。そのうえ、その人数だからテンパっちゃってワーってなって、もう開始5分か10分ぐらいで「質問ターイム！」って（笑）。なんとかテンションで乗り切って最終的には持ち直したんですけど、講演としては最低でしたね（苦笑）。

――でもそういう経験もプロとしてきっと役に立っているんでしょうね。マイクアピールなんかを見ても堂々とされてますから。

菊野　それもさっきのイメージと一緒で、勝ってマイクパフォーマンスするのも、そこで言うことも一語一句決めているんで

にすることで、現実のものになる、と。評判がよかったりすると呼んでいただいに感じてもらうっていう感じです。こで言うことも一語一句決めているんで

僕もマザー・テレサのように人を感動させる何かを作りたいんです

Katsunori
KIKUNO

す。それを考えるっていうのは勝つことが前提なわけで、脳みそにいいことなんです。だから〝こう言ったら盛り上がるかな〟とか、いつもそういうことを考えてますね。たとえば次勝ったら、「そろそろ100万年経ちましたかね」ぐらい言ったらおもしろいかな、とか（笑）。

――川尻選手の「100万年早い」発言に対するレスポンス、と（笑）。講演のほか社会的な活動としては会社も経営されていますが、これはどんな会社なんですか？

菊野　「株式会社菊野克紀」といいまして、昨年6月に立ち上げました。メインの収入はスポンサー収入で、試合のときにスポンサーさんを募って広告収入をいただいています。あとはTシャツなんかのグッズを販売したり、イベントの出演料、格闘技セミナーや講演をしたときの講演料だったりです。

――設立のきっかけというのは？

菊野　活動の幅を広げていきたかったんですけど、やっぱり自分一人じゃ限界があって、動いてくれるスタッフが必要だったんです。たとえばスポンサーさんも僕が直接お金の話をするとちょっとやりにくいじゃないですか？　そこであいだに入ってくれる人がほしかったし、お金や税金の管理もちゃんとしたかった。僕は〝ヒーローになる〟っていうのを掲げていて、そのためにチャンピオンになりたいんです。でも、それにはただ強いだけでなく、いろんな力が必要になる。もちろん資金というのも必要で、そのために会社を作っていろんな活動をしていきたい、と。たとえば鹿児島にもおいしいものがけっこうあるんですけど、前に出るのが苦手で遠慮しがちな県民性だから、まだあまり知られてない。そういうのを紹介するネット販売を会社でやりたいと思ってますし、あと東京に鹿児島居酒屋を作りたいんです。そうやって鹿児島の名産や鹿児島のイベント、鹿児島の頑張ってる人だったりをどんどん紹介して縁をつなぐっていうのをやっていきたいですね。やっぱりそういうのは会社がないとできないので。

――いち格闘家に収まらないビジョンがあるんですね。

菊野　実際一人給料を払ってるスタッフがいるんですけど、試合がアルバレス選手に負けてから弘中戦まで5ヵ月空いて、そのあいだスポンサー料が入らないから相当出費も重なりましたね。会社の赤字が100万ぐらいになって、僕は何ヵ月も給料が出なくて。実際、たいへんでしたね（苦笑）。でもいまはこないだ勝って取り戻して、けっこうまた下地ができてきたので、いい感じだと思います。



きくの・かつのり■1981年10月30日、鹿児島県出身。05年12月にプロデビューをはたし、以降、DEEPを主戦場に実績を積む。09年にはDEEPライト級トーナメントを制し王者に君臨。DREAMでは09年にアルバレスに敗れるも、10年3月の弘中戦で見事に復活をはたした。170cm、70kg。

――会社としてもけっこう危機だったんですね（笑）。

菊野　だからホント弘中選手との試合はめちゃくちゃ緊張しました。あれで負けたら倒産ですから、ホントに危なかったです（苦笑）。

――そんな超格闘家の菊野さんは、自身の将来像をどんなふうに見据えているんでしょうか。世界平和を訴える姿を見ると「はては政治家？」なんて思ってしまうのですが。

菊野　最近よく言われるんですよね、「知事になるんでしょ？」とか（笑）。でも会社にしろ政治にしろ、日本や世界、未来をよりよくするための手段だと思うんです。だから手段の一つとして政治っていうのもあるんだろうけど、いまのところその手段をとろうとは思っていません。政治家になるというのは手段であって目的ではない。僕にとってはマザー・テレサやマイケル・ジャクソンみたいに人を感動させて影響力を持って活動する人がヒーローで、僕もそういう何かを作っていきたいなと思ってます。ヒーローといっても相手は貧困だったり戦争だったり、そういうボヤっとした何かですけど、そういうものと闘っていきたい。だからアフリカにも行きたいと思ってるんです。僕たちは平和で豊かな日本に住んでるけど、一方で飯も食えない、生きていくことすらできない子どもたちがいる。このギャップというのがなんかやりきれないんです。じゃあ放っておくのがしんどいんです。どうにかするために「いまから力をつけていかないと」って思っています。

――なんだか最後は地球規模の壮大な話になってしまいました（笑）。


菊野　僕はマンガの読みすぎなんですよ（笑）。でも、うれしいですよね。1年前はこういう話をしても興味を持ってもらえなかったり聞いてもらえなかったりしたんですけど、試合で結果を出して会社やいろんな活動をするなかで、少しずつ聞いてもらえるようになったので。いま僕はサインをするとき、いつも〝輝魂〟って書くんです。みんな意味がわからないんですけど、僕のなかでは魂を輝かすこと、それがヒーローになることだと思ってるんです。それもいつか、何年か経っても伝わればいいなと思ってます。

――それでは最後にまた格闘技の話へ戻って、次戦に向けての意気込みをお願いします。

菊野　7月のDREAMに出たいと思ってます。僕はわかってるんです。会社もヒーローも大事だけど、まずは勝たないとすべてが始まらない。だから僕の一番の仕事はアライアンスで練習をして勝つこと。そこは絶対ブレないようにしています。前回の敗戦を経てつかんだものもあるし、まだまだ強くなって、次もまたいいものが見せられると思います。

【10年5月7日／都内・A－SQUAREにて収録】

──前回のインタビュー（『kamipr
あったし、試合当日は練習してた仲間が
くだろうっていう考えだったんですよ。
小見川　はい、やってくれてます。



アメリカのクソッタレ！日本はもっとクソッタレ!!

日本の暴れ獅子はいったいどこへ向かうのか──？

小見川道大

またもやこの男のクソッタレ節が炸裂!! 09年大晦日の高谷戦、さらに吉田秀彦引退興行でのミカ・ミラー戦と、格闘技界がドタバタとしているなかで、小見川は着実に強豪を破り実績を積み上げている。そんな小見川がこの先に目指すものとは？さらに青木敗戦から広がる波紋についても聞いてみた。

聞き手&撮影／細田大志　構成／松下ミワ

―前回のインタビュー（『kamipro』No.145）ではミカ・ミラー戦に勝ったら〝美人すぎる市議〟こと藤川優里さんとの対談という話もあったんですが……。

小見川　ハハハ、したかったですね（笑）。

―今日は残念ながら単独ということで（笑）。ブログを拝見したらゴールデンウィークを満喫してたようですね。

小見川　合宿先の菅原道場の近くで仲間とバーベキューしたり、自宅の引っ越しをしたりして慌ただしかったですけど充実してました。

―しかし4月には吉田秀彦選手の引退興行があって、普段の興行後とは違う雰囲気もあったんじゃないですか？

小見川　とくに何も変わらないですね。普通に試合が終わってホッとした感じで。

―ホッとしたというのは？

小見川　やっぱりいろいろ試合前には葛藤とかあるじゃないですか。試合に勝って終わってそれで一件落着みたいな感じで、なんだろう……相手の怖さっていうよりも勝負に対して負けるときの怖さだったりとか、いろいろめぐりめぐって試合するわけじゃないですか。それが勝利したことで終わって、ホッとしたって感じですね。

―大晦日から紆余曲折あって、将来を見据えたうえでもミカ・ミラー戦は負けられない状況だったと思いますが。

小見川　本当そうですね。それはありました。単純に負けられないっていうのはあったし、試合当日は練習してた仲間が負けてたのもあったんで、硬くなったところもあったかな。

―長南亮選手まで負けてしまって、いつも以上にピリピリしてた感じですか？

小見川　それはありましたね。

―試合後は日沖発戦に続き自分に唾を吐くようなコメントでした。

小見川　相手はだいぶ俺のことを研究して勝ちにきてたみたいで、なんかお父さんまで連れてきてたらしいですよ（笑）。俺としては身長差は練習したとおりにいくだろうっていう考えだったんですよ。打撃でいこうと思ったんだけど、実際は思った以上に距離感が違って苦戦しちゃいましたね。彼の映像を観て、寝技の得意な選手だからグラウンドに付き合わないで打撃でいこうと思ってたんですけど、試合中に考えが逆転して寝技でいこう、テイクダウンしていこうと。

―もう、塩漬けにしてやろう、と？

小見川　塩漬けっていうよりもポジションを取ってうまくやろうって。1ラウンドでグラウンドになったとき力がそうでもなかったんで作戦変更っていうか。そのへんは臨機応変にいけるタイプなんで、それがうまくできたかな、と。ただもうちょっと殴りたかったですね。

―試合を観ててもそれがヒシヒシと伝わってきました（笑）。

小見川　殴りたかったんですよ、本当に。クソって。

―それで〝続・クソッタレ〟ですか？

小見川　そうですね。またあれで気合い入った感じがしますよね。今年一発目だったし自分のなかであんなもんじゃない、まだまだいけるなと思ってたんで。

―気になるのは小見川選手の次の試合ですけど、決まりましたか？

小見川　全然決まってないですね。

―それは選手としてモチベーションを保つのに苦労しませんか？

小見川　そんなことないですよ。俺としては試合に勝ってきてるし、周りは自分の意思を尊重してくれてるんで、やりたいところ、やりたい相手で試合を組んでくれると思うので、モチベーションが切れるっていうことはないです。

―では小見川選手の希望に沿った試合が組んでもらえそうだ、と？

小見川　はい、やってくれてます。

―目指すところはやはり海外になりますか？

小見川　国内で出るところないですもん。どこかありますか？　俺は63キロに落とせないからDREAMも無理だし。日本の階級を世界基準に変えてほしいですよね。WECもそうですけど、海外はけっこうしっかりしてる団体が多いと思うんで、日本もしっかりしてほしい。もちろん日本に強い選手も来てると思いますけど。

―ゴチャゴチャやってるなよ、と。

小見川　そうそうそう（笑）。なんか本当しっかりしてほしい。選手がかわいそうっていうか。体重とかも当日まで何キロでやるかわからないし、世界中どこいってもそんな大会ないですよ。

―そうなると、小見川選手が見据えているところはやはり北米ですか？

小見川　はい。まぁ強い選手とやれればどこでもいいですけどね。

―なるほど。ここ数ヵ月のうちに北米では青木真也選手や五味隆典選手ら日本の主要選手が立て続けに負けてしまいましたが、小見川選手はその敗戦をどうとらえていますか？

小見川　う～ん……。アメリカだからアメリカ人をチャンピオンにしたいんだろうけど、このクソッタレ精神が活きるというか（笑）。とりあえず自分が一番になりたいっていうだけですね。

―たとえば小見川選手がWECに出るとして、これまでWECに参戦してる日本人選手を見ると勝ち越している選手がいまだにいなくて、一番いい戦績でも水垣偉弥選手の2勝2敗。大晦日に闘った高谷裕之選手もWECでは2戦2敗ですし、大沢ケンジ選手、前田吉朗選手、田村



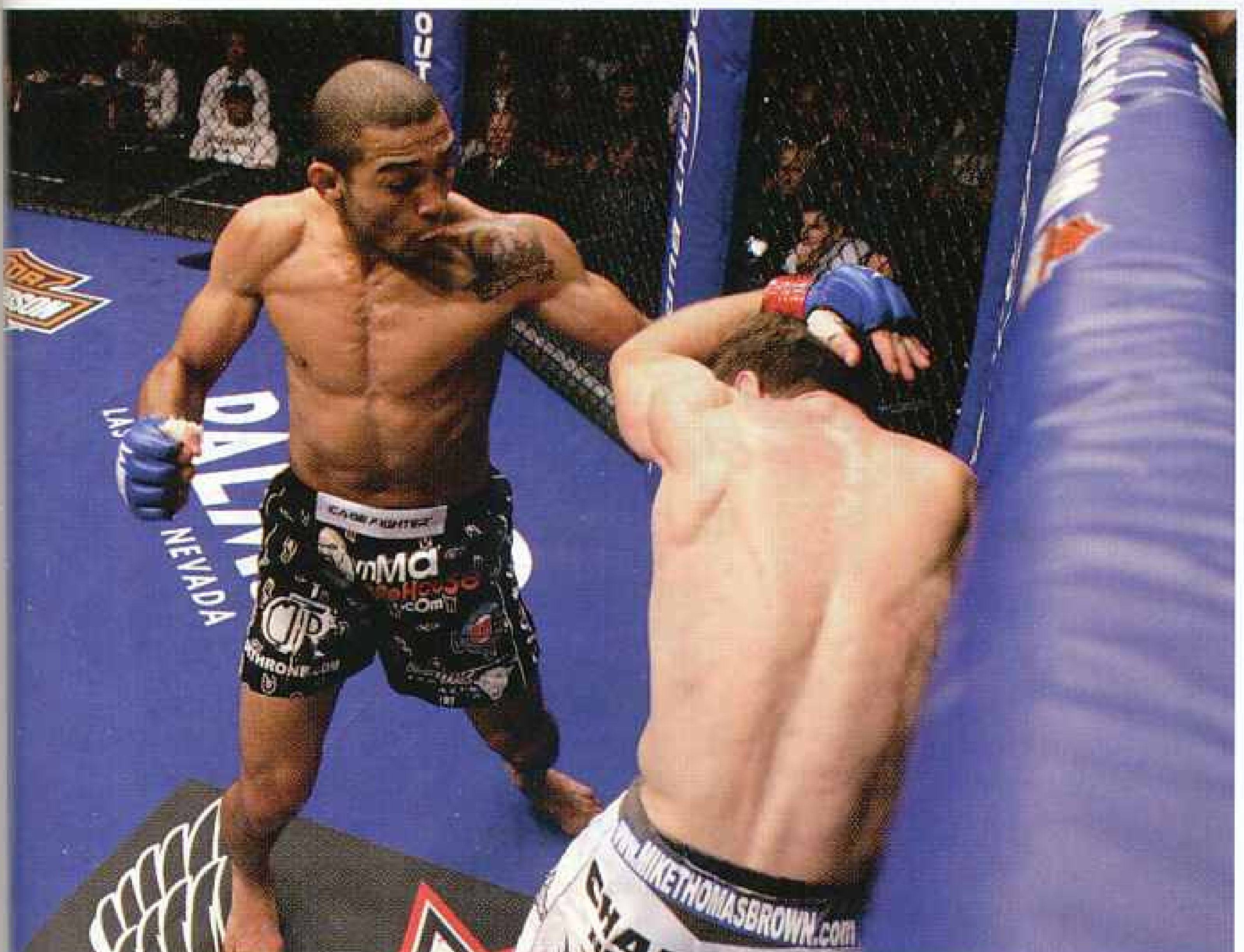
DREAMでは前田吉朗も苦労した、手足の長いミカ・ミラー。戦前は打撃でいこうと思っていたという小見川だが、途中から作戦を変更しテイクダウンへ。攻略しにくいミカ・ミラーを相手にさすがの小見川も決め手はなかったものの、見事な試合運びとなった。

国内で出るところないですもん。63キロに落とせないからDREAMも無理ですし

聞き手&撮影／細田大志　構成／松下ミワ

彰敏選手、三浦広光選手、誰も勝ち越せてない現状というのはどう思いますか？
小見川　みんな強い選手だと思うんですけどね。世界基準のレベルに達してないっていうことではないと思うんだけど。
――でも、そんな状況でも小見川選手は勝ち抜く自信がある？
小見川　そりゃあもちろん、自信がなかったら行きたいはと言わないですよ。闘い方は出るとしたら研究しなきゃいけないところですけど、俺はいままでのスタイルで勝っていけると思ってるんですよ。『戦極』フェザー級グランプリのLC・デイビス戦からもうずっと世界基準の選手がいるリングに上がってる。だからアメリカの大会に出ることが世界基準のスタートってわけじゃないんですよ。いままでのことを全部リセットしてWECに臨むっていうわけじゃない。いままでの延長線上で最終的にジョゼ・アルドの首を取ってやるって。早い段階であそこまでいかなきゃいけないんですよ。
――いまWECフェザー級王者、ジョゼ・アルドの名前が出ましたけど、そもそも小見川選手はWECという団体にどんな印象を持ってますか？
小見川　体制がしっかりしてて、上のほうの3、4人っていうのが強い選手じゃないですかね。ユライア（・フェイバー）だってね、何回も防衛したけどベルト獲られたりして。
――昔からWECは観てたんですか？
小見川　あんまり観てないです。最近はけっこう気にしてますね。
――気になる選手はやはりジョゼ・アルド選手ですか？
小見川　そうですね。この前のユライア戦で見せたローキックも凄いし、やりたいですよね。俺はUFC行ったり、ケージレイジにも出てるし自分のやれることをすれば、リングと金網の差ってそこまでないと思うんですよ。
――ちょうど金網とリングの差についての話になりましたけど、青木選手の敗戦からDREAMが急きょ金網を導入したことでケージ・リング論争が起きてますよね。
小見川　そんなに気にしてないですね。まぁケージはリングよりも投げやすかったりテイクダウンしやすそう、くらいかな。
――個人的な意見で言えば金網は金網のよさがあって、リングはリングのよさがあると思うんです。しかもアメリカと日本では採点の仕方も違うはずだし、日本のオリジナリティであるリングにこだわりを持ってもいいんじゃないか、と。だって（ギルバート・）メレンデス選手はリングで闘ったって強いと思うんですよ。
小見川　そうそう、そうですよね。単純に彼が強いっていうのが現状だし、リングだろうと金網だろうと強いヤツが強い。リングをやめないほうがいいし、ちょこちょこ変えてっからダメなんだよ！　いちいちアメリカのマネじゃないけどさ、日本は日本のおもしろさでやればいいんだから。マネなんかしてっからアメリカに占領されてくんだよ。俺が今度アメリカを占領してやりますから。
――おぉ、心強い！
小見川　金網うんぬんじゃなくて、どうやって自分を適応させるかだと思いますから。
――じゃあ小見川選手としたらケージ・リング論争なんて元も子もない、と。
小見川　どうでもいいっすよ。……闘えればどっちでもいいです（笑）。あんまり関係ないっすね。俺がどうこう言って解決することじゃないけど、どっちでもいいから決めてくれっていう感じですよね。リングも金網もどっちも世界基準なんですよ。闘えればいい！　そのなかで選手たちがどう変わっていくかなんで。
――たまたま強い選手が闘っている場所が金網なりリングだったっていう？
小見川　そうそう。PRIDEに出てた選手がUFCに行って負けたりするのもリングと金網の違いってそうないと思うんですよね。ただそのときの状況だと思うんですよ。雰囲気だったりとか体調だったりとか。青木選手が会見で言ってた「弱いから負けた」ってそういう感じだと思うんですよね。PRIDEで強かったけどUFCで負けた選手っていうのは。ケージだ、リングだっていうのは関係ないと思います。

ケージはリングよりも投げやすかったりテイクダウンしやすそう、くらいかな


09年11月にマイク・ブラウンを破りWECフェザー級王者に君臨したジョセ・アルド。今年4月にはユライア・フェイバーをローで崩して判定勝ちを収めている。次に小見川が狙うのはこの舞台になるのか!?

――では小見川選手から見た青木選手と五味選手の敗戦について教えてください。
小見川　五味選手はなんだろう……相手の選手が強かったですよね。ケニー・フロリアン強いなって思いました。打撃もジャブとか合わせるのうまいし、総合格闘技っていうのができあがってる感じですよ。たとえばあの試合は、五味選手の攻め手が打撃だけになっちゃったわけじゃないですか。そういうなかでアメリカで試合してる選手というのはトータル的にできて、打撃力もあってテイクダウンも強いし寝技もトップ取って殴るっていう感じなんで、トータル的にできないと勝てなくなってきてるのかなって。青木選手もそうですけど、何かが得意でそれだけっていうのは通用しないと思うんですよ。トータル的に強くないと。
――青木選手は大会前に、自分が負けたら日本はアメリカに植民地化されるっていうコメントを残してたんですけど、結果負けてしまったわけで……。
小見川　青木選手のなかだけの話でしょ、そんなの。一緒にしないでほしい。日本人の魂をみんなに見せようと思うけど、日本を背負ってっていうのは考え方としてどうなのかなと思いますけどね。日本背負ってるなら腹切れって話ですから。
――小見川選手も柔道時代に日本を背負って闘ってたわけで、いまの言葉には重

小見川道大

みがありますね。

小見川　プライドはありますよ、日本人としての。柔道っていうスポーツは日本で生まれたスポーツだから。柔道のときはプライドがありましたけど、総合格闘技としては個人的に、日本人として生きてきたこの魂……っていうか、俺の魂ですね。それを試合で出す。試合っていうのは発表会だと思ってるんで。

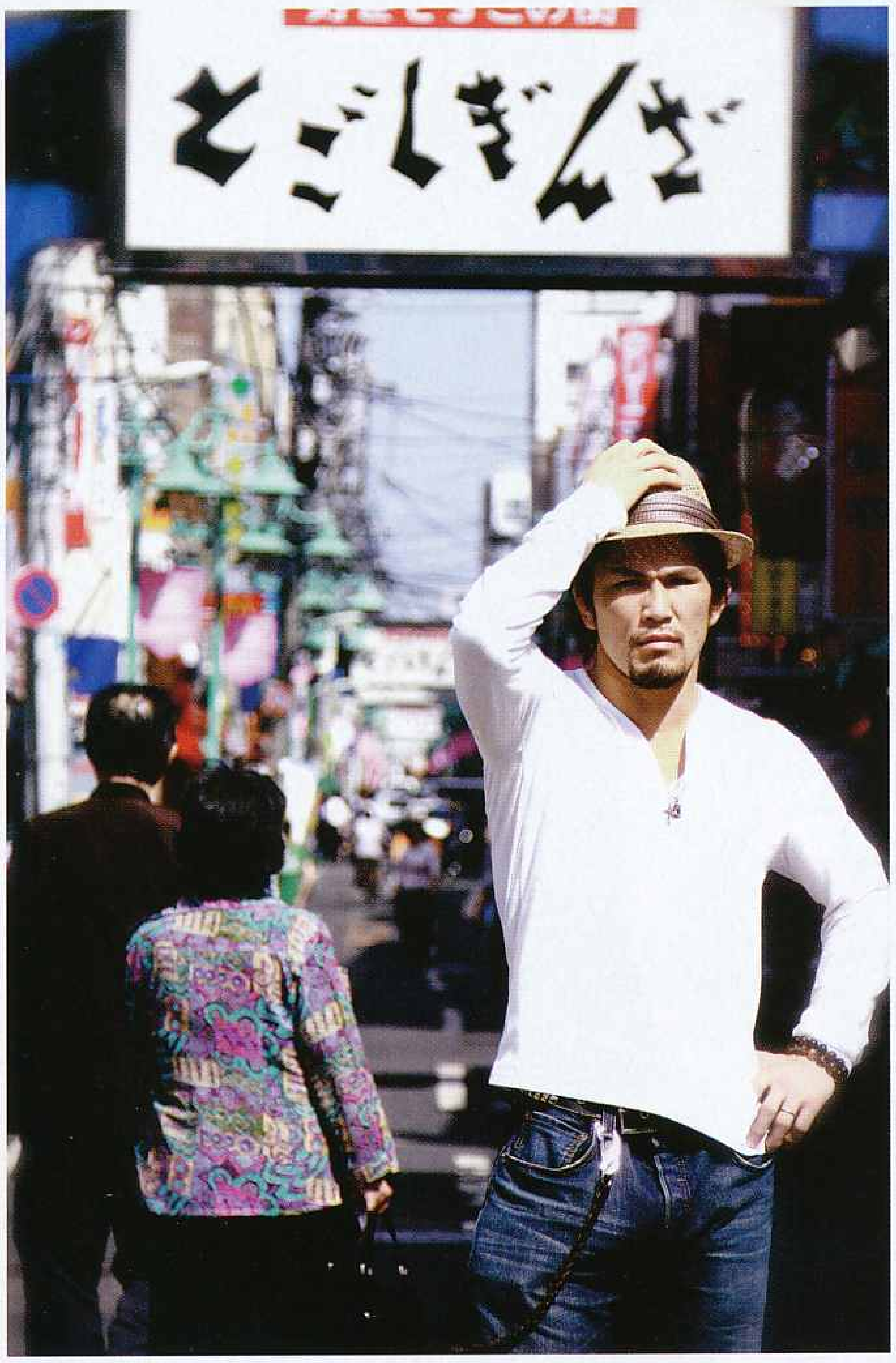
——字のごとく〝試し合い〟ですからね。

小見川　そう。自分のいままでやってきたこと、技術、魂だったりを全部出せればいいかなって。日本を背負ってとかっていうのは……自分が負けたら日本が負けたとかっていうのはどうなんですかね。

まぁ僕は考えないですね、日本を背負ってっていうのは。結果的な話ですよ。たとえばヒョードル選手が人類で一番強いとして、それでイコール、ロシア人が強いっていうイメージあります？　一人が勝ってこの国がどうっていう問題じゃないと思うんだよな。結果論で俺が強かった、みたいな（笑）。あとの日本人がどうだろうと、俺が強かったっていう事実があればいいんですよ。

——なるほど。それでいえば、小見川選手の強さを世界に発表できる世界挑戦がスタートするわけですね。

ヒョードルが人類で一番強いとしてイコール、ロシア人最強ってなります？



おみがわ・みちひろ■1975年12月19日、茨城県出身。柔道からMMAに転向し、05年5月に『PRIDE武士道』でプロデビュー。09年『戦極』フェザー級GPでは準優勝に輝き、MAP級の活躍を見せた。同年大晦日には高谷裕之を撃破。10年、目指すはWECか!? 168cm、65kg。

小見川　世界挑戦っていうのはもう始まってるんですよ。いままで試合してきた（マルロン・）サンドロ選手も日沖選手も世界レベルに達してる選手だと思うんですよね。その延長線上なんで。

——確かにLC・デイビス選手もWECに戻って3連勝中で、グランプリに出場してたジョン・チャンソン選手もいまやWECへ参戦してますからね。振り返ると『戦極』の試合は決してレベルの低い闘いではなかったです。でも、小見川選手にはもう海外しか見えない、と。

小見川　日本に強い選手が来てくれたらいいですよ。ASTRAがもし継続的にやったとして強い選手を呼んできたらまた話は別ですけど、いまの段階でそういう話がないじゃないですか。純粋に強い選手と試合がしたい、それだけですね。繰り返しですけど、延長線上ですよ。『戦極』のフェザー級グランプリに出て、日沖戦やって大晦日に高谷戦、ASTRAではミカ・ミラー選手と試合して、イージーじゃない選手たちを倒してきたんで。いまのところゴールにしてるのはWECのチャンピオン、かな。だって日本はないんですもん、俺の階級とベルトが（笑）。

——闘う場がなくなってもちゃんと目標を決められるっていうのは小見川選手ならではの頑丈な精神力ですよね。

小見川　まぁ頑丈っすね、かなり（笑）。

——海外挑戦はファンとしてはうれしいことですけど、日本の格闘技界を盛り上げたいっていう葛藤はないですか？

小見川　日本をっていうよりは、純粋に俺が一番になれるっていう自信もあって、強い選手を相手に競って試したいっていう気持ちのほうが強いかな。もちろん金原（正徳）選手ともやりたいですよ、俺だって。でもほかに誰がいるんだよって。相手いないっすよ。相手を探してるんですよ。

——PRIDE武士道があった頃は軽量級が日本のウリでもあったのに、いつの間にか60億分の1どころかそこまでアメリカに持っていかれてしまってますからね（笑）。

小見川　そうそう、それありますね。いつの間にかっすよね。軽量級は日本が引っぱっていってる感じがありましたけどね。なんで盛り上がらないんだろう……だからやっぱり組織っすよ。そこにいっちゃいますよね（笑）。でも俺のことで言えば、いまはさらに上を目指せる状況になりましたから。

——海外参戦が決まったら絶対勝ち越してほしいところです。

小見川　俺もUFCで負け越して忘れ物、借りがあるんでね。

——再挑戦するとして昔と何が一番違うと思いますか？

小見川　経験じゃないですかね。人一倍負けてるんであの悔しさ、あそこにはもう行きたくないみたいなのがあるから、借りっていうか、自分の忘れた物を取り返すっていうか。負けたぶんを階級転向して埋めてきてるような気がするんで、今度の挑戦は世界一高い山に登るぞ！って感じですかね。

——そこではヤッホーでなく、クソッタレ、と（笑）。

小見川　まだまだって（笑）。

——じゃあ忘れ物を取り返して、次こそ藤川さんとの対談ですね（笑）。

小見川　そうっすね。でも彼女って格闘技のこと知らないですよね？　俺も政治のことわからないけど大丈夫かな（笑）。

【10年5月6日／都内・J・ROCK workout studioにて収録】





榊原信行 沈黙を破る

元PRIDE運営会社
DSE代表

日本の格闘技は一度ぶっ壊さなきゃダメでしょうね

日本マット界が〝幕末〟を迎えたこの時期に、かつての〝将軍〟である元PRIDE代表、榊原信行氏がインタビューに登場！　PRIDE営業権をロレンゾ・フェティータ氏に移管し、格闘技界を退いて早3年。ついに沈黙を破り、外から見た日本の格闘技界について語ってくれた。はたして、かつての〝格闘技王国・日本〟で指揮を執った榊原氏は、日本格闘技復興についてどう考えているのか？

聞き手／堀江ガンツ　撮影／吉場正和

日本格闘技界復興のためには、アメリカ市場獲得に本気で取りくむ必要がある

―おひさしぶりです！　今日は3年ぶりにインタビューさせていただこうと思ってうかがいました。

榊原　もう3年ですか。あの最後の大会（『PRIDE・34』）のあとにやったんだっけ？

―そうですね。で、今日はですね、この3年間で日本とアメリカの差がさらに開いたなかで、日本格闘技界はどうするべきかっていうのが今号の全体のテーマなんですよ。

榊原　なるほど。

―その前に、榊原さんは近年、どのような活動をされていたんですか？

榊原　僕は格闘技を離れたあと、新たなチャレンジとして日本サッカー界に新規参入させていただき、いまは沖縄のサッカーチームFC琉球を、沖縄県民138万人の誇りになれるようにしようという思いで活動していて。それと合わせて、4年に一度のワールドカップイヤーに、もっと大きな意味でのサッカーというスポーツビジネスのなかに、トルシエと一緒にどう乗り出していけるのか、ということにチャレンジしているところですね。

―いまはサッカーに全力を傾けている、と。

榊原　まあ、リアル『サカつく』みたいな感じですね（笑）。

―リアル『サカつく』ですか！　それはぜいたくなゲームですね（笑）。

榊原　ムチャクチャおもしろいよ（笑）。ただ格闘技でもサッカーでも、人気のあるスポーツコンテンツを創りだすには、やっぱりお金が必要ですね。

―それはPRIDEのときから感じていたことですか？

榊原　そうですね。お金をかけなければいいコンテンツは作れないし、とくにプロスポーツ、プロのエンターテインメントを爆発させようと思ったら、やっぱりそのソフトにどれだけお金がかけられるか、だと思うんだよね。PRIDEのときなんかも、僕らは選手に対するギャランティも含めて、たぶん、いまの日本格闘技界でかけられてるお金の10倍近いお金をかけて、マッチメイクしていたときもあったわけだから。

―いまの10倍ですか！

榊原　だから、今日のテーマとしては、たぶんそこにすべてつながっていくと思うんですよ。そういう意味で、テーマとしては凄くいいテーマで、このままでは日本格闘技界は、アメリカに抜かれただけじゃなくて、ほかの国にもどんどん抜かれていくと思いますよ。

―第2位ですらなくなっていくかもしれませんか。

榊原　そうなりつつあるんじゃないですか。日本の国自体がいま、経済大国・日本として世界第2位だったのが中国に抜かれて第3位になって、これから、あっという間に10位以下に転落すると思うよ。今年の「世界のトップ企業100社」に入った日本の企業って3社しかないんだから。去年が11社ぐらい入ってたのが、急激に減ってるんだわ。その危機的状況に日本人はもっと早く気づかないと。昔の日本人が作った「MADE IN JAPAN」というブランドによってもたらされた繁栄の余韻に漬かってる場合じゃない。これは格闘技にかぎらず、日本の産業全体が、世界レベルで見ると地盤沈下していると思いますね。

―そういう状況のなかで、日本格闘技界はどうすべきか考えないといけないわけですね。

榊原　そう。これは言い換えれば、日本に市場をどう取り戻すか、だから。そして僕はそのチャンスはあると思っている。

―ありますか！

Nobuyuki Sakakibara



ちょうど取材に訪れた日、榊原氏の事務所には元サッカー日本代表監督のトルシエ氏が来ていた。トルシエ氏も現在、FC琉球総監督として榊原氏とともに活動している。サッカー版"本部長"といったところか。

榊原　だって僕がPRIDEをやっていたときと比べて、メディアの環境がはるかに整っているわけだから。いまはインターネットの動画サイトやいろんな方法で、アメリカまで行かなくても、アメリカの人たちに自分たちのコンテンツを届けられる。そういった環境が整ってきているなかで、アメリカというマーケットをどう取り込むのか。そのマーケティングをして、アプローチの仕方を考えて、アメリカというマーケットが取れなければ、どこまでいってもかなわないでしょうね。

―アメリカマーケットを取らずして、アメリカには勝てない、と。

榊原　だってプロスポーツにおけるアメリカ市場というのは、全世界の中で6割から7割を占めているんですよ。

―プロスポーツ市場の大半はアメリカ市場なわけですね。

榊原　それは、選手たちがもらってるギャランティを見ればわかると思う。たとえば、僕がいま取り組んでいるサッカーというプロスポーツは、アメリカのマーケットでまだ開いていないわけです。

―まだまだアメリカでは、プロスポーツとしてマイナーですよね。

榊原　だから、ひょっとしたら02年や03年の総合格闘技のアメリカ市場のような状態なのかもしれない。

―なるほど、いまのヨーロッパサッカー界が、03年ぐらいの日本格闘技界みたいな感じですか。

榊原　そう。現時点ではヨーロッパがダントツで一番の市場ですからね。だから、いまはサッカー界のスーパースターのほとんどがヨーロッパのリーグにいる。ところが、もしアメリカの市場が開いたらクリスティアーノ・ロナウドもメッシも、



会場はどこも満員。その人気はとどまることを知らないUFC。このアメリカという巨大マーケットをUFCに独占させず、奪っていくことも、今後の日本格闘技界の課題か。

UFCを脅威と思ったことはなかった。逆に向こうが脅威に思っていたと思う

み～んなアメリカに取られると思いますよ（笑）。

―それこそトップファイターが根こそぎUFCに行ったように。

榊原 それぐらいプロスポーツにおけるアメリカ市場というのは、マーケットに力があるんですよ。だからサッカー界には、アメリカ市場が開かないほうがいいと思っている人もいるわけ。ただ、格闘技界の場合はもう開いちゃったわけだから、これは熾烈な競争が必要だし、よっぽど努力してかからなきゃいけないんだけど、逆に考えれば爆発的な利益を得られる可能性を持った、とんでもないマーケットが存在するということでもあるわけだから。

―日本が食い込めていないだけで、マーケット自体はあるわけですよね。

榊原 僕らが最初にアメリカ市場を本気で開拓しようと考えた2000年代初頭というのは、そのへんを歩いてるアメリカ人は誰も総合格闘技なんて知らなかったんだから。でも、いまはかなり浸透していて、市場が広がった。だったら原点に戻って、真剣にマーケティングして、どういう戦略で市場に食い込むか、考えなきゃダメだと思う。

―チャンスといえばチャンスなわけですね。

榊原 うん。日本はそれでも、モノを作る能力は高いわけですよ。しかも、格闘技でいえば、武道の国として特別な場所として認められているわけだから。日本の良さを活かして、3年5年10年という長いスパンで、コンテンツを新たに作るしかないよね。

―いまの日本格闘技界のかたちを守ることは考えるな、と（笑）。

榊原 僕らもPRIDEの最後の頃、「守ろう、守ろう」と考えていたけど、なかなかおもいきったことはできなかったからね。だからチャレンジャーとして、新たな方法を考えたほうがいいと思う。そのためには一度すべてをリセットする、もっと言えばぶっ壊す必要がある。

―ぶっ壊しますか。

榊原 過去のPRIDEとか、過去の栄光と同じスタイルのものでそれを超すってのは無理だよ。

―榊原さんが最初にUFCの脅威を感じたのは、いつ頃ですか？

榊原 いや、「脅威」というふうに思ったことはあまりないんですよ。

―ないんですか⁉

榊原 05年に『TUF』がスパイクTVで人気番組になってるっていう話を聞いたり、06年のホイスvsマット・ヒューズ戦のPPVのバイが凄く伸びたっていうのを聞いたとき、「市場が開き出したな、これに乗り遅れたらダメだな」っていう意識はありましたけどね。とにかく一日も早くアメリカでやらなければダメだって、そういう脅迫観念みたいなものに駆られたのは事実。でも、UFCに対する脅威というものではなかった。逆に当時はボードッグをはじめとして巨大資本での新規



参入が続いてたんで、UFCとPRIDEはお互い協力して、そういう志のない、趣味や本業のプロモーションのためにやってる人たちに、市場を荒らさせないようにしようと思ってたくらいですからね。

――そういえば、ダナ・ホワイトもPRIDEに対しては、あまり悪く言ってませんでしたよね。

榊原　UFCとは常にコミュニケーションがとれていたし、いいライバルだと思っていたし、同じ総合格闘技だけど、イベントとして進化のさせ方が違っていたから、脅威とは思ってなかった。逆に僕らがラスベガス大会をやることが決まって、彼らのほうが脅威に思ったんじゃないかな。

――それはあるかもしれませんね。日本とアメリカで棲み分けができていたのが、自分たちの市場に進出されたわけですからね。

榊原　僕らにとってはUFCの脅威より、フジテレビの放送を失なったダメージのほうが、はるかに大きかった。戦艦の船底に大きな穴が開いて、それを直すのに一生懸命で、UFCという戦艦と闘えるような状況じゃなかったから。

――UFCの巨大化とフジテレビショックが同時に襲ってきたというのも大きいんじゃないですか？

榊原　それはありますね。フジテレビショックが来るタイミングがあまりにも悪すぎた。本当に我々に問題があるのなら、03年ぐらいにそういうネガティブな記事が出てくれたほうがよっぽどよかったと思ってる。06年というのは、あらゆることがバッドタイミングで、UFCとコンテンツvsコンテンツ、企業vs企業で闘えなかったというのは残念ですね。でも、いまの日本格闘技界というのは、あのときともまた状況が違うわけだから、また違った闘い方があると思うんだよね。いま、さいたまスーパーアリーナに5万人のUFCファンが集まっているわけでも、五味くんの試合が視聴率20パーセント獲ってるわけでもないでしょ？　4パーセントじゃん。

――『猪木ボンバイエ2003』以下ですもんね（笑）。

榊原　それは五味くんの試合に魅力がないわけじゃなくて、市場に熱を作ってないから観る人が少ないわけだから。いまの日本の格闘技界は、選手も関係者も一回ダウンサイズして、もう一回大きくするための方法をみんなで真剣に考えたほうがいい。そしたらチャンスはあると思うし、数年後にどういう大きな絵が描けるか、だと思うんだよね。

――そろそろPRIDE時代からのトップファイターも、世代交代の時期ですから、選手の顔ぶれも含めて大きく変わるチャンスかもしれませんね。

榊原　そう。UFCだって、いまのトップ

ビンスに「PRIDEはヘビー級があるのが素晴らしい」と言われたんです

ファイターはみんなカウントダウンに入ってるわけだから。日本でも吉田秀彦という大きな存在が引退を迎えたけど、ガラリと変わらなきゃダメだよね。僕がPRIDEを始めた頃に、新日本プロレスが東京ドームでやってたのを観たりしたんですけど、50歳のオヤジが真っ黒に日焼けして「サソリ固め!」なんてやってても、10代や20代のヒーローにはなれないなって思ったんですよ。

――そこでプロレスの凋落を予期しましたか（笑）。

榊原　長州力を観て思ったんだけどね（笑）。だって10代の若者が「長州力みたいになりたい」って思わないでしょう。でも、そういう状況に、いまの格闘技界がなりかけているんだよ。青木くんみたいに、若い男に影響を与えられる選手はいるけど、重いクラスでは残念ながらまったく見あたらないじゃん。K-1でピーター・アーツに勝った選手はいるけど、彼が若い人に影響を与えてるかと言えば与えているとは思えないし。あの選手、なんていったっけ？

――京太郎ですね。

榊原　京太郎か、苗字はどこにいっちゃったの？　K-1の選手はなぜかみんな苗字がないから（笑）。そういうのもやめたほうがいいね。

――そうですか（笑）。

榊原　日本の格闘技界は、本気で重いクラスのスターを育てることを考えなきゃ。昔、ビンス（・マクマホン）に言われたことがあるんですよ。「神に選ばれた身体を持ったヘビー級の超人たちがぶつかり合わなければ、エンターテインメントとしては成り立たない」って。

――へえ、そうなんですか。

榊原　もちろん、いろんな階級があっていいんだけど、その頂点として神に選ばれた肉体を持った男たちの闘いがないと、裾野が広がらないと思う。ビンスも「PRIDEにはヘビー級がある。だから素晴らしい。絶対、この階級をなくしたらダメだよ」って言ったわけ。それが凄くうれしかったし、同感だなって思いましたね。

――やっぱり、PRIDEも一番最盛期は小川直也が出たPRIDEヘビー級GPですもんね。

榊原　そう。PRIDEで一番お客さんが入ったのは、小川直也vsヒョードル戦ですから。あの日は本当にチケットがなかった。

――あのときはビジョンの裏までお客さんを入れてましたからね（笑）。

榊原　リングが直接見えないのに、それでも会場に入りたいんだからね（笑）。

――そんな席でも1万7000円で飛ぶように売れたという。

榊原　やっぱり小川直也は、身長193センチというあれだけの肉体を持っていて、それでいて柔道で世界チャンピオンになった幻想を持っていましたからね。やっぱりこういう人材がいてこそ、プロのエンターテインメントは成り立つんだと思いますね。

――UFCで一番稼いでいるのも、やっぱりブロック・レスナーですもんね。

榊原　そういうことなんですよ。重い階級がイベントを引っぱって、その下の階級でも素晴らしいチャンピオンが、それぞれヘビー級とは次元の違う、スピードや技術のある闘いを見せていくというのが理想ですよね。だから青木真也という選手はPRIDEがまだちゃんと続いていたり、もう少し早く生まれていたりしたら、桜庭和志を超えるくらいのスーパーヒーローになるポテンシャルを持っている選手だと思うけど、彼にプロモーションのすべてを背負わせるのは酷だと思う。

――確かにそれは感じますね。

榊原　いろんな階級のチャンピオンがいるなかの一人として気を吐く。そのほうが彼のパフォーマンスが活きるし、青木くん自身も光ると思うんだけどね。

――では、DREAMは青木真也を活かすためにも、重い階級のスターを育てなきゃいけないってことですね。

榊原　僕はサッカーの世界に来てから、格闘技界との違いを勉強する機会が凄く多いんですよ。

――サッカーを勉強することで、格闘技に足りないものに気づかされるというか。

榊原　そうなんです。たとえば、サッカーでは育成とか普及というものを各チームが持っているんですよ。このスポーツを後世に残すためには、いま自分たちが持っているものを次の世代に伝えていかな





「60億分の1世界最強」のキャッチフレーズが示すとおり、世界最強を競うヘビー級の闘いこそがPRIDE人気を支えていたとも言える。新たなヘビー級のスター作りは、人気回復のためにも不可欠か。

Nobuyuki Sakakibara

きゃいけない。だから、次のスターというのは待っているだけで現われるわけじゃなくて、普及と育成があって生まれてくるものだっていうことを痛感しましたね。日本の格闘技界がそういうことをやりだしたら、本当にUFCにとっても脅威になると思う。だからこそ、格闘技界はもっともっとほかのスポーツ界から学ぶ必要があるんじゃないかって思いますね。

——いまは、プロ・アマチュア含めて、たくさんのスポーツが盛り上がっているわけですからね。

榊原　いまのままだったら、優秀な人材は格闘技界に入ってこないよ。サッカー、野球、ゴルフ……いろんなスポーツにみんな取られてしまう。だから、子どもの頃から格闘技に触れる環境作りも必要だし、才能がある人材にはさまざまな援助も必要だろうし。そうしないと、格闘技自体が行き詰まる。格闘技界をもう一度盛り上げて、アメリカに負けないものにするためには、そういうところまで視野に入れてやっていかなきゃダメでしょうね。

——なるほど、わかりました。では最後にですね、総合格闘技ではない話題をもう一つ……。



さかきばら・のぶゆき■1963年11月18日、愛知県出身。東海テレビ事業時代に、UWFインター名古屋大会などを手がけてマット界に関わりができる。そのあとPRIDE立ち上げにも関わり、03年にはDSE代表取締役に就任。07年にロレンゾ・フェティータ氏にPRIDE営業権を移管。FC琉球の代表を務める。

格闘技界はもっとほかのスポーツ界から学ぶ必要があるんじゃないかと思います

Nobuyuki Sakakibara

榊原　（さえぎって）ハッスルのこと？

——大正解でございます（笑）。ハッスルって、リアルに失なうものが何もなくなってますが、元ハッスルの代表としてどんな感想がありますか？

榊原　PRIDEと同様にハッスルに関しても、2007年で完全に僕の手から離れているわけですよ。だから、そこから先はまったくわからないんだけど、感想を言えば、やっぱり……つまらないよ。

——感想は「つまらない」（笑）。

榊原　僕がやってたら、まずナットーマンとかは出ないもの。

——そうでしょうね（笑）。

榊原　ハッスルこそ、ホントは原点に返らなきゃいけなかったんですよ。ハッスルっていうのは、もともと「プロレスの力でみんなを元気にしよう、ハッスルさせよう！」ということで作ったわけじゃん。みんなで生きる活力や希望や勇気を発信するために、プロレスというジャンルを使って、「ハッスル」というタイトルをつけて始めたわけだから。そのときの思いと、どんどん違う方向に進んでいっちゃって……。言いだすとキリがないけど、物事を大きな方向で考えていく人がいなくなっちゃったのかなって。

——ひたすら小ネタが増えていった印象がありますからね。

榊原　そう。それが「今週のハッスル」とか、毎週ハッスルのストーリーを追いかけるテレビ番組でもあって、それをリンクさせていくならまだしもね。もう3〜4回行かなかったらわからんもんね（苦笑）。橋本真也がハッスルを作ったときに「破壊なくして創造なし」って言ったんだからさ、もうバカンバカン壊して、新しいものを生み出さなきゃ。

——結局、最後まで髙田総統頼みになっちゃってましたもんね。

榊原　髙田総統だって、いつも同じ流れやスタイルで出てもらうのではなく、まだ求心力があるときにサプライズや裏切りを仕掛けるとかさ、やりようはいくらでもあったと思うんだよね。WWEなんてブロック・レスナーをヒールターンさせるとき、ザック・ゴーウェンっていう片足のない義足のレスラーをおもいきり鉄柱にぶつけたりまでしてたんだよ？　ハッスルもそういうハプニングを常に起こして、みんなの予想をどんどん裏切らなきゃいけなかったのに……ナットーマンで裏切られてもさあ（苦笑）。

——スケールの小さすぎる裏切りでしたね（笑）。では、ハッスルこそ原点に戻らなければいけない、と。

榊原　いや、もう原点に戻っても無理だと思う（笑）。

——もう手遅れですか（笑）。


榊原　完全に壊して、まったく新しいものにすれば可能性はあるけど、一度落ちたものがちょっとやそっと手を加えたところで、V字回復したためしがない。だってまだナットーマン出てるんでしょ？

——このあいだはナットーマン・ザ・グレートが出てましたね（笑）。

榊原　（ため息をついて）水戸納豆がスポンサーについてるんだったら、やり続けてもいいと思うよ。もしくはアニメとタイアップして、『ポパイ』みたいに納豆を食べて強くなって闘うとかね。なぜ、そこまで納豆にこだわるのか……。まあ、もう腐ってるってことなんでしょう（笑）。

——おあとがよろしいようで、ありがとうございました（笑）。

【10年4月27日／都内・「うぼん」社長室にて収録】



ニホン格闘技の未来を考えるぜよ！

特集

幕末

開国か否か、偉大なる先人たちに学べ！

ニッポンの格闘技界はどうなるぜよ!?　今号の特集はズバリ幕末！
青木真也が“アメリカ”に返り討ちにされ、日本はどうすべきかを考えるために、
時は150年前、幕末の世界を考えてみたい。黒船来航で当時の日本人はどんな行動に出たのか。
そして日本格闘技界は何をすべきなのか!?

ものを生み出さなきゃ。

【10年4月27日／都内・『うぼん』社長室にて収録】

!? 『kamipro Move』で一斉アンケート実施!

? リング派ですか？

ツイッター上を中心に白熱した議論が巻き起こっているリングorケージ論争。はたしてファンはどんな意見を持っているのか『kamipro Move』上で緊急アンケートを行なった。ケージ派が多いと思いきや、多いのはリング派!?

RING

（リング派 55.8%）

意見

●リングでのMMAのほうが観客としては見やすい。また、ロープを使った攻防もおもしろい（メガネさん）

●しょせん、プロレスファンだから。ケージの勝ちパターンって格ゲーのハメ技のような感じがするので。むしろケージの闘いに進化を求めたいです（神の子さん）

●見やすい。ケージは競技者向けであって、エンターテイメントとしては成立してない（ほいほいさん）

●2ブランド制でやってほしい（アナベベ5さん）

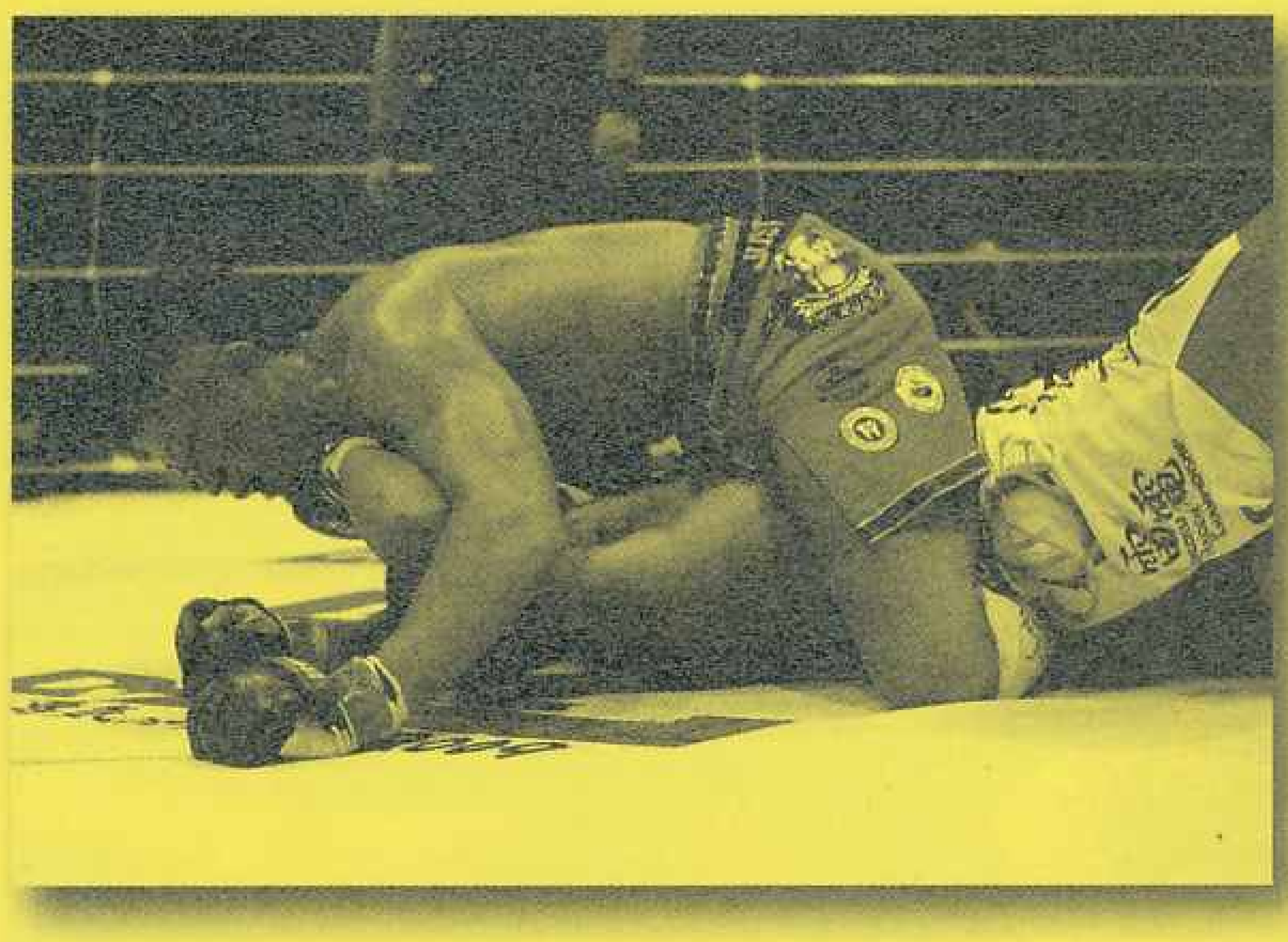
●見にくいし、アメリカのマネする必要もない（ヒトナガッチさん）

●日本はリングで北米はケージ。それぞれの特色があっていい。同一化になんの意味があるのかわからない。いま、日本のリングをケージに変えて、数年後に北米がリングにしたらまた日本はリングにするのか。猿真似すぎる。追いかけてどうする（古屋さん）

●PRIDEの伝統を受け継いでほしい。すべてアメリカが基準ではないし日本の総合格闘技の個性だと思う（ミノタウロさん）

●リング派は感情論で言うから説得力がない。PRIDEが好きだからリングが好きっていう人がいたっていいじゃん。UFCが破綻したらケージからリングへ戻すんか。日本でケージだけになったらもう観ないね（ウォワオわんさん）

●見やすいし見慣れている。そして日本は日本のやり方（リング）で復興してほしいから。ケージでもし日本が世界一になってもなんだかしっくりこない。ケージがスタンダードといわれてるいまだからこそあえてリングで勝負し、復興してほしい！　ケージも嫌いではないのでたまに開催するのは問題ないが、ずっとケージになるのは断固反対！（ARONA☆SURFさん）



●やはり、日本には日本の文化がある。そのなかでも「リング」は重要な文化だと思う。いまさらケージを真似ても、それは「二番煎じ」でしかない。たまにはケージも気分が変わっていいが、毎回ってことになるとルールも変更になるだろうし、いいことばかりではない（coolbabyishさん）

●ケージにしたからといって日本人が世界で勝てるのでしょうか？　根本から総合格闘技の立ち位置を考え直さないといけないんじゃないでしょうか。スポーツとして世間に確実に認知されることをまず考えてほしいです。対アメリカなんて考えるのはまだまだ先の話だと思います（MSKさん）

●日本MMAで育ったので。でもいまはケージが日本に必要だ、と（ガリガリ君さん）

●ケージだと、リングと比べて膠着が多いから。あと、ケージは広すぎるから逃げ道が多いので……。柔術ベースの格闘家が組みにくいので不利ではないかと。ストライカー&グラップラーがまんべんなく力を発揮できるのは何かを総合的に考えると、リングではないかと思います（カレーさん）

●海外のグラップラーからも日本の観客の評価が高いのは、海外ではブーイングを食らいかねないグラップリングも熱中してみれるからではないだろうか。それを可能にしているのがリングでの試合なのではないだろうか（絶好調さん）

●テレビでも会場観戦でも観やすいから。サダハルンバ派です！（グリとグラさん）

●寝技のバリエーションが増える気がします。ケージだと押さえ込みが多くなる（ししまるさん）

●日本の総合はリングじゃなきゃダメ。ケージにするとなんかいままでの日本の総合格闘技を否定してるみたいでやだ（青谷秋未さん）

あなたは青木真也の敗戦をどう思いましたか？

意見

●残念だが仕方がない。しかし相手も攻めていない、勝てなかったが負けていないのでは。お互いダメージがない状態でディフェンスに徹したメレンデスが勝者!?（オッキーさん）

●スパッツありだったら勝負はわからなかった。環境がいままでとまったく違うなか、よくあそこまで闘ったと思う。（メガネさん）

●アウェーでの試合という環境の違いとケージ。こないだの試合の結果が青木選手のすべてだとは思ってないです（カズヤさん）

●べつに、たいしてショックや危機はない。再戦したら青木選手が勝つと思う。あの試合は、ギルバート・メレンデスの作戦勝ちだったと思う（バカサバイバー命さん）

●正直ショックだったし、DREAMや日本格闘技に対する興味や期待感が薄れたが、ここからどう展開していくのか現実を見守りたいと思う（星くん。さん）

●思った以上の完敗。メレンデスはいい戦略を立てた（又吉ヨハネさん）

●痛い。痛すぎる。負けるにしても、もう少しいい試合になると思ったが……（町蔵さん）

●新しい展開を切り開いてくれていいと思う。DREAMもいいが、ストライクフォースもTBSで放送してほしい。スカパー！は一刻も早く!!ここ凄い大事！（マナフィさん）

●この敗戦から得たものは大きいと思う。青木ならさらに伸びる!!　今回のストライクフォースルールにおいてはとにかく完敗（ららさん）

●初めての海外、ケージファイトのうえにアウェーでのタイトルマッチでは負けても仕方ないのでは。五味と違って負けた言い訳を一切しなかった青木に期待したい（けんみやさん）

●青木が負けてショックだけど、それ以前に試合としておもしろくないので、お互いのいいところを消すいまのMMAには魅力を感じなかった。日本のイベントの試合や選手のほうがおもしろいと感じた（いちさん）

窮地にいる日本が進むべきは開国か、ガラパゴスか!?

あなたはケージ派ですか？

ケージ派 44.2%

意見

●ナッシュビルの結果を踏まえていまは対北米基準で考える必要があるのかな、と（おりょうさん）

●リングだとストップ・ドント・ムーブやロープをつかむ選手がいるので、その行為によって試合展開が変わるから（ウィローさん）

●勢いがあるUFCはケージだし、リングスやパンクラスなど昔からずっと見てるが最近ケージのほうが見やすい感じがします（まあ〜ちゃんさん）

●リングもいいが、ドント・ムーブがあるためなかなかスムーズに進まない部分もありもどかしい。ケージはないので（ダイスケさん）

●世界基準で競技するべき（Qちゃんさん）

●ロープをつかんだり、ワザと出たりなどの行為が好きではない（ちくわさん）

●単純にMMAはケージのほうが向いている。ストップがかからず、第三者の手が極力はいらないほうがいい。もちろん世界標準はある（よーくんさん）

●基本的にはどっちが好きということではないが、現在トップといわれているアメリカに勝つためにはケージしかないと思う（u2wxさん）

●日本はリングのイメージが定着しているが、これからは選手がケージに慣れないと世界に対抗できないと思うから（慎明・サンピエールさん）

●いまは時流的にケージに移行すべき。ロープの外に出たときに中断するのに違和感を感じる（伊藤世界さん）

●日本だけPRIDEを引きずってリングでやるのもなんだか……。世界最高峰の舞台はもう過去のもの。過去を引きずるよりも現在の世界最高峰で正面から勝負をしてほしい。日本の総合格闘技がいまのように存続していけるとは正直思えないので（be-l-be-l-さん）



●世界最高峰のUFCがケージなんだからケージで勝てなければ認めてもらえないと思う（吉田くんさん）

●北米MMAがつまらないとか言うヤツいるけど、ケージがつまらないんじゃなく、北米の判定基準がつまらない試合を誘発してるんだと思う。判定基準をDREAMの基準にさえすれば、ドント・ムーブもなくなるし、北米に通用する選手が増え、さらにUFCのリリース組を呼びやすくなるから（アントニオエイオキさん）

●ケージでのすべての攻防が好き！（ダイベン）

●リング内のドント・ムーブは最強を決める闘いに水を差すから（鴻巣ダイナマイトさん）

●リングも好きだけど、いまはケージ。リングでやって勝ってもアメリカかぶれにケージでやらないと文句言われそう。でも全部ケージにしちゃうと日本の文化、PRIDEの歴史が否定されそうでフクザツ！（タカさん）

●ロープよりレフェリーの裁量が減ると思われる（隼さん）

●本当はリングが好きだけど日本人が世界に勝てなくなって、日本でビックマッチが見られなくなるのが寂しい（道明寺さん）

●本当はリング派でジャパニーズMMAが好きだが、もうそんなことは言ってられない。このままでは日本の総合は終わる。どうやってもPRIDEの熱は取り戻せない。宇野、五味が負けたのはまだしも、青木の負けで現実を見なければいけない。ケージだけでなくルールもあわさなければいけないときが来た（きょうすけさん）

●わざと身体を外に出して打撃から逃げたりタックルされたときロープをつかんだりできないから（サンマルクさん）

●悔しいが現実を思い知らされた。彼が弱いから負けた。強ければ勝っていた。ごくシンプルな話。再び試合で証明するしかない（たけすさん）

●「よりによって一番弱いヤツが出ていった！」と言いたいところだが、現実は真逆。とにかく悔しい。（ちもたまさん）

●妥当な結果なんだと思いますが、「判定上等」な闘い方は好きじゃない（ガンツ最高さん）

●非常に残念。青木は川尻と決着つけたらアメリカで闘ってほしい。アメリカのでかいチームに所属して闘わないと世界一は厳しい。（鳥栖太郎さん）

●強さで負けたというより、柔道と国際柔道のように別の競技に感じた（スイミーさん）

●喜ぶべき惨敗。ここから新しい青木真也と新しい日本総合格闘技が始まる。始めねばならない。あの頃の熱を取り戻すための大きな一歩。ありがとう、青木（やっすんさん）

ツイットキャスティングではケージ派が多数。だが……!!

ケージ導入はわかるけど、心情的にはリング派!? 本誌・ジャン斉藤が行なっているツイットキャスティングや本誌に執筆する高橋ターヤンら行なっている『格闘秘宝館』でもこのケージorリング論争が語られたが、ファンの反応では「ケージにすべき！」という意見が多いように感じるものの、やっぱりリングに愛着を持つファンも多数。上のアンケートに表われているように、やっぱり隠れ（?）リング派は非常に多いのだ。「これだ！」という明確な理由はなかなかないものの、これまで長年格闘技を観てきたファンはとくにリングを推したい気持ちというのがあるのか!? いずれにせよ、簡単に答えを出すには難しすぎる議論になってきたぞ！

——先日のナッシュビル大会では、あな
スタンドアップ勝負に持ち込むというの
近い柔術家を用意したんだ。カイオはノー



暴力柔術軍団総師が語る

青木真也の敗因

「アオキに必要なのは キックボクシングじゃない。ボクシングなんだよ」

シーザー・グレイシー
Cesar Gracie

青木真也の闘いを研究しつくし、寝技を完封することに成功したギルバート・メレンデス。あらためて、シーザー・グレイシー軍団の"組織力"を痛感させられたが、そんなシーザー軍団の強さの秘密と、対青木の研究結果を聞くべく、軍団の総師であるシーザー・グレイシーに直撃インタビュー! 5.29『DREAM.14』でマッハ戦を控えたニック・ディアスについても聞いてみた。

聞き手＆撮影／石井史彦　試合写真／Esther Lin（STRIKEFORCE）　構成／堀江ガンツ

アオキ対策のために、アオキと同じような体型の柔術家を練習相手に用意したんだ

――先日のナッシュビル大会では、あなたの弟子であるギルバート・メレンデス、ジェイク・シールズの素晴らしい勝利、おめでとうございます！

シーザー　アリガト！　2試合ともグレートファイトだったし完全に試合をコントロールしての勝利、シーザー・グレイシー・アカデミーのチームとして最高の夜になったよ。まずメレンデスは素晴らしい戦略を立てて試合に臨め、またジェイクはアンダードッグであったにもかかわらず見事な勝利を収めてくれたからね。

――メレンデスの勝因はなんだったと思いますか？

シーザー　戦略、ストラテジーの勝利だね。自分のゲームで試合をコントロールし、サブミッションゲームを避けたこと。同時にアオキにはパンチを受けながらでも下からの攻めを狙わせたことだろうね。

――メレンデスには、青木戦前にどんな指導をして、どんな作戦を授けましたか？

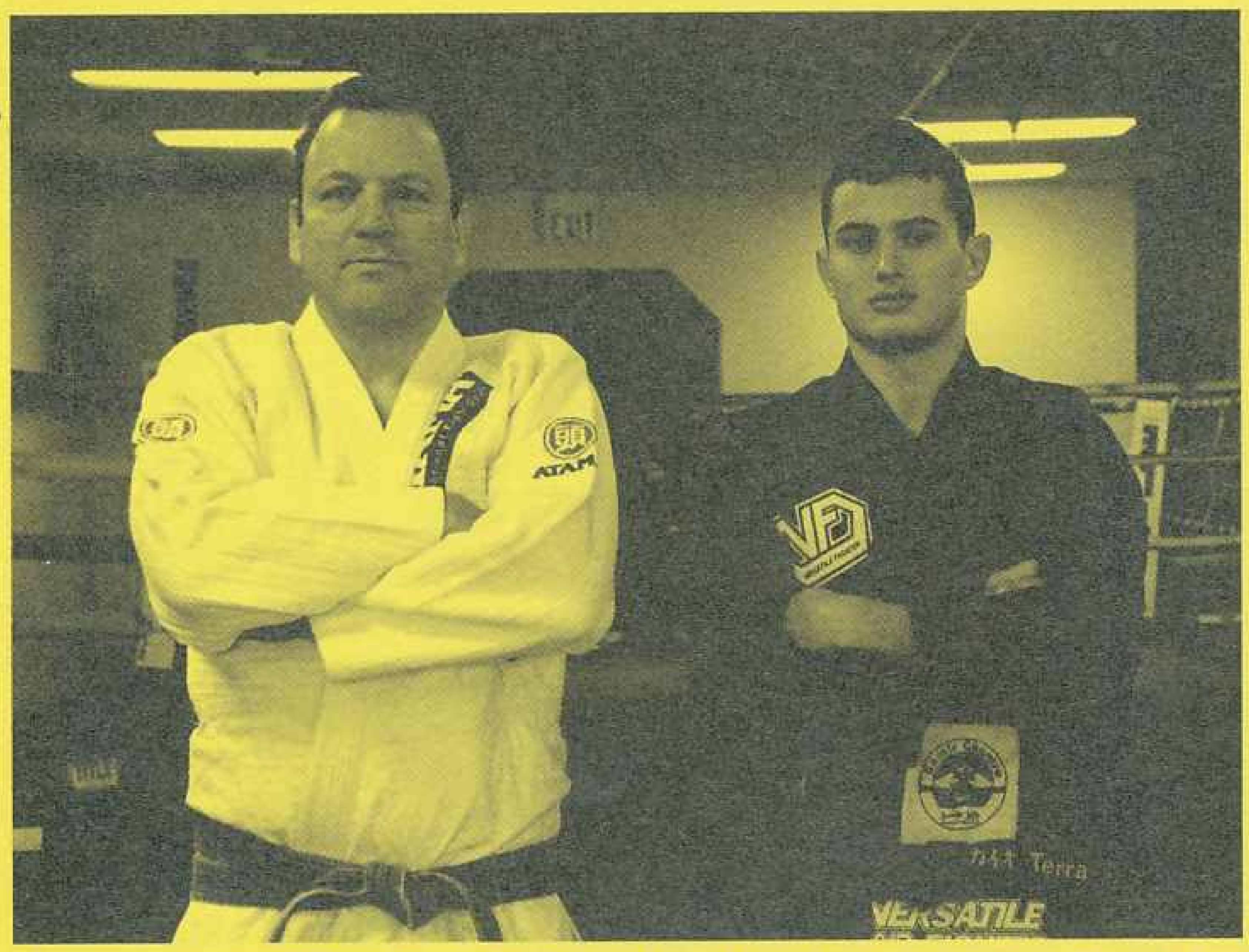
シーザー　まずはアオキの得意とするいろんな角度からのアタックを封じること。ビデオを観てとくにアオキの得意とするガードからのセットアップのポジショニングに注目したんだよ。ギルバートにはアオキの得意なポジショニングからのエスケープも練習させたけど、重要なのは危険なセットアップのかたちにならないように距離を置くことだったんだ。

――確かにグラウンドで上になっても深くガードの中には入りませんでしたよね。

シーザー　そうだろう？　できるかぎりスタンドアップ勝負に持ち込むというのが基本だった。もちろんグラウンドになっても試合をコントロールできるように、アオキ対策の練習を積ませたんだけどね。今日、ここにいるカイオ・テラは、アオキを想定した動きをさせるメインのパートナーとして呼び寄せたんだよ。

――仮想・青木真也の柔術家を特別に用意しましたか！

シーザー　アオキに比べたら背丈が少し低いけど、身体の線は同じように細いだろう？　ディアス兄弟も寝技は得意だけど、アオキとは体格が違うから、よりアオキに近い柔術家を用意したんだ。カイオはノーギ（衣なし）の2008＆2009年ワールドチャンピオンという実績が物語ってるとおり、とくに下からの攻めが素晴らしいんだよ。じつは今回のギルバートのトレーニングで、カイオは一番重要な役目を担っていたんだよ。



シーザー・グレイシーの隣にいるのが、対青木用として特別に用意したスパーリングパートナー、カイオ・テラ。柔術、グラップリングで輝かしい成績を残している選手だ。

――青木選手と同じ体型の柔術家とトレーニングすることで、極めさせなかったわけですね。

シーザー　ところで、私のスペシャリティはエスケープだっていうことを知っていたかい？（笑）。

――えっ⁉　あなたのテクニックのなかで最も得意とするのは、エスケープなんですか？

シーザー　そうなんだよ。仕掛けるより、技から逃れることに優れているんだ（笑）。だからヒールフック、オモプラッタ、ゴゴプラッタなどアオキが得意とする危険なサブミッションからのエスケープをギルバートに教え、カイオがそれらの技を使ってギルバートを攻めるという練習を繰り返したんだ。ギルバートのカーディオ（スタミナ）は5ラウンドをフルに闘えるという確信があったので、どんなポジションになってもエスケープできることを確認させたんだよ。

――それがギルバートの勝利の秘密だったんですね。では、試合を終えて、あらためて青木選手をどう評価していますか？

シーザー　試合後、彼は謙遜する姿勢を見せていたよね？　そういうアオキを高く評価するし、個人的にそういう奴が好きなんだ。正直に言うと、今回負けたことは彼のためにもよかったと思う。昨年末の試合でアオキは、対戦相手の腕を折ったばかりでなく、その直後にやってはならないことをやっただろう？　ほかにも試合前にガールの衣装をまとっている写真を見たんだ。

――確かに以前、セーラー服で公開練習をしたことがありましたね（苦笑）。

シーザー　そんな失礼なことをするヤツということで、試合前はアオキのことを人間として尊敬していなかった。でも、試合後は人が変わったように慎ましくなり謙遜していたように思うんだ。そういう



メレンデス戦での青木の唯一といってもいいチャンスは、この腕を取りかけたシーン。しかし、この体勢からの脱出方法は、道場で何度も反復練習済みだったという。取材時、シーザーはさまざまな腕関節技を披露し、青木対策が万全だったことを強調した。



なぜかセーラー服の青木と、ブルマー姿の今成によって、かつて行なわれた公開練習。メディアに取り上げられるための“奇策”であったが、この姿がインターネットによって、アメリカ格闘技界にまで知られていたとは……。ネット時代おそるべし。

アオキは好きだし、いまはファイターとして尊敬している。

——青木選手の改善すべき点はどこだと思いますか？

シーザー　まずもっと相手との距離を詰めること。あとはストライキングを身につけないといけないと思う。目立たないけど、じつは彼のヒザ蹴りは素晴らしいものがあるんだ。ただ、MMAではいろんな要素が必要とされるけど、最もカギとなるのはボクシングのテクニックなんだよ。多くのファイターはみんなキックボクシングをしているだろう？　でも一番重要なのはボクシングなんだ。ボクシングでキックボクサーと対抗できるようにならないといけないんだ。

——それくらい、ボクシングのテクニックが重要視されている、と。

シーザー　アオキはライト級のなかでは背が高いので、それを活かした自分の距離を優位に持つべきなんだ。でも、いまはその距離を優位に使っていないんだよ、とくにストライキングに関してね。ニック・ディアスとザロムスキーの試合を覚えているかい？　ザロムスキーはこれまでハイキックを多用するキックボクシングのスタイルだっただろう？　それに対してニックはボクシングで攻めたんだよ。ただし、このように両手を広げてハイキックをガードできるポジションに調整してね。

——ニックのパンチが「手打ちだ」なんていう人もいましたけど、そういう理由であの構え、あのパンチになったんですね。

シーザー　そうなんだ。だからザロムスキーはハイキックを入れられなかったんだ。もし普通の構えだったら頭に蹴りを入れられてしまうのもわかるよね。同時に、この両手を広げた構えだとボクシングに優れた対戦相手には簡単に懐に入り込まれてしまうマイナス点も理解しなくてはいけないけどね。でも、ザロムスキーはパンチングパワーを持っていないので、

暴力柔術軍団総師が語る

青木真也の敗因

ガールの衣装をまとって練習している失礼なヤツにだけは負けられなかった

このガードポジションでもそれほど気にすることはなかったんだ。

——“対ザロムスキー戦用”のスタイルだったわけですね。

シーザー　このニックの試合でもわかるとおり、すべての試合には戦略、ストラテジーが必要だってことなんだよ。そしてアオキに関しては、キックボクシングよりもまずボクシングのスキルを向上させることが必要になると思う。日本には素晴らしいライト級のボクサーも、優れたコーチたちもたくさんいるじゃないかい？　みんなタイランドに行ってムエタイの練習をしているようだけど、それは大間違いだってわかってないんだ。タイランドには、何かほかに魅力があるんじゃないかと思ってしまうよ（笑）。もちろんキックボクシングも知らなきゃいけないんだけど、キックを知ったうえで勝つためのボクシングテクニックが必要になるんだ。



身ぶり手ぶりで、ザロムスキー戦でのニックの構えを説明するシーザー。上の写真が通常の構えで、下がニックの構え。ザロムスキーのハイキック用の構えだったという。

——試合後、青木選手はシーザー・アカデミーへの出稽古を希望しましたが、“敵”であるはずの青木選手をあなたのジムに受け入れるというアイデアに賛成した理由はなんですか？

シーザー　日本にいる友人から「アオキが練習に行きたいと言っている」という電話をもらったんだ。そのとき「もちろんかまわない」と即答したんだよ。私は柔術を始めた子どもの頃から日本文化に対して尊敬の念を持っているんだ。もし日本との関係が存在しなかったら、いまの仕事にも就けていないからね（笑）。

——柔術が存在しなければ、いまのあなたはなかったわけですよね。

シーザー　私の祖父であるカーロス・グレイシーが日本人から柔術の基礎を学ぶことにより“グレイシー柔術”を作り上げたんだよ。いまから8年ぐらい前まではサクラバ、サクライ、ウノ、ゲンキ・スドーら、世界に通用する日本人の試合を観るのが楽しみだったんだ。でも、残念なことにいまでは状況が変わってしまい、ここアメリカがMMAをリードするようになってきた。だから我々一族に柔術を教えてくれた日本人に、今度は私がMMAを教えることで恩返しがしたいんだよ。

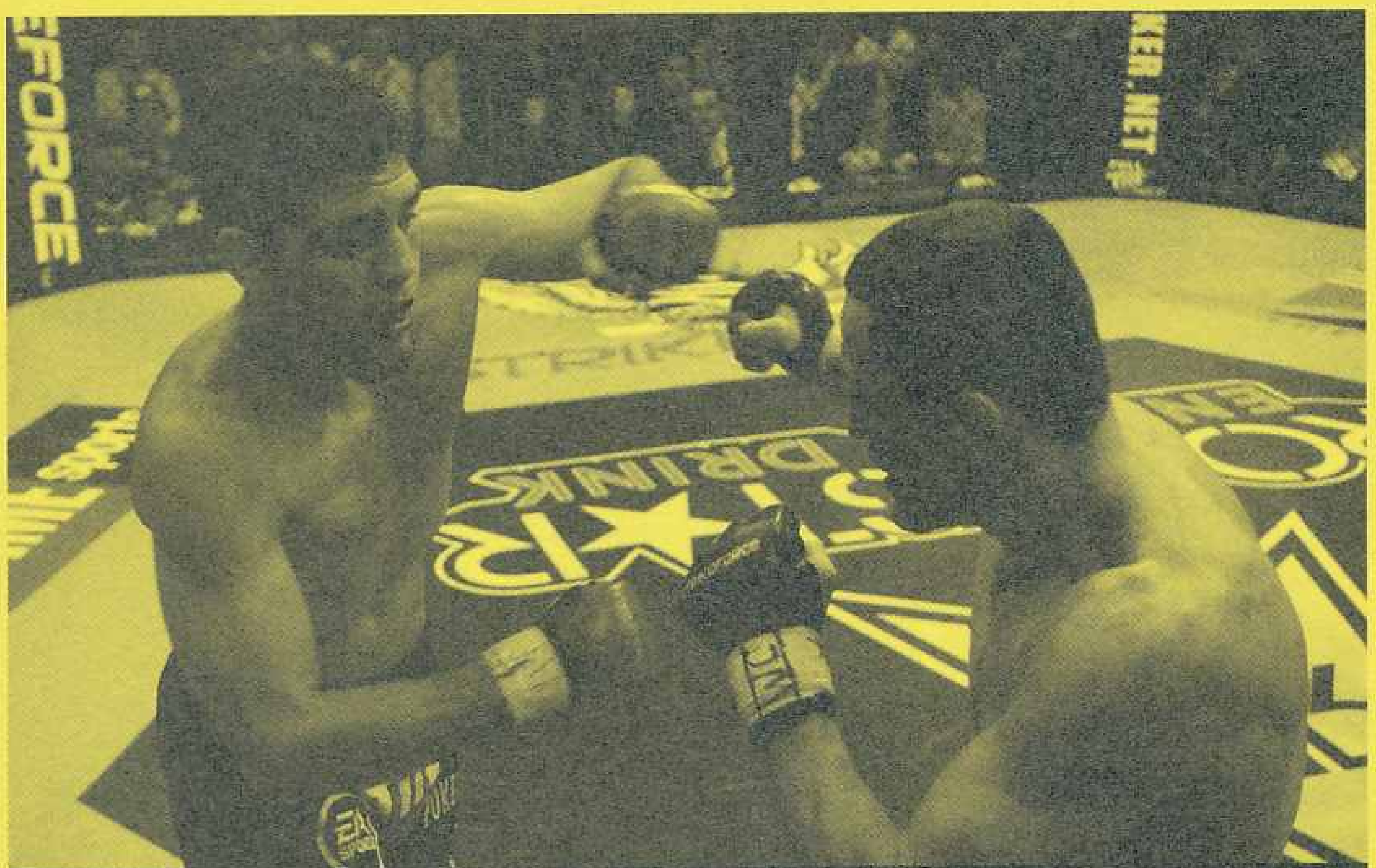
——なるほど。でも、あなたのジムに青木選手を招待することで、将来的な青木vsメレンデスの再戦の妨げにはなりませんか？

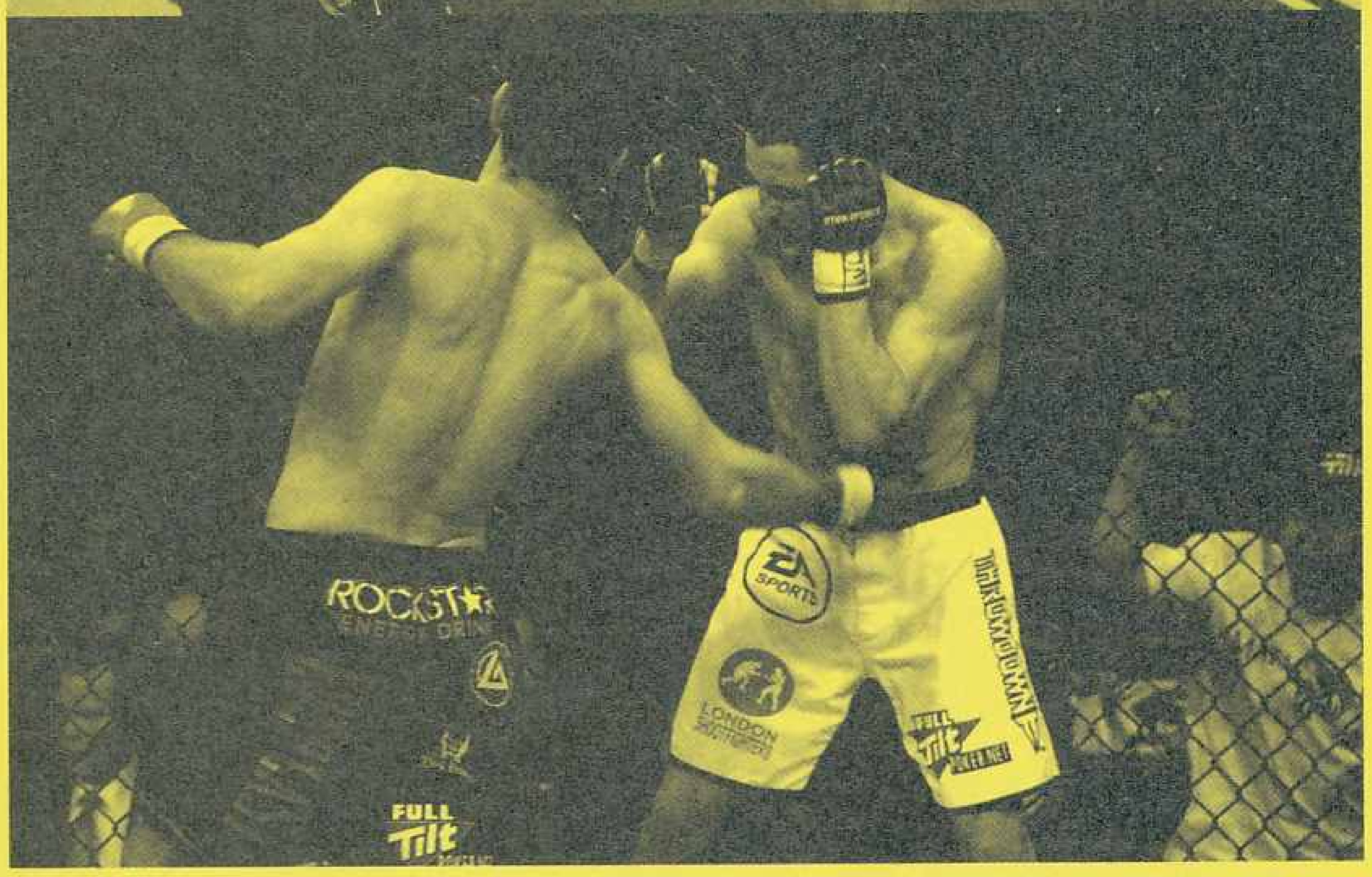
シーザー　今回のメレンデスvsアオキの試合を観たかぎりでは、本当にプロモーターが再戦をマッチメイクをするのかど

うか疑問だよ。もしDREAMがすぐにでも再戦させる考えを持っているのであれば、ここでトレーニングさせることはいいアイデアではないと思うよ。メレンデスは自分の生徒であり守ってあげる立場にあるので、絶対に勝ってもらいたいという思いがあるからね。ただし、あの試合を観てわかるように、メレンデスがすべてのラウンドを完全にコントロールし、アオキは何もできなかったので、再戦させる理由がいまのところ見当たらないんだよ。ニックがザロムスキーに1ラウンドKO勝利を収めたのと同じだね。将来的には再戦もあるかもしれないけど、少なくともいますぐにその可能性はないと思っているんだ。

――わかりました。では、5月29日の『DREAM・14』では、あなたの弟子であるニック・ディアスが桜井"マッハ"速人選手と闘いますが、どんな試合になると思いますか?

サクライのことは真の戦士だと思っている。試合が終わったらアカデミーに来てほしい





グラップラーでありながら、重いパンチを次々と叩き込み、ストライカーのザロムスキーをKOしたニック・ディアス。ボクシングを中心とした"MMAの打撃"の打撃の習熟度が、いまのMMAには必要不可欠なのか。

シーザー　ニックは凄く気合いが入ってるから、きっと激しい試合になると思うよ。それと同時に、タフで気合いの入ったサクライも観られると思っている。サクライは素晴らしいファイターだと思うけど、ここ最近の試合を観ると、意気込みを全然感じなかったし、その試合に向けた厳しいトレーニングをこなしたとは思えなかったんだ。

――本来のマッハではなかった、と。

シーザー　ただ、今度のニックとの試合に関しては、今後の彼自身のキャリアと、日本MMAの将来がかかっているような面があるので、サクライも真剣に試合のためのキャンプに入っていると聞いているからね。

――確かに早くからシアトルに飛んで、試合のためのトレーニングキャンプを張ってますね。

シーザー　だからサクライが最高の状態で試合を迎えることができたら、最高の状態のニックとの闘いになるだろうから、一瞬たりとも目が離せない素晴らしい試合になると思う。サクライはいまマット・ヒュームのところで、ケージで、1ラウンド5分のルールでの練習をしているんだろう?

――そうですね。

シーザー　でも、なぜ日本で練習をしないんだい?　試合に備えたパートナーがいないからなのかい?

――マッハ選手のシアトルでのキャンプは、試合前の恒例でもありますけど、やはり練習環境はアメリカのほうがいいんでしょうね。

シーザー　試合後はぜひ、ここシーザー・グレイシー・アカデミーにも来てほしいよ。我々はサクライのことを真の戦士だと思っているし、同時に彼に対して尊敬の念を持っているからね。

――ニックvsマッハ戦のセコンドには誰がつく予定ですか?　あなたやメレンデスも来日しますか?

シーザー　ニックのコーナーにはネイト(・ディアス)とボクシングコーチであるリチャードが行く予定になっている。私は行かないだろうし、ギルバートは行きたがっていたけど、ちょうど子どもが生まれる時期なので難しいだろう。もしかしたらジェイク(・シールズ)は行くかもしれないけどね。ジェイクは日本が大好きだし、ちょうど試合が終わったあとだから、ロッポンギで遊びたくてたまらないみたいだから(笑)。

――そういう理由ですか(笑)。

シーザー　とにかくシーザー・グレイシー・アカデミーが最強のチームであることを弟子たちみんなで証明してくれて、私は幸せだよ。きっと今度もニックが素晴らしい闘いをしてくれると思うんで、応援してやってほしいな。

【10年5月3日/米国カリフォルニア州サンフランシスコ、シーザー・グレイシー柔術アカデミーにて収録】



CEASER GRACIE■1966年、ブラジル出身。グレイシー柔術の始祖であるカーロス・グレイシーを祖父に持ち、叔父であるヒリオンから柔術を学ぶ。20歳のときにアメリカへ移住し、カーロス・グレイシー柔術アカデミーを設立。93年にサンフランシスコに移り、自らの道場を開設。ジェイク・シールズ、ニック・ディアス、ギルバート・メレンデスらトップファイターを育て上げた。

金網攻略法を徹底講義!

本誌恒例・TK講座

「リングとケージはココが違う!」



聞き手／長谷川亮　試合写真／乾晋也、Josh Hedges（UFC）、石井史彦

打撃

円に近い形状では相手を追い込みにくい!

――リングとケージの実際の違いについて、今日は両方の経験者である髙阪さんに解説をしていただきたいと思います。

髙阪　まず一番は形状の問題が一つあって、ケージって何角形であれ円に近いかたちをしてますよね。リングみたいにコーナーがない。だから前へ出るプレッシャーで追い込んで相手の出口をなくしてしまうっていうことが凄く難しくなる。だからコーナーを使って試合を作るのを得意にしている選手は、釘づけにできないから凄くやりづらいと思います。

――相手をコーナーに追い込んで仕留めることができない、と。

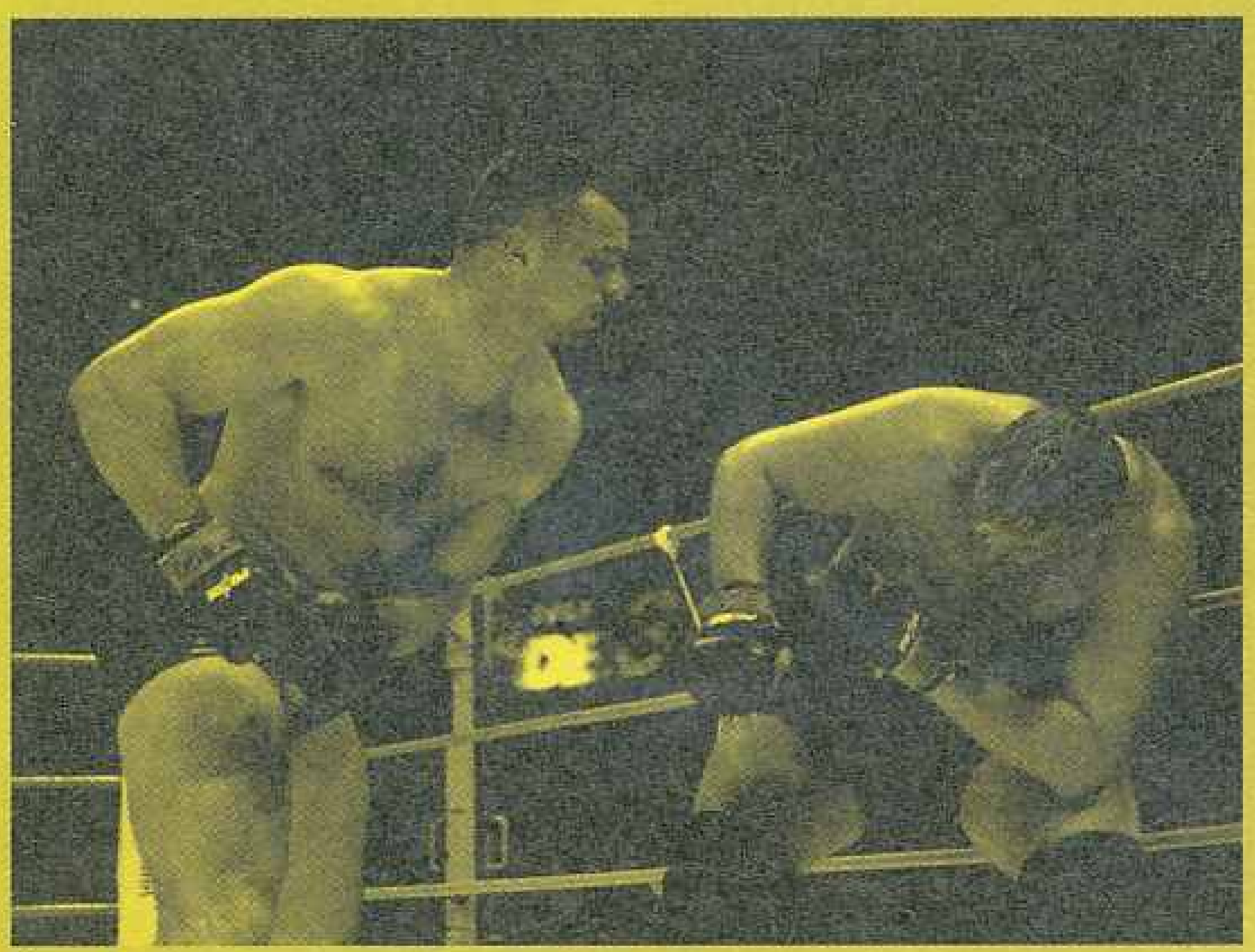
髙阪　そうですね。そういうふうな戦術を使うタイプの選手は、ですけれども。逃げ道が広がってしまうので一角に追い込むことが難しいというか、ほぼ無理ですね。

――リングの場合だとロープやコーナーに追い込むというのが戦術の一つとしてあると思います。

髙阪　ケージだとそれができないですね。だから、相手の足を止めさせるには一度正確に打撃をヒットさせなきゃいけなくなる。UFCに出始めの頃のミルコもそこで苦しんでいましたよね。ミルコはリングではコーナーに追い込むか、もしくは圧力をかけて相手の足を止めさせてからハイで仕留める、というのが得意でしたからね。あとミルコの場合は左の蹴りなので、相手が自分の右側に動いてしまうと左の蹴りが当たらなくなる。でも、それが金網だと相手に延々と回られてしまう。そうすると、これまで釘づけにして倒すってことをやってきた選手は迷いが起こるんです。何をやったらいいかわからなくなったりとか。なのでそういう戦術を得意としてやってきた選手は、試合のやり方自体をけっこう変えなきゃいけなくなる。

――でも打撃が強い選手というのは、大抵追い込んで仕留めるというパターンが多いように思いますが……。

髙阪　だから、これまで打撃だけで仕留めると言うふうに考えて試合をしてきた選手は、ケージになった途端にうまくいかないっていう場合が多いんだと思うんです。釘づけにして仕留めるというのはリングが可能にしていた側面もあったと思うので。極端に言うと、K－1のジェロム・レ・バンナとか、ああやって圧力をかけまくって、コーナーを背負わせてガンガンやるようなタイプの選手が、もしケージで同じように試合しようとしても、まぁうまくいかないでしょうね。



テイクダウン

ケージ=壁! 倒される側はディフェンスが難しい!

――打撃の場合は金網の広さとコーナーの有無が攻防の内容も変えましたが、テイクダウンに関してはどうですか?

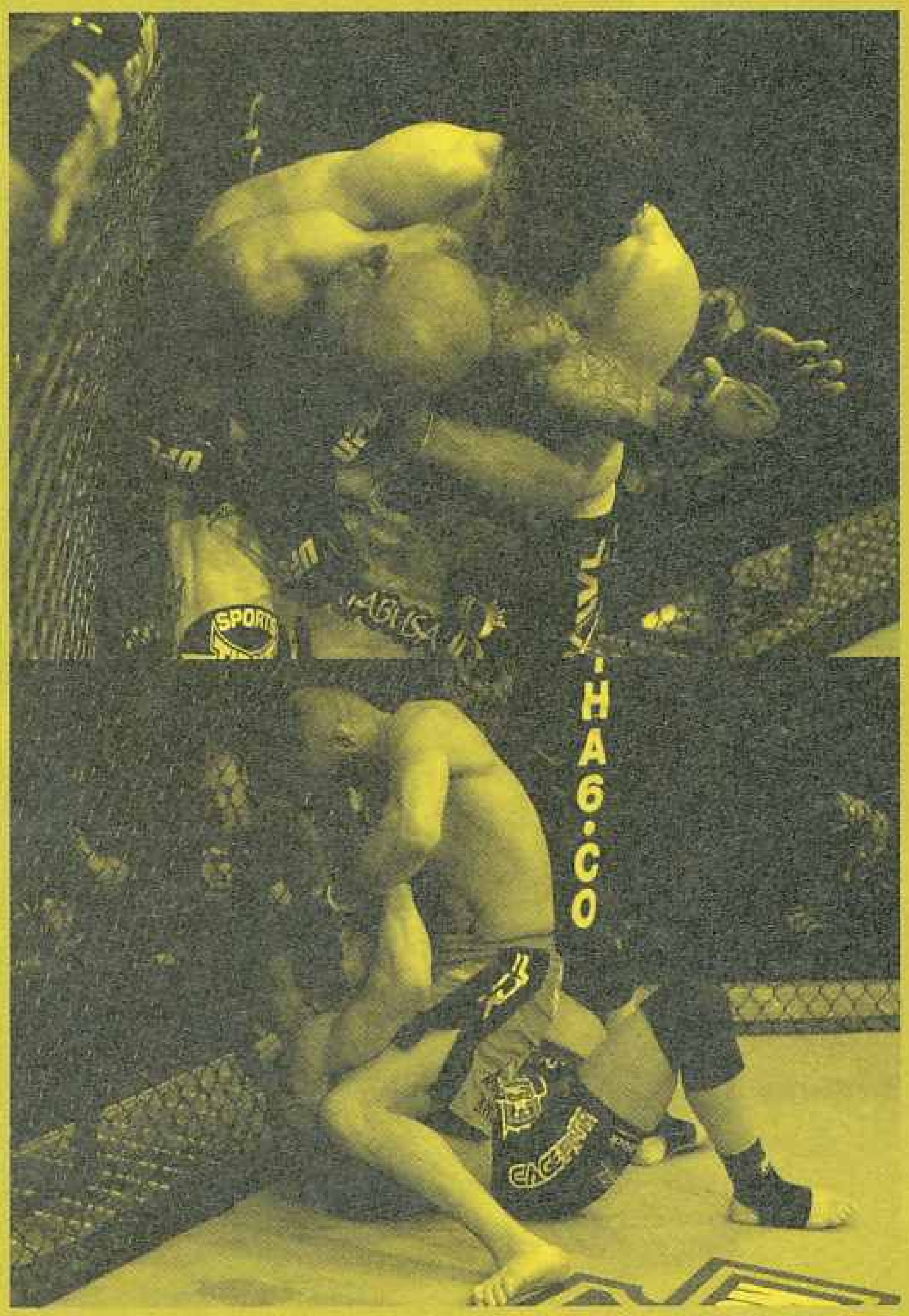
高阪　組みついて攻撃する、タックルに入る側にしたら、網というのは"壁"なんで、もしそこまで追い込んでいったら相手はディフェンスできなくなりますね。一番大きいのは、網に阻まれて足がうしろに下がらないっていうことです。タックルや脇を差されてプレッシャーをかけられてるとき、やっちゃいけないことというのは身体を伸ばすことなんです。けど、足がうしろに出せるから身体は前傾姿勢を保てるわけで、足がうしろに下がらなかったら身体は伸びざるをえない。そうなると簡単にテイクダウンを取られてしまうし、ディフェンスのしようがなくなってしまうんです。

――リングの外に足を出してタックルを防ぐのと、金網に押し込んでそこからテイクダウンするのはどちらもよく見る場面です。

高阪　ただし、金網に押し込むのを可能にするのは打撃のプレッシャーなんです。DREAMのケージは一番長いところで直径10メートルあります。それに対してリングは一辺が7メートル。この大きさの差って凄く大きい。そのなかで相手に網を背負わせる状態までタックルだけで持っていこうとしたら、広すぎてまず無理。スタンドでの打撃のプレッシャーで相手を下がらせるっていうことができないと、網まで持っていくことはできません。だから、もし押し込みたいのなら、打撃の圧力で網までうしろ2メートルくらいのところまで下がらせてからタックルに入って、たとえ切られてもそのまま前に押し込んでいけばだいたい2、3歩くらいで相手の足が網に届く、というようなパターンが理想ですよね。要は網までいけたらこっちのもんなので。

――相手を金網に押し込んだうえで、リングではできない倒し方も可能になってくる、と。

高阪　出てきますね。たとえば低いタックルが得意な選手だったら、肩で相手の身体を押していき、足だけすくうようにして手前に引くと、柔道の朽木倒しみたいなかたちで相手が倒れます。これはリングだったら足が外に出るから防がれますけど、金網だと足がうしろに出ないから可能になります。



――金網=壁になっていて、足が外に出る空間がないことがテイクダウンの攻防においては大きいのでしょうか。

高阪　そうですね。リングの場合、タックルでコーナーに押し込まれても多少は足が外に出るんです。長さでいうと10センチとかそれくらい。でも、それくらいでもうしろに足が下がるかどうかで、全然ディフェンス能力は変わるんです。それは凄く大きいですよね。

――では、金網のほうがリングよりテイクダウンの数自体が増えるということも?

高阪　その押し込むタイプのタックルをしっかりわかっていれば、です。それを使わないで普通にタックルに入って倒す、というイメージだけでやっている選手に関してはそんなに変わらないと思います。まぁ、それで取れればそれに越したことはないんですけど、だけど押し込んで倒すほうが断然楽なんですよね。

――"金網際では足が外に出ないからテイクダウンさせやすい"という特性をよくわかっていれば、より楽にテイクダウンすることができる、と。

高阪　そうですね。あとはいくつもの攻防をやる必要がなくなるので、あまり消耗しないで有利な試合展開を作れるっていうのも大きいですね。

――そういう金網の特性をうまく活かして闘っている選手というと誰になりますか?

高阪　UFCはけっこう多いですよね。いまだったらジョン・フィッチかな。ジョン・フィッチは完全に網に押し込んで相手を釘づけにしてパウンドとヒジで仕留めるっていう。彼は網を使うのが相当うまいですね。テイクダウンもほとんど網のほうへ持っていって、真ん中でのテイクダウンなんてほとんどいかない。組みついて網へ押していくか、もしくは網際のところでしか相手に組みつかない。でもそのために相手にプレッシャーをかけるのはやっぱり打撃なんですよ。打撃で網際まで下がらせて、そのあとで組みつく。あとランディ(・クートゥアー)なんかはちょっと飛び抜けてますね。逆にあの人の場合は、網を使わなかったら試合が成立しないんじゃないかっていうくらい(苦笑)。いまや代名詞にもなっている網際でのクリンチアッパー、フックだったり。

――あれもテイクダウンとは違いますけど、うしろへ下がれない金網の特性を利用した押し込んでのテクニックですよね。

高阪　あれはダン・ヘンダーソンもやりますけど、最初にやりだしたのはランディだと思います。けど最初の頃のランディは、網に全然遠いところからタックルに入って、そのまま勢いに任せて網に持っていく、みたいなことをやっていたんですけど、それを繰り返してるうちに疲れちゃって負けるっていうこともあったんです。だけど打撃の技術を上げて、打撃からの展開を作るようになったら、凄くラクに網まで持っていけるようになりましたよね。

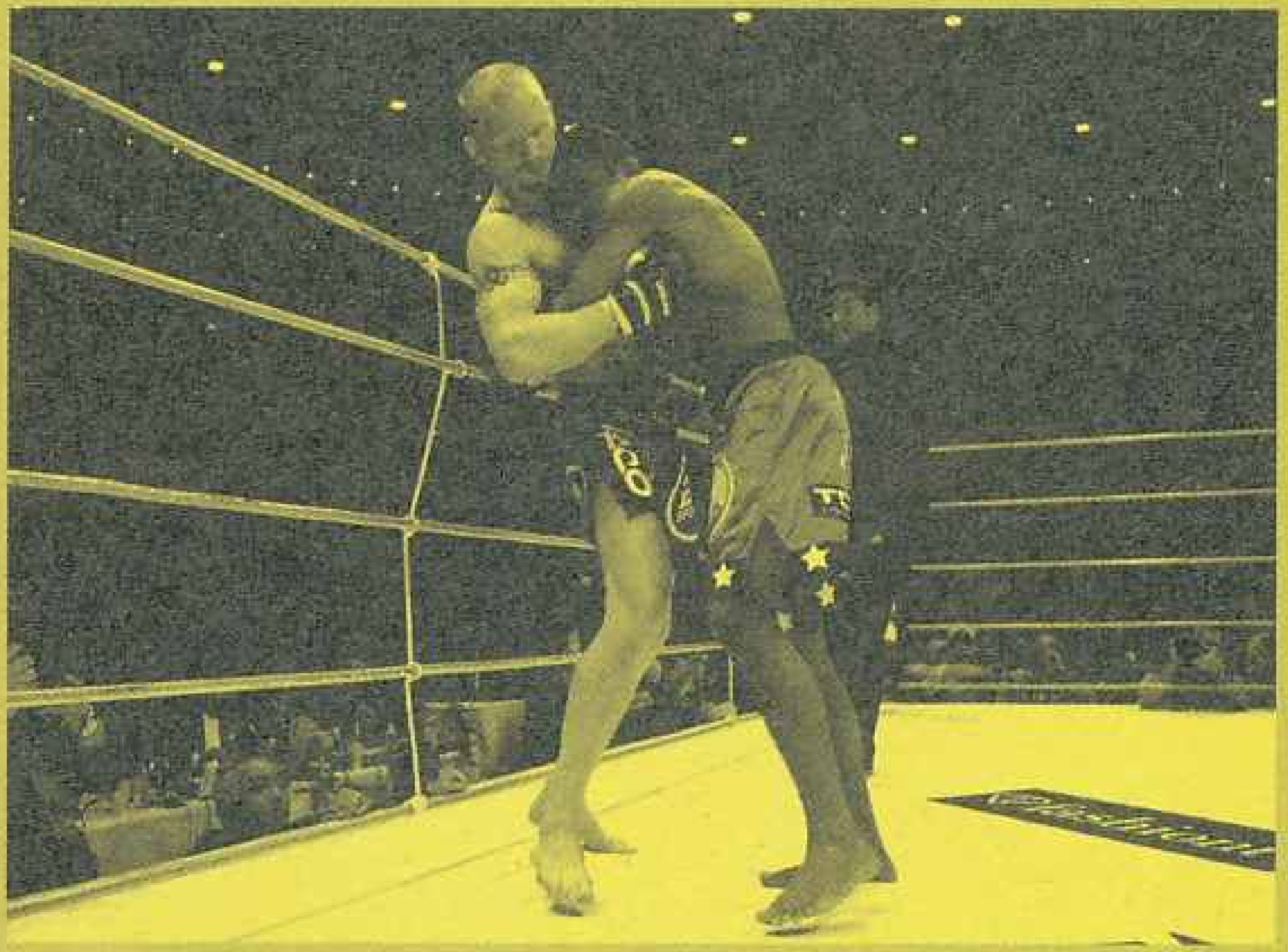
――消耗が少なく試合を展開できるようになった、と。

高阪　だから、より最短距離を通って勝ちに結びつける、みたいなことをいまのランディはやってますよ。でも彼らは網をうまく使って試合を組み立てているだけに、リングでの試合となると逆にからっきしだと思うんです。テイクダウンが網際みたいにはうまくいかなくて、ロープ際でテイクダウンを狙うたびにブレイクやドントムーブで中へ戻されて、というふうなことを繰り返してるうちに消耗しちゃうと思います。

寝技

床と壁を使えば下にいても立ち上がりやすい!

――リングとケージの実際の違いについて、寝技の場合はいかがですか?
髙阪　寝た場合は、まず上になってる側の選手が相手を網に持っていってのパウンドですよね。網に押しつけて窮屈にさせて、逃げられないようにして打つ。ただ、逆にそこから逃げ出すっていうことを考えると、網というのはロープなんかに比べると断然立ちやすくなる。網をつかむのはダメだけど、手のひらで押すのはかまわないんで。つまり、〝押していい〟っていうことは、下だけでなく、側面にもマットがあると考えて寝技ができるわけです。
――では、立つのに支点が作れるというか。
髙阪　そうですね。だから網を使って自分の身体の向きを変えられたり、少ないスペースでの身体の入れ替え方を知ってる人ならけっこう簡単に立ち上がることもできるでしょう。こういう選手なら、もし背中全体を網=壁のほうにつけることができたら、8割方立つことができると思います。
――金網に背中=体重を預ける感じにして立ち上がる、と。
髙阪　そうです。でもロープだと身体が外に出ちゃうから、身体を預けるっていうことができないですよね。で、リングの試合だと唯一それができるのがコーナーパッドなんですけど、リングの場合はロープをつかんじゃダメだから、手を使うことができないんです。

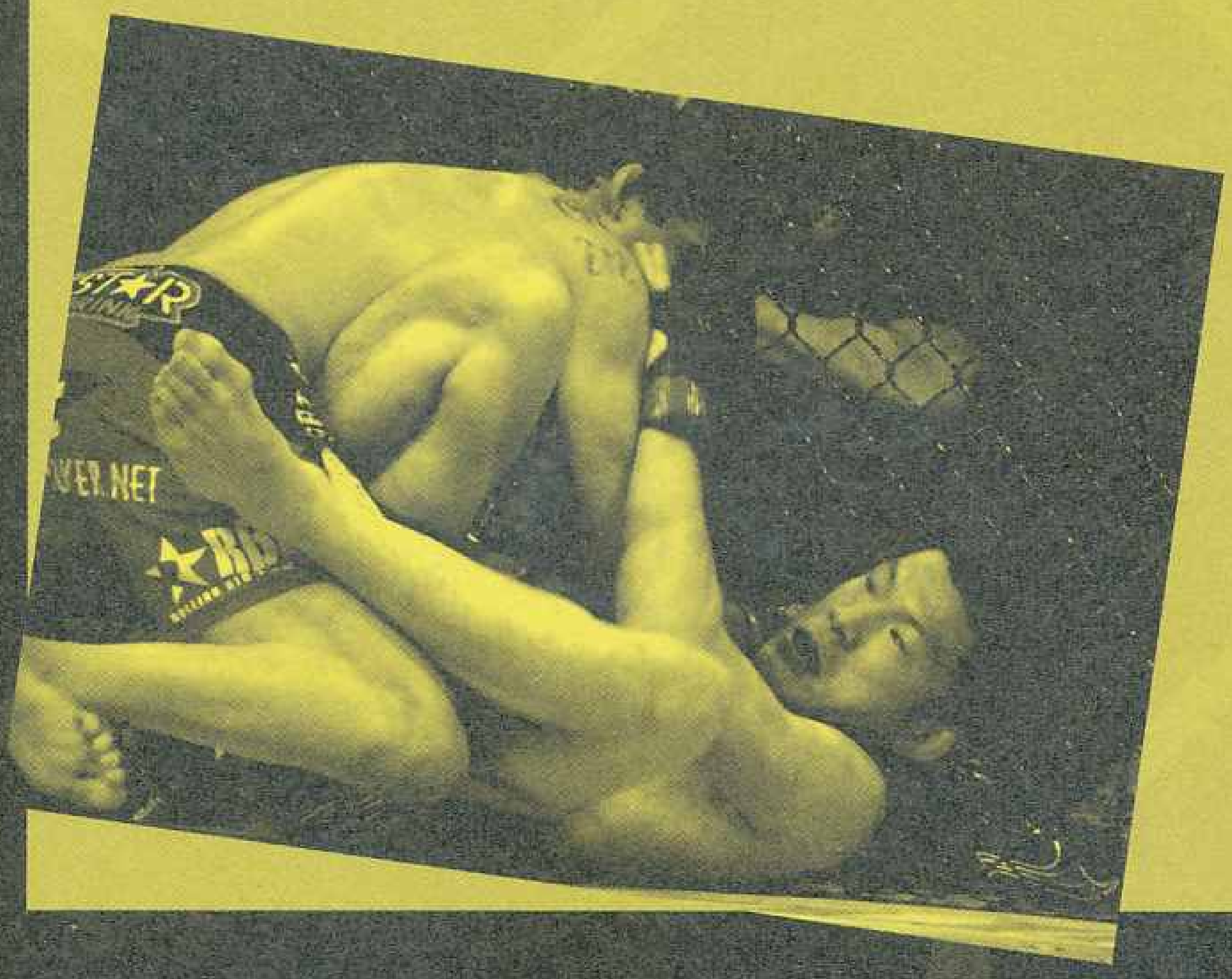


――身体を預けることができる、手で押すことができる、という2点から金網は立ち上がりやすそうですね。
髙阪　それに金網の場合は壁が延々とあるので、もし前方にズラされても自分から下がっていって、また壁のほうに寄っていく。それで背中が当たる面を自分で探せばいいんです。
――では、そこは押し込んで窮屈にして立たせないようにする上の側と、網を背にして立とうとする下の側との攻防がある、と。
髙阪　それで攻めるほうにしたら、相手の網にかかってる部分を背中じゃなく首だけにしないといけないので、足を手前に引いて首だけにしようとします。だけど下の側も手でマットを押してうしろに下がっていって金網を背にして立とうとする。網際では両者のあいだでそういう駆け引きが行なわれているんです。

経験

ケージの特性を知らない選手はあきらかに結果に違いが出る!

――髙阪さんはUFCの金網で闘った、まだ数少ない日本人の一人ですが、実際に体験していかがでした?
髙阪　一番最初は広さの違いをもの凄く感じました。直径9メートルのオクタゴンの中にポンと入って試合をするってなったとき、もの凄く相手が遠く感じたんです。それで試合が始まって相手に近づいていくのも、リングとは違う間があったりして。なんか最初の頃は不思議な感じがしたのをよく覚えています。
――まず、中に入った感じからしてリングとはだいぶ異なる、と。
髙阪　でも、リングとの違いが最初はよくわかりませんでした。一番初めにキモとやったときも、タックルを使っても網を使って立たれて「なんで?」って思って（苦笑）。そのうちに「なんかうまくいかないことがあるな」というのと「やたら相手を立たせないで攻めれてるな」という二つが出てきましたね。それで、それはなんなのかな?　と思って研究してやっているうちにだんだん網の使い方が見えてきた感じです。
――リングとの違いについては、やりながら気づいていった部分が多かった、と。
髙阪　最初は「そうは言ってもそんなに変わらないだろう」みたいに思っていたんです。でも、徐々にわかるようになってから「これは全然違うな」と思うようになりました。網際の独特のうっとうしさや窮屈さとかね。たとえば、バス・ルッテンと試合したとき、タックルに入って倒したら向こう側がちょうど網だったんですね。それでバスの頭が金網に押し込まれたかたちになって、自分はガードの中からパウンドを出してたんですけど、攻めながら「なんか狭いところで試合してるなー」って思ったのを覚えています。でも、自分が反対の立場になったときは、もう攻めてるときの比じゃないくらいの窮屈さだった（苦笑）。ほんと、逃げようと思っても押されて首が曲がっちゃってるから横に動けないし、逃げるためにはガードを解かなきゃいけないんですけど、その瞬間に殴られちゃうから、ずっとそのまんま（苦笑）。だからそういうのをわかってやってる選手と、それを何も知らないでやってる選手では、あきらかに結果として違いが出てくると思います。



総論



ケージとリングの違いは痛いほど勝ち負けを左右する!

──ここまで打撃、テイクダウン、寝技と、さらに高阪さんのUFCでの体験も併わせて聞いて、リングと金網では同じ総合格闘技でも大きく異なることを痛感しました。

髙阪　もう別ものだと思ったほうがいいと思います。そこをわかってないことが多いから、選手も金網を使いきれていないというか。それはDREAMの去年のケージの大会を見ても感じました。

──では試合空間の形状が変わることで、攻防の内容にも変化がおよぶ、と。

髙阪　うーん、でも真ん中で試合をやり合ってるときというのは何も変わらないんです。

──ただ、必ず流れのなかで中央から網際での攻防へ移っていくので、そこでの場面や、意図的にそこでの展開へ持ち込むことで違いが出てくる、と。

髙阪　そうですね。気がつかないうち網へ持っていかれたり逆に気がついたら網際で攻めていたということもあると思うんですけど、網をちゃんと意識できるかというのも有利な展開作りのポイントの一つになると思います。

──高阪さんと同じようにUFCと日本のリングを経験した弘中邦佳選手は「押し込んだときのロープのたわみがないし、頭が外に出たり腕がロープに引っかかることもない。基本、せこいことができない。金網は力と力のぶつかり合い」「ドント・ムーブがかからないからポジションが変わらないし逃げ場もない。TKOも増えると思う」とオフィシャルHPのインタビューで語っていましたが、これに関してはどう思いますか。

髙阪　それは確かにそうですよね。ロープ際で寝技の動きをやると、どうしても身体が外へ出てしまったりするんです。あとはタックルに入ってもうちょっとで倒せそうなのに、相手の身体が出ちゃったからもう一回中からやり直しだとか。だから、しっかりお互い〝やり合う〟っていう意味では、総合は網の中でやると密度が濃くなるところはあると思います。リングはリングでまたいいところがあるんですけど。

──金網とリングで行なう総合の違いを、イメージしやすいよう高阪さんなりにたとえていただきたいのですが、どんな感じになるでしょうか?

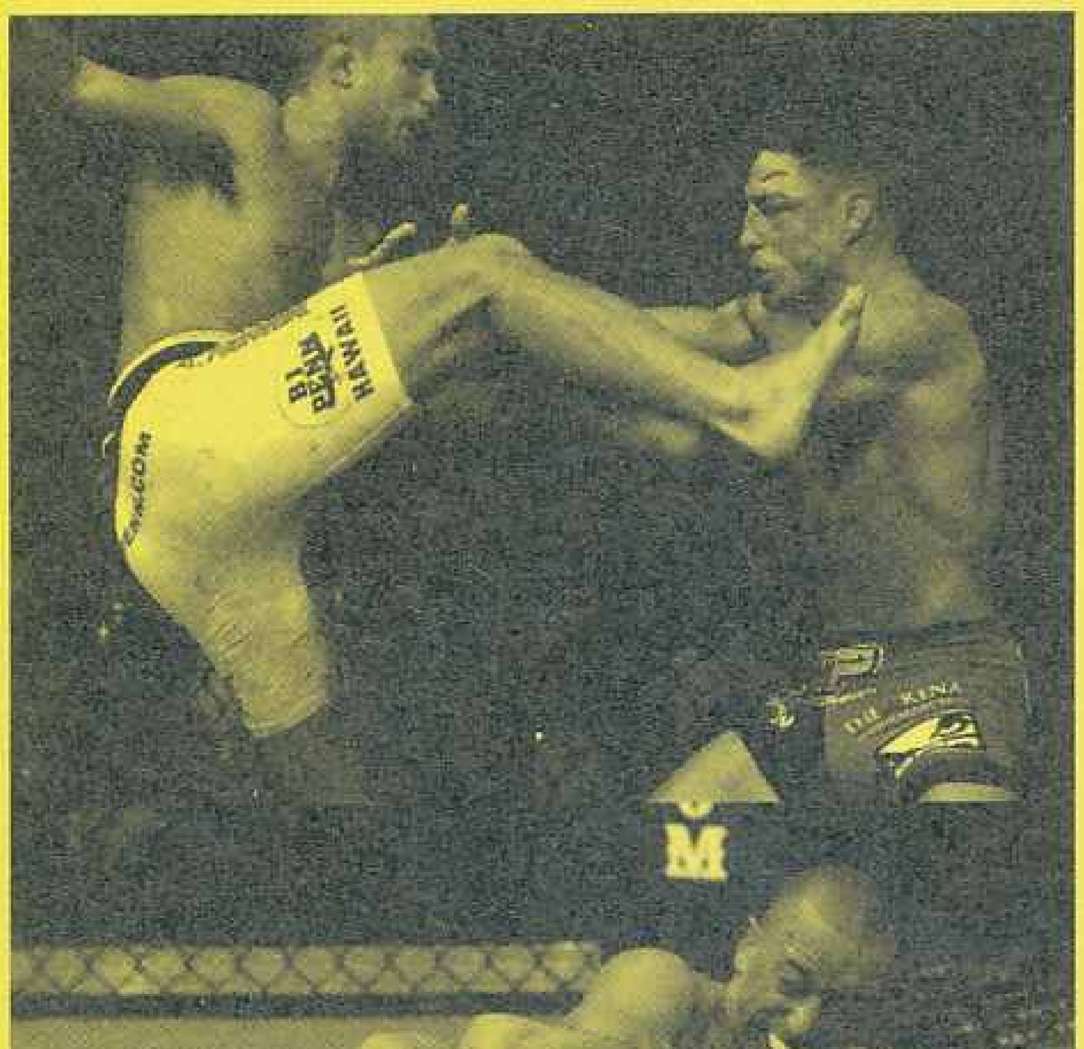
髙阪　うーん、なんですかね……。でもやってることは一緒、同じなんですよ。

──では、野球とソフトボール、あるいはサッカーとフットサル的な違いというか。

髙阪　えーと、あれじゃないかな。野球をファールとかホームランをなくしてどこへ打ってもいい、全部囲んでボールが当たるから内側へ返ってくることもある、みたいな(笑)。

──無茶ぶりにありがとうございます(笑)。

髙阪　でも、金網はおもしろくもつまらなくもなるっていうのが正直なところだと思います。



「リングとケージはココが違う!」

それは選手次第です。つまらなくなるというか一方的になってしまう場合はあります。たとえばさっき話に出たジョン・フィッチは網の使い方がうまいですけど、逆にうますぎて相手の光を消しちゃうんで、試合自体がつまらなく見えてしまう(苦笑)。でも、それはジョン・フィッチがうまいからにほかならないし、相手もUFCで何戦もしているわけで、しかも網を使った練習をしてるから特性だったりもつかんでるはずなんですけど、それさえ潰してしまうということを考えると、フィッチのそういう部分は相当強いんですよね。

──ただ、フィッチは金網を利した戦法が核になっているから、リングになったら弱くなる可能性もあるという先ほどのお話でした。

髙阪　GSPやBJとか、〝あわよくば網を利用する〟というタイプの選手はリングでも普通に試合ができると思います。でも、やっぱり金網とリングは変わります。それによって勝ち負けを左右することが起きたりもするので、試合をするんだったら違いをしっかり知っておかないといけない。たとえば、追い込まれそうなときにステップワークで円運動をすればいいのに前後左右しか動かなかったために網に詰まってしまったとか、テイクダウンされても網の近くなら網を使って立てばいいのにそれをやらずに、逆に網に向かった状態で相手が倒れるスペースがないのに一生懸命スイープしようとしていたりとか。

──金網とリングでハコが変わると中味も変わってくる、と。

髙阪　ほんと違いますね。

──では金網で勝っていこうとするなら、やはり金網のある環境で練習するのが望ましいですか?

髙阪　理想はそうですよね。練習するスペースにちゃんと金網が設置してあって、それを使った攻防っていうのを練習しつつ準備していったほうがいいと思います。

──同じ食べ物でも洋食と和食というか、総合でも金網とリングではいろいろ異なることが今日はお話を聞いてよくわかりました。

髙阪　自分の個人的な意見としては、網のほうが総合は断然やりやすいですね。ケージっていうのは、より総合格闘技に適した形状だとも思っています。打撃だけ、レスリングだけじゃなく、打撃とテイクダウンを混ぜて詰め将棋みたいに相手の出口をなくしていくのを考えると、円に近いかたちで網っていう壁のあるケージは、より適しているのかなと思います。

──高阪さん自身も二つの異なる競技に挑んだような感覚があったのですか?

髙阪　ほんと最初はよくわかってなかったんですけどね。一回やったくらいだと網のことはなかなかつかめないと思います。「なんか嫌な感じがするなぁ」とか、逆に「凄くやりやすかったけどなんでだろう?」みたいなことが起こって、そのうちに「これか!」みたいなことが出てくる。ただ、ケージの場合はフィッチみたいに試合の仕方をよく知ってる選手には一方的にやられてしまうということもあるので、そういう意味ではある種危険な場所だとも思います(苦笑)。

いまこそ、格闘技版〝サムライJAPAN〟を結成せよ！

日本格闘技界に必要なのは〝尊王〟と〝廃藩置県〟である！

日本武道傳骨法創始師範
堀辺正史

いままさにマット界は幕末！　青木真也がストライクフォース世界ライト級王者ギルバート・メレンデスに敗れたのを機に、〝開国〟してケージを導入するのか、それとも〝鎖国〟して、日本独自の格闘文化を守るのか、論争が起こっている。はたして、実際の幕末の志士たちは何を考え、どんな行動をしていたのか？　おなじみ〝現代の侍〟堀辺師範に幕末の現実をうかがった。

聞き手／堀江ガンツ　撮影／森鷹博　試合写真／乾晋也、Josh Hedges（UFC）



——先生！　今日は「幕末」がテーマなん

の

ない。そういう構造的な問題があるんで

――先生！　今日は「幕末」がテーマなんですよ。

堀辺　NHKの『龍馬伝』が流行ってますもんね。『kamipro』は福山雅治が表紙だったりするんですか？

――いや、龍馬は龍馬なんですけど、龍馬のコスプレした川尻達也が表紙です（笑）。

堀辺　そうですか（笑）。

――で、なぜ幕末がテーマかというと、先生は以前、グレイシーが登場したとき「黒船」と名づけましたよね。で、いままさに日本格闘技界は、アメリカの脅威にさらされた幕末の日本のような状況にあるんですよ。

堀辺　なるほど。UFCがいろんな国に進出しているというのは聞きますけど、確かにあれは植民地政策のようなものですからね。現地の格闘技界というのを潰して、UFCで支配してしまうという。そのなかで日本格闘技界というのは、まだなんとか独立を堅持しているという点で、確かに黒船が来た時代の外圧にさらされている状況と言えるかもしれませんね。

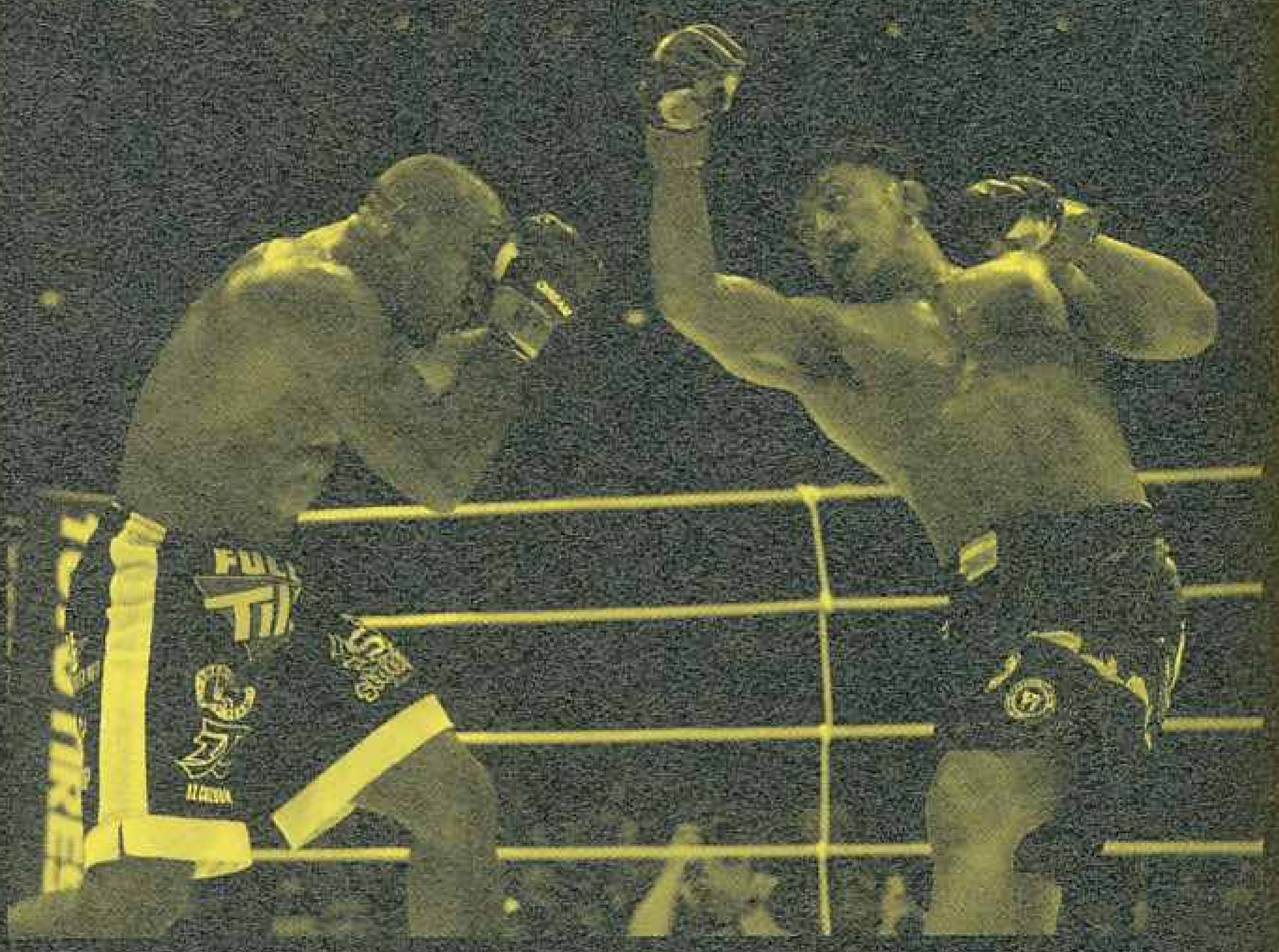
――そして先日、そういった状況のなかでも、世界に通用する日本を主戦場にした選手の筆頭であった青木真也選手が、アメリカの団体ストライクフォースのチャンピオンと対戦し、完敗を喫したんですよ。これを機に、アメリカに勝つために闘う場所もケージに変えて〝開国〟すべきなのか、それとも日本独自の文化を守るために〝鎖国〟してリングでの闘いを続けるのか、という論争になってるんです。

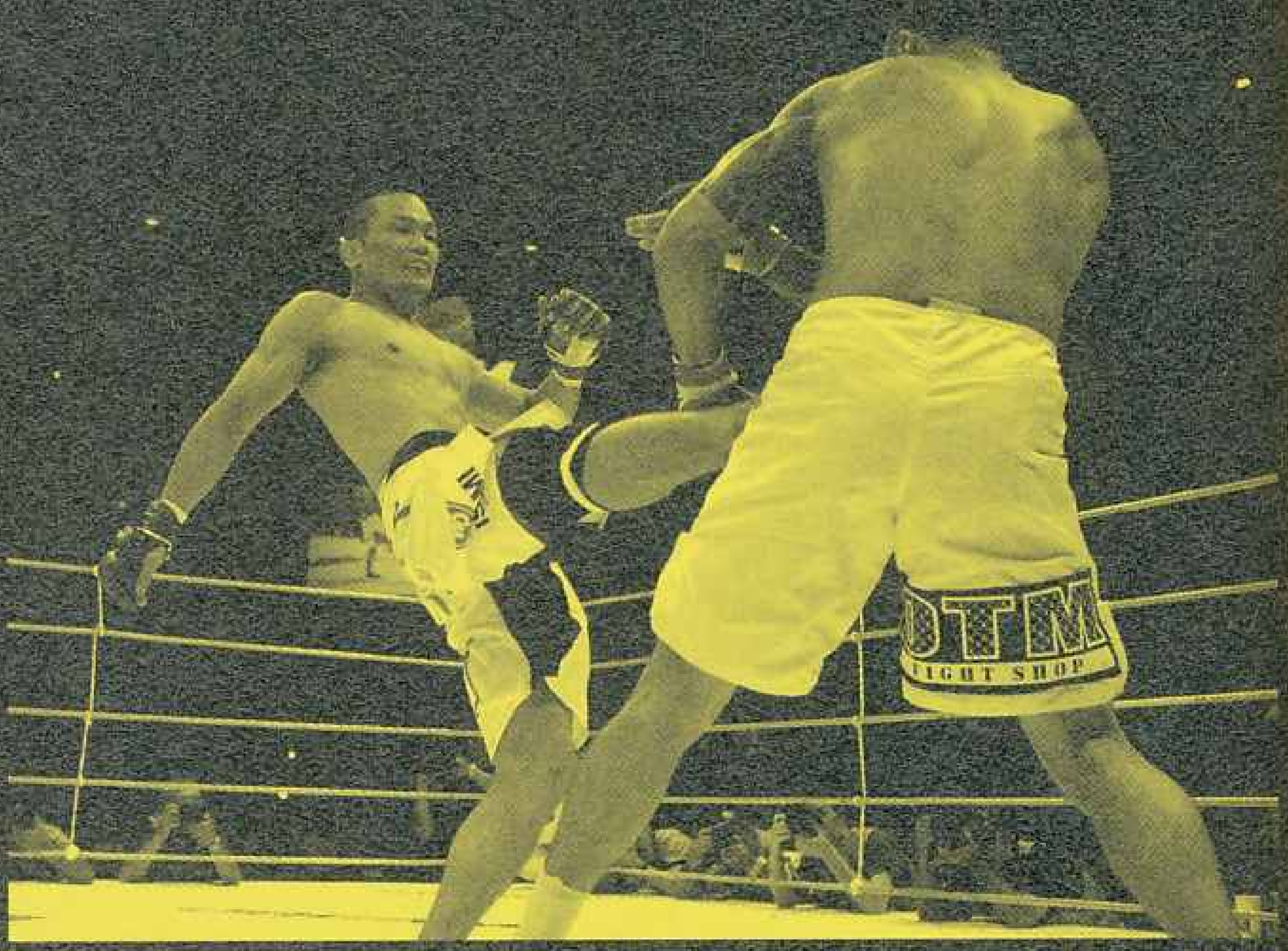
開国派、鎖国派、考えや方策は違っても「尊王」という考えで一致していた

堀辺　日本格闘技界自体が岐路に立っているわけですね。やはりアメリカが総合格闘技の本場となったいま、日本のやり方で向こうのルールで勝つというのは、ちょっと難しくなっているんでしょうね。だからずっとアメリカを主戦場にしてる選手がいましたよね？

――岡見勇信選手ですか？

堀辺　そうです。彼なんかは、完全に向こうで闘うための練習に特化しているから、結果も残せていますけど、普段は日本で試合をしていて、突然アメリカで試合をするというと、なかなか難しい部分もあるんでしょう。そこにも、いまの日本の空洞化というものが、技術的にも起きているんでしょうね。





青木真也とともに、DREAMライト級のトップを争うライバルである川尻達也と菊野克紀。この3人に、個人的な欲望以上に日本格闘技界を守る気持ちがあるかどうかも問われている。

――違うルールでやっていたことで、そのルールでの実力に差がついてしまった部分はあるでしょうね。

堀辺　また日本格闘技界がこうなってしまった要因としては、日本の国自体が不況に陥ったということもあると思います。それによってテレビ局のお金に依存していたプロ興行が、そこから資金を得られなくなった。それもこの日本空洞化の要因の一つでしょうね。

――ビジネス的に負けたことも要因の一つだ、と。

堀辺　アメリカのようなファイトマネーは払えない、だから一流選手を呼ぶことができない、一流選手が来なければ選手たちも刺激を受ける機会が減ってくるから、全体的なレベルアップにもつながらない。そういう構造的な問題があるんですよね。

――では、そんな状況を打破するヒントとして、今日は実際の幕末の志士たちは、どのように考え、どんな行動をしていたかということを、格闘技に置き換えて、先生に説明していただきたいと思います。

堀辺　わかりました。

――まず、幕末というのは、どういう状況だったか説明してもらえますか？

堀辺　幕末という時代を正しく理解するには前提があるんですね。いまの言葉でいうとナショナリズム。日本語にすると国家主義、国民主義、民族主義という言葉で訳されますけど、近代というのは、欧米がそのナショナリズムに基づいた、国民国家を作ったということが、そもそもの始まりだったんですよ。そして国民国家の時代に入ると、何が生まれるかというと、弱肉強食の国際社会なんですね。

――あの幕末の時代は、すでに弱肉強食の時代に世界が突入していたわけですね。

堀辺　はい。その象徴が黒船だったわけですよね。弱肉強食ですから、軍事力を背景に資源などを奪い合っていたわけですよ。だから大東亜戦争が終わるまでというのは、世界中が文明の力を軍事力に転換して、そのなかで資源争奪戦を行なってきたという、過酷な時代だったわけですよね。

――そして黒船が来たその日から、日本もその弱肉強食の国際社会に入っていかざるをえない状況を突きつけられたわけですね。

堀辺　そうなんです。そこで日本が取れる態度というのは、大きく分けて二つしかなかったんですよ。一つは欧米の力を素直に認め、開国することによって、追い

つき追い越すための力をつけるという方法。もう一つは、その国際社会に入ること自体を拒否すること、鎖国ですね。また、あるいは「我々が本気になれば黒船を打ち払える」という攘夷派もいたわけです。

――では、3派がいたと。

堀辺　そうですね。大きく言うと、鎖国派、開国派、攘夷派の三つ巴があったわけですね。そしてその三つ巴でさまざまなことがあって、現在の日本になるわけなんですが、その話をすると何時間あっても足りなくなるので省略します（笑）。

――わかりました（笑）。

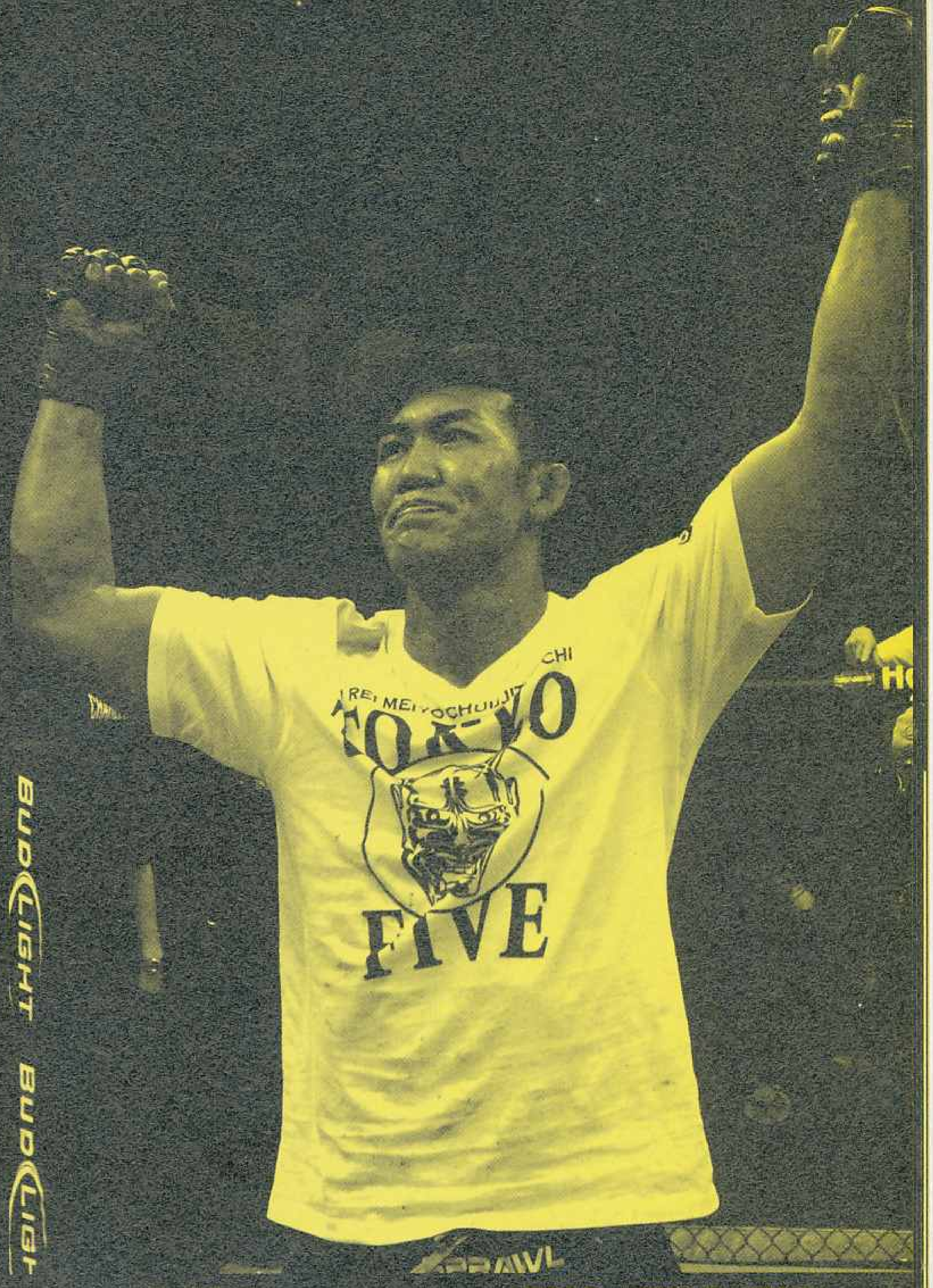
堀辺　話をナショナリズムに戻すと、じつは日本はヨーロッパの先進国に負けないくらいのナショナリズムというものが、江戸の中期ぐらいから形成されていたんですよ。ここがほかのアジアの国々と違うところなんですよ。

――江戸時代、すでにナショナリズムがありましたか。

堀辺　日本のナショナリズムの特徴はというと、よく幕末では「尊王」という言葉が出てきますよね。

――尊王攘夷というのは、学校で習いました（笑）。

堀辺　この尊王というのは、天皇を中心とした伝統的文化を価値の高いものとして、みんながその共通の価値観を持っていたということなんですよ。だからやわらかく言うと、天皇を中心としたナショナリズムというものが形成されていたということですね。だから幕末というのは、開国派、鎖国派、攘夷派とそれぞれ方法論は違い、三つ巴の激しい争いはしていたんですけど、根底の部分でまとまりが効いたんですよ。



いまアメリカでも最も結果を残している日本人ファイターである岡見勇信。彼の勝利が個人の勝利ではなく、日本格闘技のための闘いになったとき、人気は爆発するか。

野球のサムライJAPANの闘い方こそ日本がアメリカに勝つ道です！

――一番深い部分ではわかり合えたというか、考えが一緒だったわけですね。

堀辺　そうなんです。方策は違うけれど、尊王という部分で一致していた。だから国家を作り、一致団結したことによってのちに日清、日露戦争に勝利して国際社会に打って出ることができたんですね。

――また、幕末の動乱でも国家転覆することがなかったわけですね。

堀辺　そうなんです。考えが違う日本人同士が敵になったとしても、尊王に基づいた日本の国益が第一ということは一致していたんで、ほかの諸外国のように、一部の勢力が外国と組んで、結局外国の傀儡政権を作られたりとか、そういったことにならなかったわけですね。そして、そういう志士たちが、日本を近代国家にしたということですね。

――では、格闘技界に置き換えると、選手たちみんなが考えや、やり方は違っても、日本格闘技界を守るという共通認識があるかどうか、ということが問われてきますね。

堀辺　そうですね。また日本格闘技界自体には、「これが日本だ」という価値観があるかどうかということが問われているわけです。

――たとえば、日本格闘技界の特徴として、ファンのなかにも、選手以上に団体を愛す部分などもありますよね。

堀辺　ありますね。これは野球なんかもそうで、やっぱりアメリカンベースボールと日本の野球は違うんですよ。たとえば、サムライJAPANがWBCで優勝しましたよね。あのとき、なぜ日本が勝てたかといえば、いろんな要素があるとは思うんですけど、日本の選手は個人の名誉を捨てて、チームが勝つためだったらなんでもやったからだと思うんですよ。

――日の丸のもとに、フォア・ザ・チームに徹していた、と。

堀辺　アメリカなんかは、メジャーリーグの公式戦じゃないこともあったんでしょうけど、個人のことを第一に考えていた選手が多かったんじゃないかと思うんですね。でも、日本はどんなスター選手でも送りバントのサインが出たらもちろんそれに従うし、チームのためだったらエゴを封印できていたと思う。

――あんな我が強い集団でありながらそれができた、と。

堀辺　そして幕末もまさにそれだったんですよ。みんなが尊王。天皇を中心とした日本を守るために動いていた。はたして、そういったことがいまの格闘技界にあるのか。日本格闘技界の未来を、個人の損得を越えて考えられる選手がどれくらいいるのか、そこが問われていると思いますね。

――たとえば、いまアメリカのリングで勝つことが求められていますけど、それはその選手個人が名を上げるためだけじゃ、物足りないわけですよね。

堀辺　物足りない。そうじゃなく、日本の

日本格闘技界は〝廃藩置県〟を断行し 日本統一軍となる必要がある！

格闘技界を盛り上げたい、起爆剤にしたい、そういう選手一人一人の思いが重なることで、幕末の開国路線と同じような道にいくことができる。UFCに勝つために、ジムや団体の枠を越えて、一致団結できるのか。本当の意味で垣根をぶち壊して、打倒アメリカのための練習ができるのかどうか。そういうものを意識して国内でも、アメリカに送り出すための選抜戦が行なわれたりとか、そういったことをやっていけば、日本格闘技界の活性化につながるし、日本人選手が本場アメリカに行っても、活躍することができるんじゃないかと思う。それができれば、現在空洞化している日本の格闘技界に力を与えることができるんじゃないか、と思います。

――なるほど。

堀辺 ただ、これはあくまで理論的な想定です。実際にそれを担っている団体やジム、選手がそういうものを作り出せるのか。この論に現実味を持たせることができるのか。そこが問題でしょうね。

――観ているファンのほうも、選手たちがそういう思いで闘っていることがわかれば、応援する気持ちも変わってきますよね。

堀辺 変わってきます。

――べつに好きな選手ではなくても、日本格闘技界のために闘っている選手は頼もしいと思うだろうし、応援したくなりますよ。

堀辺 個人を超えるわけですよね。サムライJAPANをみんなが応援したのは、それがあったんです。WBCという国際的な試合のなかに、まさにナショナリズムが発生したわけですね。格闘技界の人たちに、そういう力を生み出せるか否か。そこでしょうね。

――有事の際に一致団結できるかどうか。いま格闘技界はまさにその有事なわけですからね。

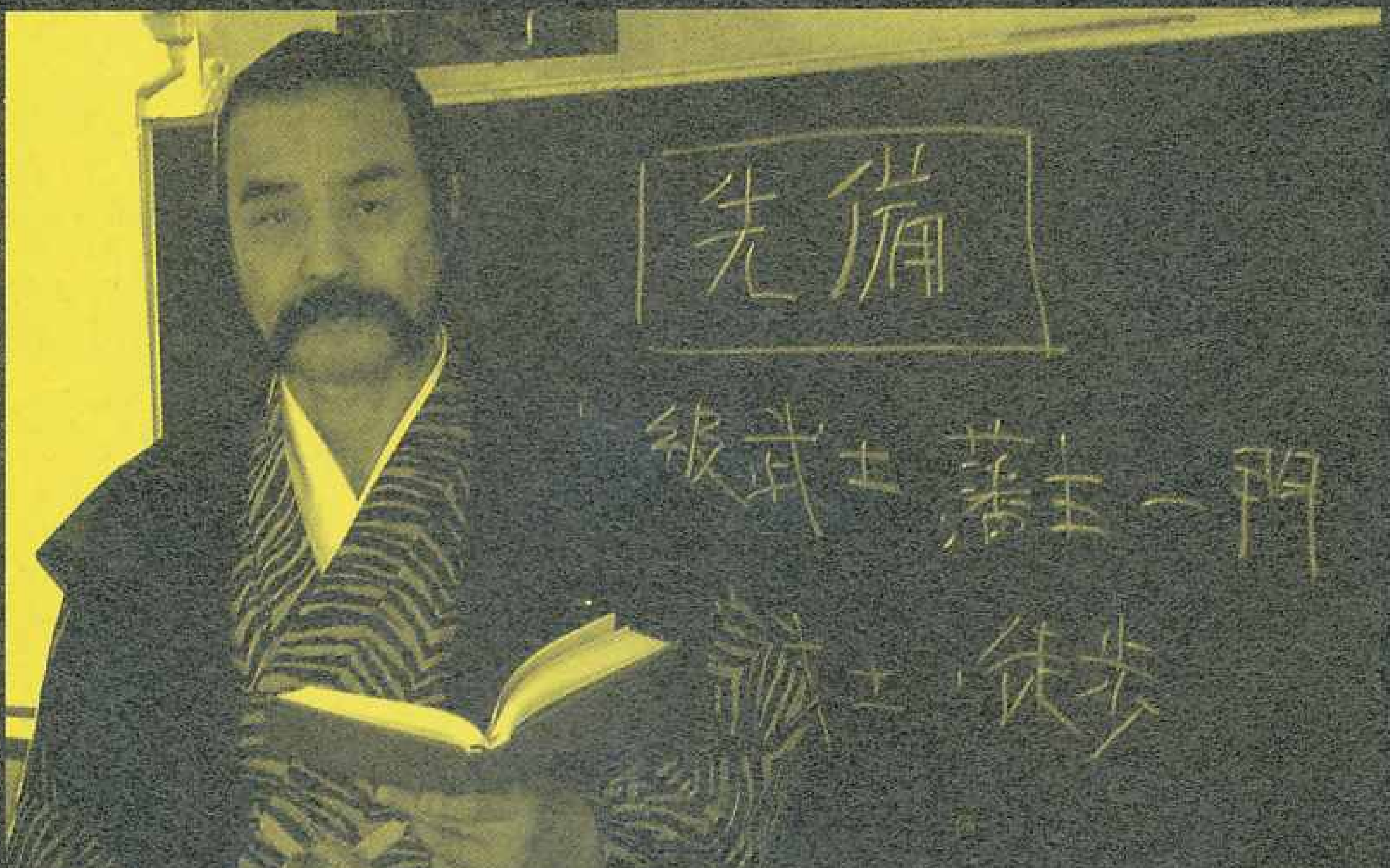
堀辺 そうなんですよ。あとは、いっそのこと鎖国するという選択も悪いことじゃないと私は思います。やはり小泉構造改革が進めたグローバルスタンダード化が、いかに日本人に合わないか、みんなわかってきたと思うんですよね。UFCもそうした部分があるんですよ。

――勝った一部の選手はお金持ち、2～3敗したらお払い箱ですからね。

堀辺 この価値観は日本人から見ると美しくないんですよ。一回や二回負けたことだけで、「弱い」という烙印を押してしまうのは、日本人に会わない。辛抱強い日本人は、敗れても修行して這い上がってくるドラマが好きなんですよ。

――アメリカは勝者のドラマですよね。

堀辺 そこが日本的な求道の価値感と合っていないんですよ。だったら現状を認めてしまって、とことん日本の価値観に合った試合システムを生み出したらどうか。私なんかは骨法で、そちらの道を歩むことに決めたんですよ。でも、鎖国しないというなら、ちゃんとサムライJAPANのようなものを結成できるかどうか。そこでしょうね。



ほりべ・せいし■1941年、茨城県出身。50年にわたる命懸けの求道の末、喧嘩芸骨法、さらに全局面打撃制kopppoを創始。最近はヨルダン国王護衛の近衛団にも武道を指導するなど、多方面で活躍中。格闘技・武道評論の第一人者でもある。

日本格闘技界に必要なのは“尊王”と“廃藩置県”である!

――選手がそういう意識になれるかどうかですね。そういうふうになれば、団体内の試合も変わってきますよね。

堀辺 そうなれば団体内の試合の位置づけが変わってくるんですよ。DREAMと『戦極（SRC）』のどっちが強いとか、どっちがおもしろいとか、どっちがお客を入れてるとか、関係なくなるんです。あるとすれば、どちらが真剣に日本格闘技界のために闘っているか、アメリカを倒す、日本格闘技界を託すことができるか、ということですね。

――団体内でも、俺はあいつより上とかそういうことが関係なくなるわけですね。

堀辺 そうです。グレイシーが出てきたとき、出稽古が増えたんですよね。それまでは出稽古というのは、頻繁に行なわれるものじゃなかったんですよ。でも、みんな勝ちたいから、出稽古をして力を合わせて立ち向かったんですよね。いまは、それをさらに大きなものにしてやる必要があるんじゃないでしょうか。

――日本人同士のライバルの争いもかたちが変わってきそうですね。

堀辺 ライバルであることは変わらないけど、ライバル意識の持ちようが変わってくるんですよ。たとえば封建時代の藩と藩の闘いは、どちらの藩が上になるか、天下を獲るかという争いだった。でも、幕末の藩の争いは、それによって戦国乱世、内戦にはならなかった。なぜなら尊王という意識で一致していたから。だから「アメリカに勝つ」「日本格闘技界を守る」という気持ちが一致していたら、みんな協力もするし、そのための競い合いもできる。そういうことを考える指導者、選手、呼びかけをする人がいるのかどうかが問われてきますよね。

――幕末にほかの藩より上だとか言っても仕方がないわけですもんね。

堀辺 そうなんです。薩長土肥が勝ちましたけど、勝った藩がまた徳川幕府みたいなものを作ろうとしたら、外国にやられちゃうわけですよ。だから最終的には廃藩置県というものを行なったんです。だから藩を団体に置き換えたら、廃藩置県を断行できるかどうかなんです。廃藩置県を断行して、日本統一軍としてアメリカに立ち向かえるのか、サムライJAPANを作れるかどうかなんです。

――わかりました。日本格闘技界はいまこそ廃藩置県をしろ！ ということで締めさせていただきます。

【10年5月11日／都内・骨法武術館にて収録】

幕末評論

「求められる強力な指導者」

文／buggy　音楽・プロレス日記　http://blog.livedoor.jp/buggy/

DREAMが発表した「ケージ導入」。これに対しネット上では「リングorケージ」問題が一部で勃発（その論争をリアルタイムでできるだけで幸せな時代だ）。当然のことながらファンや関係者という立場や個人の趣味、ファン歴などさまざまな要素が絡み合って賛否両論が湧き上がった。しかし、当然ながら明確な答えは出ず混迷状態が続いているのが現状だ。

まさにその様子は今年の大河ドラマ『龍馬伝』の時代、すなわち「開国か鎖国か」と論議された幕末にも通じるものがある。そもそもこういった論争はそのジャンルや存在が不安定な時に起こるものだ。日本でいえば天保の大飢饉（1833～39年）による米価の高騰、商人による買い占めが発端となった百姓一揆。さらには1837年に大塩平八郎の乱が起こり、長らく続いてきた徳川幕府に安定感がなくなってきた時代。そして1853年に現われたのがペリー率いる「黒船」という存在だった。そこで幕府は開国を求められたがその不安定な状態では当然のようにはっきりとした答えは出せなかった。しかも隣の中国、当時の「清」では10年前に外交政策が失敗したためアヘン戦争につながり、結果的に海外による植民地化が進んでしまったという前例も日本に情報として入ってきたのだから、当時の政治家も本当に困ったであろう。「開国か、鎖国継続か」迷いまくった当時の幕府は諸大名にも広く意見を求めたという（その行為自体がリーダーシップの欠落なのだが……）。

その結果、港を開放して交易も行なう全面開国派はたった4パーセントであったという。少ないと言うべきか、鎖国していた当時のことを考えると多いと評価すべきかはその人の解釈次第だが、一方の鎖国維持派は約70パーセント。この鎖国維持の根拠はわからないのだが、諸大名の意見ということでおそらくは日本が大きく変わったり、開国して失敗すると清のように植民地化されるうえに既得権を失なう恐れがあるからという視野の狭い根拠だったのではないだろうか。

そしてこういった混沌とした時代に突出するのが新しい人材。たとえば現在大河ドラマで大人気の坂本龍馬は「海外に負けない日本」というものを武力ではなく商業で確立しようとした。その思想に大きな影響を与えた勝海舟も幕府へ提出した「海防意見書」にて清や朝鮮と積極的に貿易をし、その利益をもって国防費に充てるという柔軟な考えを持っていた。また長州力、大谷晋二郎、ターザン山本！と西村知美を排出したいまの山口県（当時の長州藩）では吉田松陰やその弟子である高杉晋作も相手の国に飛び込み技術を吸収して、それを日本に還元しようというスタイルを主張していた。そして吉田松陰はその熱すぎる性格から英語もさっぱり話せないのに黒船に「密航」しようとするが未遂で終わり、結果的に幕府に捕らえられて打ち首にされてしまう。

ここで言いたいのは「開国or鎖国」という二元論ではなく彼らのような「相手に勝つには相手を知り、それを活かすこと」をいまの日本MMA界に投影することではないだろうか。

いまでこそリコールなどさまざまな問題もあるが、自動車でも日本は海外の技術を徹底的に真似て独自の揺るがない文化を創ってきたはずである。それはプロレスでも力道山の時代から欧米スタイルを取り入れたあとに、独自の格闘文化も加え1990年代には海外でも真似のできない四天王&三銃士プロレスのように日本オリジナルのスタイルにしてきたはずだ。そもそも海外のフォーマットを取り入れること自体どこか「日本の負け」というふうに考える風潮があるから反対意見もあるのだろう。

しかし、日本自体の文化をあらためて考えてほしい。古くは中国、戦後は欧米の真似事であったかもしれない文化をいつの時代も自分たちでアレンジして独自のものにしてきたではないか。

それが日本人の強みなのだ。「ラーメン」というジャンルぐらいに、「これが俺たちの国のスタイル、現地がどうであろうと関係ない」という確固たる意志さえあれば「開国or鎖国」論争なんてそもそも必要ないのだ。ちなみに音楽の「開国or鎖国」で思い出すのは1970年代後半からの「ディスコ・ブーム」である。1977年に映画『サタデー・ナイト・フィーバー』が爆発的なヒットを記録すると音楽の世界では「ディスコ・サウンドを取り入れるべきか、否か」というまさに開国or鎖国論争が一部で巻き起こった。その結果、あの派手なメイクでハードロック畑のKISSは『ラヴィン・ユー・ベイビー』という曲、カントリー畑のオリビア・ニュートン・ジョンは『フィジカル』、ロッド・スチュワートは『アイム・セクシー』において、普段のジャンルとはかけ離れたディスコ調のサウンドを取り入れながら成功している。それによって、たとえばKISSがハードロック界で評価を落としたかといえばそうではない。要は、混迷の時代は外部のスタイルを取り入れるべきだが独自の「軸」になっている文化も残すべきであり、そのバランス感とやり抜く決意と強い指導者が必要なのだと思う。そして今、圧倒的に足りないのは「強い指導者」なのではないだろうか。強烈な指導者は時に偏ったベクトルに向かうが、ある意味それぐらい強烈な舵取りがいまの日本に必要なのかもしれない。

思い出すのは先日他界してニュースとなったマルコム・マクラーレン。その名前こそ音楽ファンにしか知られていないだろうが、音楽ファン以外でも有名なバンド、セックス・ピストルズを仕掛けた人である。たとえるなら猪木をサポートした新間寿というべきか、AKB48を仕掛けた秋元康というべきか。マルコム自身はアルバムを何枚も出しながらほとんど歌ったり楽器を演奏したりしないが誰かを使って音楽を創ることは天才だった。彼はアメリカでパンクと出会い、イギリスに持ち帰ってピストルズを仕掛けた。のちに発表された自身のアルバムでも当時珍しかったヒップ・ホップのスクラッチを初めて楽曲に取り入れるなど超がつく開国派だった。そこで圧倒的に優れていたのは打ち出したい音楽と同時にファッションで若者を操り、スキャンダルでマスコミを操ったことでありそのバランス感覚だった。だからこそ「パンク」はムーブメントとなったのだろう。

そこで個人的に思うのはいまのマット界において「格闘技」や「プロレス」に精通したプロデューサーはいても、それらを「若者文化」に昇華するプロデューサーがマット界には不在なのではないだろうか。その仕掛人が不在であればケージにしようと、リングを続けようと世間には伝わらない。

FEG代表

谷川貞治

今号も
サダハルンバが
TBS主催問題、
ケージ&リング論争、
開国問題……etc.
をブッタ斬る!!

何度も言うけど
FEGは
潰れないよお!

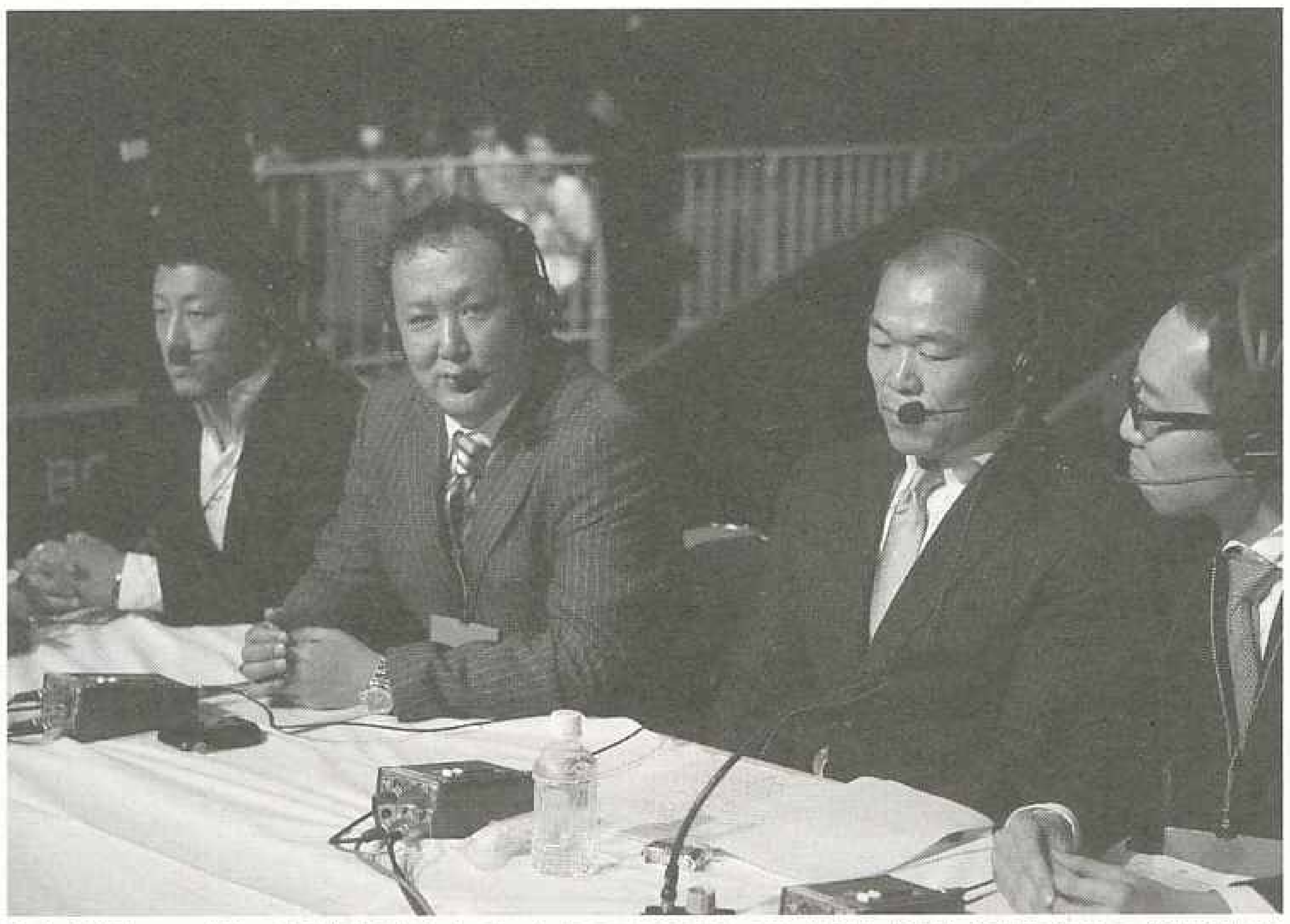


マット界にいろんな噂が飛び交う今日この頃。
今号も、そんな噂をサダハルンバにぶつけてみた。
……が、TBS主催問題やリング&ケージ論争など、サダハルンバはどれも一蹴!
はたしてサダハルンバの頭のなかにある日本MMA界の未来像とは!?

聞き手／ジャン斉藤　試合写真／乾晋也、丸山剛史、Josh Hedges（UFC）

すべきかはその人の解釈次第だが、一方
格から英語もさっぱり話せないのに黒
の真似事であったかもしれない文化を
れによって、たとえばK-SSがハード
世間には伝わらない。

——今日は残念ながら山口日昇さんの話じゃないんですよ。
谷川 なんだあ、そうなの？（モジモジしながら）。
——というか、べつにしゃべりたいこともないでしょ（笑）。
谷川 そう！ とくにないんだよねぇ……。
——ダハハハハ！ ツイッターの反応から「興味なし！」感がびんびん伝わってきてますよ（笑）。
谷川 ボクはただ会長（山口氏のあだ名）の心配してるだけだからさあ。
——それすらも怪しい（笑）。
谷川 でも、それ以外に何かボクに聞くことあるの？
——いや、いっぱいありますよ！ 「FEGはいったいどうなるんだ？」ってもっぱらの噂ですし。
谷川 またそんな話？ だから何度も言うけどFEGはなんにも変わらないんだって！（ドンッ）。
——珍しいですね、谷川さんが大きい声を出すなんて。
谷川 もう最近は噂ばっかりなんだもん！ だいたいみんな何をそんなに期待しているの？
——いま一番の話題はTBSの主催者降板問題です。
谷川 はあ〜、降板なんてしていないよ。そんなの話す必要もあんまりないと思ってるくらいで。
——でも、ファンは非常に不安になってるみたいですよ。
谷川 じゃあ説明するけどさ、だから主催というのは2パターンあって、名義の名前貸しとホントに主催する興行があるんだよ。で、年末の『Dynamite!!』なんかはホントの主催なんだけど、深夜でやるようなナンバーシリーズに関しては主催名義興行なんです。で、主催名義だと、主催者（FEG）はTBSにお金を払わなくちゃならないんですよ。そうするとテレビでスポットを流してもらえるんだけど、今回はそれを節約しただけの話なんです。



地上波組とPPV組とで解説席が分かれていた『DREAM.13』。これはそれぞれ地上波権をTBS、衛星波権をスカパー!が持っていることからなっている。今後地上波以外にもビジネスチャンスを伸ばしたいと話すサダハルンバだが、ネット中継でのビジネスモデルを作れば可能性はもっと広がるはずだ。

——ただの節約だ、と。
谷川 単純にDREAMが主催名義料を払わなきゃいけないから、それを省いただけ。それだけです。たとえば「後援・スポーツニッポン」とかあるじゃない。ああいうのと一緒ですよ。それがテレビになると、主催者がテレビ局に宣伝料みたいなのを払わなきゃいけないという。

TBSは降板なんてしていないよ。そんなの話す必要もあんまりないし

——ただ、TBSはDREAMを放映してますよね。そうなると主催者には放映権料は払われるんですよね？
谷川 もちろんそうだよ。テレビ局が払わないわけがないじゃない。ただ前にも話したとおり、我々も地上波の放映権料以外にもどんどん広げていかないといけないというふうには考えてるけどね。とくに総合はPPVをビジネスにしていかないと、今後は地上波だけに頼ってる時代ではなくなりつつあるし。だからかつてのPRIDEみたいな、PPV基盤のビジネスを考えていかなきゃいけないだけで。
——前回の『DREAM・13』でPPVと地上波放送の実況を別々に撮ってたのも、そういう理由なんですよね？
谷川 うん。PPVで放送するうえで、たとえば局アナとかは使えなくなっちゃうからね。そこの権利関係に関してはテレビ局がいろいろ厳しくなってるんですよ。たとえば、このあいだユーストリームやニコニコ動画で青木の試合を生中継したじゃない。あれなんかもネット系で流れたりしてくると局アナが使えないのは当然で、そこは地上波の権利、衛星波の権利、3Dの権利、インターネットの権利とか全部分けてあるから、そこを侵食するようなかたちではできないんですよね。
——たとえば『YouTube』のK—1チャンネルで流すときには、テレビ局とは関係ない実況を立てないとダメだ、と。
谷川 そこの権利をボクらがテレビ局に渡してないからね。地上波権しか渡してないから、ボクらがインターネット化権というのを渡さないとできないんだよ。それは衛星放送に関しても、衛星波ということでスカパー！さんに渡してるわけで。だからスカパー！で放送される映像に、局アナもそうだけど、たとえば藤原紀香ちゃんとか佐々木希ちゃんとかを映してもマズイんですよ。
——そうか。でもそれくらいFEGはウェブメディアに関して本腰を入れてきてるということですよね。
谷川 うん。だからインターネット化権も、地上波がいい条件を出してくれるんだったらそれはそれでそのたびに合意しているけどね。昔の地上波だと、どこの局もスポーツなんかはとくに「全部自分たちのもんだよ」って言ってたんだけど、いまはやっぱり地上波の権利は地上波だけの、自分たちのものだよってことでやってるから。たとえばTBSチャンネルみたいな、いろんな局系のCSチャンネルがあるじゃない。そこで過去の映像を流すだけでも権利関係はけっこうデリケートに処理してますよ。だから簡単に、局の人がいろんなところには出られない状況にはなってますね。
——主催の話とつながるかもしれないですけど、スポンサー関連についてはどうなりそうですか？
谷川 まだちょっといまやってるところだね。でも、どうなるかまだわかんないです。ただでもスポンサーは確かにつきに

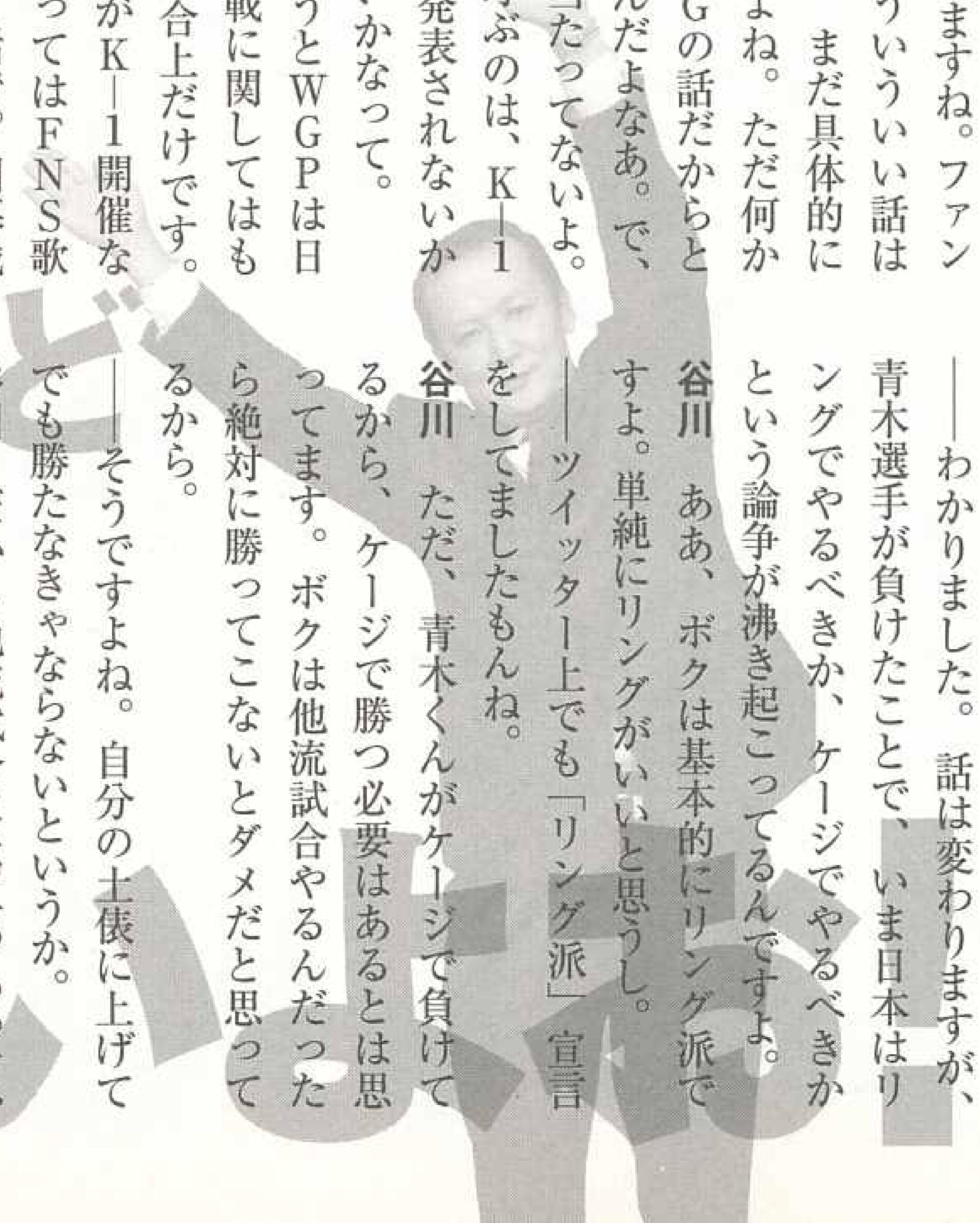
くくなってるんで苦しいのは事実だなあ。
——それは日本の経済事情と合致してる、と。
谷川 それもある。このあいだ『SRC』の人とも会ったけど、ホントになかなかいないって言ってたんだよ。正直に言うと、長谷川穂積や視聴率を獲る亀田だって何もついてないもんね。だからホントにドン・キホーテさんみたいに応援してくれる企業は貴重だよ。あと金額はわからないけど、つい最近感心したのは國保さんがやった吉田選手の引退興行。あれはよくついてたなと思う。
——引退興行というのもあったんでしょうね。
谷川 それから、たまたまボクシング関係者ともしゃべったけど、ボクシングでスポンサーがつくのは内藤大助だけだって話だったからね。そのくらい厳しいですよ。
——そういうなかで、FEGはもう倒れるんじゃないかという噂が最近はずっと蔓延してますよね。
谷川 なんかそういう話をすること自体、疲れるよ(くたびれた表情で)。
——去年のいまぐらいからずっとですかねぇ。
谷川 もっと前から言われてる気がするけど、ネガティブな話にイチイチ気をもんでもしょうがないでしょ。ただまあ日本が不況だという問題はあるし、あのー、いまさら言ってもしょうがないけど、税金を払ったりしたじゃない。
——追徴課税がけっこう大きなダメージになったというか。
谷川 そういうのもあるし、いろんな部分がありますよ。もちろんK-1とPRIDEが対立してた頃のファイターのギャラの高騰とかも一つの要因だしね。そういうものがいろいろあるんだけど、ただ全然そんなの大丈夫だよ。
——そんななかでFEG自体の形態が変わってくるという可能性はありますか?



旅行会社のH.I.S.化粧品&健康食品を製造するDHCなど、吉田秀彦引退興行では、ここ最近の格闘技では群を抜いて多くのスポンサーがついていた。今後ももっと格闘技界を応援してくれるスポンサーがつくといいのだが……。ついでに『kamipro』のスポンサードもお願いします!

ボクは他流試合をやるんだったら絶対に勝たないといけないと思ってる

谷川 今後、あるかもしれないけど、いまの時点では何も変わらないよ。ホント噂だけ。っていうか、噂を聞くのも聞き飽きてるくらいで。
——そんな噂のなかで、FEGに海外資本が入るんじゃないかというような話もあります。
谷川 ああ、それはやってますね。ファンドとしてやってるし、そういういい話はたくさん来てるんだけど、まだ具体的に決まったものはないんだよね。ただ何か決まっても、それはFEGの話だからとくに言うべき話でもないんだよなあ。で、いろいろある噂も何一つ当たってないよ。
——でも、そういう噂を呼ぶのは、K-1の日程なんかもなかなか発表されないからだったりするんじゃないかなって。
谷川 あのー、それでいうとWGPは日本で行なう開幕戦と決勝戦に関してはもうフジテレビの編成の都合上だけです。いつも12月の第1土曜日がK-1開催なんですけど、今年にかぎってはFNS歌謡際をやる予定だからって話で。開幕戦に関しても編成上の問題だけですね。でも、もうすぐ発表できると思いますよ。
——それに加えてDREAMは年内に終わるという噂もあったりします。
谷川 いやいや、まったくそんな話もないです! ……ま、終わるときは終わるけどね(サラッと)。
——ダハハハハハ!
谷川 でも、やめると決めたことは一回もない。終わるかどうかはボクらが決めることだから。7月はまだ日にちが確定してないけど深夜に放送するし、9月はゴールデンだからね。だから安心してもらってもいいし、スポンサーが抜けてもやることはやりますから。
——でもそのスポンサー問題はかなり重要じゃないですか?
谷川 いまホントに問題なのはスポンサーがあまりついてないことと、海外の投資家からなんかは、援助するという話はもちろんある。それ以外はなんにもないです。
——わかりました。話は変わりますが、青木選手が負けたことで、いま日本はリングでやるべきか、ケージでやるべきかという論争が沸き起こってるんですよ。
谷川 ああ、ボクは基本的にリング派ですよ。単純にリングがいいと思うし。
——ツイッター上でも「リング派」宣言をしてましたもんね。
谷川 ただ、青木くんがケージで負けてるから、ケージで勝つ必要はあるとは思ってます。ボクは他流試合やるんだったら絶対に勝ってこないとダメだと思ってるから。
——そうですよね。自分の土俵に上げても勝たなきゃならないというか。
谷川 だから他流試合には二つあって、一つは相手のリングに上がること、もう一つは自分のリングに上げること。で、プロモーターとしてみれば、相手のリングに上がるんだったらそれはどんな手を使ってでも絶対に勝たないとダメだと思ってるんだよ。それで勝てないんだったらやらないほうがいい。逆にこっちのリングでやる他流試合だったらべつに負けてもいいと思うんだけどね。
——それは主導権がこっちにあるからですよね。
谷川 うん。主導権があるぶん、負けてもこっちでそれをドラマ化していくこともできるわけでしょう。でも、ルールも違う、環境が違う、それで主導権も握られて



何度も言うけど、FEGは潰れないよ!

る、そこにあえて出ていくんだったら絶対に甘く考えないほうがいいよね。だからK−1でたとえると、「立ち技最強・ムエタイ」に選手を送り込むことと似てると思うんだけど、でもボクはムエタイには触りたいと思わないし、それは全然ピンとこないんだよ。たとえばボクが『格通』をやってた頃の立嶋篤史や前田憲作がタイで「打倒・ムエタイ」を一生懸命やってるんだけど、もらったのは数万円で交通費もなしですから。そうなると、何が「打倒・ムエタイ」なんだろということになるじゃない。ましてやいまのK−1とムエタイのルールなんて全然違うからね。だからハッキリ言うけど、魔裟斗くんがタイに挑戦しても簡単には勝てないと思うんだよ。

——ああ、逆もそうですよね。ムエタイ選手がK−1に出ても勝てないというか。

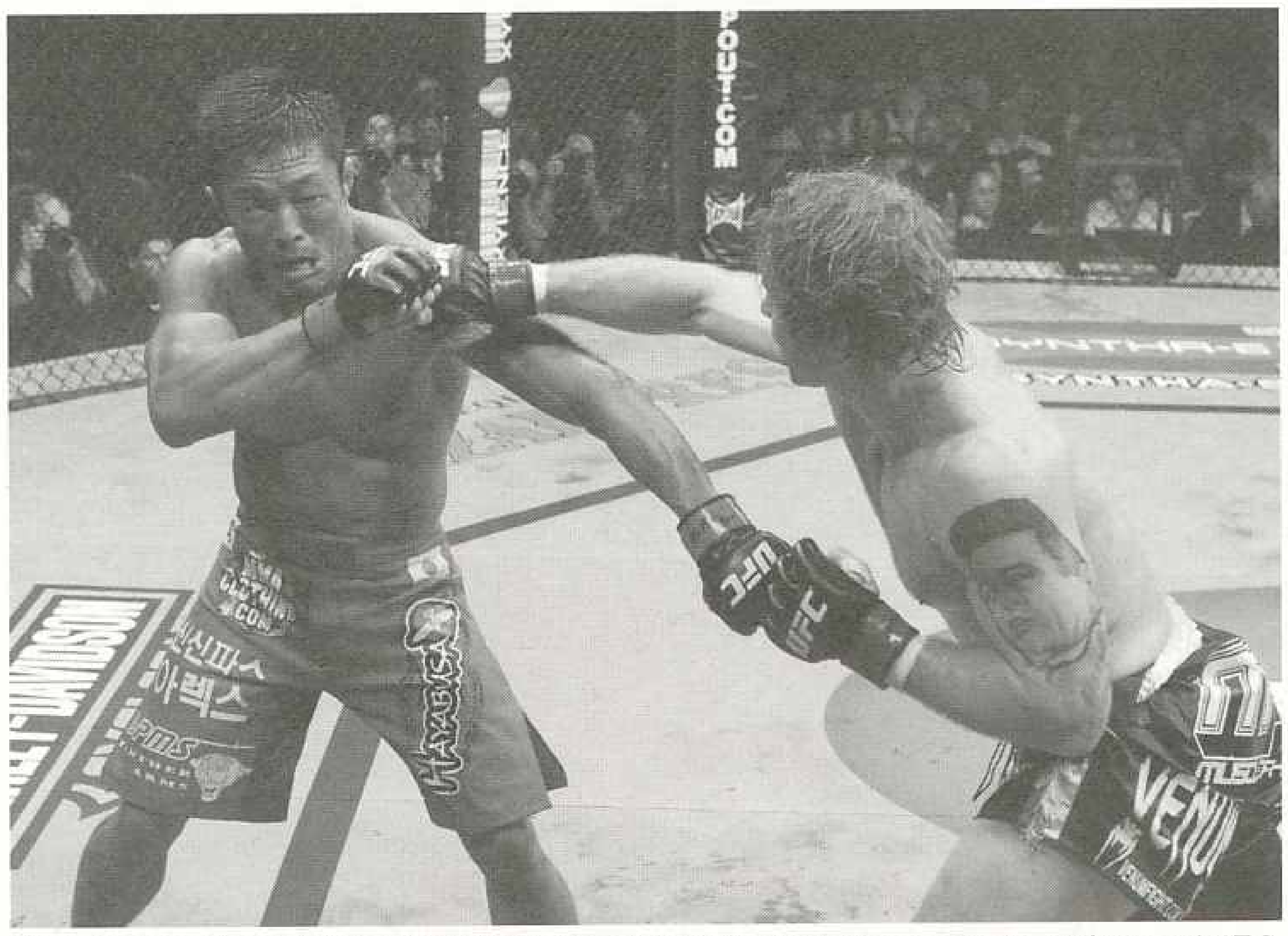
谷川　それはアルバート・クラウスでも、アンディ・サワーでもタイのチャンピオンなんかには簡単には勝てないよ。だから触らないほうがいいと思う。触るんだったらホントに勝つことを前提にやらなきゃいけないし、勝つまでやったほうがいいよ。だから、みんなこれまで五味くん、青木くん、あとザロムスキーやマヌーフなんかもそうだけど、敵のリングに上がるということは、働く場が増えるというのはもちろんいいんだけど、働く場を増やすんだったらやっぱり勝たないと。で、青木くんの敗戦がショックなのは、ボクは青木くんだったら絶対勝つと思ってたからね。

——ただK−1とムエタイと違って、日本のMMAとアメリカのケージって、そこまで色分けされてない感じはありますよね。

谷川　でも、ボクは全然違うと思うよ。

——そこはロマンとして、ファンもリンクしておいてほしいなという気持ちは強いと思うんですね。

谷川　うーん、ボクは本当にロマンがあるとすれば、UFCに関してはマーケットというか、お金しかないよね。ファイトマネーがたくさんもらえるというロマンはあると思うけど、あそこで勝って、じゃあなんの意味があるの？　っていう。とくに日本人が勝つ意味はなんなんだろうって。



7月に行なわれる『UFC116』で対戦が決定している秋山成勲vsヴァンダレイ・シウバ。サダハルンバが言うとおり、ここで秋山が負けてしまえば日本MMAのイメージはさらにマイナスに。そう考えると、この一戦は2010年の一つの勝負どころとなりそうだ。

——もともと日本のMMAが威信を取り戻しにいく物語もあるじゃないですか。というか、負けたあとに「意味があるのか？」とか言わないでくださいよ（笑）。

日本のMMAが威信を取り戻すには団体が力をつけることしかないんです

谷川　そうなんだけどさあ。それをやるなら、それは本当はボクらプロモーターの役割なんだよね。

——ああ、要は興行で逆転して、UFCのトップファイターが日本のイベントに参戦するという図式に持っていくということですね。

谷川　それしかない。だから、ホントの他流試合ってそこしかないんですよ。UFCに持っていかれたと思ってるものを取り戻すには、選手がUFCで勝つことじゃなくて、団体が力をつけることしかないんです。ただ、いまそこに差がついてるから、その意味では本当に海外の投資家とかもそうですけど、取り込まないといけないなと思ってます。だから、その最強幻想を打ち砕いてるのは選手じゃなくて団体ですよね。

——なるほど。ちなみに、谷川さんは日本のMMAがこのままK−1とムエタイみたいに差別化される流れになればいいと思います？

谷川　ボクは差別化されていくほうがいいと思う。そうするにはホントに団体が力をつけることが大事だけどね。

——でもDREAMがホワイトケージでやったりとか、当然今後そのアメリカに目が向く選手もいるわけですよね。

谷川　でもね、アメリカに目を向ける選手はもう止まると思うよ。そんなにアメリカに渡ることが今後話題になることもなくなってくると思う。今回の青木くんほど騒ぎになることはもうないでしょ。

何度も言うけど、FEGは潰れないよ！

——いまがピークだ、と。

谷川　ただ一つだけ忘れ物があるとすれば、青木くんは勝ってきて戻ってほしいなというのはあるよね。ボクが心残りなのはそれだけ。

——たとえば川尻選手にケージで勝ってほしいとかはあまり思わないですか？

谷川　うーん、新しい人はべつに触らなくてもいいと思うんだけどね。全然触る必要はないと思うし。

——ということは、谷川さんは〝開国〟しなくていい、と？

谷川　それが開国だなんて思ってないからね。選手が行きたいと思うのはいいんだけど、それはあくまで個人のロマンであって、団体としてはとくに触る必要はないんだよ。触るんだったら、こっちに上げるしかないと思ってます。UFCであろうがなんだろうが、こっちのリングに上げるしかないんですよ。だから、べつに川尻くんとか菊野くんとかがアメリカに行く必要はまったくないと思う。影響があるとすれば、今度の秋山くんの試合くらいじゃない？　負けたらヤバイなと思うのは。

——でも、相手はある意味〝日本陣営〟のヴァンダレイ・シウバですから、魔王が負けても……。

谷川　だって秋山くんが負けたら、それこそもう日本人がまったく通用しないというイメージが一般についちゃうでしょ。「五味も、青木も、秋山もみんな負けるんだ」というイメージがついちゃうよ。この

3人は世間で目立つからね。ただ、これも団体としてはまったく関係のない話なんだよ。団体が勝つには、とにかく体力をつけて選手を呼び戻すだけ。だからボクは、リングとかケージは全然違うものだと思うし、どっちを選ぶとかじゃないんだよね。個人的にはボクはリングでないと名勝負やドラマは生まれないと思ってるし。

――いや、そんなことはないでしょ(笑)。

谷川 だってケージって塩漬けのイメージしかないもん。いわゆるマーク・コールマンとかマーク・ケアーみたいなヤツが勝てる舞台というか。

――コールマンにマーク・ケアーって……。

谷川 いまのは古い選手だけど、その特性というのは永遠に変わらないと思ってるから。

――リングはリングで膠着するし、ケージはケージでおもしろい試合はありますけどね。じゃあ、谷川さんは日本のMMAはどういうふうに進んでいくのがいいと思いますか?

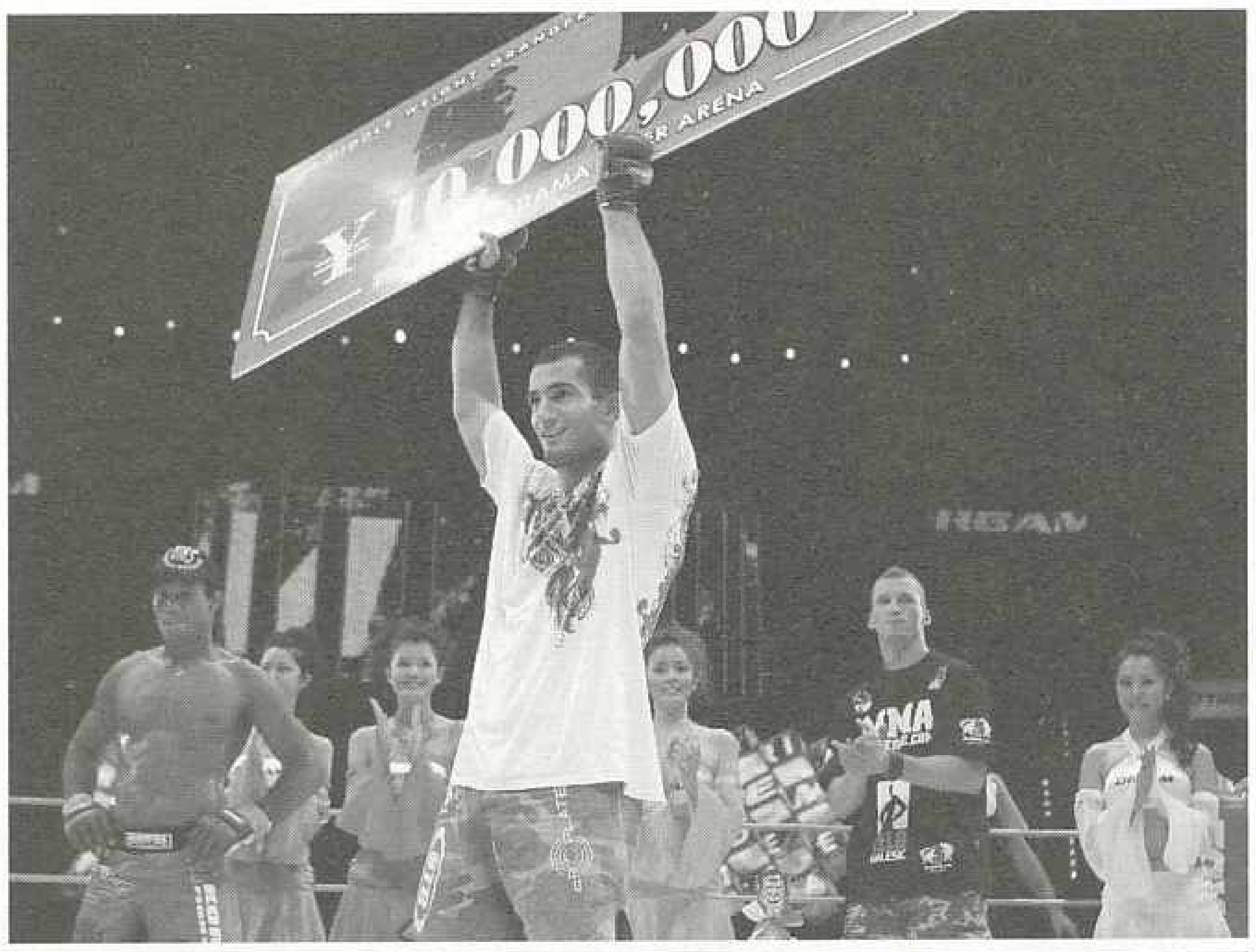
谷川 ホントに一番いいのは日本のMMAがリングをもって、アメリカ以外を制することですよ。というのは、アメリカ人にとっては世界なんて関係ないからさ。だからロシアやブラジル、ヨーロッパなんかに目を向けたときに、UFCはたぶん外へ出れば出るほど損するでしょ。やっぱりアメリカ的なやり方だから。

――それは谷川さんが常々言われてる「アメリカは巨大なローカルでしかない」ということですか。

谷川 だからUFCは、NFLであり、メジャーリーグであり、NBAであって、アメリカのプロスポーツとしてきわめていくという方向なんだよ。それはそれでいいと思うんだけど、そうじゃなくて、アメリカ人以外にもオランダ人も出てる、ブラジル人も出てる、中国人も出てる、韓国人も出てるというMMAのリングをきわめるのが一番いいですね。それで世界を制するのが、一番の道でしょ。

――なるほど。

ホントに一番いいのは日本のMMAがリングをもってアメリカ以外を制すること





DREAMのミドル級GPを制し"最強の近く"を感じさせるゲガール・ムサシや、『戦極』のリングで人気を得たキング・モーは、それぞれの団体のイメージキャラである一方、最近はストライクフォースのファイターというイメージもある。最強幻想とともに、こうした"日本的興行イメージ"を奪われるのも痛い部分だ。

谷川 その対抗馬としてUFCは存在したほうがいいと思ってるよ。だってボクはむしろそれ以外のMMA団体のほうがイヤなくらいだからね。そういう団体ってボクらにとってはマイナスで、たとえばストライクフォースと提携して、スコット・コーカーとも仲良くいろいろやってるけど、じゃあゲガール・ムサシやキング・モーなんかは「どっちの選手なの?」ってなるじゃない。ああいうふうに両方出ちゃうと、じゃあDREAMはなんなんだって話にもなるし。

――確かに世界観がわかりづらくなるのはありますよね。DREAMでやってる闘いが、なぜかストライクフォースでも行なわれてるという。

谷川 そのほうが取られちゃってるというイメージがあるんだよ。なんかストライクフォースと似てるというのとかね。そこは戦略的にハッキリさせる必要はあるんだけど、そのためにはちょっと力をつけてやるしかない。……って、安田会長ってスポンサードしてくれないかなあ(しみじみと)。

――ハハハ! でもそれって、現実的にムリなんですか?

谷川 『SRC』やってるからムリでしょ。でも『SRC』と同じくらい支援してくれたらリング復権なんかも全然できるんだけどなあ。メレンデスなんかどんどん呼べるんだからさ。

――それはプロモーターとしてはもどかしいですねえ。

谷川 でも、ホントにいまは苦しいなかで選手が頑張ってくれてるんで、そこはありがたい話ですよ。今度のDREAMも桜庭とかKIDが出ておもしろそうだしね。だからもう全然気にしないでほしいよね。

――これ以上、いわれのない噂話はやめてくれ、と(笑)。

谷川 噂自体も飽きたというか。だいぶ前から、苦しいなか一所懸命やってるだけだから。まあ、今月中に一部解決すると思うしね。

――え? それはどういうことですか?

谷川 まあ、体力を戻す一歩を踏み出すということです。ボクが「やめる!」って言わないかぎり、K-1はなくならないよ!

――わかりました。では、ボクは谷川さんがリングに上がることがないように祈っております。

谷川 んあ~。ボクはリングには逃げないぞお!

【10年5月8日/都内・某所にて収録】



マット界の転換期を駆け抜けた雑誌

『SRS-DX』座談会

前号に続き柳沢忠之を考える！

柳沢忠之とはいったい何者なのか？ 前号のサダハルンバインタビューで語られた内容が業界内を中心に思った以上に反響があったため、今号でも柳沢忠之を考えるきっかけとして、雑誌『SRS-DX』を検証してみた。そこから見えるマット界のうねりと登場人物とは!?

構成／松下ミワ

でも『SRS－DX』の休刊ってまだ俺たち知らされてないんだよ

斉藤　今日は『SRS－DX』について皆さんに語っていただこうと思ってるんですよ。

井上　なんのことやら（笑）。なんでいきなり『SRS－DX』なの？

斉藤　いや、じつは前回の谷川さんのインタビューがけっこう業界内では評判だったんで、それがきっかけなんですけどね。

井上　あっ、あれはおもしろかった！　あれって「90年代」っていうテーマで聞いたのに、どうして途中から社長（柳沢忠之のあだ名）の話になったの？

斉藤　というか、裏テーマとして柳沢忠之さんについて聞こうと思ってたんです。というのも、いまにつながる90年代末期がどんなふうに作られていったのかを引き出したいなって。いまも谷川貞治が前面に出てやってるように見えますけど、そこには常に柳沢忠之がいるわけで、プラス榊原信行も関わってたり、なぜ山口日昇があああいうふうになったのかというのも柳沢さんの存在が絶対に外せないじゃないですか。なので、今日はあらためて『SRS－DX』の内部にいた井上さんをゲストに、堀江ガンツとボクでいろいろお話を聞きたいな、と。

ガンツ　ボクはあんまり詳しくないんですけどね（笑）。

井上　ということは、俺にインサイダー情報を提供しろ、と？

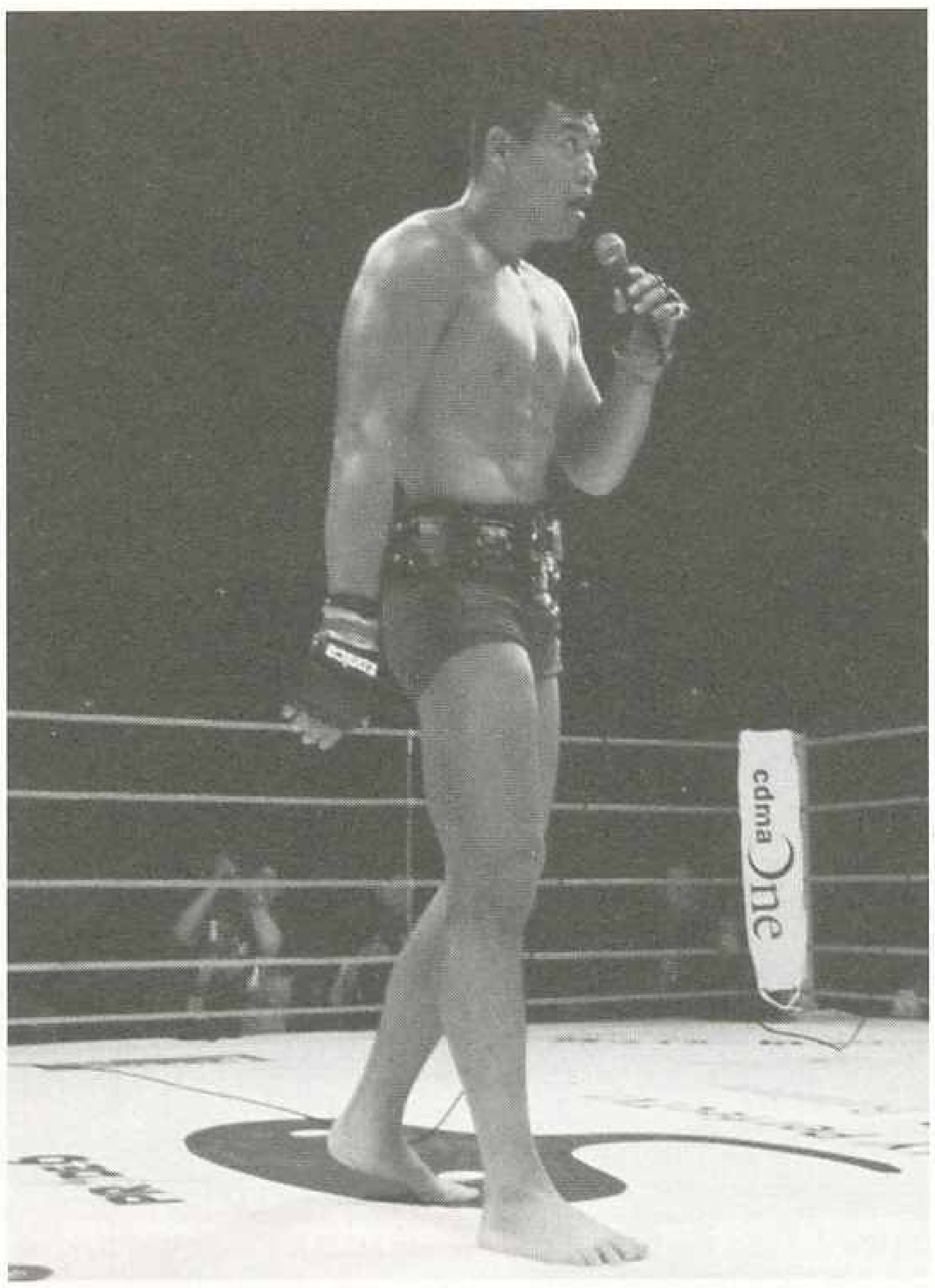
ガンツ　よろしくお願いします！（笑）。

井上　でも、いきなりマジメな話をすると、『SRS－DX』が休刊になったことって、俺たちまだ知らされてないんだよね。

斉藤　ダハハハハ！　それは山口さんの再婚＆出産話を僕らがまだ聞かされてないのと一緒ですね。

井上　だから、柳沢忠之とはどういう人かといったら、もう、そういう人ですよ（笑）。

斉藤　なるほど。まず『SRS－DX』の成り立ちから話をすると、谷川＆柳沢率いるローデスがサムライTVに関わるところから始まるんですよね？



99年『PRIDE.6』ゲーリー・グッドリッジ戦でPRIDE初登場をはたした小川直也。この大きな出来事の裏側にまさかTシャツ商標事件があったとは……（本文参照）。

井上　そうそう。だからローデスがサムライTVの開局に関わってたんだけど、それがまあ開局まもなく本隊と決裂しちゃったんだよ。だから俺も含めてサムライTVの業務に関わろうとしてた人たちがもう即、宙に浮いちゃったというか。

斉藤　そんななかで食べていくためにローデスとして出版事業に手を出さざるをえなかった。

井上　オープニングスタッフってことで抱えてる社員とかいっぱいいたからね。そこにプラスして、のちのブロンコス、要は映像制作チームのなかでローデス側についてた人たちも一緒にサムライを辞めたみたいな経緯があったんだよ。だからなんの仕事もないところに一時は30人くらいゴッソリ集まっちゃったんだよ。そのなかにね、長谷川咲恵もいたよ。

ガンツ　あ～！　そういえば関わってましたね（笑）。

井上　長谷川咲恵はキャスターとして関わってて、長谷川咲恵も大まかにいうと“ローデスサイド”だったの。ひと言も会話したことないけど（笑）。

斉藤　なるほど（笑）。ほか、『kamipro』読者が知っている顔でいうと松林（貴）さんとか。

井上　だからけっこうな一大勢力だったんだけど、食いぶちがないから当時は細かい映像の仕事もやったりしてたと思う。谷川さん一人だったらK－1に入っちゃえばいいけど、でもそうはいかない状況のなかで社員全員でできることといったら、やっぱり出版しかないし。

斉藤　そうは言ってもそういう状況だとわかるとボロボロと辞めちゃう人もいたんじゃないですか？

井上　まず映像班が抜けてブロンコスって会社を立ち上げたり。だから残ったのが結局出版系の人間だったって感じだったと思う。でも、ホントにあのへんって俺ら下っ端レベルではあんまり状況がわかんないじゃん。そういうときって、上の人って全部状況を教えてくれないから。だから、俺なりに「いったいどうなってんだろう？」みたいな感じだったよ。

斉藤　ちなみに、給料出てたんですか？

井上　いや、出たり出なかったり。で、そんな大変な時期に、猪木さんの引退試合があったりしたんだよね。でも「これだけは行かないわけにはいかんだろ！」みたいな話になって、たしかスタンド席のチケットを全員で買ったんだけど、そのお金は会社から借りたんだよ。

ガンツ　社長が猪木信者だけに、アントニオ猪木に関しては、けっこう財布の紐が緩いんですね（笑）。

斉藤　そんななかで『SRS－DX』が創刊するわけですよね？

井上　かなあ？　というか、逆に知っている情報どんどん教えてほしいんだよね、そのほうが思い出せるから。

ガンツ　ボクもいまボンヤリ思い出してたんですけど、『SRS－DX』って小川直也のPRIDE参戦からでしたっけ？

井上　いや、小川は創刊2号じゃない？　1・4橋本vs小川の年だから99年で、その年の7月『PRIDE・6』に小川初登場だから。

斉藤　……え？　ということは、猪木さんの引退が98年だから、99年の小川vs橋本の1・4まで1年くらいありますよ。それまでよく我慢できましたね。

井上　ホントだよねえ（しみじみと）。だから谷川さんなんかは、全日本キ

座談会出席者

［司会］ジャン斉藤
本誌・編集長。雀鬼・桜井章一の内弟子を経て『kamipro』編集部へ。『SRS－DX』とのつながりは「読者」。

井上崇宏
ペールワンズ総帥。変態座談会のレギュラーメンバーであり高田延彦の変態的ファン。ローデス組であり、ローデス在籍時はグッズ制作を担当。柳沢忠之最後の書生と自称。

堀江ガンツ
本誌・編集部員。変態座談会主宰者であり、変態道は海外イベントにまで通じている。じつは『SRS－DX』編集部員になる話があったという。

ック系のジムがオープンするってときにはジム開きの司会をやったり、あとは『SHOOT THE SHOOTO XX』っていう修斗とシュートボクシングの共催のイベントあったじゃん。あのマッチメイクとかもやったんじゃないかな？　あの大会、俺も「パリンヤーを呼んだほうがいい！」って言ったんだ、たしか（笑）。

斉藤　パリンヤーってあのオカマのですか!?

井上　そうそう。（アレッシャンドリ・フランカ・）ノゲイラも初登場だったし、中野龍雄vsヤーブローもあった大会なんだけど、そこに「パリンヤーを！」という恥ずかしい仕事をしてたんだよ。でも、俺まだ20代前半くらいだからなんか楽しかったんだよね。「ほんとにオカマ来たぞ！」みたいな。

斉藤　そんな状況から『SRS−DX』創刊にはどうつながっていったんですか？

井上　ある日、PRIDEが『PRIDE・4』で終わるらしいという話が入ってきたのがきっかけだったんだよね。そこも詳しくは聞かされてないんだけど、バラさんから話があったのか、谷川さんと社長からコンタクトを取ったのかはわからないけど、「PRIDE復活をローデスが手伝うんだ」みたいな話になってたんだよ。

斉藤　谷川さんは、バラさんから話が来たって言ってましたけどね。

井上　そうなんだ？　バラさんとローデスとは以前K−1名古屋大会の運営でつながってたからね。だから、PRIDEがKRS体制では立ち行かなくなって、それを継続させるためにまたバラさんとローデスが再合体した、と。でも、あんときのバラさんの気持ちってどうなのかね。K−1と仲良くやっていきたかったのか、当時からK−1に取って代わるものとしてやろうと思ってたのか。

ガンツ　まだ取って代わるって気はなかったでしょう。館長にも挨拶しながら総合格闘技のイベントをやらしてもらうみたいな感覚だったはずですよね。谷川さんや柳沢さんに筋を通すことで、必然的に館長にも話をしたかたちになってたというか。

斉藤　話を戻すと、それと同じタイミングで『SRS−DX』を創刊しようってことになったんですね？

井上　そう。だから「これからローデスがPRIDEを盛り上げていくんだ」というなかで、それをメディアで煽っていかなきゃいけないということを社長と谷川さんがフジテレビかどこかにプレゼンしたんだろうね。だから『SRS−DX』っていう名前で。

斉藤　それこそ出版元はフジサンケイグループの扶桑社ですもんね。

井上　だから『PRIDE・5』から関わるなかで、いろんなものが一気にやってきたんだよ。で、社長が猪木さんに声をかけたのもそれくらいの時期だったと思うんだけど。『PRIDE・7』の会場に猪木さんが来たよね？



東海テレビ事業時代から名古屋で開催される格闘技イベントに関わっていた榊原信行。K-1名古屋大会をきっかけに谷川&柳沢チームと急接近し、PRIDEで合流することとなった。が、その後の分裂してゆく流れはご存知のとおり!

オーちゃんTのデータ渡したら本人が勝手に商標取っちゃった

ガンツ　なぜかアラン・ゴエスと一緒に観てたんですよね。猪木、百瀬、ゴエスっていうもの凄い並びで（笑）。

井上　あれも柳沢さんが「PRIDEには猪木さんが必要だ」ってことで引っぱってきたんだよ。そこからもう一気に動き出したよね。それこそ、ポスターからパンフからPRIDE仕事を取ってきちゃうわけじゃん。もちろん『SRS−DX』もやったし、俺個人で言えばオーちゃんTシャツをやったしね。

斉藤　ありましたねえ、オーちゃんのTシャツ！

井上　あれがあったから俺はグッズ関係のほうにいっちゃってるんだよ。だから社内で雑誌をやるってときも、「いやいや、僕はそんなのけっこうです」という感じだったと思う。

ガンツ　ちなみにオーちゃんTシャツって、そのあと勝手にいろいろなバージョンが作られたんじゃなかったでしたっけ？（笑）。

井上　そうだよ、あれってホントにヒドイんだよ。クッソー！　ちょっと長くなるけど、話していい？

ガンツ　お願いします（笑）。

井上　『kamipro』の前号でさ、nWoのTシャツが20万枚売れたって言ってたじゃん。でも、俺の感覚は「え？　そんなもんなんだ」って感じなの。というのは、オーちゃんTシャツも数万枚売れてるんだよ。だから「ほんの4〜5倍なんだ」みたいなさ。

ガンツ　売れてましたもんね。Tシャツといえば、いまだにnWo、オーちゃん、エンセン井上ですし。なぜかオーちゃんTシャツのイラストは『kamipro』の表紙にもなりましたけど（笑）。

井上　で、あれってオーちゃん本人に「こういうのは商標取んなきゃダメだよ」って言われたんだけど、「いやいや、小川さん、格闘技とかプロレスTシャツって、そんな大層なもんじゃないんですよ」って俺は言ったんだよ。「そんなにデカい市場じゃないんで、こういうのは取んなくていいんですよ」って。そしたら「ああ、そうなんだ」とか言ってたんだけど、『PRIDE・6』からそのTシャツが爆発的に売れて、オーちゃんが「ホームページのトップに使っていい？」って言うからデータを渡したんだよね。そしたらそのデータでオーちゃんが勝手に商標を取っちゃったんだよ！（笑）。

斉藤　ダハハハ！　さすが小川直也！（笑）。

井上　ヒドいなんてもんじゃないよ。でも、俺やっぱ若かったからさ、

『SRS-DX』座談会

柳沢さんって内部に通じてるから雑誌に都合のいい結論が出てた

なんか洗礼を受けた感じがしてうれしかったんだよ。「うわ、なんかプロレス業界っぽい！」みたいな。でもあのイラスト、俺が適当に描いたやつだからね（笑）。

斉藤　よっ、ヒットメーカー！

井上　でも、柳沢さんの感覚としては、俺にはそういうことをどんどんやらせてくれたんだよ。「いやいや、全員が雑誌に関わってもしょうがねえんだ」みたいな感じで。だから俺のやりたいことは自由になんでもやらせてくれてたんだよね。

斉藤　となると『SRS−DX』の編集メンバーは誰になるんですっけ？

井上　だから谷川さん、柳沢さん、松林さん、外部というか常駐でターザン、ハッシー（橋本宗洋）とかかな。元『ボクシングマガジン』の宮崎さんもいて、そのあとから現ペールワンズの小松とかが入ってくるんだけど。でも、俺は「うまくいかないんじゃないかな？」と思ってたんだよね。やっぱ、『kamipro』系と『格通』系の人間が集まってたからノリが合うはずがないと思って。でも、フタを開けてみたら意外と相性がよかったからね。

斉藤　堀江さんは創刊当時の『SRS−DX』はどう見てました？

ガンツ　僕はまだ『kamipro』編集部に入る前だったんだけど、『kamipro』読者のボクからすると、やっぱりちょっとオフィシャル感がありすぎるような感じはありましたね。いち読者でありながら「この人たちは興行の中でやってる人なんだろうな」ってのがわかるというか。

井上　なるほどねえ。

ガンツ　あと、『SRS−DX』で思い出すのは、じつは僕も『SRS−DX』編集部に入るって話があったんですよ（笑）。

井上　……あっ！　あった、あった！　そんな話あったよね？　なんだっけ？

ガンツ　ボクは出版の仕事に就こうと思ってエディタースクールに通ってたんですけど、どっかの編集部にバイトで入って就職できればいいなと思ってたんですよ。そしたらちょうど『kamipro』と『SRS−DX』が同じ時期にスタッフ募集をしてたんですよね。結局『kamipro』からすぐ連絡が来て、採用されたんですけどね。

井上　でも、こっちにも履歴書出してなかった？

ガンツ　出しました。同時に速達で出したんですけど、あとで聞いたら『SRS−DX』にも通ってたらしいんですよね。

井上　そうそう、なんか堀江くんってのを呼ぼうって話になったんだけど、もう『kamipro』で働いてるらしいよって会話を聞いたことある。

斉藤　変態のすれ違いが起こってたわけですか（笑）。

ガンツ　でも、募集要項をよくよく見ると『SRS−DX』はバイトで、『kamipro』はボランティアスタッフ募集だったんですよ！

井上&斉藤　ダハハハハ！

ガンツ　だから、もし欄外の「ボランティアスタッフ募集」がちゃんと視界に入ってたら……。

井上　ローデスだったんだ⁉

斉藤　そんな頃、井上さんは格闘技ショップ「グレート・アントニオ」をやってたんですよね。

井上　そうそう。あれも言い出しっぺは柳沢さんなんだよ。会社のビル1階が薬局だったんだけど、「あそこ出てったから、店やんない？　グレート・アントニオって名前で」って。でも、よく考えたらあの采配も恐ろしいよ。うまくいかないと思ってたからね、最初。

斉藤　へえ〜。ボクは「グレート・アントニオ」といえば、というか『SRS−DX』といえばファスティングのイメージですね（笑）。

井上　そうだ、俺もあの頃が人生のピークかって感じで冴えまくってたんだけど、「やっぱ、ファスティングジュースでしょ！」みたいな感じで販売元の人に交渉しに行ったりして、一時期はローデスが総販売代理店だったからね（笑）。

斉藤　あとはとうふパンか（笑）。ボクはその印象が一番かなあ。

ガンツ　いや、でも一番覚えてるのはやっぱりヘンゾ・グレイシー戦後の「田村の勝利は是か非か」ってのじゃないですか？　あれって柳沢さんですよね？

井上　ああ、あれはよく覚えてる。会場の武道館でさ、社長に「これ、どっちが勝つと思う？」って聞かれて、「田村が判定で勝つんじゃないですか？」「だよな」みたいな会話をしたんだよね。で、「どう転がしていくかな？」みたいなことポツリと言ってたんだよ。あれ、『kamipro』は相当反応してたよね？

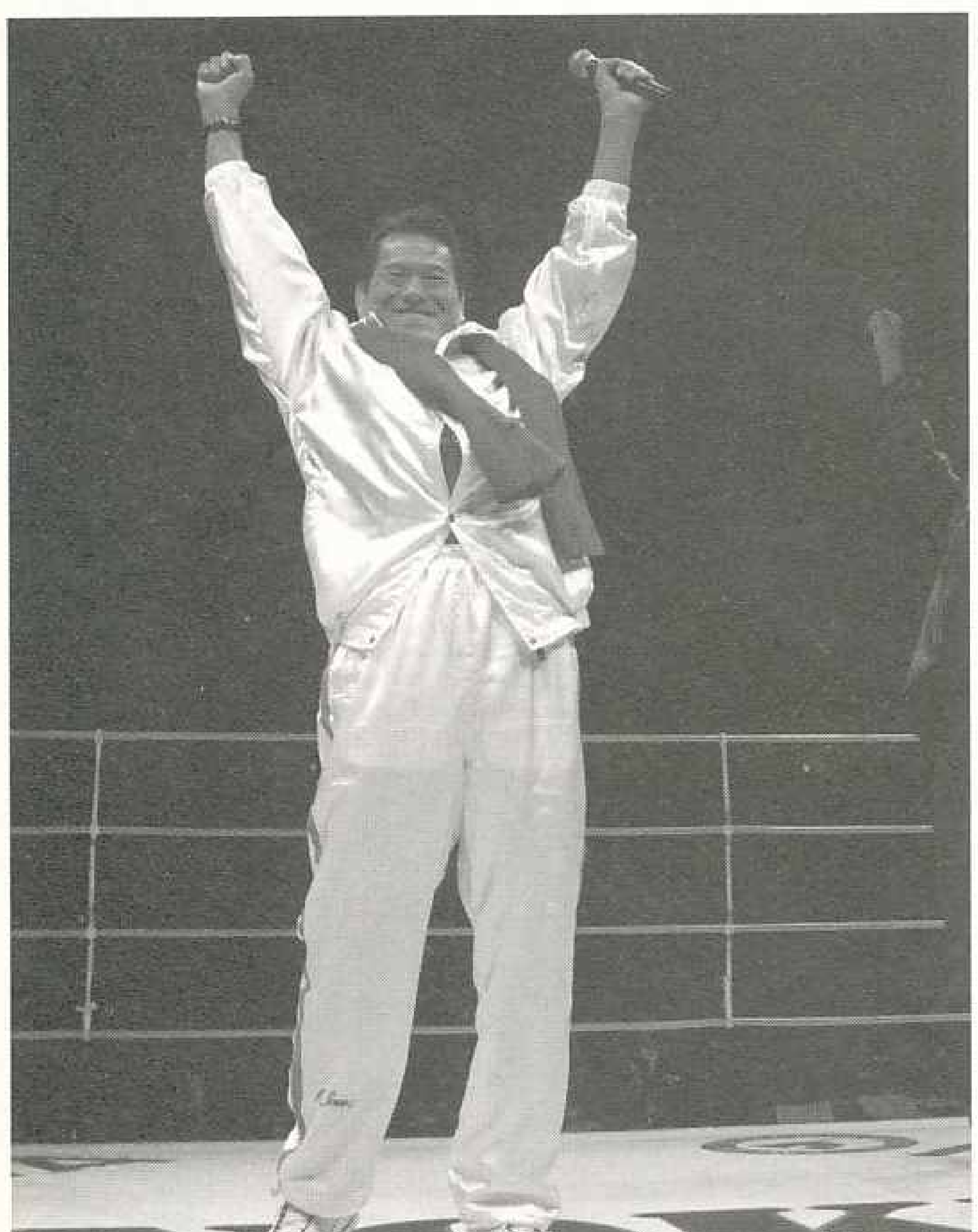
ガンツ　会長（山口日昇のあだ名）からは「ガンツ、おまえ、誌面でなんかやれ」っていうことを言われた気がしますね。そんときはまだバイトで一応給料が出るようになってたんですけど……月5万円。

斉藤　ホントに最低の会社！（笑）。だからあのとき『SRS−DX』は田村vsヘンゾ戦で膠着問題を提示したんですよね。でも奇跡的なのは、谷川さんや柳沢さんって団体の内部に通じてるから、何かの問題を提示しても何かしら雑誌に都合のいい結論が出るというか。その点、『kamipro』ってよくPRIDEの機関誌って言われてましたけど、じつは山口日昇と我々の思惑とあんまりつながってなかったんですよ。だから柳沢さんがK−1、PRIDEで進めたいと思っていることをダイレクトに誌面に反映できたという点で、『SRS−DX』は本当に凄い雑誌だと思います。

井上　でもさ、これは意外だったんだけど、社長のなかではメインは興行じゃなくて、あくまで雑誌だったんだよね。

斉藤　あ、そうなんですか。

井上　雑誌がやりたいがために「興行に関わんなきゃしょうがねぇんだ」みたいな感じだったと思う。で、みんなが思ってるほど団体と『SRS−DX』ってズブズブでもなかったんだよ。というのは、雑誌とか作る編集者みたいな人と興行主って、どこまでいっても相容れないというか。だからさっき言った、雑誌が提



アントンがPRIDEの会場に現われるようになったのは、谷川&柳沢チームがPRIDEに関わるようになってから。当時アントンはPRIDEの一つのシンボルだったが、03年の大晦日がきっかけで姿を消すことに。この猪木に対して高田延彦が「去る者は追わず!」というマイクをしたのは有名だ。

示したものにイベントが乗っかるみたいなのも、わりと打ち合わせはなかったと思うんだよね。ただ、雑誌が団体側やフジテレビに対しての柳沢さんのいいプレゼン材料にはなってたと思うけど。

斉藤　ということは、柳沢さんが先に球を投げて、どう反応するかという環境だったということか。

井上　で、乗りやすいと思ったら団体もフジテレビも乗ってきてただろうし。

ガンツ　それで言うと、『SRS－DX』の座談会だって、いろんな人が出席してるのにあきらかに「司会者」としか出てない柳沢さんがしゃべることを決めてるんだろうなというのがわかりましたよね。

井上　出席者のターザンは、柳沢さんの言いたいことを言わされてるみたいな雰囲気もあったね。『週プロ』の巻頭記事は山口・柳沢が作ってたって言われるのと一緒で。ただ、ターザンがそれをどう表現するかというのは、利用してたというより、わりとそこは頼りにしてたみたいだよ。表紙のコピーとかはやっぱターザン頼みだったというか。

ガンツ　まだターザンが冴えてた時期だったんですねえ（笑）。

井上　でも、突き詰めるとやっぱりそのへんが凄いんだよ。ＰＲＩＤＥをやるときに「猪木さんをプロデューサーにしよう」とか、雑誌を始めるときに「ターザンを客員編集長みたいなポジションで迎え入れよう」みたいなところは。あれはなんなのかな？

斉藤　やっぱりプロデューサーとして天才的なんでしょうね。ただ、そんな『SRS－DX』が休刊になったのは何が理由でしたっけ？

井上　やっぱり一番大きいのはＰＲＩＤＥと蜜月関係が崩れたからじゃないの？　そっから『SRS－DX』はK－1しかやれなくなったわけだから。

斉藤　あ、そうか。そもそもＰＲＩＤＥとK－1の関係が悪くなったのって結局W－1の失敗という話が一般的ですよね？

井上　要は、W－1ってＰＲＩＤＥ制作チームとローデスの共催というか、リスク折半でやるという話になってて、結局コケたときにお金でトラブったのかね？　そのへんも詳しく知らないんだよ。

斉藤　で、ゴールドバーグとのとんでもない契約がネックになってたんですよね。要はＰＲＩＤＥ制作チームがゴーバーと5～6試合契約で何千万みたいな話になってたような……。

ガンツ　あとは、国立競技場の『Ｄｙｎａｍｉｔｅ！』をやったあとにＰＲＩＤＥ名古屋大会があったんだけど、『Ｄｙｎａｍｉｔｅ！』にいいメンツを出したから、ＰＲＩＤＥの参戦選手がアレクとか小路とかヤマヨシとかで、メインが大山vsハイアンっていう。そういう部分もあったでしょうね。

斉藤　もちろんＰＲＩＤＥ側にも当時「もしかしてK－1側に頼らなくてもできんじゃないの!?」っていうムードはあったでしょうし。それが決定的になったのがW－1だったということか。

ガンツ　でもあの時期って凄かったよね。W－1があったときに館長が逮捕されて、さらに森下社長自殺とミルコ移籍。あの3つが重なってて。ミルコのＰＲＩＤＥ参戦のカード発表だって谷川さんとかはホントに知らなくて、髙田本部長が「今回の対戦カード発表します。ミルコvsヒーリング！」って完全に騙し討ちで発表しちゃたりしたわけだから。

井上　それはやっぱり館長逮捕っていうのもあったし、ローデスとも関係が悪くなっちゃったっていうんで、もう「K－1に喧嘩売っちゃえ！」みたいな感じだったのかな？

ガンツ　しかも、バラさんが代表になるってことだったから、そういうものが一気に噴出したのかもしれないですね。



グレイシーが大敵だった当時の日本マット界で、判定ながらヘンゾを破った田村潔司。しかしこの勝利に対して『SRS-DX』は過激なコピーで膠着問題を提示。が、これもやはり柳沢忠之の"仕掛け"だったのだ。

K－1とＰＲＩＤＥが割れてからＰＲＩＤＥ系の取材ができず……

井上　そうだよねえ。その時期って俺も人づてに聞くくらいの情報しかなかったんだけど、俺の立場としては知らぬ存ぜぬのふりで「社長、俺、なんか昔からＰＲＩＤＥのヤツらが気に入らないんですよね」みたいなことを言ったりしてたんだよ（笑）。

斉藤　気ぃ使ってますねえ（笑）。

井上　そしたら社長も「あ、そう？」みたいな（笑）。でも、そういうコミュニケーションの取り方しかなかった。へんに空気を読んで会話するというかさ。だって、それ以降はＰＲＩＤＥの仕事がなくなって、誌面でもＰＲＩＤＥ系ファイターの取材はなかなかできなくなったんだよ。「ちょっとスケジュールがいっぱいで……」って言われたりさ。そんなわけねぇだろう！　って感じなんだけど。

斉藤　じゃあ『SRS－DX』が休刊になったのはやっぱりＰＲＩＤＥとの溝が決定打なんですかね？

井上　それもあったと思うけど、実際はＰＲＩＤＥと割れたんで、もうK－1一本で食っていくしかないってなるんだけど、その頃って谷川さんがK－1イベントプロデューサーになったから、ターザンを編集長代理みたいな感じで立てたんだよね。そっからもう下降の一途ですよ。ターザンも丸投げされると何もできないからさ。

斉藤　谷川さんや柳沢さんが操縦したりもしなかったんですか？

井上　そんな余裕なかったと思う。で、ターザンはテリー伊藤と自分のツーショットを表紙にしたりとか蛮行に出るわけですよ。

ガンツ　ターザン自作自演の覆面座談会も凄かったですよねえ（笑）。

井上　そうだよ！　X、Y、Zって3人で語ってるんだけど、あれターザン一人で書いてるからさ、原稿全体がターザンベタぼめなんだよ。

斉藤　みんなターザン口調なんですよね。「ターザン山本は油断できないぞ」「そうだそうだ」「アイツはくせ者だ！」みたいな（笑）。

井上　で、覆面座談会なのに次の日のターザンカフェの日記には「あー、今回の座談会は苦戦した」とか書いてるんだよね（笑）。

ガンツ　でも、あの半年はホントに凄いですよ。K－1vsＰＲＩＤＥ戦争があって、そこに『ｋａｍｉｐｒｏ』と『SRS－DX』両陣営みたいな感じがあって、誌面も正反対のことをやってて。『SRS－DX』はマイク・タイソン押しでサップvsタイソンを煽ったりしてるんだけど、一

03年のあのドタバタの半年間はPRIDE買収の時期より凄い

『SRS-DX』座談会

方の『kamipro』はミルコを使ってK−1をこき下ろすっていう（笑）。

井上　ミルコも「もう、私の知っているK−1ではない」とか言ってるんだけど、ミルコがそこまで考えてるわけないじゃん！　っていう（笑）。

ガンツ　マネージャーによる超訳の部分もあったんでしょうけど、それだけのリアリティが当時のミルコにはありましたけどね。

斉藤　あの頃って舞台裏を見るファン層がそんなにいなかったからあんまり注目されてなかったけど、あの半年間ってホントに大揺れですよね。ヘタしたらPRIDE買収うんぬんよりも凄かったかもしれないですよ。

ガンツ　あれが2003年だから、結局大晦日のいざこざもそれの延長なんですよね。

井上　凄いよなあ……。まあだから話を戻すと、要は『SRS−DX』は役割を終えたんだよね。K−1だけやってちゃしょうがないわけで。

斉藤　それ以降は谷川さんも柳沢さんも本格的にプロデューサー業に専念するわけですもんね。

井上　うん。ただ、そうは言っても社長はやっぱりメディア側の人だと思うんだけどね。興行やっててもそんなに楽しくないんじゃないかな。

斉藤　いまもですか？

井上　PRIDEのときだって会社の利益的にはいい感じだっただろうけど、あんまり興行やってどうのこうのってよりもメディアだったんじゃない？　『SRS−DX』でどう煽ろうかってことを考えてるほうが楽しそうな感じがしたけど。

斉藤　となると、いまは〝メディアで煽る〟って部分を何で補填してるんですかね？

井上　だから、また自分で何かやろうと思ってると思う。

ガンツ　確かにそういう雰囲気は感じますね。

斉藤　そうなんだ。先ほども話しましたけど、ボクたちは主催者側がどうしていきたいかというところに関与できないですけど、柳沢さんはそこを含めて転がしていくことがプロデュース業であるという考え方ですもんね。そう考えると納得できますけど、そこは我々とはスタンスが違ってきますね。

井上　あ、でも、柳沢忠之最後の書生としては俺も社長と同じ感覚なんだよね。逆に俺の感覚で言うと、「『kamipro』はなんで団体側ともっとズブズブにならないの？」ってのはあるんだよ。

斉藤　『kamipro』がですか？

井上　そっちのほうが業界活性のためにもなるじゃん。でも、最近の『kamipro』って何かそういう関係性を否定してるよね？

斉藤　いや、とくに拒否してるわけじゃないんですけど、そういう立場にいないというか、必要とされてないんじゃないですかねぇ。あといまの団体関係者たちとはあきらかに話が合わないと思う（笑）。だって○○○とは言語が違うでしょ。

ガンツ　通訳が必要だよね（笑）。

井上　そうかな？　ちょっと話はそれるかもしれないけど、雑誌作りって作業自体は自分たちのなかで完結できるじゃん。1冊作って、ハイ、そっから波紋がどう広がるかみたいなところがあるよね。でも、興行ってハナから関わってる人間の数からしてケタが違うというか、テレビ局もいればスポンサーもいれば興行制作の人たちがいるという。で、柳沢さんをずっと見てて思うのは、そういう輪の中にいるとだんだん下品にならざるをえないんだなって。その点、雑誌作りが上品とは言わんけど、自分たちの主張を正確に発信する場として完結できるから、じつは俺はそこが壁だったりするんだよ。下品さと闘えるか、みたいな。『kamipro』もそこを拒否してる部分があるんじゃないの？

斉藤　うーん、どうなんだろう。正直、そこまで深く考えたことないですね。

ガンツ　でも、本気でマット界を復活させようと思ってるんなら『kamipro』なんか巻き込んじゃうのがホントは一番いいのかもしれないですね。

斉藤　逆に、そういうのって堀江さんは向いてると思いますけどね。

井上　向いてるでしょう。変態という名前で一括りにする以上は、ちょっと主宰者は突き抜けてもらわないと困りますよ。

ガンツ　じゃあ、やりますか！（軽く）。

斉藤　えー、というわけで各団体の皆さん、『kamipro』はいつでも堀江ガンツを貸し出しますのでよろしくお願いします。謝礼については要相談です（笑）。

井上　代表の脳内アーカイブは半端じゃないですから（笑）。

斉藤　でも、井上さんも、人間関係を構築するなかで、だんだんプロデュース業にいく雰囲気はありますよね。

井上　うん。自分でもそう思ったりするんだけど、なかなかまだジャストな人間関係が築けてないんだよ。ま、でもホント『kamipro』はもっとズブズブになってほしいよ。ちゃんと読んでる人は、「あれ？　なんか『kamipro』って前とちょっと雲行き変わってきてない？」って思ってるよ。

ガンツ　でも、雲行き変わらざるえないですよ、最近の内容だと。去年は一年中文句言ってた気がしますし。

斉藤　井上さんが言うのは、そこに井上さんや堀江ガンツを送り込めばいいんじゃないかってことなんですよね（笑）。

井上　そうだよ！　ガンツ、我々は旅に出るぞ！（笑）。

ガンツ　ダハハハハ！

井上　……でもさ、こういうこと含めて俺がやってるのはやっぱり「柳沢忠之ごっこ」なんだよなあ。

斉藤　柳沢忠之ごっこ！　なるほどなあ（笑）。

井上　結局、俺は柳沢忠之という教科書をずっと見ているんだよ。でも、「ごっこ」でも充分楽しいんだけどね、これが。

斉藤　じゃあ、堂々とやってくださいよ。柳沢忠之ごっこを。

ガンツ　ええ。最悪、山口日昇ごっこでプロレスデビューしないように気をつけます（笑）。

【10年5月6日／『kamipro』編集部にて収録】



K-1とPRIDEが分裂した当時、PRIDE側についた山口日昇だが、PRIDE隆盛のために山口日昇がそこまで戦略的に『kamipro』を使ってたといえば、じつはそうでもなかったりする。そういう意味では『SRS-DX』と当時のK-1、PRIDEの関係は、団体とメディアの一つの理想的な関係と言えそうだ。



格闘幕末時代から見えるもの──。

世界一の箱庭国家

日本国。

──菊地さんは青木真也VSギルバート・

ほとんどないですから。」

は……。

会社の帰属意識じゃなかった時代に、忠



音楽家にして文筆家

菊地成孔

菊地氏は開国問題をどう見るのか──？
そこにはPRIDEの“60億分の1”をめぐる見立てが
いまあらためて問われることになった。今月もやっぱり必読です!!

聞き手／ジャン斉藤

忠臣蔵の物語に力を失なったいま 日本人に残ったものは敗戦と幕末だけ

――菊地さんは青木真也vsギルバート・メレンデスの試合はご覧になりました？

菊地　観てないですが、話は聞いています。そういえば、日本が世界に誇るテクノDJのケン・イシイさんっていらっしゃるじゃないですか。あの人、青木の試合を観るために1泊2日だかでナッシュビルに行ったらしいですね。業界内リークですが。

――あ、イシイさんのことは現地で小耳に挟みました。

菊地　これまた日本が世界に誇るJAZZ DJの沖野修也さんに「絶対に観に行ったほうがいいよ」って焚きつけられて乗り込んだらしいんですが、沖野さんが「その後、イシイから連絡がないんですよ」って言ってました（笑）。やはり落ちてたみたいですね。

――それは青木が負けたことに対して？

菊地　そうでしょうね。やはりその、世界に誇る同志という連帯感というか。

――なるほど（笑）。その青木の敗戦を受けて、日本の格闘技界も揺らいでるところがあるんです。日本もケージを本格導入して開国すべきじゃないか、と。そこで開国派と鎖国派に分かれて、幕末めいた論争が起きてるんです。

菊地　堀辺先生が登場しうる誌面で幕末について語るというのは僭越ですが、幕末という時代は、ローカリティとグローバルスタンダードの接触という意味では極端なシーンですよね。日本の鎖国に似た状況を同じ規模でやった国は人類史上ほとんどないですから。

――凄く際立っている状況なんですね。

菊地　最初はオランダと中国にだけ貿易を許して出島というものを作って、まあまあ制限国交をしていたわけですね。鎖国の大きな理由の一つとしてはキリスト教があまりにも日本人には恐ろしい宗教だったからというのがあります。死を厭わないほどの熱狂を狂信と恐れた。それでキリスト教を弾圧するという流れのなかで、鎖国という極端な選択に流れてると。歴史の授業みたいですが（笑）。

――それから300年近く鎖国を守ったわけですから、世界史のなかでも異様な世界なんですね。

菊地　そこに黒船の来航で、いわゆる「幕末」が訪れて、尊皇攘夷だ開国だ新撰組だという、いまや国民みな知っている、あの芳醇な物語が生じた。以降、日本人にとって、パラダイムシフトのイメージは一直線に幕末と結びついています。90年代初頭、日本にグレイシー柔術が来たときも黒船と言われたでしょ。

――大騒ぎになりましたね。

菊地　包括的に見れば、現状よりもグレイシーショックのほうが「開国」「鎖国」みたいな意味合いは強かったですよね。まだ見ぬ技術体系がまとめてインストールされて、最初に平（直行）が帯もらったとかね。いまやジ・アウトサイダーでの名ジャッジですが。

――あの当時のグレイシーという黒船から考えたら、今回はそんなに大きな波紋は……。

菊地　まあ、あくまで比較のうえですけどね、ないと思いますよ。まあでも、状況が「このまま現状守ろう」と主張する側と「いや、変えなければいけない」と言う側のぶつかり合いを起こすという意味では同じですよね。それにしても日本で改革というと幕末になる。ほかにもパラダイムシフトだらけなんだけれども。

――定番なんですね（笑）。

菊地　昔はなんか年末年始になると忠臣蔵の話がドラマになって。"忠義"の2文字といいますか、社長が恥をかかされたんだから、全体で仇討ちだと、社長の恥をそそいで全員死ぬんだという。昔はまだ日本の会社が終身雇用制度を維持してて、会社が家族みたいな時代があって。言っちゃえば会社そのものがカルトみたいになっていた。いまみたいに欧米化された会社の帰属意識じゃなかった時代に、忠臣蔵というファンタジーは毎年毎年、手を変え品を変え、テレビで観られたわけじゃないですか。でも、それが崩壊してしまって、最後の忠臣蔵はたけし軍団だと言われてますよね。

――確かに！（笑）。

菊地　なので、ああした物語が力を失なって、残った日本人の大きな物語というのは敗戦と幕末だけかもしれないですね。敗戦と幕末だけでなんでもアナロジーしちゃうというかね。いずれにせよ、アナロジーされる対象が生き生きしてればそのアナロジーは有効というかね。

――もしかしたら、有効じゃないのかもしれないですね、いまの格闘技界にとっては（笑）。

菊地　いやいや、そこそこ有効なんじゃないですか。たとえばグーグルが来たときも、アメリカから黒船が来たようなイメージでとらえることも可能だったと思うんだけど、とくにそんなふうに言わなかったじゃない。

――騒がなかったですね。

菊地　日本の虚をついて、まったく新しい、ひょっとしたらこっちが乗り遅れてしまうんじゃないかと思わせられるような巨大な文化が外部から入ってきたときに、黒船だと言って騒ぐか騒がないかっていうのは、さまざまなファクターによると思いますが、とにかく今回の、青木のケージでの敗戦というケースは、ちょっと騒がれているわけですよね。だけど、さっき言ったように、グレイシーというデカいのがまだ記憶に新しいからなあ。世代とも関係ありますけどね。

――それにいまはその黒船の実態を知ってるわけですもんね。知ってるものが脅



MMAの首都がアメリカに移ってから数年――。地方都市日本のMMAはどうあるべきか。青木の敗戦なくしても突きつけられた刃であったのかもしれない。

威になってるわけですから。

菊地　あのときはホリオン（・グレイシー）という天才が仕掛けて、インターネット前夜、つまり神秘性がメディアによって剥奪される前にやったんだよね。いまとなっては黒船の脅威というのはややクールにならざるをえない。堀辺先生が本気で命懸けの覚悟を決めてしまう熱狂は難しい世の中になりました。当時の本気度で比べると、今回は「まあ青木もやられちゃったし、ウチらもこれじゃガラパゴスだよね」というクールな感じじゃないでしょうか。でも、これ言っちゃ身もふたもないけれども、ワタシPRIDEの頃から、「リングで総合は日本独自の文化」って思ってましたよ。たとえばラブホテルやジャズ喫茶とか、日本にしかないものっていっぱいあるわけ。ああいうモンですよね。エキゾチックっていうか。

――ああ、そうですね。

菊地　うん。セックス専用と謳っているドライブインなんてないし、ジャズのレコードというのは、家とかで聴くものであって、喫茶店に行ったら店主が選んでみんなが静かに聴いてるというのは独自のものです。

――内側からだと意外とわからないもんなんですね。

菊地　逆に我々が外国に行くと「なんでこんなことするんだ。おっもしれえなあ」と思うことだらけじゃないですか。

――リングという文化もそう見られてもおかしくないわけですね。

菊地　あんまり詳しくないですけど、特別マッチではなく、ケージを本格的に導入した団体は日本にありましたよね？

――ありますけど、そんなに大きなイベントではないんです。

菊地　ああ、興行がもともと小さい。

――マット界に与える文化的影響がそんなにないっていう。

菊地　リングやケージにこだわるのはどういう理由からなんですか？

――簡単に言うと、「最強」のイメージを持って日本の格闘技を観たいってことですね。それこそアントニオ猪木の昔から、UWF、PRIDEまでそのイメージを追ってたところはありますから。

菊地　ああ、なるほど。だったら話はシンプルですよね。60億分の1というのをリアルな現実と解釈したか、美しい見立てと解釈したかですよね。ワタシは後者でしたが、前者も山ほどいたことでしょう。最盛期のPRIDEは確かにおもしろい



かつて日本で競われた“60億分の1”は現実だったのか、幻想だったのか。今回の問題にもそこは結びついていると菊地氏は指摘する。

日本はどんな優れたものを作っても外国に仕掛けて勝つ力に欠ける

し、すばらしいし、文句は何もなかったけれど、要するに日本が勝手にやってる世界一決定戦であって。

――それはK－1自体の構造と一緒になりますね。

菊地　そうそう。日本にはK－1とPRIDEという、勝手に世界一を作る箱庭があるということですが、これはもう鎖国とかそういうこと以前に、国土が島国で四季が豊かでという、いわゆる「日本の心」というか、要するにこう、完全に閉じた小さな敷地のなかで、それは龍安寺の石庭とかと同じで、狭い場所に世界全体を表現してしまうような、箱庭的な属性が日本人にはありますよね。だからPRIDEとK－1を外に出してグローバルスタンダードっていう基準にさらしたら、まったく世界一でもなんでもないんだという。そういう考え方をするか、それでもあのときは確かに世界一だったという2派に分かれると思いますよ。ケージを導入しようかどうかっていう議論はその先にあるものです。

――まず問われるのはそこですか。

菊地　そうです。最初に問われる基底部は「あのときの世界一が本当に世界一だったのか？」「あのときの世界一は、箱庭や見立ての世界一だったのか？」っていうことだと思いますよ。日本はほら地勢的に言っても、ローカリズム／エキゾチズムの美しさで世界に訴える力が、少なくてもアジア諸国のなかで一番強いんですよ。国のなかで勝手にカワイイつって騒いでいたのが、外国からえらく喜ばれることになる。PRIDEがゲイシャやオタクカルチャーみたいなエキゾチックだったのか、あるいは国産車みたいな存在だったのかは難しいですが。

――端から見たらかなりエキゾチックであることが大切なんですね。

菊地　だから実質も計りようがない。確かに青木は負けたけど、秋山は勝ってるし（笑）、全盛期は凄かったと。たとえば80年代の新日本プロレスというのは、ひょっとしたら世界中のプロレス団体のなかで一番強かったかもしれないとかさ、なんとでも言えるわけよ。

――ですね（笑）。

菊地　ちなみにイギリスは日本と同じ島国だけど、イギリスはアメリカにアタックをかけるんですね。ビートルズに代表されるように、イギリスはそうやっていいモン作ったとしたら仕掛けてくるわけ。その歴史がある。日本はいいもの作っても仕掛けるのがヘタです。どんなに優れたものを作っても、外国に仕掛けて勝っていく力に欠ける。静かに花を咲かせていたら、外人が愛でてくれた。というのは得意ですが、アメリカに打って出るとボコられたりするわけです。ビートルズみたいなこと、やったことないですよね。

――あんまり思いつかないですねぇ。

菊地　K－1も海外覇権に対していろいろとやってますけど、結局はさんざんたるもんだったじゃないですか（笑）。香港や韓国がまあちょっといいかなぐらいで

しょ。日韓はまた別問題なんだよね。PRIDEもラスベガスに行くって瞬間にダメになったわけです。それこそ、堀辺先生のほうがお詳しいわけですが、「秘すれば花」といって、こっちから売り込まずに黙っていいことをしてるのを誰かに見てもらうっていうことが一番得意なわけで。

——つまり、日本人は売り込みがヘタということですか？

菊地 イギリスみたいにうまくない。UWFもすばらしかった、あれも日本の珍発明ですよね。PRIDEも珍発明。珍と言うと、悪いものみたいだけど、かなり奇形的な発明、優秀なものができちゃって、海外旅行で来た人なんて、もうかなりエクセレントみたいな感じだと思うんですよ。

——UWFなんて説明のしようがないですもんね。

菊地 うん。説明のしようがない。なんか雑な説明しかできないよね（笑）。「ガチふうのプロレス団体が日本にあるんだ。それがもの凄い人気なんだよ」って説明しても意味がわからないじゃないですか。「韓国の本格的な鍋料理で最後に入れてくれるのがインスタントラーメンなんだよね。それが大人気なのよ」「へー」みたいなさ（笑）。

——意味がわからないですね（笑）。

菊地 だからそれこそ坂本龍馬じゃないですけど、「世界人としての視点」というか、コスモポリタン（世界市民）としての視点で日本を不思議な国として見るか、見ないかという態度というのは、昨日今日始まったことじゃなくて、聖徳太子の時代からずっと続いてるんですね。聖徳太子は元祖コスモポリタンだったというね。ナショナリズムなども、そうした視点の分裂から生じるわけですね。ワタシは仕事柄、世界中飛び回りますけど、だからといって自分はコスモポリタン的視点があるかというとはなはだ疑問ですが。とはいえPRIDEや新日本プロレス、UWFって一通り観てきて、どれも絶頂期は凄いわけじゃない。

——世界最強のイメージですよね。



北米に覇権を奪われる最中、ゼロゼロ年代を支えた吉田秀彦が引退し、プロレスとMMAをクロスオーバー刺せた桜庭和志や藤田和之も有終の美を飾ろうとしている。これは決して偶然ではないはずだ。物語のなかでの必然的なイベントだ。

PRIDEもUWFも日本の珍発明。かなり奇形的な発明だった

世界一の箱庭 日本国

菊地 だけど、それが実質本当にグローバルスタンダードのなかの世界一で、そのソフトをそのまま他国にインストールして、オリンピックみたいなグローバル競技として成り立ち、しかも日本一が世界一になる。と思ったことは一回もないです。それでいいわけです。

——冷静に考えると。

菊地 いま初めて日本がガラパゴスだと言って焦ってる人たちがガラパゴスを作るわけです。コスモポリタン的な人は、「最初からガラパゴスに決まってんじゃん。でっかいガラパゴス島だよ」「鎖国以後もずっとガラパゴスなんだよ」っていう感じじゃないでしょうか。もちろん日本にも世界水準のものはあり、それこそ冒頭に戻りますがDJカルチャーもそうですが、金メダルもちゃんと獲る。そのかわり相撲の綱をガイジンが獲ったりするリスクにあるんだけど。そういうかたちのものと、もう、見ざる聞かざるしゃべらざるというか、要するに自閉によって小さい箱庭を作って、そのなかに世界を全部畳み込む胎内感覚。キン肉マン的世界観といいますか。

——キン肉マン的世界観（笑）。

菊地 すみません、一度も読まずに言ってますけどね（笑）。そういう意味では「PRIDEとUWFを一緒にすんな」と言う人がいるのは当然ですが、新日本プロレス、UWF、PRIDEは全部つながってて、それは日本人だけが世界一だと心から信じることができた、すばらしい箱庭だったという意味です。ところがPRIDEだけがインターネット後だったこともあり、幻想が壊れやすいから、それはそれで気の毒だけれども、新日本プロレスやUWFとつながってるものだと思います。

——そこが青木真也の敗戦によって分断されたということですね。


菊地 でも、幻想でも世界一だと思わせるのは凄いことですよ。国際プロレスが世界一を自称しても妄想かフカシとしか思われない。PRIDEの60億分の1というのは、客観的な事実としてファンは信じていたわけだから。「だって比べようがねえじゃん。ケージじゃねえんだからさ」と思わせなかった。コスモポリタンの視点からは、青木が負けたらケージ導入が議論されるというのは、遅きに失しているというか、ナショナリストの発想に見えると思います。そういう意味では髙阪剛は数少ないコスモポリタンです。彼は最初から留学者であり、イグザイラーとして世界中を回る人であって。ナショナリストではないよね。日本人がコスモポリタンになると、一匹狼化するしかないのよ。髙阪のあの気高い一匹狼ぶりというかね。

——髙阪は日本で食えたのにアメリカに渡ったわけですもんね。

菊地 そう。だから世界を知りたかったわけです。そういう意味では、髙阪剛というのは勝海舟ですね。前田日明という人に寵愛を受けながらも、コスモポリタンとして外に出ていった。許した前田もすばらしい。髙阪は顔つきも勝海舟っぽいですし。こうなると時勢柄、龍馬は誰かという話になりそうですがそれはやめときましょう（笑）。龍馬ブームなんて、コスモポリタニズム掲揚に見せかけたナショナリズムの病ですよ。自分を龍馬だと思ってるオッサン全員、ドメスティックだもの（笑）。

【10年5月10日／都内・某所にて収録】

発行/株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555(代表)
発売/株式会社角川グループパブリッシング
[エンターブレイン総合サイト] http://www.enterbrain.co.jp/



こんな男こそ成功できる！

日本人が勝つには〝忍者の手〟しかないんです

狂気の大スターに学ぶ

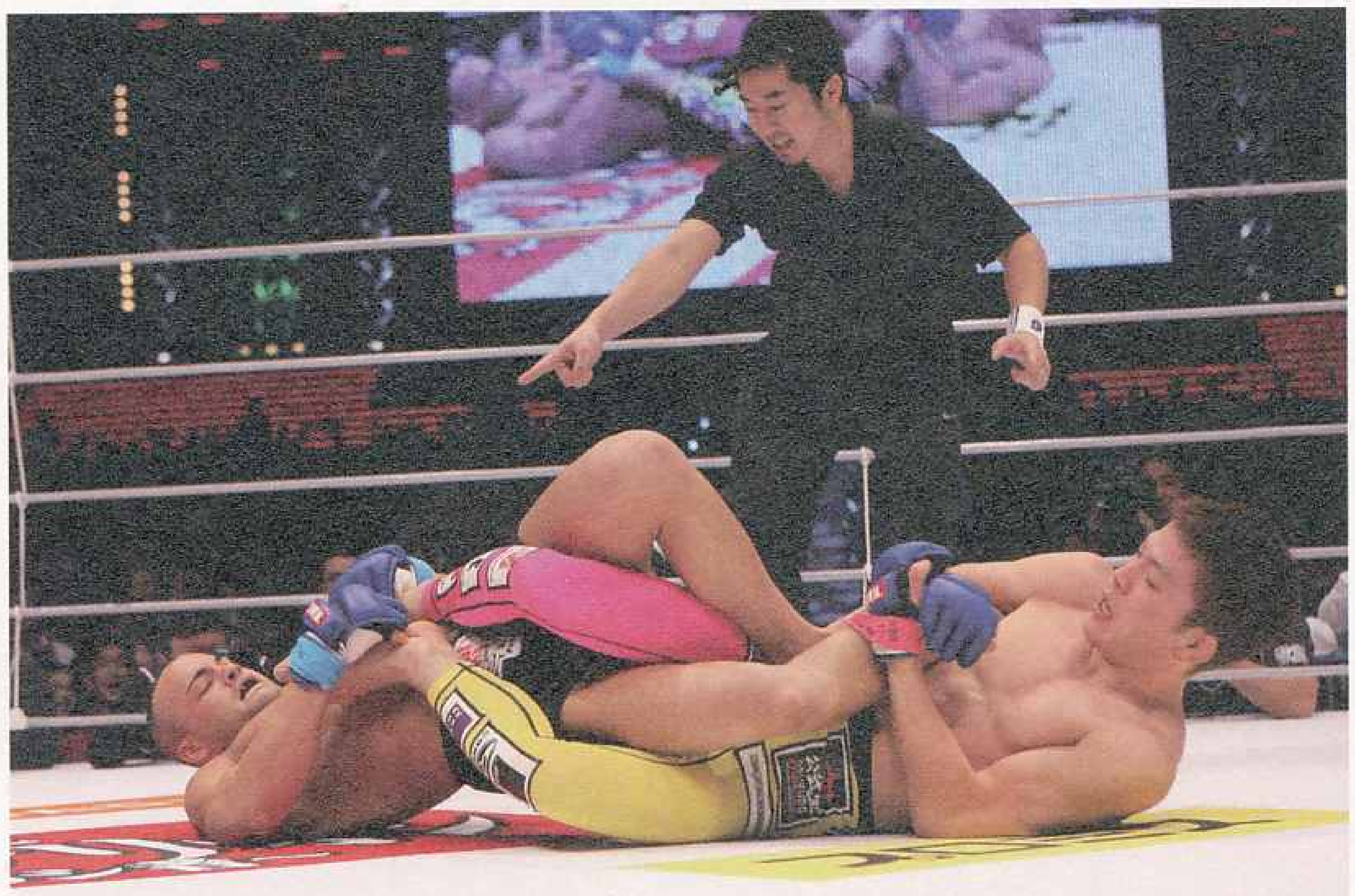
本気の世界進出！

JJサニー千葉

アメリカ進出成功法はこの男に聞け！ ご存知、JJサニー千葉（千葉真一）である。国内はもとより、海外、とくにアメリカでもブルース・リーと並ぶ大スターとして人気を博し、その後、俳優養成スクールJACを設立するなど、71歳にしていまだアクションの世界を牽引する大御所である。そんなJJサニー千葉にアメリカ進出の方法をご教授いただいたのだが、なぜか忍者の話に……!?

聞き手／青柳直弥　構成／松下ミワ　撮影／菊池茂夫　試合写真／乾晋也

―今日は、よろしくお願いします！
千葉　よろしく（顔の前で両手を合わせ、こちらの目を見ながら）。
―さっそくですが千葉さん、格闘技とかはご覧になられるほうですか？
千葉　ええ、けっこういろいろ観ますよ。
―先月、日本の総合格闘技界のトップ選手がアメリカの大会で負けちゃったのはご存知でしょうか？
千葉　誰ですか？　その選手って？
―青木真也というライト級の選手なんですけど。総合格闘技の。
千葉　ああ、総合格闘技のほうか。どんなコだったっけ？（『kamipro』の青木の写真を見ながら）あー、はいはい。一回観たことあります。寝技が強くて、「倒しゃあ、こっちのもんだ」なんて言ってたコですよね。
―そうです、そうです。その青木選手が、アメリカのストライクフォースという団体に乗り込んでいって、その団体のライト級のチャンピオンに完敗しちゃったんですよ。
千葉　ほーう。そうですか。
―それで今回、さまざまな方向から日本がアメリカに太刀打ちできる方法はないかということで、いろんな方にお話をうかがってまして、役者としてハリウッドで実績を残されている千葉さんにお話をおうかがいできれば、と。
千葉　僕が昔、黒人と闘ったの知ってる？（ニヤリ）。
―1977年にハワイで行なわれた極真会館の日本代表チームとハワイ代表チームのフルコンタクト空手の大会のことですね。
千葉　そうそう。大山（倍達）先生の真ん前でやったんですけど、一昨日たまたま、その大会を子どもの頃に会場で観ていたっていう、いまは社長になっている人と会ってね。彼が凄く興奮して僕にしゃべってくるから、こっちも「そういえばやったよなー」って、ついつい朝まで酒飲んじゃってさ（笑）。
―ハハハハ！　僕は観てはいないんですけど、東孝さんとか中村誠さんとか錚々たるメンバーのなかの一人として千葉さんが出ていたというのはスゴいですよね。
千葉　うん。会場も満杯でしたよ。当時は僕もバンバン鍛えてたから、ハワイで2週間の合宿に入って、極真の人たちと毎



なんと! 大スターであるJJサニー千葉が青木真也を知っていた! 取材時には青木の階級まで細かく聞いてくるほど興味津々。さすが極真空手の段持ちだ。いつか、JJサニー千葉がリングに上がる姿も観てみたい。

白人にしても黒人にしても彼らは肉食 つまりね、ヒョウと犬の違いですよ

日毎日稽古して。で、本番で僕は黒人選手と当たってね。相手の身長は僕より5センチくらい高かったのかな。身体も凄くゴツくて。試合では、後半かろうじて一本取って勝ったんですけど、その相手とやったときに思ったのはね、肉食動物ですよ、彼ら（笑）。我々は菜食動物。この違いだよね。彼らは生まれながらにして闘うべく、そういう民族ですよ。
―それは黒人がというか、外国人がですか？
千葉　外国人が。白人にしても黒人にしても。だいたい、日本という小さな国とアメリカとじゃ、まず人口が全然違うってのがあるじゃないですか。でも、そんなこと以前に、基本的に彼らは肉食動物ですよ。つまりね、ヒョウと犬の違いですよ。
―それは凄くわかりやすいですね（笑）。そもそものスペックがそれだけ違う、と。
千葉　そうじゃない？　闘ってみて思ったけど、それだけ違えば叩いたって効かないよね。
―でも、このとき千葉さん、胴回し回転蹴りとかやられたんですよね？
千葉　フフフ、書いてありました？（エキサイト気味に）。もうね、手なんかでやったって効かないから、足で攻撃していくしかない。でも、それは相手の裏をかいて一回転する技だから、何回も使えるもんじゃないんですよ！　で、僕が試合を終えて帰ってきたら大山先生が、「うーん、回転蹴りは3回くらいやるべきだったな」って言うんですよ。だから僕が、「いや、先生、3回もやったら見抜かれますでしょ。3回は使えませんでした」って言ったら、「いやいや、やってることがおもしろい」って。こっちは倒すか倒されるか必死でやってるのに！
―アハハハハ。じゃあ、回転蹴りは一回しか出さなかったんですか？
千葉　一回だけ。マトモに当たってもよかったけど、当たらなかったから。何度も出したら見抜かれちゃうじゃない。でも、あの試合をした経験は僕にとっても凄く勉強になりましたね。
―当時、千葉さんはすでに俳優としても活躍されていた立場でありながら、極真の対抗戦に出ていったのがスゴいですよね。
千葉　うん、僕はその頃から「いつかアメリカに渡らなきゃいけない」と思ってましたから。
―あ、その頃からすでに。
千葉　とっくに思ってましたし、ホントに海外には興味を示してましたね。映画俳優として中国に出たのも一番最初ですし、韓国映画に出たのも僕が一番最初ですから。
―千葉さんの海外進出において、やっぱり空手が一つの代名詞というか、大きな武器になったところはあると思うんですけど、千葉さんは四段をお持ちなんですよね？
千葉　ええ。三段まではちゃんと取ってますからね。

——普通に昇段試験を受けられてるんですよね。名誉段じゃなくて。

千葉　そりゃそうですよ、試合まで出るんですから。稽古だって、大山さんと1対1で激しくやってましたからね。大山先生と1対1でできたというのは、これはなかなかいないじゃないですか。

——いませんよね。

千葉　おもしろい先生でしたよ。おもしろいというか、稽古したあとは必ず、すぐには帰してくれない。いっつも稽古のあとは、「じゃあ焼肉行こう」って。恒例なんです。

——焼肉なんですか。またストイックなイメージとは対局な。

千葉　ええ。また（大山先生が）メチャクチャ食うんですよ。だから格闘技は肉食ですよ。やっぱ肉食じゃなきゃダメです。

——いまの格闘家って、プロテインとか、食事の管理とか徹底してる方が多いんですよね。それじゃダメですかね？

千葉　その頃ないもん、そんなの！

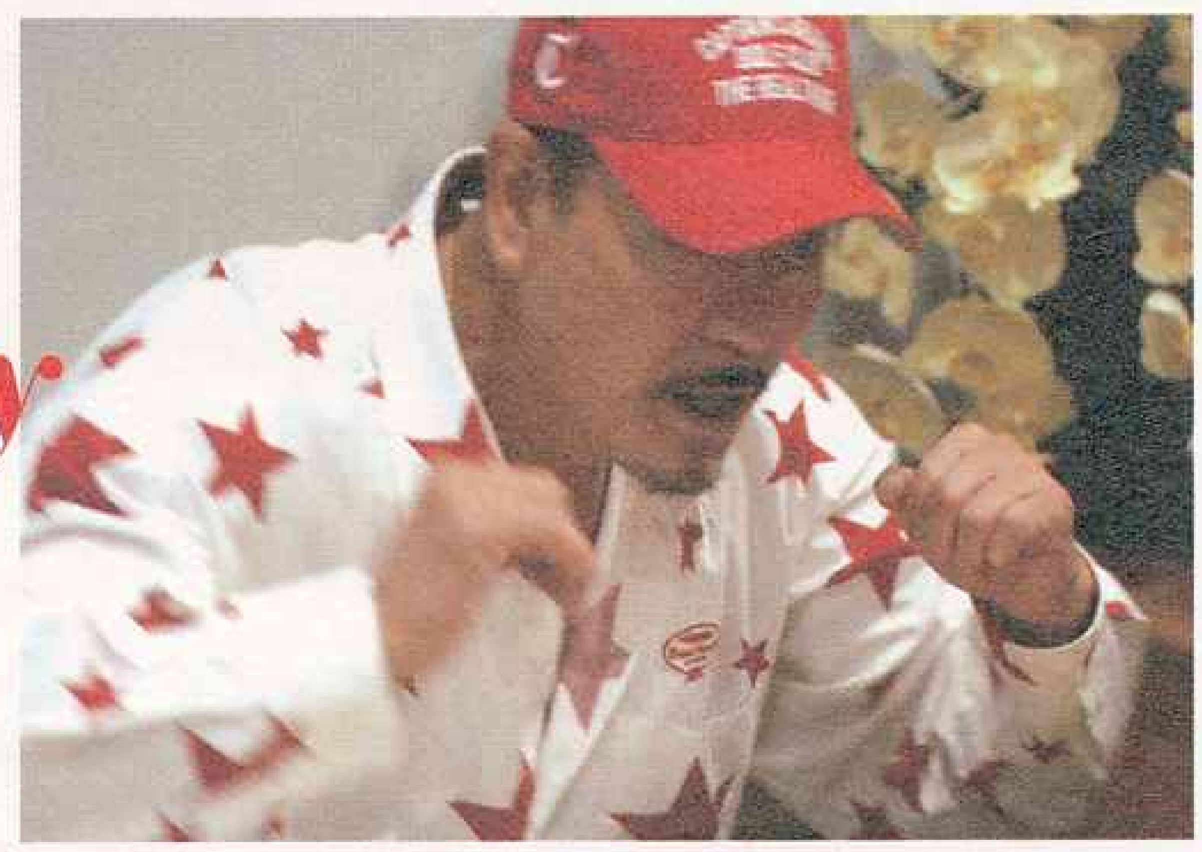
——あ、そっか（苦笑）。

千葉　食うしかないもん。肉食って、魚食って、野菜食って、それしかないじゃないですか。だから、歯や、ここ（両アゴを指しながら）が丈夫になるんでしょう。

——それは、イコール打たれ強くもなるということですよね。

千葉　そうでしょうね。いまのコたちみたいにプロテインと野菜で育ったコじゃないですから。大山先生は、「肉！」「ホルモン！」。それも半端な量じゃない。もちろん僕らもよく食いましたよ。芸能界で一番食うのが、加山雄三さんか、千葉真一かって言われてね。ドカベンの東宝加山、東映千葉って言われたくらい、当時は。







JJ Sunny Chiba

——なるほど（笑）。先ほど、大山先生と稽古していたとおっしゃってましたけど、千葉さんご自身も、JACでは志穂美（悦子。現・長渕剛夫人）さんなんかと相当激しい稽古をされていたみたいですね。

千葉　悦ちゃんはもうホントに徹底してやりましたよ、稽古を。トイレでいつも泣いてたみたいですけど、彼女は根性があったから。

——実際、志穂美さんは強かったらしいですね。

千葉　けっこう強かったね。長渕クン、伸ばされてるんですよね、何回か。夫婦喧嘩でね。

——何かの雑誌で読んだ記憶があるんですけど、何回か、なんですか？　一回じゃなくて？

千葉　僕のとこには、「また」って言ってきたから。「また回し蹴りが入っちゃったんです……」「またやったの？　なんでオマエそういうこと……」「だって殴ってくるんだもん」って（笑）。

——最初は志穂美さんも我慢してるんですね、一応。

千葉　そりゃ、そうですよ。女性ですもん。でも、2、3発ブン殴られて我慢できないから、手が出ないで足が出たって。回し蹴りが頭にパーン入って、倒れちゃったって（笑）。

——長渕さんは、それから空手を始めたっていう。

千葉　そうそう。

——やっぱり実話なんですね（苦笑）。

千葉　本物を覚えさせましたからね、武道に関しては。真田（広之）クンも強いですよ。彼も極真から段もらってるでしょ？

——あ、そうなんですか？

千葉　言わないから、あいつは。で、皆さん、JACというのは飛んだり跳ねたりする学校っていうふうに思ってるでしょ。そうじゃないんですよ。アメリカの映画監督はカメラを回すとき、必ず「レディー・カメラ・アクション！」ってやるんですよ。アクションっていうのは、アメリカの俳優にとって、「さあ、演技をしましょう」ということなんです。つまり、アクションというのは、演技をやるためのもので、演技のなかにアクションも入ってるワケでしょ。だから、JACの頭文字は、本当は「ジャパン演技クラブ」という意味なんですよ。

——なるほど。

千葉　みんなJACというと、アクション俳優というようなことを言うんだけど、僕はよく、「そうじゃない。喜怒哀楽を表現するのは肉体だから、やっぱり肉体を表現するべきだ」って言うんですよ。やっぱり肉体を鍛えてる人たちっていうのは、役者になるのも早いですよね。演技さえ照れないで覚えれば。

——確かに、真田さんはハリウッド進出をはたしてますし、堤（真一）さんにしろ、JAC出身の千葉さんのお弟子さんが、皆さん一線で活躍されてるのを見ると、千葉さんの教え方は間違ってなかったっていうことなんでしょうね。

千葉　うん。いまでもそういうふうに教えてますから。じゃあ、うちからなぜたくさん俳優が出てくるか？　基本が違うんですよ。普通、俳優さんって、演技の勉強とか発声の勉強とかそういうことをするじゃないですか。そんなこと最初にやらしちゃダメなんですよ。役者というのは、腹式呼吸でしゃべるので、腹式は腹筋力なんですよ。たとえば映画やミュージカルで踊ったとき、どうしても息があがるから胸式呼吸になるんですよ。それを腹式呼吸に戻すためには、腹筋と背筋の強い力で、ドンと下へ落とさなきゃいけないんですよ。それは鍛えてないとなかなかできないんです。肉体ができていれば、発声が簡単に短時間でできるようになる

んです。

—理にかなってるワケですね。

千葉　そうなんです。ほかにも時代劇の勉強といえば、どこの学校でもまず木剣を持たせる。それじゃダメなんです。木剣を持たせたら木剣で振ることを覚えちゃう。うちでは木剣を持たせずに、腕から先の基本の動きを毎日3ヵ月くらい、ひたすらやらせる。これをやり続けると、どうなるか？　腰が自然に使われてるんです、手と身体が一体化してますから。で、腰が入ることを覚えてから、刀を持たすと自然にボーンと振れる。これが基本なんです。すべて肉体なんです。だから、真田クンなんて、『ラストサムライ』で、スゴくいい殺陣してたじゃないですか。

—そうですね。やっぱり基礎ができてないと、なかなかそこまではできないですもんね。

千葉　大切なのは基本なんですよ。格闘技も一緒じゃないですか。

—いま、千葉さんがおっしゃった話を聞くかぎり、もしかすると日本の格闘家は鍛える順番とかが違ってるのかもしれないですよね。

千葉　おっしゃるとおりです（真剣に）。だから、誰に教わるか。やっぱり一番大事なのは、指導者ですよ。うちへ来たときには、「すいませんけど、ちょっと時間かかります。時間をかけて基本を教えます。それからやれば早いですから」って言うんですけど。

—そうすると二つ目のキーワードは、指導者ってことですかね。

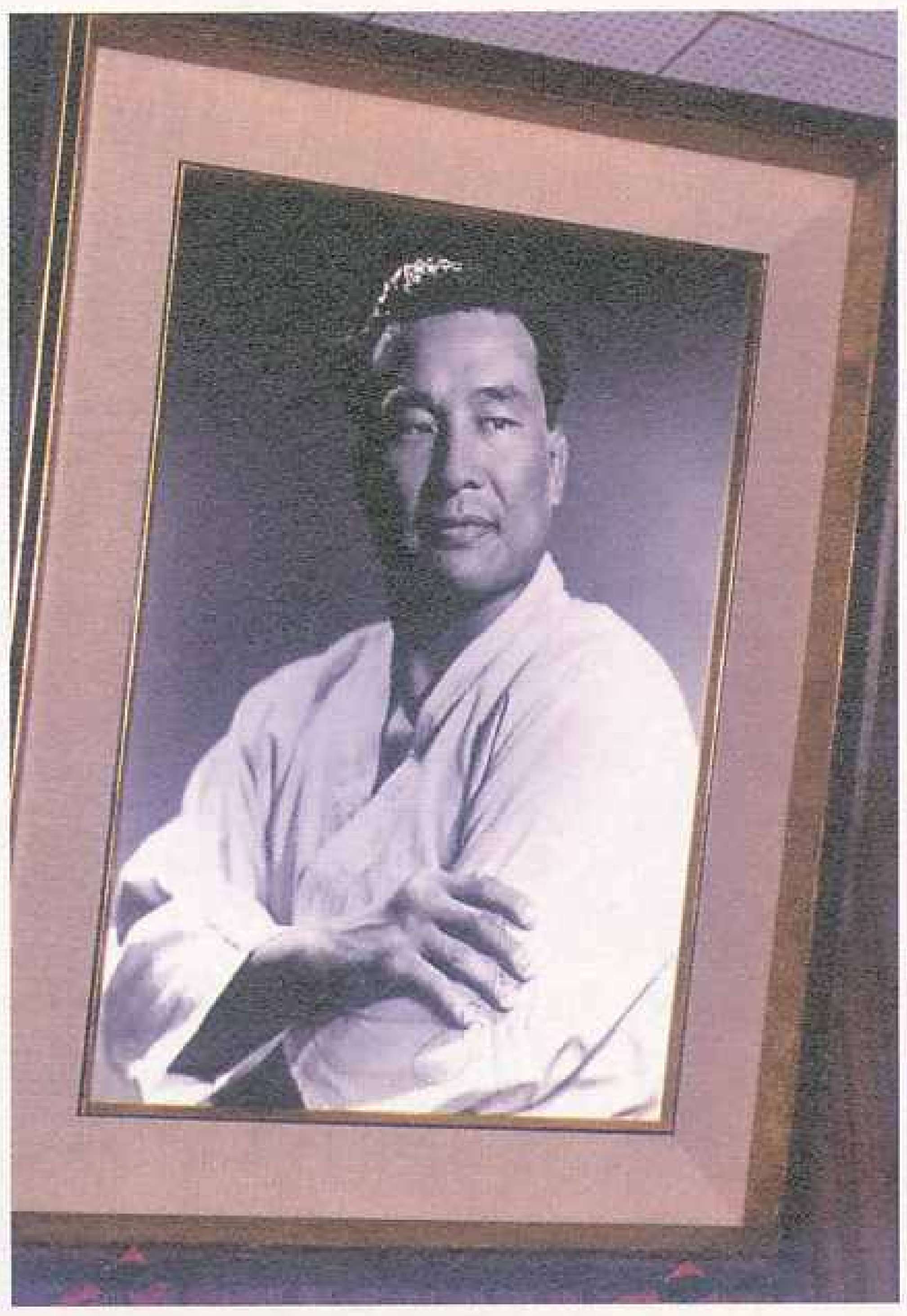
千葉　だから、うちの殺陣なんかも、そうですよ。僕は、いつもみんなに言うんです。本物やってる人の殺陣はなぜ違うのか。俳優さんは怖さを知らないけど、実際、闘った人は怖さを知ってるワケですよ。日本の映画で侍をやる人たちは、だいたい刀をぶつけ合うでしょ？　ありえない（キッパリ）。ホントにその場面だったら、打ってくる刀に対して、まず身体をかわしながら刀で受ける。ボクサーだって、相手がパンチを打ってきたら必ずよけるじゃないですか。時代劇だってそうなんですよ。刀で打ってきたら、必ず人間はよけるんです。よける動作があるからおもしろい。それがリアリティなんです。

—確かに、刀振り下ろされたら、まずよけますよね。

千葉　それをやってるのは、実戦を経験してるものにしかわからないワケですよ。僕はそれを生徒に教えてきた。志穂美悦子たちに教えていたのも、そういうことなんです。殺陣の稽古でも、「悦子、本身（ほんみ）持て」「え…？」「本身」。

—本身って、真剣ってことですか？

千葉　真剣ってこと。で、スーッと構えて、「危ないよー。切れるからねー。注意して。いいね、右からいきます。オアターッ!!」って行くと、逃げてるんですよ。（大声で）やっぱり逃げるんです。それをやるから、リアリティがあるワケです。



かつては大山総裁から直接指導を受けていたというJJサニー千葉。大山総裁を喜ばせた胴回し回転蹴りがどんなものだったのか、ぜひ観てみたい。映像をお持ちの方は教えてください！

殺陣の稽古でも志穂美悦子にちゃんと“本身”を持たせて教えましたからね

—いや、それをやるからっておっしゃいますけど、コワすぎますよ！　僕、聞いてるだけで手に汗かきましたよ、いま！

千葉　だから、自信のある人間とやらなきゃいけない。自信のない人間とたまたまやると、こうやって切られちゃう（自身の腕の傷を見せながら）。

—うわー！　ザックリですね！

千葉　もう、これは骨までいきました。相手の俳優さんが、ナイフの扱いを間違ったんですね。本身というのは、そのくらいわかるんですよ、コワさってのが。

—嫌でもわかりますよね（苦笑）。

千葉　真田クンとかもみんなそれを体験してますから、どう使ったらいいかがわかってる。自然にわかってくれてますよね。だから、格闘技の話をするならば、やっぱり本物でなければ。こっちは映画だけど、いかに本物に近づけるかっていう。

—本物に触れるってことですね、結局。

千葉　そうです、そうです。そこに触れないと、おもしろくないですね。

—しかし、本物を習得するとなると、やっぱりそのくらい命懸けでやらないといけないんですね。

千葉　そりゃ、そうですよ。僕は『キルビル』で、ユマ・サーマンや、ルーシー・リューに殺陣の指導をしたんですけど、彼女たちなんて学ぼうとする姿勢がホントにスゴいですよ。もう完全プロフェッショナル。お金もたくさん取るからには、それだけのことやりますよ。もうホントにビックリしたんですよ。

—どんなふうにスゴいんですか？

千葉　彼女たちには3ヵ月、殺陣の基礎からみっちり教えたんですけど、毎日毎日、6時間から多いとき8時間の稽古をしてクタクタなんですよ。で、ルーシーは日本人の役だから、ユマ・サーマンに教えてる殺陣とは動きが違うんですけど、「なんで私と、ユマ・サーマンと違う殺陣を教えるの？」って、差別してるみたいなことを言うワケですよ。ユマ・サーマンに教えてる殺陣は、飛んだり跳ねたりしながら切ったりするから、確かに見てると派手なんです。

—それに比べて、アタシの動きはなんで地味なの、と。

千葉　役柄の違いを説明したら納得してくれたんですけど、あとで、ごはんを食べに行ったときにルーシーに、「ところでルーシー、たかが殺陣のことで、なんでそんなにムキになるの？」って言ったら、彼女は、「なぜそんなこと言うの!?　だっていまは日本の文化の日本刀を教えてもらっている3ヵ月。この3ヵ月で、私たちの財産が増えるんじゃない？　いま吸収しなきゃいつ吸収するの？　こんな大チャンスないじゃない？　なぜ手を抜けるの？　だから必死なの、私たち」って言ってきてね。

やっぱりプロ意識が違う。だから日本からは一流の俳優は出ませんよ!

—もの凄いプロ意識ですね。

千葉 僕は、「おお、これを日本の女優に聞かせたい!」って思ったね。まず、こんな姿勢で勉強する女優いない。「はい、わかりました。でも、疲れたんで休んでいいですか?」。勝手に休め! って（笑）。

—千葉さんは、そういう日本の役者さんの現状とかを、口に出して言うことはないまでも、ずっと醒めた目で見てたんですか?

千葉 そうです。だから、日本は遅れてる。やっぱり姿勢も違うな、と。これじゃ、日本からは一流の俳優は出ませんよ。世界じゃ通じませんよね。

—そう考えると意識の高さもそうですけど、やっぱり層の厚さもあるんでしょうね。格闘技でいえば、日本でトップを張ってても向こうに出ていったら……。

千葉 数が違うもんね。それとやっぱりモノの考え方、「俺たちはプロなんだ」っていうプロ意識ってもんがスゴい。もちろん日本人もプロ意識はあるんでしょうけどもねえ。

—とくにハリウッドなんかで勝ち残っていくためには、ホントの本物じゃないと残れないっていう気がしますよね。

千葉 うん。そういうことでいえば、日本の格闘技もホントに……ねえ〜。だいたい日本人って格闘家に向いてないんじゃない?（苦笑）。

—あ、向いてないですか（笑）。

千葉 いや、僕ら役者はいろんな役やれるけど、格闘家はさっき言ったように肉体の違いというのがあるじゃないですか。やっぱり根本的に人種の違いで勝てないのかなー」って。つまりさっき言ったヒョウと犬の違いみたいなのがあって。

—やっぱり、そこですか。

千葉 僕はよく、アメリカで子どもたち連れてヤバいところも行くんですよ。食べ物がおいしかったり、買い物だったりで。そうすると（両手を広げて）、こんな大きいのと、いつトラブルになるともかぎらない。そうなったときに、家族を守るために俺はどうするだろう? って、いつも思うの。

—常に考えてるんですか?

千葉 考えてますよ。日本人として何すると思います? そういう大物に勝つためには?

—う〜ん……股間を狙うとかですか?

千葉 いやいやいや、忍者の手しかないですよ。忍者の手って何か知ってます?

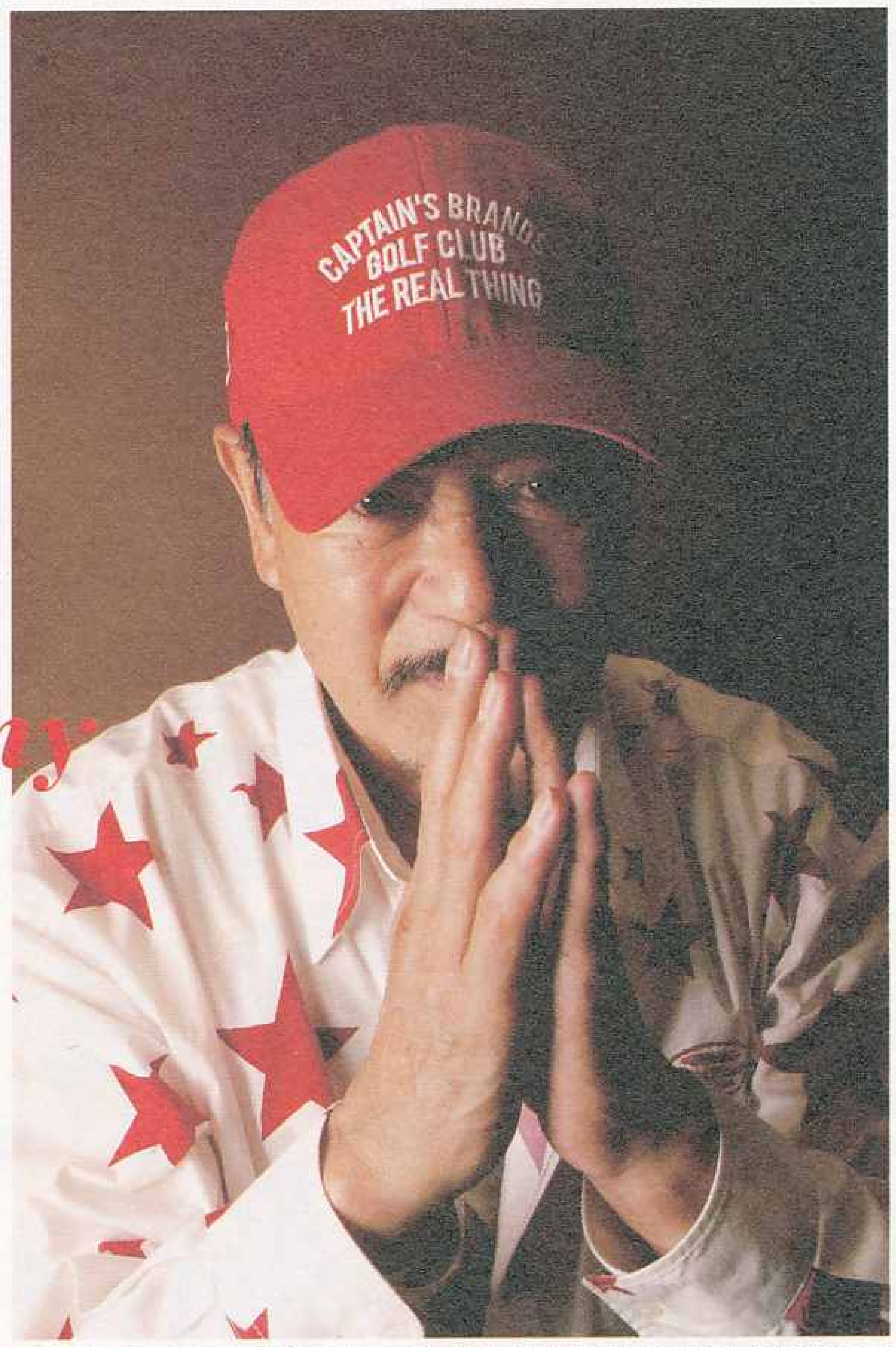
—に、忍者の手ですか? 手裏剣とかでしょうか……?

千葉 忍者は、侍の長い刀と対峙したとき、その懐に入って侍を倒さなければ自分の主人が倒されてしまう。そういうとき、忍者は絶対、卑怯な手しか使わないんですよ。だから、その卑怯な手を侍は侍で知らなきゃいけない。

—なるほど!

千葉 だから、忍者が狙うのは急所ですよ。急所というのは正中線ね。あと（身体の）両サイド。つまり、大きな男が来たときに倒さなければならない、家族を守らなきゃいけないときは、忍者の手しかないですよ。忍者の手というのは、もの凄く卑怯ですから。ボールペン1本で（相手を）倒せますよ。

JJ Sunny Chiba



じぇいじぇい・さにー・ちば■1939年1月23日、福岡県出身。中学校から体操競技を始めオリンピックを目指すが、腰を痛めたためその道をあきらめ俳優の道へ。その後『キイハンター』などでの演技とアクションが話題を呼び一躍大スターに。70年には俳優養成学校であるJACを設立し、真田広之や志穂美悦子らを排出。現在も映画を中心に俳優として精力的に活動中。ちなみに、写真のポーズは最も隙のないファイティングポーズとのこと。あなたも絶対に試してみるべきだ!

—いやー、『影の軍団』で、服部半蔵を演じた千葉さんが言うと説得力が違います! それにしても、千葉さんは50歳をすぎてからハリウッドに挑んだこともそうですけど、本当に常にチャレンジされてますよね。その行動力はどこから来てるんですか?

千葉 それはJACで何百人という生徒を預かっていたこともあるし、日本の映画は、このまま俺が死んだらどうなっちゃうだろうってこともあったし……。まあ、なんでも10年かかりますよね。もう13、14年になりましたから。このへんできちんとした花を咲かせないといけない。時間はかかったんですけど、いよいよ、その時期が来てるんでね。

—けっこうアメリカではご苦労なさったみたいですけど。

千葉 ええ。そりゃ、やっぱり半端なもんじゃなかったですよ。そのうち、また、そんなことを語るときも来るんじゃないかと思うんだけどね。

—あ、いまは語る時期じゃない、と（笑）。一応、テーマ的にはそういう……。

千葉 （さえぎって）でも、僕がやろうとしてたことは決して間違ってないってことは真田クンが感じてるだろうし、堤クンも感じてるだろうし、伊原（剛志）クンも最近、アメリカ映画出てるしね。だから、やっぱりみんなあとをついてきてくれてるんですよ。僕自身も今年はデビュー50周年だし、いろいろ進めている構想もあるんで……!?

—楽しみにしてます! ではいつかアメリカでのお話をお聞かせください（笑）。

【10年5月7日/都内・某所にて収録】



芸能界屈指のマニアが語る
幕末の壮絶人間模様!

ビビる大木の幕末浪漫ごもっとも〜!

幕末といえば、この人しかいない! 朝の情報番組『PON!』などで
その幕末マニアぶりを存分に発揮しているビビる大木である。
最近はNHKの大河ドラマ『龍馬伝』などで幕末ブームが巻き起こっているが、
はたしてその魅力とはどんなものなのか? 幕末浪漫に浸れ!!

聞き手/ジャン斉藤　撮影/笹井孝祐　試合写真/乾晋也

——大木さん！　幕末にハマったきっかけを教えてください！

大木　NHKの大河ドラマ『新選組！』（2004年放映）ですかね。三谷（幸喜）さん脚本の。

——新撰組から幕末という背景に興味を持った、と。

大木　そうです。『新選組！』を楽しく観るために、その前の年に京都旅行へ行ったんですよ。

——つまり幕末鑑賞の基礎体力までつけたってことですか（笑）。芸能界の幕末好きといえば、武田鉄矢さんが有名ですよね。

大木　ああ、武田さんは坂本龍馬が大好きですから。「42年間、坂本龍馬を研究してる!!」って言ってましたから。

——42年間!!（笑）。

大木　ちょっとやそっとのファンじゃないっすよねぇ。歴史学者の人だってそんなに龍馬のことを研究してないでしょうから。

——我々はプロレス&格闘技雑誌なんですけど、日本マット界は開国したほうがいいのかどうか、今日は先人からいろいろ学ぼうと思って大木さんにお話をうかがおう、と。

大木　でも、日本にはPRIDEとかもあったんで、ボクはとっくに〝開国〟してるものだと思ってましたよ。あれだけ外国人選手が日本に来て試合してるのに、「開国問題」があるということは「どういうことなのかな？」って。

——えぇと、以前の格闘技界は日本主導で物事が動いてたんですけど、いまは海外主導になってるんですよね。

大木　はいはい。ちょっと元気がないですもんねぇ。

——で、いろんな面で海外を参考にしなきゃいけないんじゃないかっていう動きが出てきまして。

大木　なるほどねぇ。まぁ、幕末のときの日本はもう開国せざるをえなかったですから。こんなちっちゃい島国ですから、要は何年もかけて海を渡ってこれるような船を持ってる国が日本に来た。日本はそんなことをやったことがなかったですから。



「日本格闘技界はとっくに開国してるもんだと思ってました」というビビる大木。確かに、外国人が参戦するという意味では開国しているが、アメリカとのパワーバランスを考えると現状、開国しているとは言い難い。

——そりゃあ黒船が来たらビックリしますよね（笑）。

大木　その時点でまず国の力が違うわけです！　だからどうしても外国と争うことなんてできなかったわけですよ。そうするともう開国する選択しかなかったんだろうなと思いますし。でも、開国反対派の人たちは、それまでの暮らししか味わったことないから。

——これはもう5月病どころの騒ぎじゃないですね（笑）。

大木　だって、外国人なんかは宇宙人に見えるような感覚ですから！

——ダハハハハ！　できれば〝第9地区〟に閉じ込めておきたい（笑）。

大木　そうでしょ？　目の色も違う、背も違う、髪の色も違う、見たこともない船で日本にやってきて、聞いたこともない言葉でしゃべる。着てるものも違うし、刀も持ってない。そんな連中は怖くて普通は受け入れられないですよ！　そう考えると、ボクはよくこんなにちっちゃい国が外国の植民地になんなかったなと思いますよねぇ……（しみじみと）。

——というのも、隣の清は侵略されちゃってますもんね。

大木　そうなんです！　アヘン戦争で負けて植民地まではいかないまでも欧米各国に支配されてましたから。それなのに、こんなちっちゃい日本が植民地になんなかったですから。そこがね、やっぱり日本は奇跡だと思いますよね。なんか不思議な国ですよね。

——どうして植民地にならなかったと思います？

大木　まぁまぁ、これには諸説があるらしいんですけど、ペリーが黒船で来たときも、日本に不利な状況で開国させられたと言うんですけど。それほど不平等じゃなかったという説もあってですね。明治になってから日本の使節団が不平等条約見直しの交渉に行ってますから、日本は日本でちゃんと行動してるんですよ。世界に追いつくためにいろんな勉強をして、西洋の力や考え方を取り入れてますからね。

——いまの格闘技もそうなんですけど、「いまのままでいい」って言ってるファンも、やっぱりアメリカの影響には目を向けざるをえないんです。ただ、頭ではわかってるんですけど、どうも身体で反応しきれてないというか。

大木　そこが難しいですよねぇ。でも、その人たちだってハンバーガーを食ったりとかジーパン穿いてたりするわけでしょ。

——たぶん（笑）。

大木　結局アメリカのライフスタイルに浸かってますからね。どっぷり外国に染まった生活を送ってますから、我々は。そもそも総合格闘技というジャンル自体が日本になかったわけですよね？

——このジャンルが誕生してから、まだ20年も経ってないですね。

よくこんなにちっちゃい国が外国の植民地にならなかったなって思う

大木　それも言っちゃえば、格闘技界全体からしたら開国して受け入れたわけですもんね。結局、大国のほうで主流になったものは、いずれ日本に来ちゃうと思いますけどね。iPhoneだってiPodだってそうじゃないですか。でも、ちゃんと受け入れてからの日本って強いですからねぇ。テレビや車だって日本が発達させたわけですから。

——そこの応用力は優れてますよね。

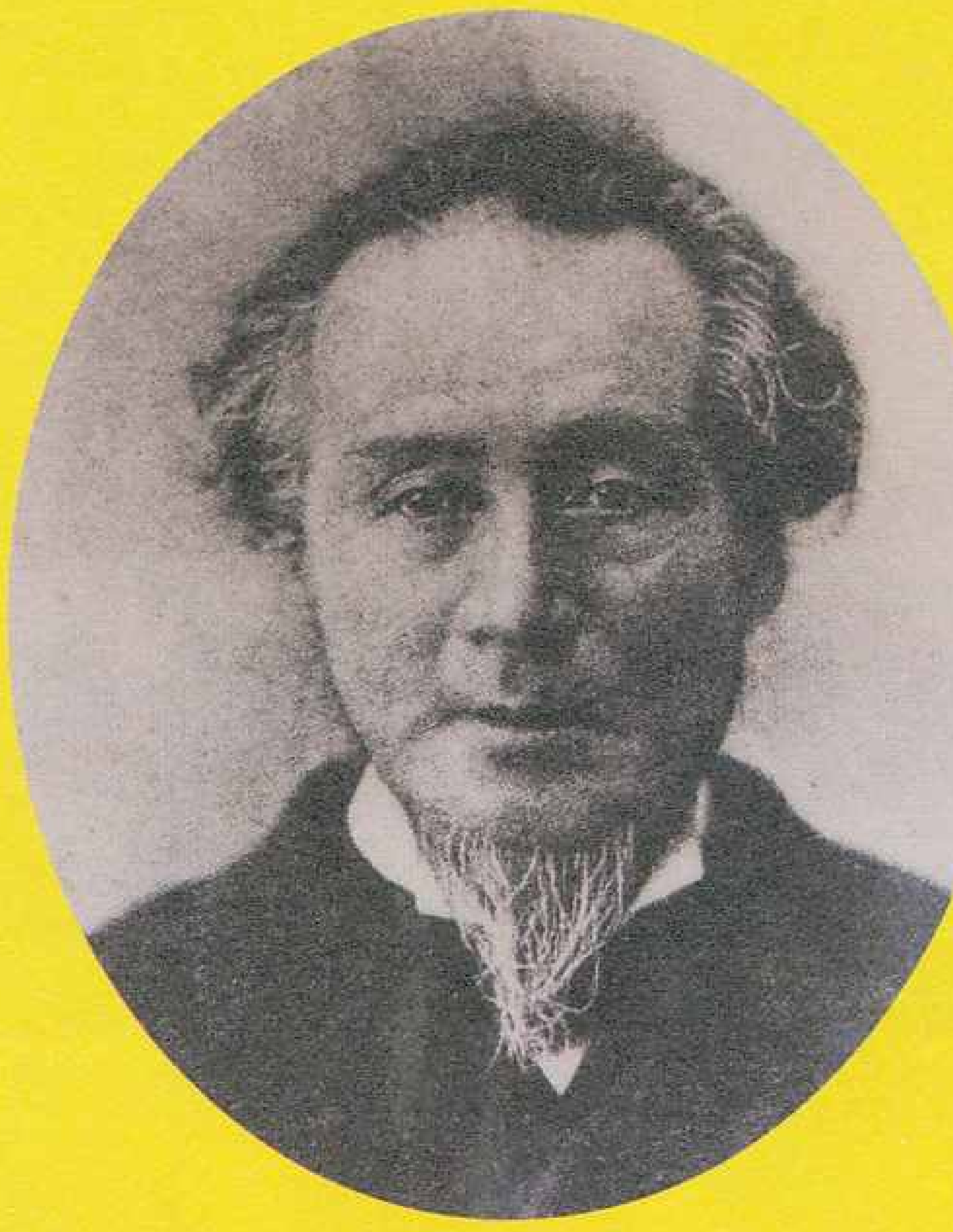
大木　そうなんですよ。日本は外部から新しいモノを取り入れながら、自分たちでそれを発展させていく力が凄くあるんですね。

——幕末も外国に完全に服従したわけじゃないですもんね、開国したからといって。

大木　そうなんですよ！「開国して外国人に勝つ」っていう考えが念頭にあってのことですから。「相手の考えを受け入れながら、おまえたちには負けないぞ!!」っていうね。それにね、要所要所の外国との交渉でも「NO！」って言ってましたから。たとえば連合軍と長州藩（山口県）が戦争になるわけですよ。馬関戦争といって、そのときは山口県が負けて、連合国が山口県の離島を指して「おまえたち負けたんだから、この島をもらうぞ！」って要求したんですけど、高杉晋作たちが「そもそも俺たちは負けてない!!」って言い張って（笑）。

——え？　それはいったいどういう理屈ですか？

大木　いや、「負けてない!!」って言い張るだけなんです（苦笑）。そうすると、連合軍は「あれ？　おかしいな？　こいつら負けてないと思ってたんだ？」って戸惑いだして……。



——なんか話が合わないぞ、と（笑）。

大木　それで賠償金を請求したら「俺たちは徳川幕府という国のなかの一員だから、文句があったら徳川幕府に言ってくれ」っていう交渉なんです。なんかこう、うまくかわすんですよね（笑）。まあ、結局いろいろ持っていかれちゃったんですけどね、それでもそういう交渉術は日本はできるんですよね。ホントはもう怖かったと思いますよ。見たことない船が日本に来るわけですから。それがずっと停泊して「何してくるんだろう、アイツらが？」という恐怖ですから。さっきも言いましたけど、宇宙人がデッカイUFOで来るのと一緒ですから。

——東京の上空にずっと停まってるみたいな感じですよね（笑）。

大木　みんなで「あのUFOは何？　俺たちをどうする気？」って騒ぐのと一緒ですよ。「あんなのに勝てるわけねぇじゃん」って言う人もいれば、「追っ払え！」と

龍馬が死んだのが33歳。高杉晋作は27歳ですからね、死んだのは

吠える人がいて当然だと思います。だから幕末のときもどっちもどっちで言い分があるんですよ。

——UFOに見立てると、よくわかりますね（笑）。

大木　UFOを見て「これは無理だな」と思う人、「宇宙人を迎え入れて新しい地球作りをしようよ」と言う人と、「いやいやいや、宇宙人なんかダメダメダメ」と嫌がる人に分かれるのは、なんとなくわかる。

——そのいろんな意見を調整する人々の生き方が幕末の醍醐味だったりしますよね。

大木　坂本龍馬と勝海舟がそうですよね。あの人たちは外国のいいものを取り入れながら、日本の国力をつけようっていう



写真は幕府内にいながら「幕府を倒せ!」と叫んだという偉大なる勝海舟先生だ。NHKの大河ドラマ『新選組』を観る前に京都を訪れたというビビる大木だが、都内にもいろいろと幕末の痕跡は残っているぞ。

人でしたから。それが驚くことに20代でこなしてるんですから！

——20代で！（笑）。

大木　龍馬が死んだのが33歳。高杉晋作は27歳ですからね、死んだのは。

——いまUFOが来ても、20代でなんかしようとはとても思えないですね（笑）。

大木　いまの20代なら「国があのUFOをどうにかしろよ！」と怒るじゃないですか。でも、幕末の人たちは国に任せないで「俺があのUFOをなんとかする！」っていう人たちでしたからね。その心意気がまず違いますよね、いまとはどうしても。それにあの時代は他人に会うにも話を聞くにも、まず歩いていくしかないですから。

——何日もかけて歩くしか手段はないですよね。

大木　たとえば、京都に凄い学者がいると知ってても、まず住所がわかんないじゃないですか。いまみたいに電話もないから、行ったらいない留守の可能性がある！

——ダハハハ。それでも会いに行く。

大木　そう！　そういうことをみんな関係なく幕末の人たちは行動してるんですよ。行動力がハンパじゃないですよねぇ。

——いまなんかいろいろと便利なんですけどね、当時から考えると。

大木　そうなんです。やっぱり便利すぎたために人間としてちょっと弱くなった部分もあるんじゃないですかね。

——最初から見切っちゃってるところが

幕末の志士を見習って「あんたが行動しなさい!!」ってことですよ!!

あるかもしれないですね。「会ったところで……」「連絡取ったところで……」とか。

大木　そうそう！　なんかやる前からわかっちゃうというか。わかったふりになっちゃうというような。だからボクは海外の大会に出ていく日本人選手がいることは素晴らしいことだと思いますけどね。たぶんそれは「いまのままじゃダメだ」と思って行くんでしょうから。

――「世界を知りたい」っていう気持ちがあるわけですから。

大木　最近海外で負けた日本人選手って青木選手でしょ？　彼はいい選手ですからねぇ。勝ってほしかったんですけどね……。だからそういうふうに自らが行動して、背中で見せる人間がいるかどうかってこともあるんじゃないですか。幕末と格闘技界の似てるところがあるとすれば。

――結局は人材であったり、行動力であったり。

大木　そうですね。だから格闘技界もどれだけ人材が豊富かわかりませんけど。国内の大会が盛り下がると「格闘家になりたい」っていう人も減るでしょう。ただ格闘技でどうしても外国勢との試合となると、たとえとして〝サムライ〟が出てくるじゃないですか、必ず。「サムライが異国で試合をする」みたいなたとえが出てくるわけですから。サムライ精神みたいなものを表現したほうがみんなも燃えるわけですからね。

――その当時の精神性が残ってるんでしょうね。

大木　残ってるんですよ。ホントに150年ぐらい前の出来事ですから。この150年で日本も凄く、文化とか思想も含めて、だいぶ変わったと思うし、成長もあったと思いますし。ボクら若い世代になるともう生まれたときからパソコンがあって、ソファがあって、ハンバーガーがあって、テレビゲームがあって、ジーパンがあって……。そこで「日本人とはなんだ？」と問われたら「なんだろう？」って話ですよね。

――う〜ん。

大木　畳がない家もいっぱいあるわけですから。ホント、ボクもね、「日本人」っていう意識になるとだいぶ薄い世代なのかなって。「自分が日本人だなぁ」って思う瞬間って、あんまないじゃないですか。日本人らしいこと何かやってるかと言ったら、ボクはべつにもう。結局、好きなのは海外のものじゃないですか。もうすでに開国されてるんですよ、ボクたちは！

――なるほど（笑）。

大木　開国して受け入れてるんですから、結局は。ただ、格闘技にしても、どうやってそれを受け入れるのかって話じゃないですかね。

――それを受け入れることが、屈辱的だっていう人もいるんですけど、そこは考えすぎですかね。

大木　そう思ってるんなら幕末の志士を見習って「あなたが行動しなさい!!」ってことですよ!!



ビビる大木の幕末浪漫 ごもっとも〜!







――おまえが新撰組を結成しろ！　と（笑）。

大木　そうなんですよ!!　幕末にはそういう志士たちがたくさん立ち上がったんですから。やっぱりね、歴史にいまだに名前が出てくる人っていうのは、ちゃんと行動した人ですから。当然、言うだけ言って「アイツ、なんもやってねぇなあ」ってヤツは残ってないわけですよ！

――ダハハハハハ。

大木　「文句は言うけど、剣術の修行もやってねぇんじゃん！」という人もたくさんいたと思います。怖いから死にたくないっていう人もいたでしょう。それと同時に、死んでもいいって行動するヤツもいた。そういう人の名前は残るわけで。そこでボクは吉田松陰という人間が好きなんですけども。

—松下村塾の吉田松陰。

大木 あの人は「学んだことを実行しないと意味がない」という考えの人で「決して学者になるな」って言い続けたんです。要するに「机上の空論にならないように学んだことは必ず実行しないと意味がない」っていう人だったんです。その教えを継いで行動したのが高杉晋作。

—思想と行動がつながってるということですね。

大木 で、その行動している途中で吉田松陰は処刑されちゃうんです。倒幕しようとした罪で。

—安政の大獄ですね。

大木 その死によって弟子たちに火がつくわけですよ。「行動した先生が殺された。ならば、俺たちがやらなきゃいかんぞ！」ということになるわけですよね。だから青木真也が負けたということで、青木より若い世代の後輩たちが「青木さんが負けちゃうのか」ということで、さらに練習するかどうかというのもあるじゃないですか。

—あんまりピンときてないみたいですけどね、残念ながら（苦笑）。

大木 あ〜、それじゃ未来は暗いですねぇ（笑）。そういう人たちに伝えたいのは、松陰先生が処刑されたのは30歳のときですよ？ 黒船に乗り込もうとしたのは25〜26歳の頃ですから！

—行動力ありすぎですね！（笑）。

大木 信じられない。見たこともない黒船に手漕ぎボートで近寄って「俺を黒船に乗っけろ」と言ったのが25歳。それで処刑されたのが30歳ですからハンパじゃないですよ。あの時代の行動力は。

—肝が据わってるなぁ。

大木 そして松陰先生は自分の家の敷地内で、村の子どもたちや青年たちに物事を教えるような私塾を開いて、結果そこから総理大臣が二人も出てますから。そう言っても授業をしてたのは27〜29歳ぐらいまでの、たった2年間ですけどね。

—凄すぎますね……。

大木 同じくらい勝海舟も凄い。当時の徳川幕府には、外国を追っ払いたい人ももちろんいたし、「開国をせざるをえない」と言う人もいた。それで開国したことによって、天皇側が怒ったんですよね。あの時代の天皇は外国人が大嫌いでしたから。すると、長州藩らが「朝廷を怒らすような幕府ではいかん」という考え方になってくる。そのなかで幕府の勝海舟は「いいんじゃないか、開国して」という派。「勝てないだろ、日本は」という人でしたから。



DREAM、SRC、アストラと、メジャー団体が現状なんとなく3派に分かれているいまの日本格闘技界。いま勝海舟がいれば、「あんた方、分かれてやってる場合じゃないよ!」と言ってくれそうだが、マット界にそんな勝海舟のような人はいないものだろうか!?

勝海舟は「新しい日本を作るのに敵だ味方だと言ってる場合じゃない」って

—冷静で客観的に物事が見られる人ということですね。

大木 それで坂本龍馬や長州藩とか、徳川幕府に不満を持っている連中を集めて海軍学校を作るんですよ。そこの考え方がまず違うんですよね。言うことを聞かない連中だから、普通は「敵だ！」っていうふうに見なすじゃないですか。ほかの徳川の連中は「勝海舟は反乱分子を集めてなんかやってるらしいな」って疑うけど、勝海舟としては「新しい日本国を作るためには敵だ味方だとか言ってる場合じゃないだろ」っていう考え方なんですよね。まずは日本という国の力をつけなきゃいけない。勝海舟はほかの人たちより見てるところが広かったんですよねぇ。

—大局観に優れてるんでしょうね。

大木 そこに龍馬がほれ込んだわけですから。「この人は見てる目が違う」ということで。そして、それを見抜いた勝海舟もいるわけですよ。「坂本はいいぞ！」ということで。

—コイツは使えるぞ、と（笑）。

大木 坂本龍馬は150年経ったいまでも、ヒーローですからね。その偉人を見抜いた勝海舟もいるわけですよ。で、勝海舟は、大事な話の席には龍馬を連れていったり、自分は徳川の人間なんで表立って動けないときは龍馬を使う。龍馬が取る行動というのは全部、反徳川の行動ですから。それを勝海舟は先頭を切ってできないんで「おまえ、頼む

思想が違うという理由で寝てるところを斬られたりすることがあるわけですから

ぞ！」と命令しているわけですよ。国を強くするにはそれしかないという考えを持っていたのが勝海舟でしたから。

—そう考えると、開国とか攘夷とかそういうレベルじゃなかったんですね。

大木 龍馬と勝海舟は、日本国内で揉めてるあいだに「外国が攻め込んできたらどうすんだ？」っていう考え方だったんです。「国内でまとまって対外国に対してんみんなで力をつけよう！」という人たちだったんでね。勝海舟が凄いのは、徳川に不満がある薩摩藩、長州藩の連中に対して、「これからの日本は、おまえたち長州や薩摩のような大きな藩が力を合わせて国を作んないと、たぶん日本はダメになるぞ」っていう話をしてることなんですよ。西郷隆盛に会ってそう言ってるわけですから。

—俺の会社を倒してくれ！と（笑）。

大木 そうそう、勝からしたら「いいよいいよ。日本の未来のために、俺が所属してる徳川幕府を倒しちゃえ！」っていうような話ですから。実際、あの状況だったら、いずれにせよ幕府はなくなっちゃいますからね。だったら「おまえたちのようなしっかりしたヤツらが熱い気持ちで国を変えろよ」ということで。やっぱり、そういう人が必要ですよねぇ、どの社会にも。格闘界だろうが、普通の会社だろうが。それで実際に西郷や龍馬たちは行動し始めるんですから。

—しかし、20代ではできない行動ですね、ちょっと（笑）。

大木 だからね、あの時代が凄いのは、いまじゃ考えられないですけど、殿様に対する忠誠心が凄かったんですよね。

—いまの時代よりはるかに所属意識が強いんでしょうね。

大木 そうなんです。いまは自分の住んでいる県とか市という感覚ですけど、あの時代は自分の住んでいる国ですから。薩摩が一つの国、長州で一つの国。各国ですからね。だから自分の国をどうにかしたいとか、自分の殿様を実力者にしたいとか、そういう思いがみんなにそれぞれあったわけですから。そういう部分でみんなが国のために動いていたという事実ですよね。



びびる・おおき■1974年9月29日、埼玉県出身。96年にお笑いコンビ「ビビる」を結成。02年からはピン芸人として『CHIMPAN NEWS CHANNEL』の声優や朝の情報番組『PON!』の司会など多方面で活躍。04年に放送されたNHK大河ドラマ『新選組!』に出演したり、『PON!』で『龍馬JIN』という幕末コーナーを設けるなど、幕末には並々ならぬ愛情を注いでいる。

ビビる大木の 幕末浪漫 ごもっとも〜！

—24時間、国のあり方を考えてたんでしょうね。

大木 いまは生まれたときから上に絶対的な権力者がいないわけですから。あの時代はね、生まれたときから殿様という神様がいるんで。普段は顔も見れないですし、会うことだってできないですから。でも、不思議なのは、俺たちがいま「総理大臣に会いに行こう！」って思っても会えるわけがないじゃないですか。これだけテレビで見たり新聞で知ってるのに。それなのに龍馬になると、フリーターで身分もないのに、なぜか殿様に会えるんですよ！

—いま「国を変えたいんですけど」って総理大臣に駆け寄ったら、変人扱いされて逮捕されますね（笑）。

大木 でも、龍馬はどうにか人伝いに殿様に行くんですよね。そして龍馬は行く先行く先でかわいがられるんですよ。「おまえ、おもしろいな」って。

—大木さんも生きてみたいと思います、幕末という時代に？

大木 いやぁ、幕末はちょっと……。

—ダメですか（笑）。

大木 いやぁ、厳しいですねぇ。だってあの人たちは命の危険を毎日感じながら生きてる生活ですからね。思想が違うという理由で寝てるところを斬られたりすることがある世界ですから。

—いまだとネットで罵られるぐらいですね（笑）。

大木 ホントに（笑）。考えてみてください。「おまえとは国のあり方に対して、考え方が違う」ということで、斬ってくるわけですからね。それぐらい熱い集団ですから。「アイツ、むかつくんだよ」「じゃあ、斬っちゃう？」っていうことじゃないですか？

—ダハハハハ！

大木 国のあり方が合わないから斬るんです。もういまとは違うんですよ、考え方が。恐ろしい時代ですよ、幕末は。それは国が動いた時代ですからね。

—やっぱり、行きたくないですね、幕末は（笑）。

大木 凄く大変だったと思いますよ。だから誰か龍馬のような、勝海舟のような、高杉晋作、吉田松陰のような人が、マット界にいれば、何かが変わるかもわかんないですけどね。

【10年5月4日／都内・某所にて収録】



武田鉄矢のモノマネ第一人者が語るプロレス幕末論

竜馬とたけしと猪木と前田



舞台版『お〜い！竜馬』主宰

三又又三

幕末といえば竜馬。竜馬といえば武田鉄矢。武田鉄矢のモノマネといえば三又又三ということで、たけし軍団の三又又三が登場！ 自身も舞台版『お〜い！竜馬』を主宰し、プロレス&格闘技にも造詣が深い三又さんに、幕末とプロレスを絡めた“すべらない話”をたっぷりとしてもらいました！

聞き手／高崎計三　構成／堀江ガンツ

オレのなかの〝竜馬イズム〟って「誰からも頼まれてないのに行動する」ってことなんですよ！

——三又さん、今回は幕末特集ということでご登場いただきました。

三又　ああ、『龍馬伝』が流行ってますからね。でも、『kamipro』と関係ないでしょ？（笑）

——それが、青木真也選手がアメリカで敗戦したことで「リング・ケージ論争」が巻き起こったりして、マット界も幕末なんです。それで幕末といえば竜馬、竜馬といえば武田鉄矢、武田鉄矢といえば三又さんということで。

三又　こじつけじゃないですか！

——いえ、そんなことはないです！　三又さんは『お〜い！　竜馬』の舞台版をプロデュース＆主演もされたんですよね。それは武田鉄矢さんのつながりだったんですか？

三又　オレ、今月43歳になるんですけど、35歳ぐらいのときに「何か新しいことをしなきゃな」って思って本屋に行ったらたまたま『お〜い！　竜馬』が全巻あったんですよ。オレ、武田鉄矢のモノマネするわりには坂本竜馬のことを毛嫌いしてたから、読んでなかったんですよね。

——毛嫌い！　また何でそうなったんですか（笑）。

三又　もういいだろう、と。酒場で会う竜馬好きにどうもいい印象がなくて。だけど、何か気になるじゃないですか。じゃあ、『お〜い！　竜馬』でどんな人か知ろうと思って。たまたま原作が武田鉄矢さんで、作画が小山ゆう先生。小山先生にもプライベートでかわいがってもらってたんで、これで知ろうと大人買いしたんですよ。

——毛嫌いからいきなり大人買いしましたか（笑）。

三又　それで5巻ぐらい読んだら、突然舞台化したくなって。それで小山先生のところに行ってOKをもらって、武田さんのところにも行ってOKもらって……っていう流れなんですよ。

——じゃあ、ある種運命的な感じだったんですね。

三又　そうそう。それで、「ああ、こりゃファン多いわ」って納得もしたし、小山先生には「司馬遼太郎も読みなさい」って言われて『竜馬がゆく』も全部読んで。

——一気に竜馬好きになった、と。三又さんのなかでできた竜馬像ってどんなものですか？

三又　普通にやってたことに満足しなくなってきて、そういうときにすっごい新しい出会いがあるんですよね。竜馬であれば黒船に乗りたいっていうところから始まってアメリカの文化に触れて、日本はなんてちっぽけなんだ、身分制度とかにとらわれてバカバカしいってなるわけじゃないですか。すると勝手に身体が動くっていう。勝海舟って人が、いままで聞いたこともないことを教えてくれて、それによって夢も開かれるみたいなこともあって。そういう出会いと、自分で動くってことが竜馬だと、オレは思いますね。

——なるほど。

三又　だからリングとケージの話で言うと、確実にケージのやり方のほうが絶対にいい！　っていうことであればいいけど、そこにもの凄く大きな開きがないと難しいかもしれないですよね。「これでやるべき！」っていう理由ですよね。幕末で言えば、あきらかに日本の制度っておかしかったわけですから。農民やなんかがあきらかに虫けら扱いだったわけじゃないですか。それがアメリカにはないんだから、「これだ！」ってなりますよ。リングとケージの差っていうのがそれぐらいのもんなのかってことですよ。

——ケージのよさだけでなく、リングの不条理さもなきゃダメだろう、と。

三又　青木選手がそこで何を感じたかですよね。「もうダメだ、リングはもう遅れてるよ！」って言うんだったらケージにすべきでしょうけど。両方によさがあるっていうんだったら、幕末とは言えないと思うんですよ。

——ただ「アメリカでやってるから」じゃダメだと。

三又　そう、それだったらオレは乗れないんですよね。

——竜馬も、ただ「アメリカ、カッコいい！」だけじゃなかった？

三又　最初の入りはそうだったんですけど、文化も制度も何もかもが違うのを見ちゃって、「なぜ日本では上士が通るだけで土下座しなきゃいけないんだ」と。目を合わせただけで斬られるわけですからね。それで斬ったほうが罰せられないって、メチャクチャですから。あと、オレのなかの竜馬イズムって、「誰からも頼まれない」ってことなんですよ。

——頼まれたわけじゃないのに動く、と。

三又　それこそ福山雅治の『龍馬伝』、あれは国から頼まれてやってるわけですよ。

——国営放送のNHKですからね。

三又　「あなたは女にも人気があるからやってください！」って頼まれてますよね。もうそこからして竜馬じゃないんです。

——なるほど！（笑）

三又　オレは誰からも頼まれてない。それが幕末なんです。前田日明にしても、最初は「ちょっとUWFに行ってくれよ」って頼まれたかもしれないけど、そこからは全部自分で動きましたよね。という部分のほうが幕末を感じるんですよ。

——前田日明に竜馬を感じる、と。

三又　あの頃、前田さん自身もよく竜馬の言葉を使ってましたからね。前田さんからですから、そのへんの知識も。自分が舞台をやるようになったら、「そりゃ前田さんも引用するわ！」って思いましたから。あとは猪木vsアリですよね。

——猪木vsアリが幕末……ですか？

三又　それこそ、誰にも頼まれてないでしょ？　猪木さんが夢を抱きすぎちゃって。アリ側も、まさか本気とは思ってなかったでしょう。それでも実現しちゃった。あれを超えるロマンってオレのなかにはないんですよ。それで世紀の凡戦と言われて、何億って借金だけしか残らない。計り知れないですよ！

——借金の額も計り知れないですけどね（笑）。



まさに「誰にも頼まれずに」自らストライクフォースに乗り込んでいった青木真也。この男の行動が結果的に、DREAMという"国"を動かすこととなるのか？

凄い借金を抱えてるのが見え隠れしたりとかパチンコ屋で営業する猪木にリアリティを感じる



三又　オレも『お〜い！竜馬』の舞台を3回やって、3回目はけっこう大コケしてるんですよ。けっこうな借金も抱えちゃったんですけど、それでも猪木vsアリ戦のことを考えると、「どうってことねえや」なんですよね。オレは猪木vsアリ戦の写真はいつも壁に飾ってますからね。

——そんなに憧れてますか！　それこそ、竜馬も最初は笑われたでしょうからね。

三又　土佐勤王党をやめるってときもそうですよね。おまえ、何言ってんだと。勝海舟の弟子になって、何考えてんだって話じゃないですか。オレも「又三」って名前をビートたけしさんにいただいてやってますけど、いままでのたけし軍団も土佐勤王党ですよ。遅れてますね。浅草キッドとオレがいなかったら終わりますよ。

——終わりますか！

三又　これは書いていいですよ(笑)。オレもキッドも変えていこうとしてますから。みんな闘ってないですよね。気づこうとしないし、気づいても行動に起こそうとしない。

——それはやっぱり、みんながたけしさんの名前に寄りかかってしまってるってことですか？

三又　そうですね。あと、自分から行動しようとしない。吉本帝国と闘っていかなきゃいけないわけじゃないですか。じゃあ闘えるガチのリングっていったら、『(人志松本の)すべらない話』なんですよ。

——『すべらない話』こそガチ！

三又　そこに打って出てるのは浅草キッドとオレしかいないですからね。あそこでも勝負しないといけないし、そのためにはライブとか、地味なこともしないといけない。オレはこの3年、それをやってますから。たけし軍団って、元はたけしさんに憧れた集団だったわけで、じゃあたけしさんが何をやったかって言ったら、ずっと一人で闘ってたわけですよ。オレたちもそれをしなかったら、このままだとただの「取り巻き」で終わるな、と。ただゴマすって終わるのかよ、と。……って、幕末からめて考えると、熱くなってくるんですよ。

——気持ちが沸き立っちゃう(笑)。

三又　やってない先輩をみんな土佐勤王党にしちゃってね(笑)。おもしろい話を1時間できますか、と。みんなオレに斬られるぞ、と。たけしさんはいまでも勝負に出ますからね。そこもカッコいいんですよ。いまもハッキリ言って勝つ自信ないです。芸人としてケンカを売ったときに勝てないと思うのは、たけしさん以外ではキッドの二人だけですから。

——でも浅草キッドのお二人については、同志という気持ちもあるんですよね。

三又　そうですね。背中を見てる部分もあるし、それに、『kamipro』という共通項もありますから。常に楽屋に『kamipro』がありますからね(笑)。

——ありがとうございます(笑)。

三又　それで影響されてオレも読み始めて、やっぱり普通のプロレス雑誌と違うおもしろさから生まれるものもありますから。だって、いくらプロレス好きの芸人がたくさんいるって言っても、『1976年のアントニオ猪木』を読んでるのは数えるほどしかいないですから！　それってもう、違うじゃない！

——深みが違うよ、と(笑)。

三又　もういいや、ってなっちゃうし、勧めたりもしますけどね。『猪木・アリ戦の真実』で満足してもらっちゃ困るんだよ、と！

——そこでも孤独な闘いをしてるわけですね(笑)。では一番、竜馬的なものを感じるのは猪木さんですか？

三又　う〜ん……やっぱりアントニオ猪木とビートたけしは、宇宙人みたいなところがありますから。でもリアリティって部分では、猪木さんのほうがあるんだよなあ。

——リアリティですか？

三又　凄い借金抱えてるっていうのが、思わず見え隠れするところってありますよね。平気で地方のパチンコ屋で営業してるところとか。ああいうところに、凄くリアリティを感じるんですよ。

——それは確かにリアリティありますね(笑)。

三又　オレも行くんでね。関係者に聞いたら、ピンタでいくらとか、凄く細かいんですよね。そういうところに感じますよね〜。オレね、舞台やるときでも、「このとき、猪木さん

ならどうしただろう」とか考えちゃ　すね。

ますしね。腹立つぐらいスキがない　すよね。

った！」と思うんですよね。名言も

たけしさん自体が黒船みたいなもの。あの地位で〝TENGA〟の話をされたらもう勝てませんよ！

ならどうしただろう」とか考えちゃうんですよね。「だから、前田さんから人が離れたのか！」とか。

——常に猪木、前田がお手本。

三又　『お～い！　竜馬』でも、照明さんとかから全部入れると50人ぐらいになるんですよ。一応オレ、50人を率いてるんですよね。だから猪木、前田っていうのはいつも頭にありますね。ＵＷＦ解散についても、宮戸優光さんに取材したりね。

——宮戸さんにですか？

三又　ご一緒したときに宮戸さんが機嫌よかったから、「ＵＷＦってなんで解散したんですか？」って聞いてみたんですよ。そしたら答えが凄くシンプルで。

——なんですか？

三又　「食事です」っていうんですよ。最初はみんなでちゃんこを囲んでたから和があったけど、だんだんみんな忙しくなって、ポルシェで道場に来て勝手にやるようになったら、なんだか違うようになったって。だから言われました。「これから若い衆が増えるだろうけど、食事はちゃんと一緒にしたほうがいいですよ」って。

——なるほどぉ～。いい話だ。

三又　凄くシンプルで驚きましたよ。でも、「いまになったら前田さんの気持ちもわかるけど」とも言ってましたけどね。それを聞いてなるべく実践するようにもしてるんですけど、たまに前田日明も見え隠れしますね。

——「解散だ！」って言い放っちゃうような（笑）。いろんな意味で猪木、前田が竜馬像の下敷きになってるわけですね。

三又　そうですね、その意味ではビートたけしより参考になりますね。

——たけしさんは近すぎるんですか？

三又　いや、デカすぎるんですよ。スキがないんです、凄く。だから資料にならないんですよ。近くにいればいるほど、参考にならない。

——弱いところを見せない？

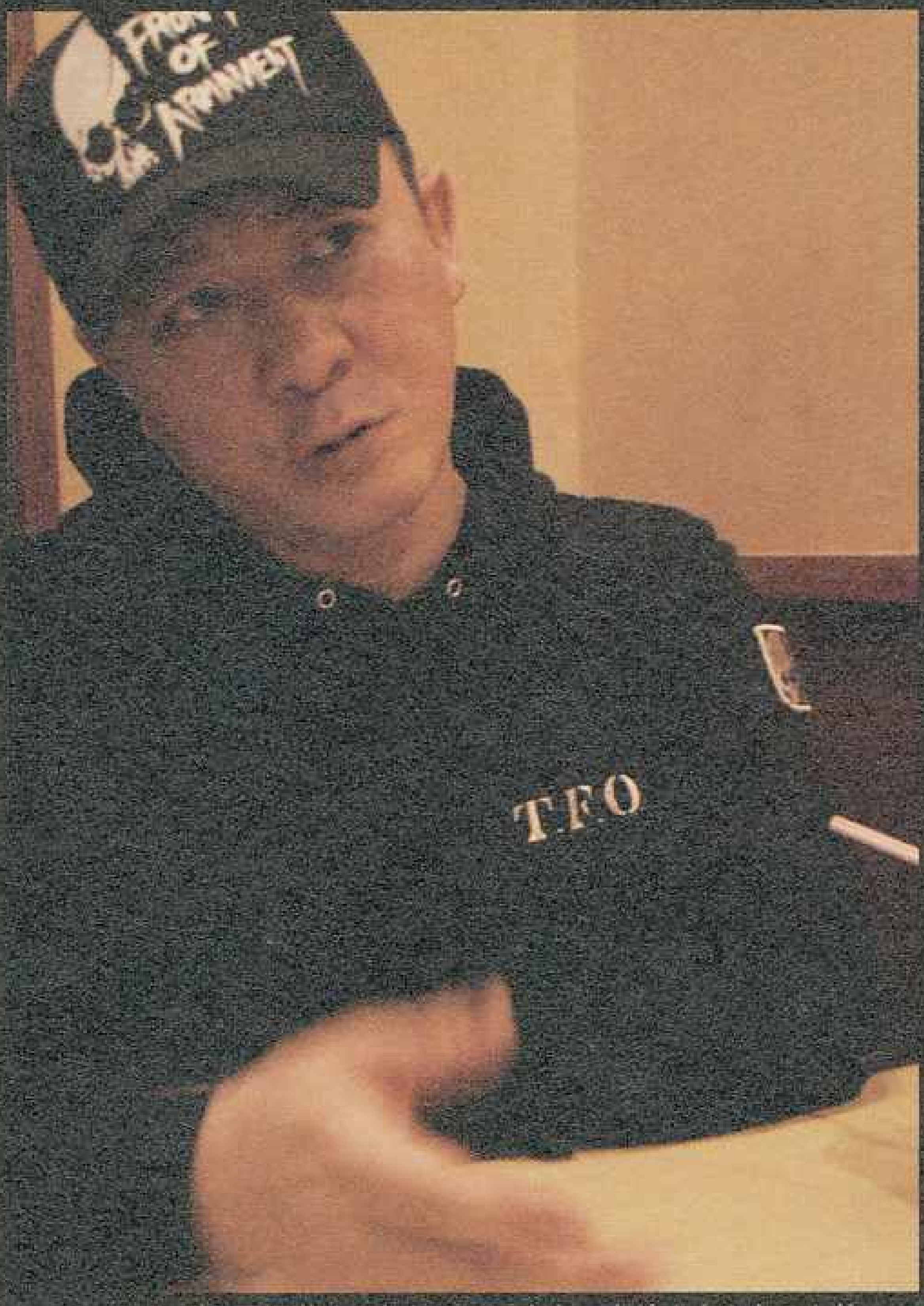
三又　見せないですね。それにどんなシチュエーションでもすぐに染まってみせるし。若手を集めたら、同じ目線でものを言って騒いだりもしますしね。腹立つぐらいスキがないんですよ。

——それに比べたら、確かに猪木・前田はスキだらけかもしれない（笑）。

三又　あんなにうまくやってた新聞さんとケンカ別れしたりとかね。舞台やってても、「こいつは新聞になりそうだ」とか思っちゃいますから。

——それは油断できない（笑）。

三又　それに比べると、たけしさんはホント計り知れないですよ。何をやるにしても規格外なんですよね。でもそういう人の下にいると、気持ちが落ちないっていうのはありますね。師匠の仕事がうまくいってなかったら、負のオーラをもらったりするじゃないですか。それがないんですよね。



三又又三

みまた・またぞう■旧芸名&本名は三又忠久。山崎まさやとのお笑いコンビ、ジョーダンズを結成し、武田鉄矢のモノマネで人気を博す。2005年からは舞台『お～い！ 竜馬』を主演・企画プロデュース。劇団『マッチョドラゴン』も旗揚げした。2007年にジョーダンズを解散し、芸名を三又又三とする。現在『人志松本のすべらない話』などでも活躍中。

——常に上にいてくれる、と。

三又　たとえばこの前も、フランスで賞をもらって帰ってきたじゃないですか。海外に行くたびに大きくなって帰ってきますよね。それで第一声、どんなことを聞かせてくれるんだろうと思ったら、眉間にしわを寄せて、小声で話し始めるんですよ。

——ドキドキしますね（笑）。

三又　「水道橋（博士）からもらったＴＥＮＧＡが忘れられなくてよぉ、日本に帰ってきたら〝ホットＴＥＮＧＡ〟ってあるんだよ！」って。オレ、ホットＴＥＮＧＡって知らなかったんですよ。

——普通知らないと思います（笑）。

三又　「なんすか？」って聞いたら、「知らねえのかよ、お湯に入れて温めるんだよ！　それで、10分ぐらいしたら人肌になるんだけど、早くやりすぎて熱すぎて、オレいま、亀頭ヤケドしてるんだよ。オロナインとＴＥＮＧＡ買ってきてくれ」って。そこでもＴＥＮＧＡかよ！　ってね。

——強烈すぎますね！

三又　凄いじゃないですか、なんだよこの人！　って。太刀打ちできないですよ！

——ある意味、ずーっと黒船と一緒にいるようなもんですね！

三又　しかも、その黒船がどんどん大きくなってくわけですから。偉くなればなるほど、ＴＥＮＧＡの話されたら、芸人としては勝てませんよ！　女の自慢されるのとはワケが違いますから。

——確かに（笑）。

三又　そういうときに、「弟子でよかった！」と思うんですよね。名言もたくさんありますから。「ＴＥＮＧＡは慰謝料を取らない」とか。ホント、オレと会うとＴＥＮＧＡの話しかしないですよ。

——なぜだ（笑）。じゃあ三又さんのなかではたけしさんが黒船で、竜馬は猪木、前田と。

三又　オレのなかで竜馬はもう一人いて、シュートボクシングのシーザー武志会長ですね。もう15年ぐらい親しくさせていただいてるんですけど、会長からは『お～い！　竜馬』の舞台を立ち上げるときに、興行について凄く教えてもらいましたから。

——ちょっと思ったんですが、三又さん、シーザー会長に顔が似てませんか？

三又　言われるんですよ！　『シーザー魂』って番組をご一緒させていただいてたんですけど、すっごい「似てる」って言われて。でも、悔しいかな、そう言われるのがうれしい自分がいるんですよ。

——3人の竜馬のうち、風貌はシーザー竜馬と化している、と（笑）。いい締めをありがとうございました！

【10年5月10日／都内・某所にて収録】

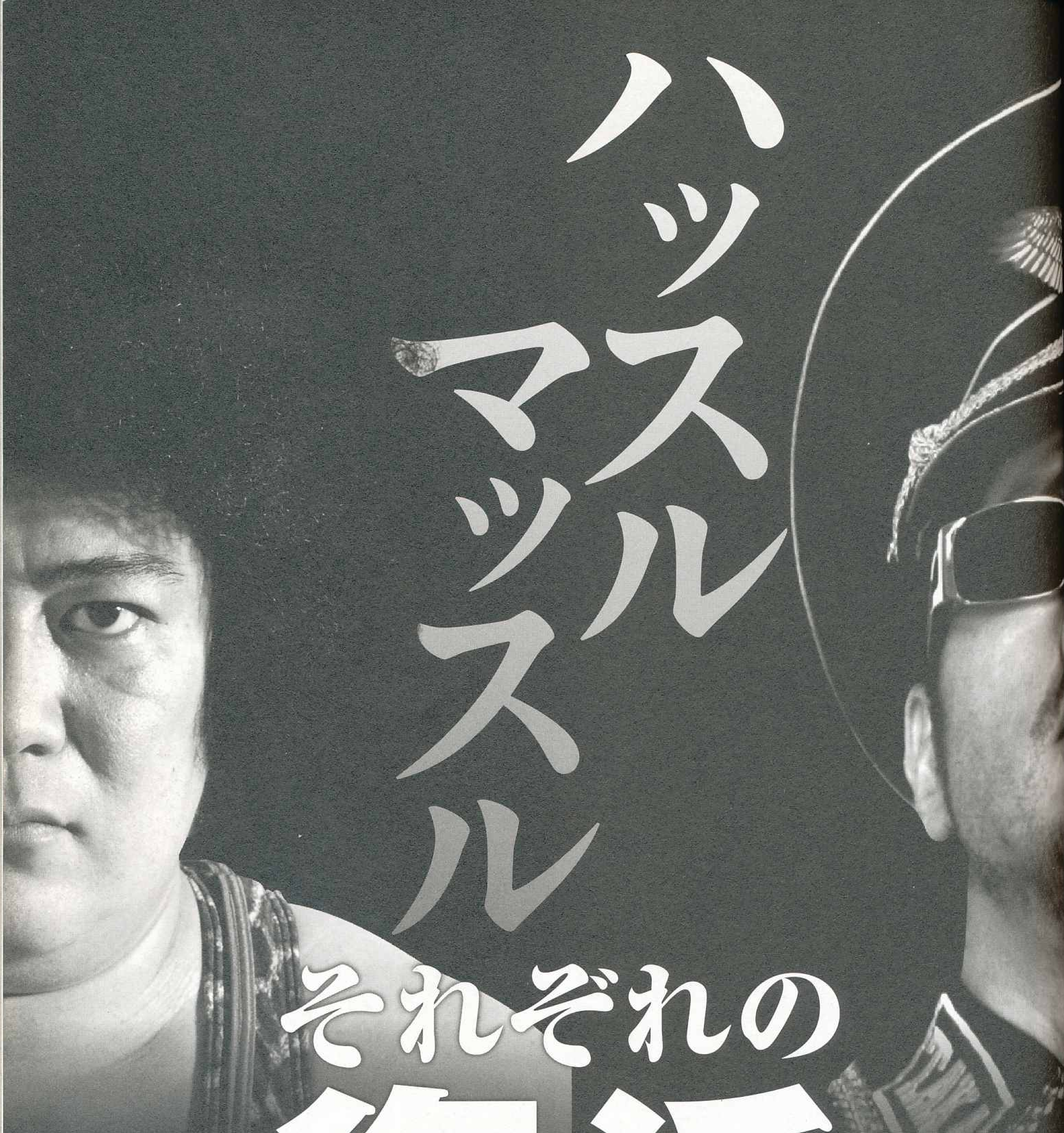
「三又又三の三又会」
毎月開催中！

『三又又三の三又会 Vol.5』
東京・六本木スプラッシュ
5月23日（日）開場18:30 開始19:00

出演
三又又三、ほたるゲンジ ほか

料金
［前売り］2,000円
［当日］2,300円（全席自由）
※1ドリンク制（別途500円）

問い合わせ
オフィス北野 TEL.03-3588-8135



ハッスル マッスル それぞれの復活

ミスター高橋本以降のプロレス界に、多大な影響を与えたプロレス団体『ハッスル』と『マッスル』が
時を同じくして"復活"を遂げた!! 事実上の活動停止を余儀なくされた理由はそれぞれだが、
なぜ彼らは鳴りを潜め、ここにきて姿を現わしたのか——? え? 『ハッスル』は負債問題だろって?
まあまあ、そうなんだけど、とりあえず読むでござる。

HUSTLE 4.30 後楽園ホール

どん底からの出直し! 坂田と山口日昇はリングで何を見せたのか?



4月30日、再スタートとなった『坂田〝ハッスル〟亘～審判の日～』が後楽園ホールで行なわれ、1322人の観衆を集めた。

ハッスルエンターテインメント代表・山口日昇の動静が注目されたメインイベントでは、なんと山口代表が柔道着に裸足で登場。パートナーの坂田亘とともに、黒の中村カントク率いる、Bustle(罰ッスル)軍と相対した。しかし、なんとBustle軍は、セミに登場したLOCO&MOCOを含め、4人の外国人レスラーが登場。さらに黒の中村カントクがレフェリーを務めるという異常事態に。

試合も、実質的に坂田が1vs4となる構図で進み、山口代表が「亘!」とタッチやカットをしようとしても、坂田は「入るな!」と取り合わない。だが、中盤、坂田が外国人3人がかりのパワーボムでグロッキー状態となると、ついに山口代表が登場。張り手、チョップで攻撃も、逆に外人勢、さらには中村カントクのチョップ攻撃まで食らい、場外に落ちて憤死。最後はジョーメガロドンの罰ッスルボムに坂田が敗れた。

罰ッスル軍が、かたちは同じながら通常のハッスルポーズより一回多い、「バッスルバッスルバッスル」ポーズで喜びを示すなか、山口代表はセコンドに抱えられ、一部からの罵声を浴びながら退場した。

すると、大谷晋二郎が現れ、坂田にマイクで、「いつまでも寝てんじゃねーよ! 本当に強い男ってのは、何度も立ち上がる男を言うんだ!」と坂田を激励。立ち上がった坂田は涙声で、「俺が死んでねえってことは、ハッスルも死んでねえ。俺は一生ハッスルし続ける!」と絶叫。最後は元祖ハッスルポーズで大会を締めた。

試合後の会見でも坂田は号泣。ハッスル再出発第2弾興行が、ちょうど1ヵ月後の5月30日(日)、同じ後楽園ホールで行なわれることについては、「〝仮押さえでいい〟って言ったのに、バカな山口が押さえちゃって……」と苦笑いした坂田だが、山口代表については、「今後リングに上げることはない」と涙のなかでもエースの責任をキッパリ。「骨が折れてると言われて……」と右腕を三角巾で吊りながら現われた山口代表も、「覚悟はしていましたが、全然歯が立ちませんでした」と寂しそうに語ったものの、「一歩一歩進んでいきたい」と、今後は裏方に徹底する熱意を示し、関係者からは拍手が送られていた。

メイン前には先頃WWEを退団した、FUNAKIも登場。ハッスルに対して「できるかぎり応援していきたい」と心強いアピール。また、セミに登場した越中には「ケツ親父」コールが起こり、大谷には、「あちち!」のかけ声、また第2ハッスルに登場した℃軍団にはおなじみの「シー!」ポーズで同調するファンも多く見られた。

なお、坂田亘扮するナットーマンが注目された第1ハッスルは、助っ人として、ザ・グレート・サスケにウリ二つの、ナットーマン・ザ・グレートが現われて代役を務めることに。ボタンを操作するごとに、ロボット→レスラーとその動きのテイストが変わるロボットマンに苦戦したが、最後はサスケのおなじみ、ラム・ジャムで、グレートが完勝した。

超満員札止めに膨れ上がった後楽

とから逃げていた」と反省のポーズ。

で何が起こったのか?



「俺が死んでねえってことは、ハッス

完勝した。

5.4 後楽園ホール **MUSCLE**

日本武道館出陣を再び宣言! マッスル再始動に進化を見た

超満員札止めに膨れ上がった後楽園。まずは司会の鶴見亜門（アシスタントは、みなみ飛香）が「（テレビばっかり観ていた坂井が）この1年間、考えに考え抜いた結果がこれだった」という『リング・オブ・コント2010決勝大会』という形式をアナウンス。

8人の選手が各自試合をプロデュース、『キング・オブ・コント』や『M—1』のような高得点勝ち残り戦で行なわれるこの大会、優勝賞金は「この業界では珍しく実のある」（？）という10万円。サムライTVでは、1時間の特集番組が流れるという特典つきだ。

さまざまなネタ（試合）が提供されたあとメインに登場したのはマッスル坂井（&アントーニオ本多）。なぜか興行中、学童保育の小学生たちの面倒を見させられていたという二人は、すっかり仲良くなった子どもたち20人を引き連れてリングイン。

この子どもたちを「一瞬でも飽きさせたら、即追放」という〝子ども参観選手権試合〟をやるハメになった二人は、徹底的に子ども目線の試合を展開！　子どもに媚びた勧善懲悪的な試合を展開しようともくろむ。最後は、坂井が〝にくえもん〟という青塗りのドラえもん風キャラで登場し、六角レンチを手に反則大暴走！

子どもたちを唖然とさせた坂井だが、本人はなぜか「してやったり」の表情！　しかし場内は微妙な空気に……。ここで高木社長が、「こんなもん子どもに見せるんじゃねーよ！」「もっとちゃんとやれよ！」と大説教。坂井も「自分、間違ってました。お酒やギャンブルや『ハッスル』とかばっかりやって（場内大爆笑）……大事なことから逃げていた」と反省のポーズ。

この時点でかなりのロング興行になっていたものの「俺が後楽園の延長料金を出す！」と男を見せた大社長と一騎打ち……と思いきや、なんと坂井は〝浜口道場の先輩〟大谷を指名！

今度こそ、大谷におもいっきり殴られ、蹴られながら真剣にプロレスに取り組む坂井に、子どもたちも身を乗り出して真剣に応援！　今年1月の『アメトーーク！』大谷特集（学校訪問）の意趣返しのような展開になって、場内の声援もおおいに集めた坂井。しかし最後は、二度のフルネルソンスープレックスで轟沈！

マイクを握った大谷は「お笑いもおちゃらけもあっていいが、みんなおまえの立ち上がる姿を観に来ているんだ！」と説教！　さらにプロレスの教科書222ページとして「でっかい壁にぶつかったときは、乗り越えようとしなくていい！　ただ！　その壁から逃げるな！　ずっと逃げなければ！　いつか必ず乗り越えられる！」というシビれる名言を披露！

ここでエンディング……と思いきや、表彰式では賞金10万円の封筒を控室で泥棒しようとしたマミーをツルティモ・ドラゴン会長が捕獲！　という時事ネタで大オチとなった。

最後は「近い将来、日本武道館公演をお見せします！」と進軍ラッパを鳴らしたマッスル坂井。迷走が続いていた『マッスル』の再出発にふさわしい、アイデア満載の濃密なロング興行となったが、最後まで破綻なく大団円をまっとうしたその姿に、クリエイターとしての〝進化〟を印象づけた大会となった。

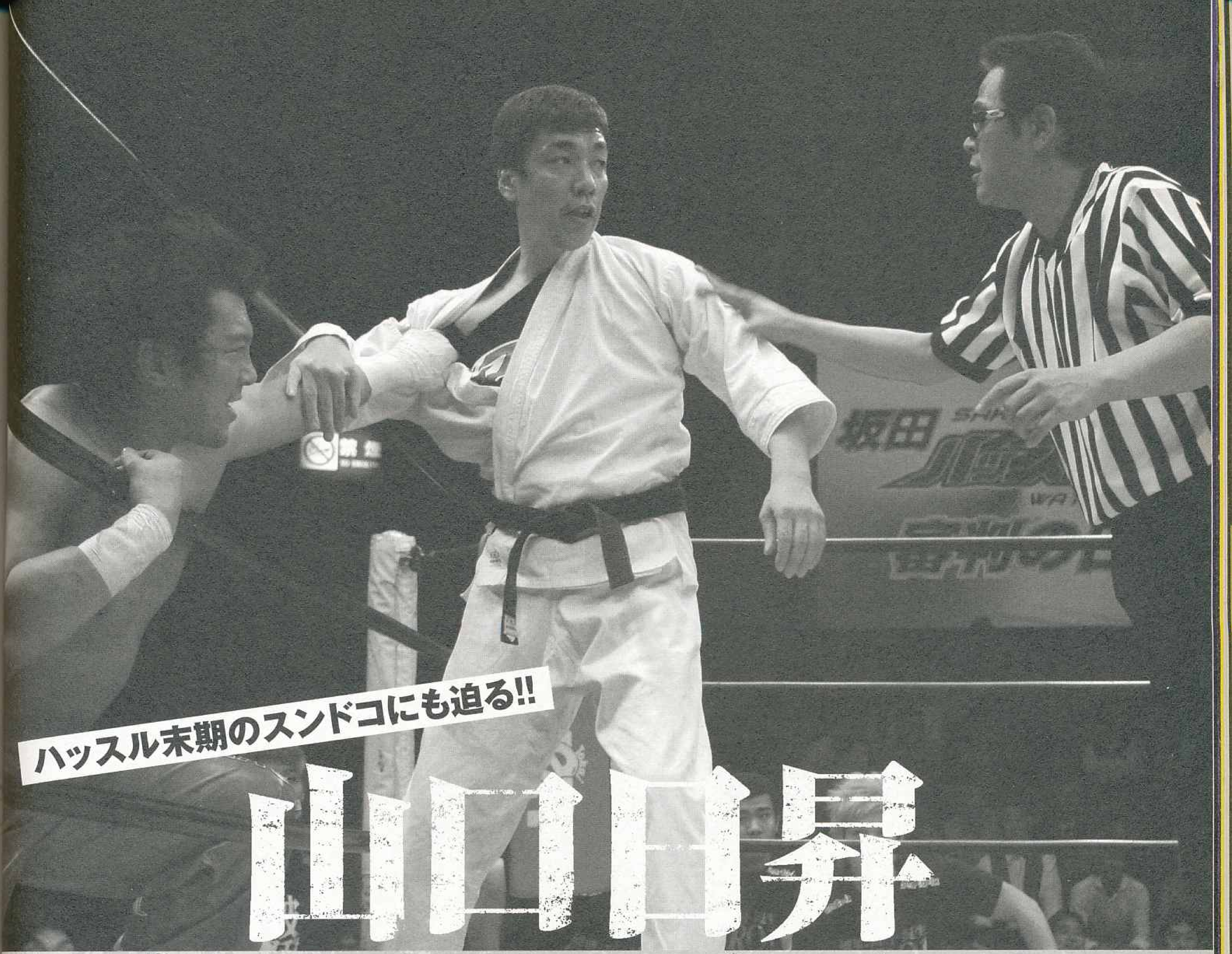
それぞれの再出発で何

――今日は中村さんにいろいろと聞きた

中村　でも、僕はべつに本当に試合させ

プを打った衝撃で自分の右腕がねじれ

――目にバーニングスピリットが宿って



ハッスル末期のスンドコにも迫る!!

山口日昇 プロレスデビュー顛末記



ハッスルを救った男 中村祥之

『ハッスル』旗揚げ時からパートナーシップを結んでいたZERO1。2008年にその協力関係は解消されたが、『ハッスル』再出発となった今回のイベントでは、ZERO1側の強力なバックアップが確認された。いったい裏側で何が起きたのか？山口日昇のプロレスデビューの経緯を知る中村氏に話をうかがった。罰ッスル、罰ッスル!!

聞き手／坂井ノブ　試合写真／平工幸雄

山口日昇氏がリングに上がった瞬間の顔はアントニオ猪木の形相だった（笑）

――今日は中村さんにいろいろと聞きたいと思ってます。

中村　いろいろって？

――まあ、山口日昇さんの話がメインになるんですが（笑）。『ハッスル』と一度は袂を分かった中村さんがなぜ山口さんに手を差し伸べたのか？　なぜ山口さんがプロレスデビューをすることになったのか？　とか。デビューの話はホントに急な発表でしたよね。

中村　今回のイベント、いろんなアイデアは出たんだけど。いろんな案は出た、たくさん。だけど、よくよく考えたら審判されるのは坂田亘だけじゃないんじゃないか？　と。

――そうですよね。むしろ坂田さんは審判されるいわれはあんまりなかったりする。

中村　そうそうそう。たとえば坂田亘は「ハッスル被害者の会」の会長になってもいいぐらい。で、山口さんっていまでも急に連絡が取れなくなったりするんですよ。のんきにタケノコ掘りに行ってたり（笑）。

――ワハハハハ！

中村　「アンタ何をやってるんだ⁉」というね。みんなそれで緊張の糸がプツリと一瞬切れたんです。

――タケノコで（笑）。

中村　タケノコで！　それで怒りが山口さんに向かっちゃったんですよ。もう「試合させよう！」と。で、本人に聞いたら「まかせますよ」と。ホントは嫌がってたんだけど。

――ボクは絶対にやらないだろうなって思ってたんですけどね。性格的にもさらし者になるのを一番嫌がるじゃないですか。

中村　でも、僕はべつに本当に試合させようと思って発表したんじゃなくて、山口さんに責任を持ってほしいなっていう。『ハッスル』を再構築するうえで「逃げも隠れもするな！」と。吐いた唾を飲み込むなよという話じゃないけど、ある種の保険をかけたんです。で、山口さん本人はホントに「ヤダ、ヤダ」と言いながら、だんだん自分が闘わなきゃいけないんじゃないかという気持ちになってきたんでしょ。

――結末から言っちゃうと、山口さんは試合で右腕を骨折しちゃいましたよね。

中村　外国人の胸板をチョップしたらスパイラル骨折しちゃった（笑）。チョップを打った衝撃で自分の右腕がねじれて割れたというかたちですね。



中村氏のケータイで激写された試合直後の山口さん。沈痛なるサスケの佇まいはまるで映画のワンシーンだ。サスケ最高!

――ねじれて割れた‼　それって普通の骨折よりも治すのに時間がかかるんじゃないですか？

中村　そうですねぇ。すぐに骨折した腕を引っぱって固定すればよかったんだけど、ところがあの人は病院にも行かず、1時間以上も放置してたから（笑）。

――あ、応急処置をせずに。

中村　折れてから2時間経ってようやく病院に行って。だからその頃には「時すでに遅し」だったし、いまは入院してズレた骨を牽引してんですよ。1週間かけて引っぱらないといけない。それからようやく手術。

――うわぁ～。

中村　でも、試合は素晴らしかったですけどね。山口日昇氏はね、リングに上がった瞬間の顔がアントニオ猪木の形相だった（笑）。

――アハハハハハハハ！　そういえば、試合はケンカ腰でしたね。

中村　そう！　この数ヵ月、山口さんにはいろんな問題があったわけでしょ。全部自業自得なんだけどさ（笑）。たとえば債権者の問題もあり、『ハッスル』のスタッフもみんないなくなり、ボロボロの状態で落ち込んでたテンションをここまで上げて、いざ自分がホントにリングに立たなければならなくなった。人間って追い詰められて怒ったら、ホントにこういう顔になるんだなって（笑）。

――目にバーニングスピリットが宿ってしまうものなんですね。

中村　山口さんのパンチやキックってさ、ホントにプロレスラーが入れてるような音がしたんですよ。「ペチン、ペチン！」じゃなくて「ボスン、ボスン‼」と。で、顔見たらもう、なんかすっごい怒った顔してて。レフェリーをしているこっちが「ウルッ」とくるくらい。

――黒の中村カントクも、サングラスの下では涙を隠していたという（笑）。

中村　まずね、オープニングの挨拶で、山口さんが四方向に「すいませんでした！」と頭を下げたじゃない。でも、あの人は他人に謝んないじゃない。

――何があっても謝らないですね。まあ、謝る表情もこわばってましたけど。

中村　ね。謝らないじゃない。謝らないといけないシチュエーションになると、消えたりするじゃない。

――それで周りの人間が謝るしかないんですけど（笑）。

中村　山口日昇という人間を知ってから約10年弱。今回、初めて他人に謝っている姿を見たんですよ（笑）。そのときにじつは僕はうるっときてたんですよ、すでに。

――もうちょっと前に謝っておけば、こんなことにはなってなかったんですけどねぇ……。

中村　そうそうそう。逃げないでやっておけばさ、ここまでひどい状況にはならないじゃないですか。ただね、そういう

思いが重なって、いざ試合になって、この人は何かを越えようとしてる、と。20数年間このプロレスのリング関係の仕事に携わってて、初めてシロウトがプロレスラーに本気で殴りかかった姿を見ました。言葉は悪いけどね。

――いままでフロントがデビューするというパターンはいくつかあったじゃないですか。新間寿さん、武井（正智）さん、荒井（昌一）さん、上井（文彦）さん……。そのどれとも違いましたね。

中村　どれとも違う！　で、試合が終わったあとに「山口さん、本気でしたね」みたいなメールを送ったら、「たとえば経済面や会社のこと、今後越えなきゃいけないものがたくさん自分にはある。で、リングで外国人に囲まれたときに、その壁と外国人がクロスして、俺はこの壁を越えなきゃいけないんだと思った」らしいですよ。

――それは本人いわく？（笑）。

中村　今後いろんな越えなきゃいけないものがあって、それと外国人の壁がクロスしちゃったって。だから、この壁を打ち崩していかなかったら、俺には先がないんだってことですよね。結局は跳ね返されたけど（笑）。

――現実でも跳ね返されてるわけですもんね。しかも骨まで折っちゃって。

中村　いろんなことがあったと思うんだよ。業界の中にも山口日昇は許さないと思ってる人はたくさんいると思うんだけど、俺はあの人のことが心底憎めない。ただ、僕の場合はね、ほかの人とは違って、未払金がウン千万とかの被害じゃない。だいたい数百万円……。

――それでも数百万（笑）。



『ハッスル』開催発表記者会見。出席者は小川直也、橋本真也、榊原信行、中村氏。この時点でイベント制作に関与していた高田延彦を含めて、最終興行となっていた昨年10月の『ハッスル・ジハード』には誰も携わることはなかった。

山口さんはけっこういい車に乗ったり いい時計をしたりしてるじゃないですか

中村　そのレベルであって。だけど、なんかあの人自体もうまく担がれた気もするんですよ、『ハッスル』というブランドに。

――ハッスルエンターテイメント（以下HE）立ち上げのときの話ですか？

中村　『ハッスル』ってもともとはドリームステージエンターテインメント（以下DSE）から始まったじゃないですか。で、あるときにHEとして船出をした。ただし、そのときにはDSEからスポンサーを受け継いだかたちでスタートしてるじゃないですか。つまり、ある程度、お金がある状態でスタートしたんです。で、山口さんはけっこういい車に乗ったり、いい時計をしたりしてるじゃないですか。

――いまでもベンツに乗ってますからね。リースですけど。

中村　それを選手が見たら「あっ、この人は金を持ってるな」と思うじゃないですか。いまのプロレス界って団体が選手のスポンサーなんですよ。

――団体が選手のスポンサー？

中村　たとえばスポンサーというのはなかなか集められる時代じゃないじゃないですか。で、選手は団体がスポンサーなんですよ。

――要するにその団体に定期的に声をかけられるようにする、と。

中村　だから山口さんは頼られちゃった、選手にみんなに。『ハッスル』にお金のニオイがしたんでしょうね。

――まぁ、本人がおもいきりお金のニオイをさせてましたもんねぇ。

中村　そう。で、僕らが『ハッスル』を離れたのが2008年らしいんですよ。そのあとも、もしかしたら手伝いに呼ばれてちょこっと顔を出したのかな。そのときは僕だけ仲間はずれみたいな雰囲気。わかります？

――わかります（笑）。そこでうかがっておきたいのは、どうしてZERO1さんは『ハッスル』から離れたのかということなんですけど。

中村　離れた理由？　それまでね、切磋琢磨しながらも、『ハッスル1』からやってきたんですよ。たとえば、『ハッスル』のスポンサーにパチンコメーカーの京楽さんがついてたじゃないですか。

――京楽の黒歴史になってますけど。

中村　京楽さんと話をつけたのは榊原（信行）さんでしょうけど、突破口を作ったのは僕なんですよ。

――あっ、そうなんですか。

中村　そういうこともあったりしたんだけど、あるとき「カントクさ、2年ぐらいZERO1にもある程度のお金払ってきたし。周りからなんでZERO1にそんなお金払わなきゃいけないんだという声も上がってる」と言われてね。でも、天龍さんや川田さん一人以下のお金だからね。で、一度契約の見直しをしましょうということで話し合いに行ったんだけど、島田（裕二）にいろいろと言われてカチーンときて。

――あ、山口さんじゃなくてあの島田さんに（笑）。

中村　うん。「バカにしてんのかな」と思って。提示額も前年度比からいうと、約3分の1ぐらい。

――3分の1マイナスじゃなくて、3分の1に？

中村　そう。60パーセント減くらい。俺たちもこれだけ一生懸命やってきて、自分たちの興行日程もずらしてきたのに

これは受けれないなって、正直。ある意味『ハッスル』からしたら、ZERO1の選手の名前を売ってやってんじゃんみたいな雰囲気もあるわけ。それに当時の『ハッスル』をパッと見渡したら、TAJIRIくんも入ってきた頃だし、川田さんはレギュラー参戦してるし、天龍さんもいる。HGやRGもいる。

――横綱（曙）もいて。

中村 で、そんときの『ハッスル』って初期の頃と違って、いろんな選手が『ハッスル』に出たがってたんだよね、『ハッスル』のお金を求めてね。だから、ZERO1なんていなくたってやれるよ、と。「山口さん、ZERO1なんか、気遣わなくていいですよ～」って（笑）。

――凄く言ってそう（笑）。

中村 いいも悪いもなくそれは彼たちの生き方だからいいけどさ。で、大谷晋二郎に相談したんです。「いいですよ。もう『ハッスル』はやめましょう」「いいっすか？　経営的にしんどくなりますよ」「もっと頑張ればいいじゃないですか！」って。大谷晋二郎はね、そう言ってくれたんです。でも、ほかの選手からしたら不安じゃないですか。それで崔領二が『ハッスル』に移籍するとかしないとかいう噂も流れて。でも、大谷は「中村さん、行っちゃったら行っちゃったでしょうがないし。そんな噂はウソかもしれないし」って。それで僕、クレームをつけたことあるんですよ、山口さんに。「崔を引き抜きしようとしてるじゃないですか？　ありもしない話を振って、選手を惑わすのをやめてください よ」って。

――どういう反応が返ってきました？

中村 「いや、そんな噂になってますか？　たまたま崔くんから『ハッスル』の今後はどうなんですかね？　って話はあったけど」って言ってましたけどね。それも何が本当かわからないから、大谷さんは「もう放置しておきましょう」と。

――あとインリンさんの旦那さんで元



いつの間にか姿を消していたキャラクターは数知れず。まるで赤軍派の“内ゲバ”のように、また一人また一人と選手、関係者が『ハッスル』を去っていっていたのは印象的だった。

元『ハッスル』社員を雇ってるあいだはすんごい意地悪されました。メチャクチャ

『ハッスル』社員の問題も……。

中村 そうそう。ZERO1が彼をスタッフとして雇い入れてることもムカつく、と。その問題がじつは一番大きいんですよ。「ケツの穴の小さいこと言ってんじゃねーよ」って思ったんだけど。

――それまでさんざんプロレス村の体質を批判してきたのに、ケツの穴が小さいですよねぇ。

中村 あのときに「元社員を取るか、『ハッスル』を取るかの選択ですよ」って言われたの。彼を切って、『ハッスル』と取引をするか。だいたいタレントと結婚するったって、『ハッスル』のタレントじゃねぇだろうって。

――まぁ、そうですよね。

中村 結婚するも何も、それは俺たちのせいじゃない。『ハッスル』が管理すべき問題だし、『ハッスル』の責任だよ。でしょ？　それを結局、彼がどこにも行くとこなくなって、かわいそうじゃない。恋愛はともかく、アイツは『ハッスル』のためにやってきたわけだし。そんときに俺、なんか情に流されたっていうんじゃないんだけど、「あぁ、守ってやんなきゃ」と思った。守れなくても守ってやんなきゃって。だからもう『ハッスル』を取るか、彼をクビにするかというときに迷わず、彼を守ることを決断したんですよ。そうしたら向こうもよけいに固くなって、彼を雇ってるあいだは道場とかも貸さないとか、すんごい意地悪されました。メチャクチャ。

――それが結果的にインリン様の引退の引き金みたいなかたちになってますもんね……。それがまた、どうしてこういうかたちでくっついたんですか？

中村 僕もここ1年間ぐらい、プロレス自体には関わってなかったんですけど。去年の夏の『ハッスル』後楽園ホールにふらっと遊びに行ったんですよ。

――HGさんが骨折した大会ですか。

中村 たまたま観に行ったんです。で、観た率直な感想を言うと、ホントに笑えない。何をしてんだかわからない。全然わからない。で、唯一モンスター℃だけが「シー、シー！」やってて、あとは全然何をしたいのかわからない。

――元気があるのはモンスター℃だけでしたか（笑）。

中村 申し訳ないけど、暗い『ハッスル』。暗～い『ハッスル』が展開されてて「あっ、これは時間の問題だな」と。あの当時から酒井（正和）さんという人が関わっていたんでしたっけ？

――当時『ハッスル』最高顧問で、現在は『スマッシュ』の代表をやられている酒井さん。

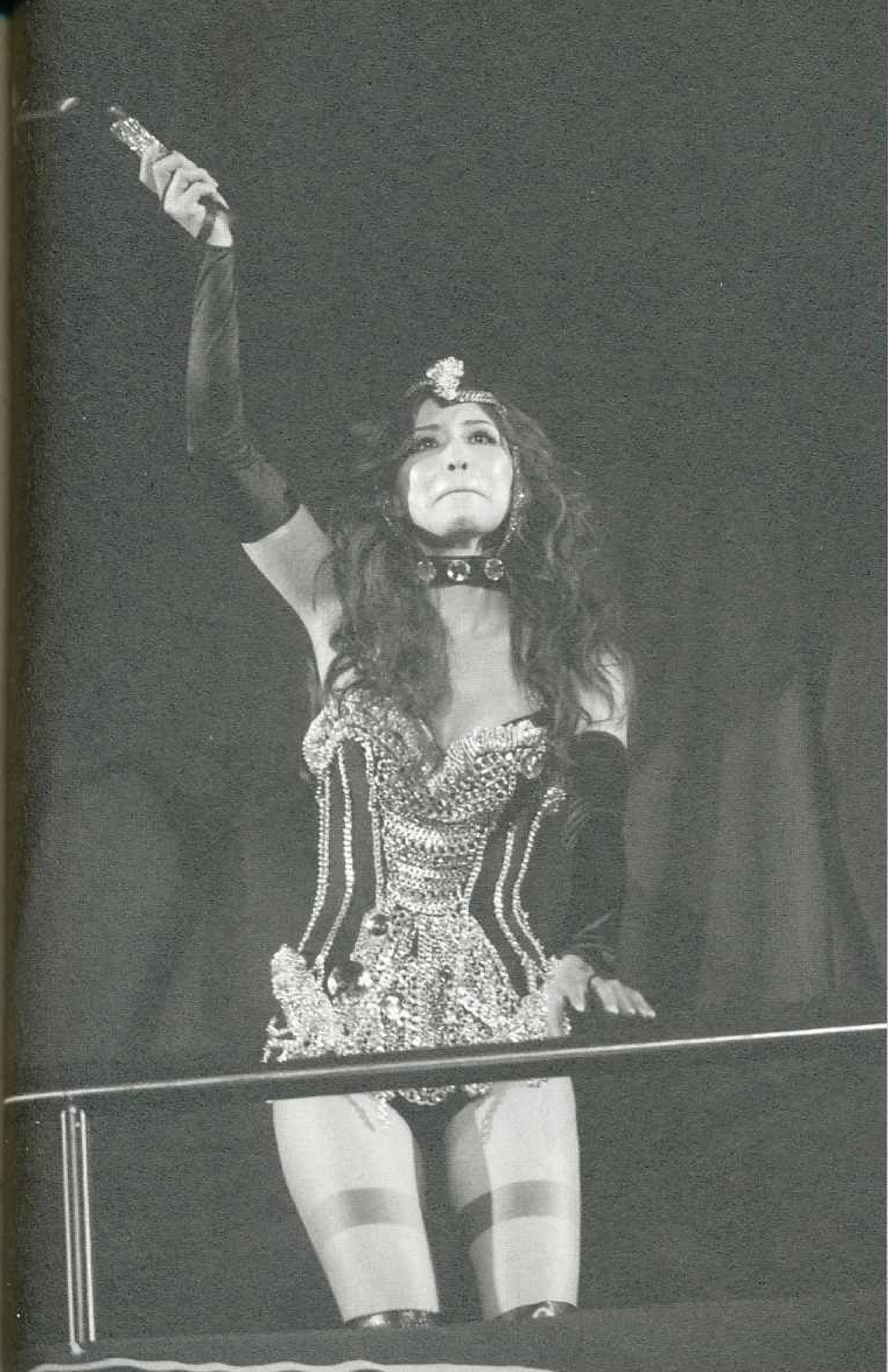
中村 「またいいスポンサー見つかったんだ」ってくらいしか思わなかったけど。でも、『ハッスル・ジハード』の発表をウェブで見たときに「あっ、これは客は入んないよ」って。絶対に入んないって。案の定、まったく入んなかったと思うんですよ。

――両国国技館はガラガラでしたね

中村 ねっ。その数日後にあった、蝶野さんの30周年興行の両国は超満員で。

――あのときは入りきらないぐらいの超満員でしたよ。

中村 あそこまでの不入りの両国をやらかしたのは、誰の責任でもないんだろうけど、それって『ハッスル』に求心力がないってことでしょ。で、その直後に業界中に『ハッスル』が後楽園ホールをキャンセルするんじゃないかっていう話



がドワーって出回ったんです。

――中止を発表したのは大会前日でしたけどね。

中村　発表する前日に、何度も山口さんに電話を入れたんだけど、山口さん出てくんなくて。やっぱりプロレス界で興行事の中止ってよくないんだよね、全体のイメージとして。とくに『ハッスル』みたいな名前があるところは。だから大谷さんに頼んで「ギャラは出ないけど、ウチの選手を出して興行だけは成立させませんか？」って。そうしたら大谷さんが若いヤツ全員に、「コスチューム用意しとけ！」って言ってくれて。

――カッコイイなぁ。

中村　「明日、誰も出てくんなかったら、俺たちができることを後楽園ホールでやろう」と。それこそ大谷、田中将斗、崔領二、佐藤耕平、日高郁人以下が全員コスチュームを用意して。でも、そのときは酒井さんが最高顧問だから、酒井さんがジャッジメントするんだよね。

――そうですね。

中村　決断は「中止」って。それはね、違う業種から来て、貸借対照表を見て、後楽園で赤字ならやめたほうがいいじゃんっていうのが外部の人間の正論ですよ。でも、業界のダメージなんかを酒井さんはわからないでしょ。あんときに山口さんが「カントク、気持ちはうれしいんですけど、いまの僕にはそれを決めれる力もないし、金もないから、もうダメです。とりあえず中止にします」と言ってた。で、中止になった大会当日、リングアナのオッキー沖田が後楽園に行きやがって来場者に頭を下げてるんですよ。

本誌が誌面で『ハッスル』を取り上げなくなったきっかけは、インリン様引退の舞台裏。一番の被害者は"インリン様"を楽しんでいたファンだよ。どいつもこいつもプロレスをナメくさりやがって!

山口さんは「アイツらは、俺がいなかったら、食っていけない」という意識なんですよ

――あ～、そういえば「どうしてオッキーがやってるんだ？」という謎の行動でしたよね（笑）。

中村　でしょ。俺からしたら「おい、オッキーおまえ、まるでウチが関わってるみてーじゃねぇかって。やめてくれよ！」っていう気持ちもありながら……ちょっとうれしかった。アイツ、事後報告なんですよ。「祥之さん、僕たまたま後楽園にいまして」って。たまたま後楽園にいるわけねえだろうって（笑）。

――いやぁ、いい話だ！

中村　で、「山口さんが後楽園ホールの部屋でつめられてる顔を見てたら、とても外に出られるような顔してなかった」と。「最高顧問の人いなかった？」と聞いたら「最高顧問はいませんでした。山口さんは中でつめられて怯えてるし、来てるのはモンスターCと女の子（KGこと朱里）と大原しかいないんですよ。だから僕がこういうふうに頭を下げるんだということを彼らに示しちゃいました」って。

――凄いなあ、オッキーは……。

中村　ただ、俺が残念だったのは、そこにね、『ハッスル』を背負ってた人間がいなかったということ。坂田なり、TAJIRIなり、川田さんと天龍さんは別格なのかもしれないけど、そこでファンにきちんと謝罪をするべき人間がいたわけですよね。山口さんはもう軟禁状態なんだから。酒井さんだって、年末に『ハッスル・エイド』をやるって宣言してるんだよ、リング上で。

――両国国技館のリング上ですよね。

中村　ねっ？　宣言してるじゃない。であれば、そのときに宣言した人間として、やっぱり自分が謝罪するべきだよね。それがこの業界のマナー。決まりごとではないけど、それがマナー。俺だってそうしてきたよ。やっぱり前に出された人間は、それが自主的に出たものであれ、担がれて出たものであれ、責任を負わなければいけない。そういうルール、マナーがある。

――ある種のケジメというか。

中村　で、11月の末に山口さんとやっと会えたんだけど。このまま放置すれば、必ず『ハッスル』からドロップアウトした人間が、ある程度まとまって、団体作りますよって言ったんです。そのときに僕は絶対に島田とTAJIRIくんがそうするだろうなって思ったんです、自分の勘で。でも、山口さんは「KUSHIDAはカナダで一人ハッスルしてるから大丈夫ですよ。朱里もときどき連絡を取ってるから、あの子も大丈夫ですよ」って。……ホントね、「山口さん！甘いっすよ!!」って。

――ダハハハハ！　確かに甘すぎますよね（笑）。

中村　食事している席からも、KUSHIDAくんにメールしたり、朱里に電話して「カントク、こうやって電話もメールもつながるから、若いヤツらは問題ないですよ」って。でも、『kamipro』

からも離れてる人間がいるじゃない。でも、あの人は「アイツらは、俺がいなかったら食っていけない」という意識なんですよ。

――そこはまったく逆なんですけどね。僕らのようなスタッフや選手が辞めたら山口さんが終わってしまう。

中村 で、『ハッスル』をやっていくんだとしたら、たとえば『ハッスル・マニア』はできませんけど、ディファ有明でもいいじゃない。空いてる平日でもいいから。たとえば新木場（1stリング）でもいいって。やることが大事であって、このまま若手をほっといても俺のところに戻ってくるなんて、山口さん、それは甘いって。そうしたら案の定……。

――みんな『スマッシュ』に行っちゃいましたねぇ。

中村 ねっ。それは選手からしたら、あたりまえなんですよ。

――マジメな話、いつ試合が組まれるかわからない『ハッスル』に残ったところで、メシは食えないですもんね。

中村 それにお金がない山口さんのところにいたって、しょうがないじゃないですか（笑）。

――末期はビラ配りに行くスタッフの交通費すら出なかったわけですからね。

中村 いままで情だけで何ヵ月間か我慢してきたけど、骨だけの傘の下にいられないじゃないですか。だけど、『スマッシュ』のほうは傘があるわけでしょ。でも、山口さんは「いや、大丈夫。朱里は残る。大原は行かない。KUSHIDAも行かない。みんなが俺のことを信頼してて、島田、酒井さん、TAJIRIのほうには行かない」と。どういう根拠で言ってるのかなって（笑）。

――いま思えば、強がりなんですかね？

中村 違う。ナチュラルにホントに思ってる。「いやぁ、プロレス業界がこんなんだとは、この歳でわかりましたよ」とか言うんですから。

――何をいまさら言ってるんだろう……。

中村 めでたい人なんですよ。で、坂田は動く気がしなかったんですよ。坂田が『ハッスル』に賭けたいっていう気持ちも聞いたことがあるから。ましてや、TAJIRIクンがプロデュースする側にいるとするならば、坂田はその触覚に引っかからないだろうな、と。で、今度は道場の問題が出てきたんですよ。

――家賃滞納の問題ですか。

中村 もともとはZERO1が借りていた道場で、そのあとPRIDE道場になり、『ハッスル』道場になり。そこは僕らの知り合いのところなんですよね。で、家賃滞納。結局、紹介者はファースト・オン・ステージじゃんって話になって。

――話が転がり込んできちゃったんですか（笑）。

中村 山口さんや島田に連絡する。島田なんかは「俺はもう知らない」って言うんですよ。「俺もう、『ハッスル』辞めたから」って。「山口さん、どうしますか？」って聞いたら、「う～ん、ジェット（山笠ジェット信介）やれよ！」って。

――「やれよ」って、何をやるんですか？

中村 引っ越し。

――「ジェットやれよ！」じゃないですよ！（笑）。

中村 僕らの縁があって借りてた場所だから、僕らも相手先に迷惑をかけれない。だから、選手総出で片づけて。そのとき過去に『ハッスル』に出た選手、関係者は誰一人助けてくれなかった。

――誰も手伝いに来なかった、と。

中村 来ない。だ～れも来なかった。もぬけの殻というか、コスチュームとかもみんなリングの上に散乱してた。それはそれはもう、汚いの度を越えて、腐ったような。

――腐ったような……。

中村 夜逃げしたような状態ってわかります？ あんな状態。それでもオッキーが、うちの若いヤツ使って、夜に道場に行っては、少しずつ荷物を整理して。オ

『ハッスル』道場引っ越しより凄い!?

これがkamipro編集部の壮絶引っ越し劇場だ!



1月末。諸事情により引っ越さなければいけなくなった本誌編集部。リミット1ヵ月を切った段階で"株式会社ダブルクロスとしては引っ越し先を用意できない"ため、編集部員の奔走により居候先を確保!



居候先に持ち込むものは編集部員の私物と試合写真等のみ。あとは豪快に捨てることに。『週プロ』や『ゴング』のバックナンバー、ダブルクロス20年にも及ぶ資料はゴミに。それにしても無駄に広い事務所!



撤去作業は10時間にも及んだ。ありがとうダブルクロス、さようならダブルクロス!（まだ会社自体は存在するけど）。現在社員は別の編集プロダクションにて本誌制作に携わっております。



引っ越し作業の1週間前、「山口さんの荷物はどうします?」「自宅に持っていく」という確認を取っていたので山口日昇さんの荷物は完全放置。後日談によれば、結局は処分したらしいので、だったら一緒に廃棄すればよかったのに……。

ツキーは、「山口さんがあんだけいま苦しんでるから、僕がやります」って言って全部やった。山口さんも当然、手伝いに来れない。あんな人だから。

――やっぱり来ないんだ（笑）。しかし、そんな最低の人間をよく助けましたね。

中村 これはね、僕の悪いところでもあるんですよ。諸先輩方からよく怒られるんですけど、経営者として困ってる人を見ると放っておけないんですね。「見て見ぬふりは加害者と同じ」っていう言葉が僕の気持ちのなかにあって。ある人から言われた言葉なんですけど。俺もイヤなんですよ。汚れたものに触るの。

――ここまで触っておいて（笑）。

中村 でもね、そういう信頼関係がある人間が、山口さんには誰もいないんですよ。

――誰一人としていないですね。

中村 いない！

――なんでいないと思います？ 山口日昇には。

中村 おかしいですもん。おかしい。おかしいですもん、ホントに。でも、山口さんの……見ちゃってたからな。

――見た？

中村 なるべくそういうビジネスをするときって、家庭だなんだっていうのは、絶対に見ないようにしてるから。見たらもう、止まらなくなっちゃうから。山口さんに電話をすると、うしろで子どもの声が聞こえるんですよ。で、お金もない、何もない。家も差し押さえられ、いつ追い出されるかわからない。「子どもいくつですか？」って聞いたら「2歳」。自分もお金ないんだけど、かわいそうだなって思っちゃうんですよ、子どもが。山口さんはマグロ漁船に乗ろうとどうでもできるけど、残された人は住む家もなければ……。かわいそうじゃないですか。で、「山口さん、ここは子どものためということで、やんないすか？ そう思ったら、気持ち燃えてこないですか」「それは一番ある！」って。

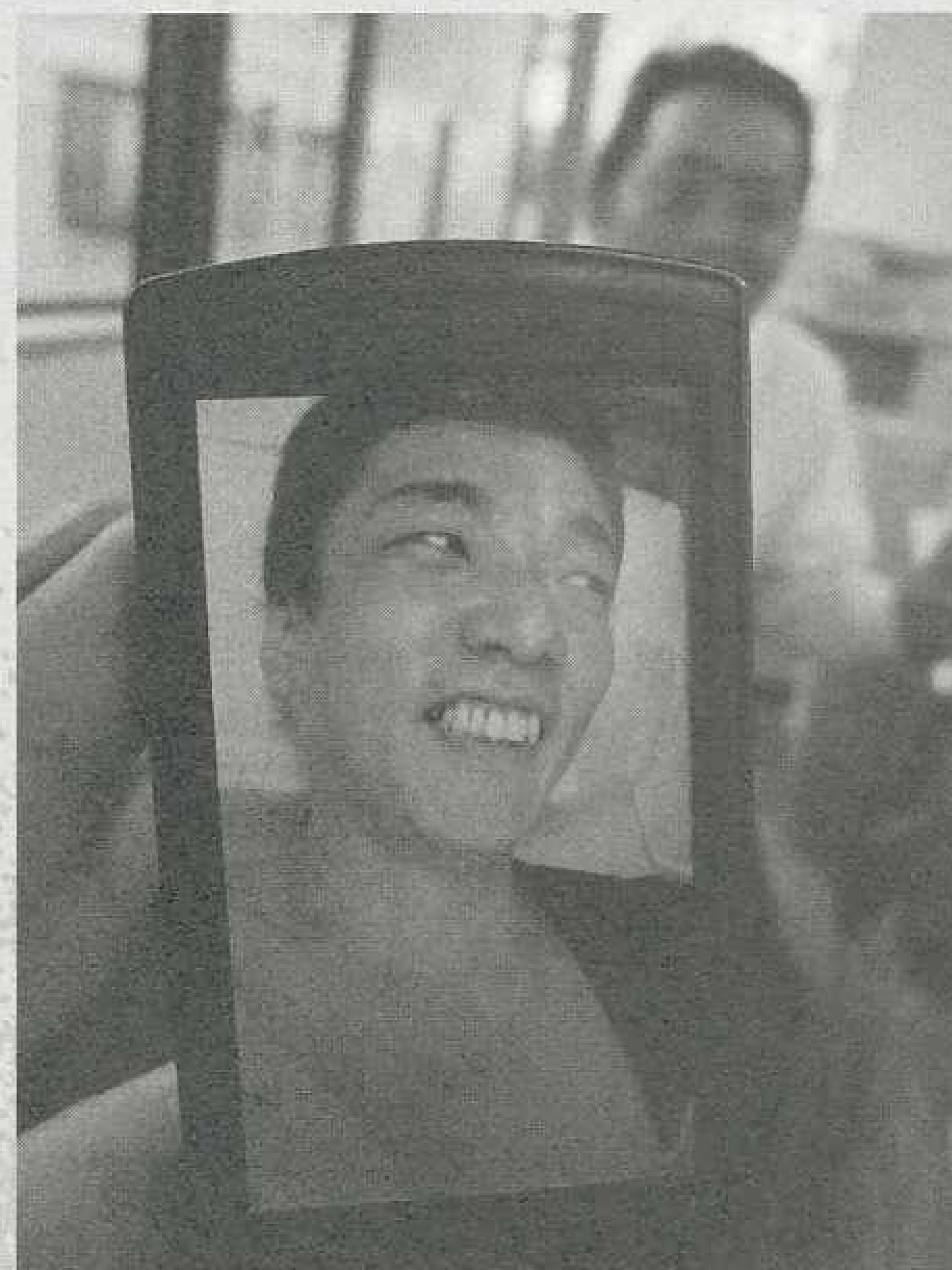
――それが一番あるんだ（笑）。

中村 うん。そこが一番あるって。だから子どもさんがいるかぎり、山口さんはハッスルするんじゃないかなあ。

――まあ、迷惑をかけない程度にハッスルしてほしいですね。今日はありがとうございました！

【10年4月某日／ZERO1事務所にて収録】

子どもさんがいるかぎり、山口さんはハッスルするんじゃないかなあ



充実感に満ちあふれた試合直後の山口さん……。狂気だ! ちなみに我々編集部員は山口さんに子どもがいることをオフィシャルには聞かされておりません。「なんでアイツらはご祝儀を持ってこないんだ?」と怒ってるそうですけど。

山口日昇退院！ 次回大会へ向けて記者会見!!

5月12日、スカパー本社にて『ハッスル』の会見が行なわれ、再出発第2弾興行（5月30日・後楽園ホール）の大会概要および、坂田〝ハッスル〟亘と黒の中村カントクが一騎打ちすることが発表された

会見はまず、「もしかしたら誰も聞きたくないかもわかりませんが……」という山口日昇氏の右腕骨折の術後経過報告からスタート。報道陣には、4月30日のハッスル再出発第1弾興行で右腕を骨折した山口氏の「試合後の腕の状態」「手術後の腕の状態」「患部のCTスキャン」という、計3枚の写真が配られ、山口氏が試合当時の模様を説明。

「外人勢にやられて骨折したと思われてるけど、本当は、場外に落ちた亘を助けるために、外人に自分から体当たりしたら、その時点で『ビキッ』という感覚が……」と、ファースト・コンタクトから自爆してしまったことを告白。先週木曜日（6日）手術を行なって日曜日（9日）に退院したこと、診断名は「右上腕部骨幹部骨折」、全治には3ヵ月かかることを明かし、「肉を斬らされて、骨を断たれた。プロレスの奥深さを、身をもって知りました」と苦笑いした。

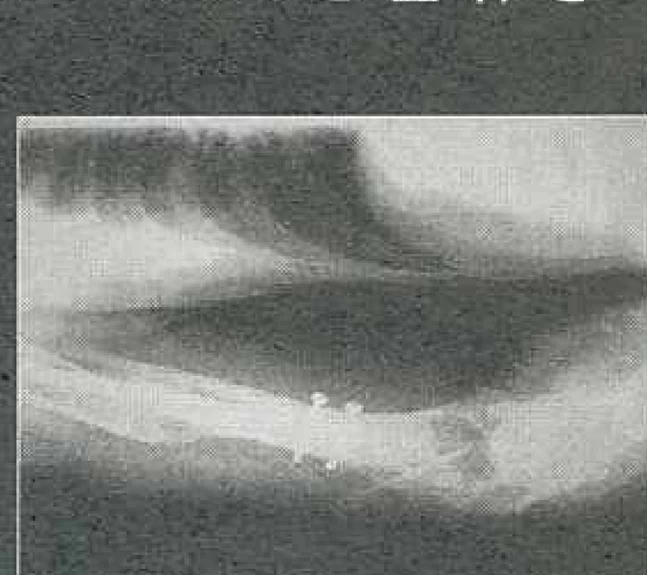
これに対し、「そんなに（試合）やってないだろう。リアルを通り越してギャグにもならない」とあきれた様子の坂田は、「無理難題ばっか言ってるから、KUSHIDAとかスマッシュ行っちゃうんですよね」と、キツイ一言。これに対して「KUSHIDAからも、大会翌日『本当に（骨）折ったんですか？』と電話がありました」と、悪びれず明かす山口氏であった。

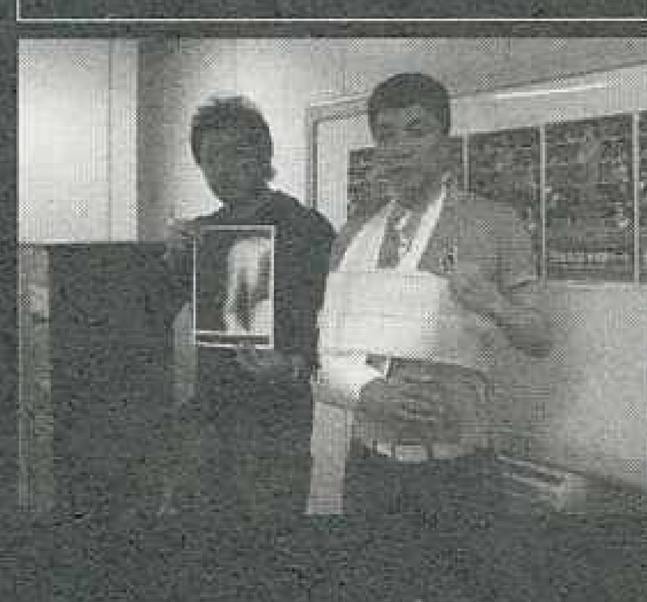
注目の再出発第2弾興行については、この日唯一の決定分カードとして「逆制裁マッチ『ドナドナ2010』～坂田〝ハッスル〟亘 vs 黒の中村カントク」を発表。「中村が哀しい子牛となり引かれていくイメージでマッチメイクした」と言う山口氏は、「GPWAとかどうなったの？ あの人自身がプロレスラー・ライセンスを発行してリングに上がってくればいい」と中村氏の所業をネタにし、奔放に言いたい放題。とはいえ、「これはメインじゃなく、必ずちゃんとしたカードを組みます」と、第2弾以降のカード発表に含みも持たせた。

一方で「第2弾に向けて、〝絶賛何をやるか会議中〟です」とした坂田は、「お客さんにハッピーにハッスルして帰っていただくようにしたい」と決意を新たにし、試合後の雑談でも「（同じ日に夜興行を打つ）新日本のために会場を温めますよ！」と朗らかに語っていた。

「サブタイトルを〝BUZAMA〟にしようと思った」（山口氏）第2弾興行のタイトルは『ハッスルMAN'Sカーニバル』。世界中のハッスルしてる奴らを集めたいというコンセプトの同大会には、前回に引き続き大谷晋二郎、越中詩郎、ザ・グレート・サスケや、℃軍が参加することが決定している。

（以上、携帯サイト『kami-pro Move』のニュース記事より転載）





『坂田“ハッスル”亘 ～第二章～』

東京・後楽園ホール
5月30日（日）開始12:00

チケット料金
S席5000円／A席3000円／B席2000円

お問い合わせ
ハッスル制作委員会
TEL.03-5730-3988


中邑真輔の
一見さん
お断り


中邑真輔の
一見さん
お断り
プロレス界史上最高に難解な男の脳みそを解き明かす!!



あらためまして、日本武道館進出宣言！ というわけで、
あらためまして30代からのマッスル入門企画

マッスル至近距離の真実

「いまマッスルに台本がなくなりつつあります」



“マッスル総合演出家”鶴見亜門こと
37歳プロレスファン舞台俳優
今林久弥

5.4後楽園ホールで、じつに1年ぶりに開催されたマッスル。これまでプロレス界に大きなインパクトを与えながら、万年大ブレイク寸前状態が続いていることも確か。しかし今大会でマッスルはあらためて日本武道館進出を宣言！ というわけで、いまからでも遅くない！ 食わず嫌いの読者に向けて、“マッスル総合演出家”鶴見亜門としてマッスルに参加している俳優・今林久弥さんに、内側から見たマッスルを語ってもらった。

聞き手／堀江ガンツ　試合写真／平工幸雄

マッスルに関わったきっかけは知り合いの女の子がDDT勢と合コンしたことなんです

――今回はマッスルが1年ぶりに再開したということで、30代からのマッスル入門というテーマでうかがいたいんですよ。

今林　あらためて入門編ですか。

――というのも、2～3年前からマッスルが大ブレイク寸前ということで、特集やら単行本やらいろいろやらせていただいたんですけど、ウチの既存の読者からの反響が若干足りない感じだったんですよね。

今林　元からの『kamipro』読者には届いてませんか。

――もちろん反響はあるんですけど、もっとあってもいいなって。そのウチの読者っていうのは、だいたい30代後半の昔プロレスを観てて、いまは総合ばかり観てるっていう、要はボクみたいな層だと思うんで（笑）。そういう新しいものに対しておっくうになり始めてる世代に対し、同世代のボクがこれまた同年代の今林さんにインタビューすれば、より読者にもマッスルが伝わりやすいんじゃないか、と。

今林　なるほど。

――というわけで今日は、ボクもマッスル初心者としてうかがわせていただきます。まず、今林さんはいまおいくつですか？

今林　僕は72年生まれの37歳ですね。

――やはり、世代的に子どもの頃からプロレスファンだったんですか？

今林　そうですね。初代タイガーブームの頃にファンになって。

――それからずっとファンですか？

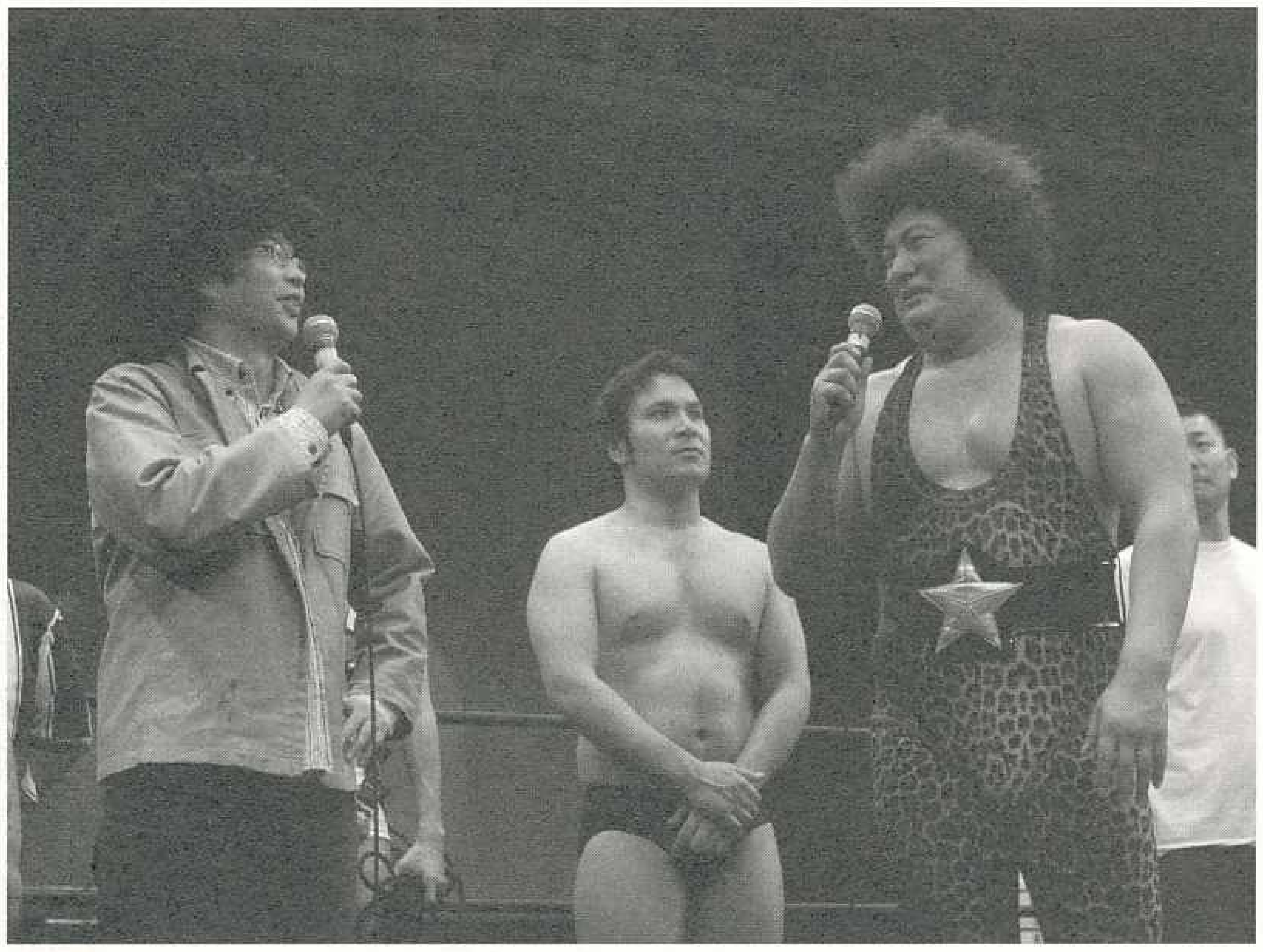
今林　いや、中高ぐらいで一回離れてるんですね。でも受験勉強ぐらいのときに、夜中に全日をたまたまテレビで観て「やっぱりおもしれえな」と思って。『週プロ』も買いだして、大学に入ってちょっとお金も自由になるようになったんで、手当たり次第に会場に行きだして。そこからですね。

――『週プロ』黄金期の大学生プロレスファンにありがちなパターン（笑）。

今林　まさにそうです（笑）。

――ファン時代にプロレス界との関わりはまったくなかったんですか？

今林　全然なかったですね。マッスルに関わるようになる最初のきっかけっていうのは、僕の知り合いの女の子がDDT勢と合コンしたってことですから。



2005年5月5日の『マッスル4』からマッスルに登場した鶴見亜門。その流暢なしゃべりを武器に、いまに至るまで『マッスル』の世界観を構築するうえで欠かせない存在となっている。

――いまっぽいきっかけですね（笑）。

今林　で、その女の子が、ちょっと坂井と知り合いになったって聞いたんで「じゃ、ちょっと紹介してよ。ウチの芝居を観に来てもらうように言ってよ」って。で、坂井に芝居を観に来てもらったんですよ。それが最初です。

――それはいつ頃の話ですか？

今林　僕がマッスル出てちょうど5年になるんで……5年半ぐらい前ですかね。で、僕はDDTが大好きで観にも行ってて、坂井のことも会う前から「おもしろいヤツだな」と思ってたんで、最初に会ったときは「大ファンです」なんて言ってましたね（笑）。

――そこから、どうやってマッスルに出演するようになったんですか？

今林　坂井が僕の芝居を観に来てくれるようになって、一緒に飲んでみたいな関係になったんですけど。僕が初出演した『マッスル4』の1～2週間前に電話がかかってきて「出てもらえませんか？」って言われたんですよ。

――そのとき、どう思いました？

今林　いきなり「DDTに出てくれ」って言われたら、「ええっ!?」って思ったんでしょうけど、「マッスルだったらいいかな」っていう（笑）。でも、ぶっちゃけうれしかったですよ。憧れてたプロレスの世界に触れられるというのは。

――ある意味、〝プロレスデビュー〟ですもんね。

今林　何をやるのかは全然わからなかったんですけど、大好きな世界にちょっとでも触れることができるなら、なんでもやろうって感じでしたね。

――マッスルファンは「鶴見亜門の登場がエポックだった」って言いますよね。

今林　そうなんですかね？

――基本的な質問なんですけど、〝マッスル総合演出・鶴見亜門〟っていうのは、実際にマッスルの演出家なわけではなく、演出家という役柄なんですか？

今林　そうですね。僕が本当に台本を書いて演出しているように思われた時期もあったかもしれないですけどね。

――でも、昔から「プロレスには台本があるんじゃないか」なんて言われてきたなかで、脚本演出役が登場するというのは、逆転の発想ですよね（笑）。

今林　ちょっとひねくれてますよね（笑）。でも、僕も最初は、坂井に「こうしてくれ」「こうしゃべってくれ」と言われたことをやるのが精一杯で、「これをやっていいんだろうか？」なんて思う余裕がなかったですね。坂井がいいって言うんだったら、まぁいいんだろうなって。

――そもそも、なんで〝鶴見亜門〟を出そうと思ったんですかね？

今林　『マッスル4』で僕が初出演する前に、僕が本業の芝居で〝劇団の作・演出家の役〟をやったんです。それを坂井が観に来て、そこでちょっとひらめいたのかもしれないです。

――なるほど。

今林　あの頃の坂井はたぶん、やりたいこと、アイデアのストックがたくさんあったんでしょうね。そのなかの一つが「作・演出家役をプロレスで出す」ということだったのかなって。

――鶴見亜門の数々のセリフが話題になりましたけど、あれはマッスル坂井が〝鶴見亜門〟を通してアピールしているわけで

マッスル至近距離の真実

坂井もある程度で枯渇したんでしょう。でも、表現者ってそこからじゃないですか

すよね？

今林　そうですね。ただ、最近はまた変わってきてるんですよ。今回（5・4後楽園）、僕はほぼセリフとかなかったじゃないですか。もう司会として回すだけでしたからね。

――演者というか完全に司会者でした。

今林　ある時期から、どんどんあいつは台本を書かなくなったんですよ。

――そうなんですか！

今林　去年の正月ぐらいから、ホントに書かなくなってきたんです。で、僕は台本がないと何もできないじゃないですか。

――役者さんですもんね（笑）。

今林　でも、ホントに書かないから、無理やり僕が「ここどうすんだ？」「次は何をやっていくんだ？」って決めさせて、去年は僕と坂井が一番ギスギスしてた時期でしたね（笑）。

――去年のマッスルはへんな終わり方が多かったって聞いてますけど、そういうことなんですか？

今林　そうなんですよ。でも、その経験を経て、僕自身も「べつに台本なくてもいいかな」ってなってきてるんですよ。去年の5月はとくにひどかったですからね。たしか5月4日にマッスルがあるのに、4月30日に開催された『Ｙｅｓ，Ｗｅ ｃａｎ』っていう女子プロレスの大会の映像を作る仕事をあいつが引き受けちゃって。

――ダブルブッキングみたいなもんですね（笑）。

今林　その時点で僕はびっくりしたんですけど、「マッスルは5月1日から稽古します」とか言って、5月1日にとりあえず集まってみたものの、何も台本がない。それで僕はもうイライラして。最終的にラストをどう締めるかとかをまったく決めずにやっちゃったから、ひどい終わり方になっちゃったんですけど。

――決めずにやっちゃったんですか（笑）。

今林　「なんとかなるかな？」と思ってやったら、結局、なんともならなかったみたいなところありますよね。

――それもあって、マッスルは1年間やらなかった部分もあるんですか？

今林　そうですね。結局、マッスルって坂井が「やります」って言わないかぎり、やれないですからね。アイツがやるって言うんだったら、僕らはいくらでも協力するつもりなんですけど。

――じゃあ、最初はやりたいことがたくさんあったけど……。

今林　ある程度のとこで枯渇したんでしょう。やりつくしたんでしょうね。でも、そこからじゃないですか、表現者って。とりあえずアイデアのストックがなくなってから、どうするかが本当の勝負で。でも、それでマッスルをもうやりませんというのも、あいつの自由だし。またやりたいことがあるなら、僕らもやるし。それでいいんじゃないか、と思いますけどね。

――この1年間のマッスルは、今林さんから見てどんな感じでした？

今林　まず、さかのぼると一昨年の秋ぐらいから、坂井が「へんだな」「なんかちょっと精神的にイライラしてるのかな？」っていうのがありましたよね。それでまぁ、去年の正月、マッスルに大仁田さんが出たときぐらいでちょっと……。僕、リング上で普通にリアルに坂井と言い合いをしちゃいましたからね、泣きながら。

――そんな"ガチンコ"がマッスルのリングで展開されたんですか!?

今林　だってアイツ、リハーサルの時点からもう勝手にキレて、リハーサルをボイコットして控室に戻っちゃいましたからね。しょうがないから、そのあと僕がリハーサルを進めたんですけども。

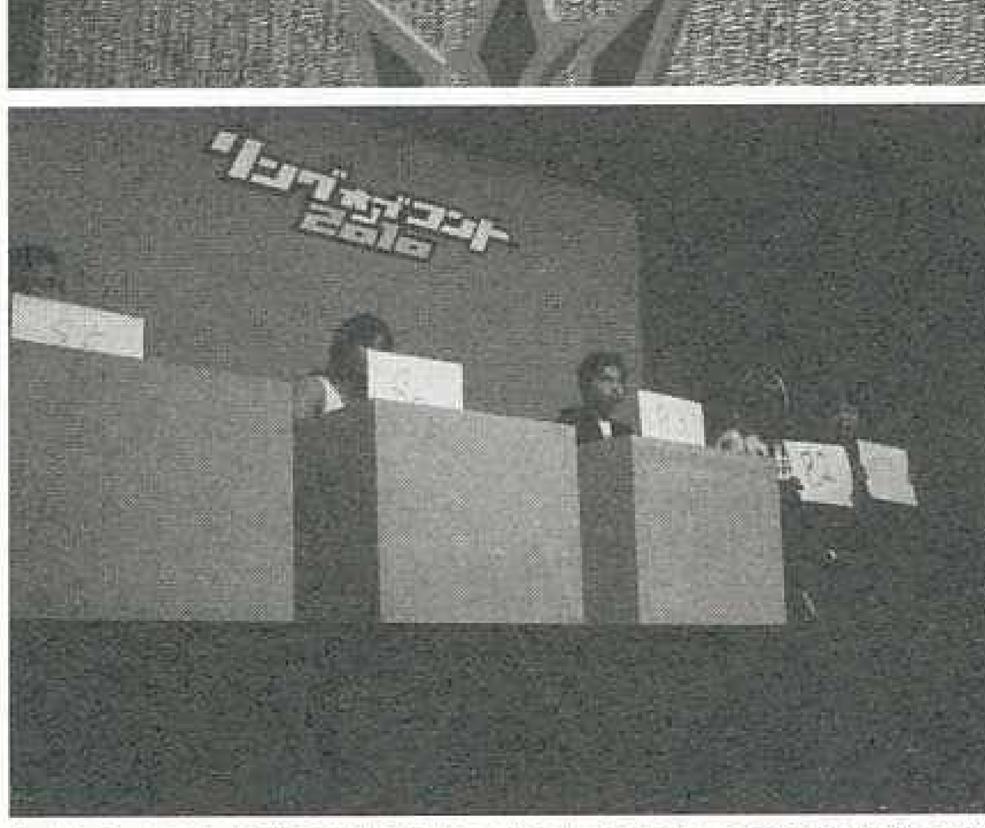
――ほんとにマッスル演出家になっちゃって（笑）。

今林　で、その1月のマッスルのあとは、アイツもちょっとプライベートでいろいろあって……。それ、『ｋａｍｉｐｒｏ』さんのケータイサイトのコラムとかでも書いてましたよね？　去年の春ぐらいには彼女と別れただのなんだの……。

――精神状態がおもいきりコラムに出てましたよね。原稿が落ちたり（笑）。

今林　あれは傍から見てるとおもしろかったですけど（笑）。で、それを乗り越えて去年の5月の後楽園だったんですけど、ちょっとまあ……僕もよくなかったんでしょうけどね。それまでのイライラが全部爆発しちゃった感じで……。でも、そのあとアイツは『キン肉マニア』に関わったり、ＤＤＴの両国の演出をしたりで、けっこういい仕事してたので「大丈夫なのかな」と

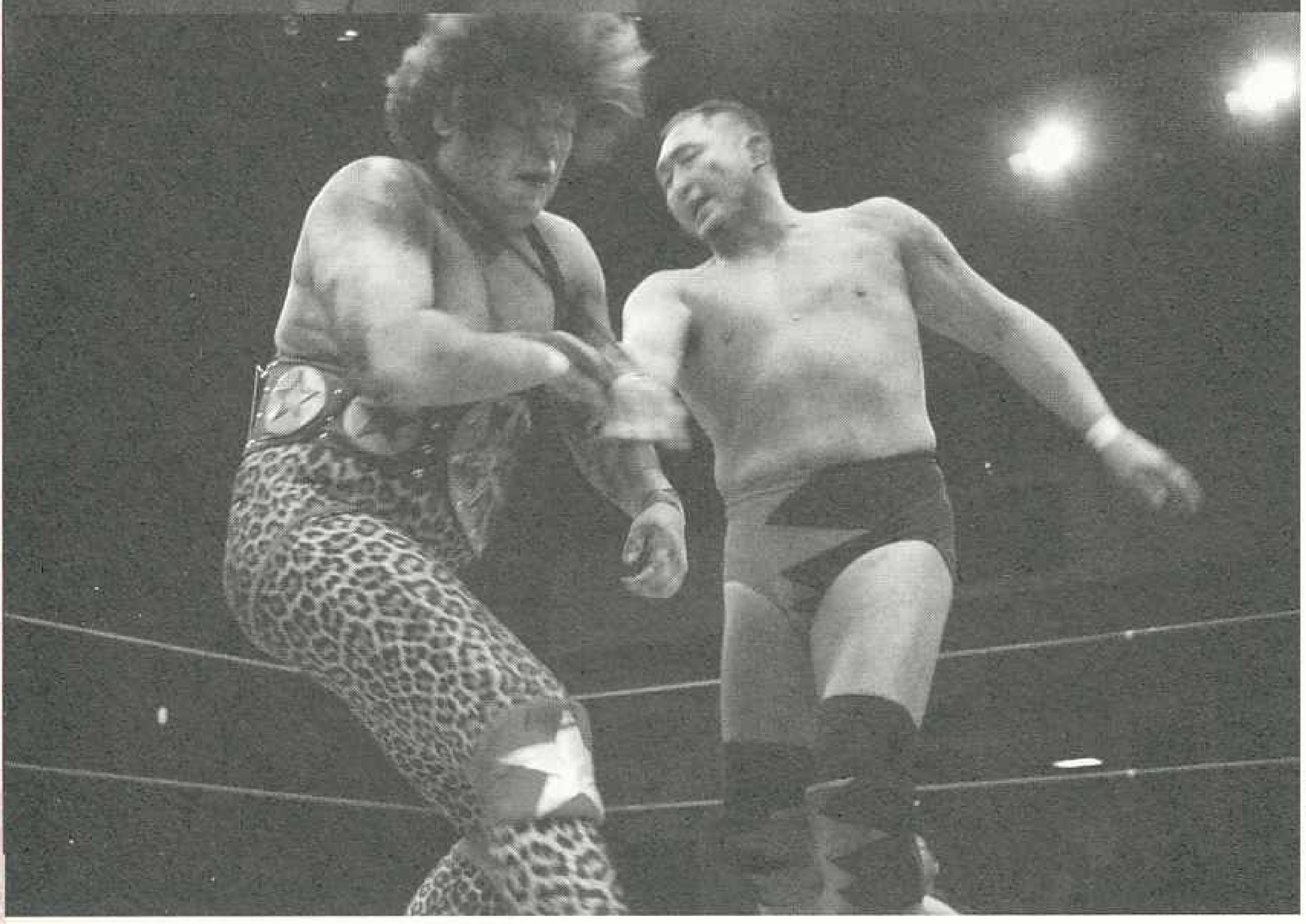






5.4『マッスルハウス9』は『リング・オブ・コント2010決勝大会』と題して、8人のレスラーがそれぞれ各自の試合をプロデュース。それを高木三四郎初めとする審査員がジャッジ、優勝者を決めるというストーリーライン。なかでも広田さくらの「引退試合」は大きなインパクトを残した。





大会終盤では坂井と大谷晋二郎が純プロレスマッチで対戦。勝利した大谷はマイクを握るとプロレスの教科書として「でっかい壁にぶつかったときは乗り越えようとしなくていい! ただ、その壁から逃げるな! いつか必ず乗り越えられる!」という名言を披露。

は思ったんですけどね。でまぁ、そのあとハッスル参戦があったわけですけど、ハッスルが事実上の倒産となってしまったのは、アイツもショックだったんじゃないですかね。

——予定が狂ったというか。

今林　本来なら資金もメディアもあって、マッスルではできないことができると思ってたはずですから。

——それがちっともできないうちに、興行中止の連続になっちゃいましたからね。

今林　でもまぁ、今年2月に666さんと合同でディナーショーやって、そのときぐらいから、精神的に盛り返してきたように思うんですけどね。

——では、いろんな経験をして、1年経ってマッスルという場に戻ってきた感じなんですかね。

今林　まあ、心弱いッスからね、アイツ（笑）。

——繊細というか（笑）。

今林　繊細なんでしょうね。天才にありがちで。でも長い目で見ると、そういう落ち込んだり、悩んだりする時期も必要なのかな、とは思いますね。青春ドラマに挫折はつきものというか（笑）。部員同士がケンカしたり、凄い落ち込んだ時期も乗り越えて甲子園に行くからドラマになりますからね。

——ちょっと話は戻りますけど、今林さんはもともとプロレスファンですけど、マッスルというプロレスの内部を知って、驚きとかありました？

今林　マッスルってよく「演劇っぽい」とか「台本があって、しっかり稽古されてる」とか言われますけど、言われるほど決めてないんだなっていうのは感じました。僕が知ってるのはマッスルだけなんで、マッスルに関して言うと、確かに芝居の部分、セリフのやりとりの部分は、台本もあって稽古してやってますけど、試合に関してはそうじゃないんだなって思いましたね。ちょっと表現が微妙になりますけど。

——じゃあ、やっぱりプロレスはプロレスだった、と。

今林　僕はマッスルの内部を知ってもがっかりしなかったし、よけいに「凄いな」と思ったし、プロレスファンとしてうれしかったです。

——本物の演劇っていうのは、もちろん最初に台本が決まって、そこから開演まで稽古の連続なわけですよね？

今林　メチャメチャ稽古しますよ。ガンツさんにこのあいだ観ていただいた芝居も、1カ月半ぐらいメチャクチャ稽古しましたから。

——それを思うと、マッスルを「演劇っぽい」とか「演劇プロレス」みたいに言われるのは……。

今林　全然違うなって思いますね。演劇とプロレス両方に失礼だなって。それにマッスルは、演劇の要素がどんどん薄れてるんですよね。今回も公演前にとりあえず集まってみたものの、台本もとくになく、こういう流れでやります、試合はそれぞれでお願いします、みたいな。とりあえず、広田さくら用の紙テープをみんなで巻いたりしましたけど（笑）。

——じゃ、演劇っていうよりも、いまはバラエティ番組の作り方に近いんですかね？

今林　ああ、そうかもしれないですね。坂井も『ダイナマイト関西』に出たり、『めちゃイケ』に出たりして、そういう要素を取り入れてるのかもしれません。あとは、僕も含めて出演者に対する坂井の信頼みたいなのも強くなってきたのかなって思いますけどね。昔は一言一句全部、坂井がセリフを書いて決めてましたけど。いまはそうしなくても「まぁなんとかなるだろう」と、アイツが思ってきたのかなぁって。

——ある種、マッスルが回を重ねることでプロレスに昇華し始めたというか。

今林　うん、今回は普通にプロレスでしたよね。僕も司会者として進行しながら、「この試合どうなるんだろう？」って観てた試合がありましたもん。

——そうなんですか!?

今林　このあいだは「リング・オブ・コント」という企画で、各試合を採点してましたけど、あの採点はガチンコなんですよ。

——じゃあ、誰が優勝するかわからなかったんですか？

今林　そうなんです。「点数は自由につけてください」って審査員に言ってたんで。で、暫定1位の人は常に司会の横の席に座っているっていうのは決まってて。だから、僕は「きっと前半戦1位になるのは大谷（晋二郎）さんの試合だろうな」とは思ってましたけど、となるとずっと大谷さんが僕の横で試合を観てるっていうことですから、ちょっとドキドキしてたんですよ。

——そう考えるとおもしろいですね。大谷さんが最後に発表した〝プロレスの教科書〟は、マッスル坂井が台本として書けることじゃないですもんね。

今林　そうですよ。だって、大谷さんがあそこで何を言うかなんて、僕らは全然わからなかったですし。マイクで何か言って

マッスルは坂井にとっても台本を書くという段階を越えちゃってるのかなって

くれるかどうかもわからなかった。あそこで坂井に勝って、そのまま控室にはけちゃったかもしれないですし。僕も大谷さんのマイクのあと、「このまま表彰式をやらせてもらっていいですか？」って、おそるおそる言ってましたから。で、表彰式をやって、大谷さんに賞状を受け取ってもらって。で、そのあと大谷さんはZERO1のブログに〝優勝しました！〟って賞状と御祝儀袋の写真、載せてましたからね（笑）。ああよかったと思って。

——きっと大谷さんもうれしかったんでしょうね（笑）。

今林　だからマッスルは一時期、〝プロレスの向こう側〟って言い方をしてましたけど、やっぱりプロレスですよね。だからこそ、坂井にはもうちょっと、プロレスラーとして頑張ってほしいですね。もうちょっと大谷さんに反撃できないものかな、と僕は思いましたから。もうちょっと頑張ってくれないと、お客さんも応援しづらいですよ。あっという間に息が上がって、あっという間に心が折れてるのが、こっちにも伝わってきましたからね。

——もっとプロレスラーとして成長しろ、と（笑）。

今林　そうですねえ。だって、その試合だけ頑張っても、プロレスの試合ってちゃんとできるもんじゃないですよね。失礼な話だと思いますよ。

——稽古不足で芝居に出てくるようなもんですかね。

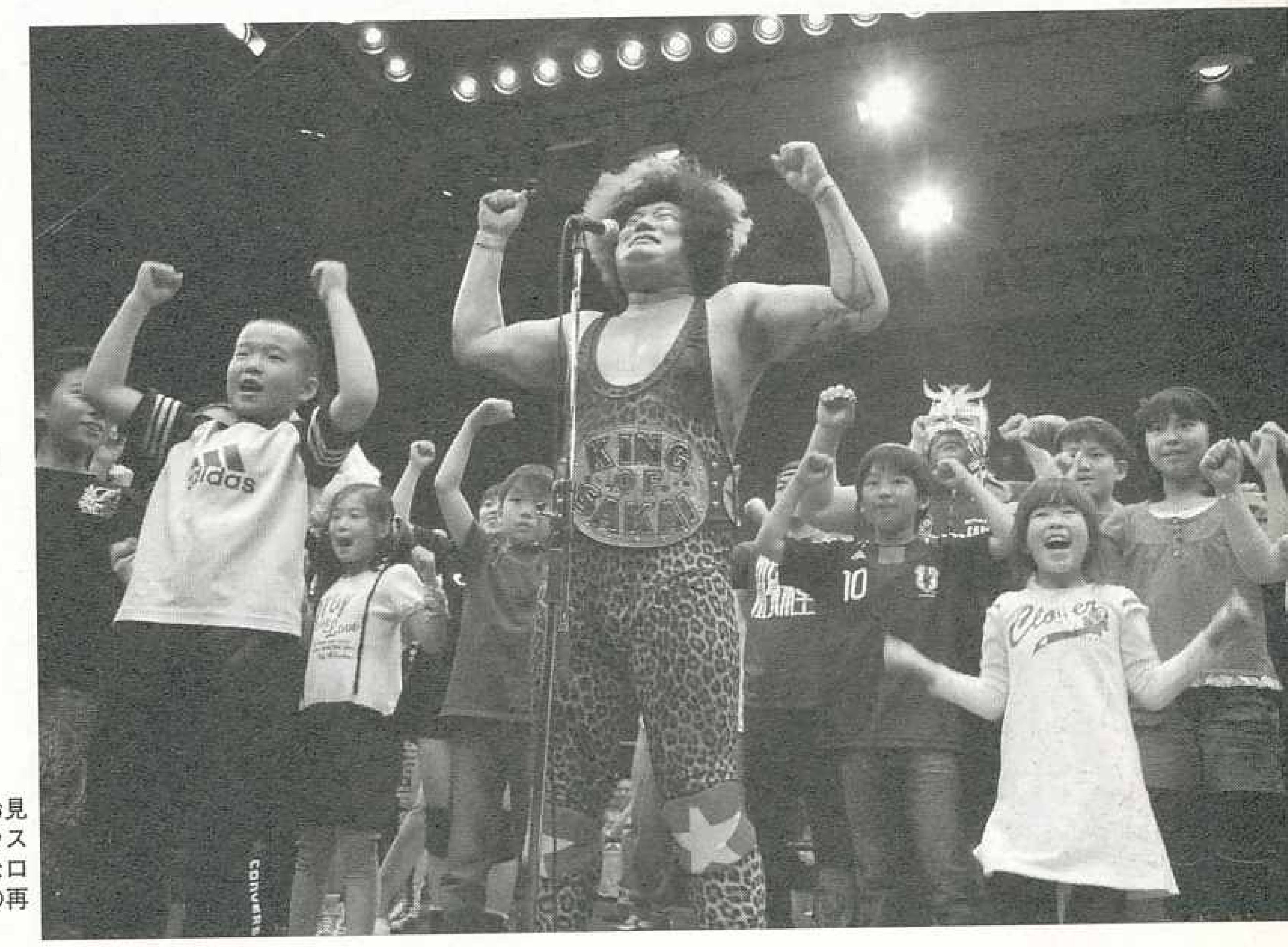
今林　そうですよ。あとマッスル全体としても、もっとショーとして、いろいろ質をよくしていかなきゃって思ってますね。今回はとにかく長すぎましたから。

——22時半頃までやってましたもんね（笑）。

今林　あれは僕がもうちょっと、どうにかしなきゃいけなかったなって、反省してますね。司会として、早めにいろいろ削ったりできたんじゃないかって。

——WWEならタイムキーパーがいて、しっかり指示出したりするんでしょうね。

今林　それができないぶん、あとは僕の司会で審査の部を分短くするとか、進行部分、コメントを短くしていくとかいうとこで……まぁ、それでも短くできて10分もできないでしょうけどね。でも、それは前日のミーティングとかで予測できたことではあったので、大きな反省点の一つですね。だから今後は、坂井には作家・演出家としてやりたいことをやってもらって、事務的なことは周りのメンツでやっていかなきゃいけないのかなって思いました。



大会は坂井が「近い将来、日本武道館公演をお見せします!」と進軍ラッパを鳴らしてからのマッスルポーズでフィナーレ。アイデア満載の濃密なロング興行は、迷走が続いていた『マッスル』の再出発にふさわしいハッピーエンドとなった。

——そんなことを感じた大会だった、と。

今林　そうですね。僕も進行として、どんどんやっていかなきゃダメなんだなって思いましたね。僕も昔よりはいろいろと口を出すようになりましたけど。

——役割が変わってきてるんですね。これからも変わっていきそうですか？

今林　坂井次第ですけどね。でも、アイツがまたしっかり台本を書いて、というふうにはもうならないと思います。たぶん、アイツにとっても台本を書くっていう段階はもう越えちゃってるのかなって。今回も「台本を書け、書け」とは言いましたけど、だからといって一言一句しっかりセリフを書かれても、もう俺もそのとおりに言う気はないよ、みたいなところもありますし（笑）。

——鶴見亜門自体が人格を持ちだした部分もあるんですか？

今林　僕もマッスルを5年やってきて、マッスルに関して言えば、それなりにいままでやってきたことを踏まえて思うところもありますから。とりあえず坂井のアイデアをいろいろ聞いて、それに対してこっちが「どう思う、こう思う」って言う時間が大事なのかな、と思いましたね。

——では、今林さんは今後のマッスルをどうしたいという思いがありますか？

マッスル至近距離の真実

今林　いや、やっぱり武道館は行きたいですよ！

——やはり武道館進出ですか。

今林　武道館って両国と違って、どこか放送局が協賛なりでついてくれないと難しいみたいですけどね。でも、ぜひ進出してみたいですし、それ以外にも3カ月にいっぺんはマッスルで何かしらやって、観てもらった人に感動や元気を与えられたらいいなと思いますね。

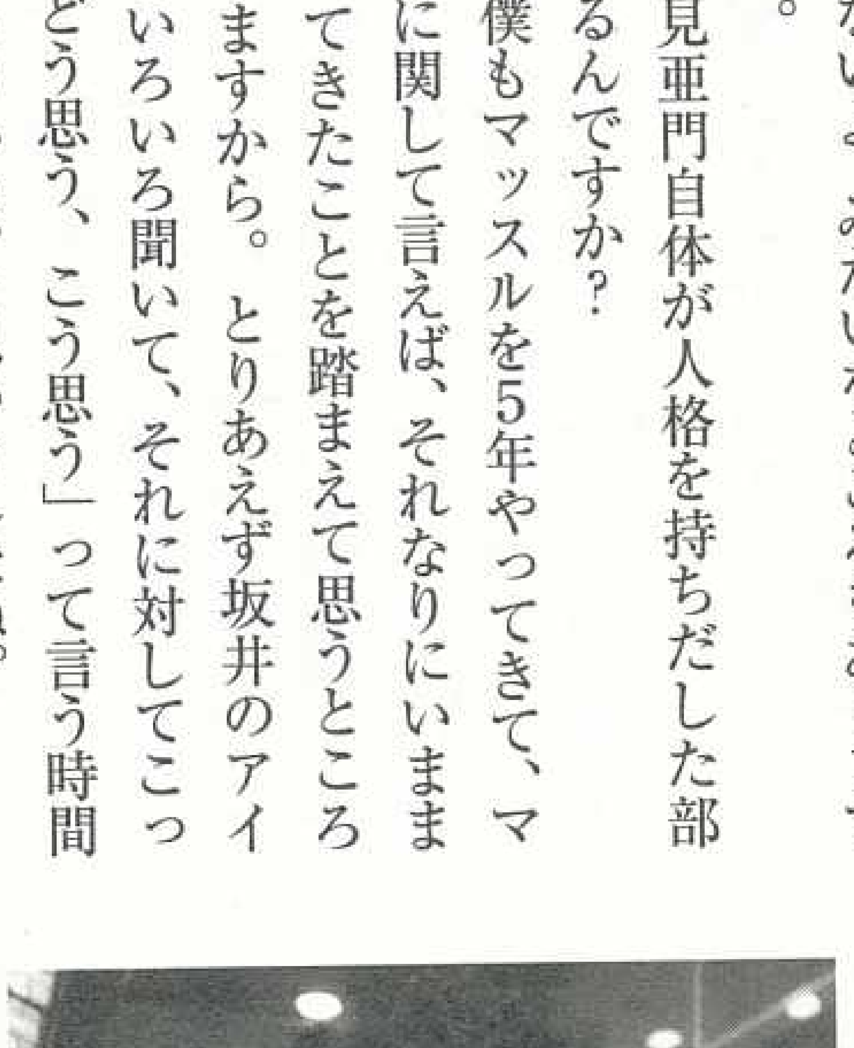
——でも、〝役者〟として関わり始めた今林さんにとって、自分がいつの間にか役を越えたことをやり始めてるっていうのは、革命的なんじゃないですか？

今林　そうですね。台本を渡されてセリフを言う役割で呼ばれてた僕が、リアルにリング上で坂井と口論するわけですからね。セリフじゃない言葉を役者が舞台で言うわけですから。冷静に考えれば、〝何だ、それ!?〟と思いますよねぇ。

——だからマッスルもやはり、〝底が丸見えの底なし沼〟だってことですよね（笑）。

今林　そうですね。やっぱりプロレスは奥が深いですよ。

【10年5月7日／都内・某所にて収録】



つるみ・あもん■本名・今林久弥。1972年9月1日、福岡県福岡市志賀島出身。鴻上尚史に憧れ、氏の出身校である早稲田大学に入学。その後、演劇研究会の先輩の劇団『双数姉妹』に在籍して俳優として活躍中。2005年5月の『マッスル4』で、総合演出家・鶴見亜門として初登場。



俺たちの女子プロレスど変態座談会

全女には俺たちがプロレスに求めるすべてがあった!

毎度おなじみ、浅草キッドの玉ちゃんと語る変態座談会。
今月のテーマは、なんと女子プロレス! これまで総合格闘技やUWFを語りまくってきた変態メンバーが、
女子プロの何を語るのか? 今回は「ど変態座談会」です!

構成/堀江ガンツ　試合写真/平工幸雄

という段階を越えちゃってるのかなって

うしたいという思いがありますか?

総合演出家・鶴見亜門として初登場。

女子プロレスど変態座談会

ガンツ　毎度おなじみ変態座談会ですけど、今回のテーマは「女子プロレス」でいきたいと思います！

玉袋　来たね～。やっぱ全女だよな。

椎名　全女は最高ですよね。

ガンツ　でも、我々が女子プロを語るってことに対して「えっ？」って思ってる読者もいると思うんですよね。

玉袋　あ、そう。俺は好きだぜ～。

椎名　俺たちさんざんUWFだ、PRIDEだって言ってきて、女子プロだもんね。でも、UWFと同じくらい女子プロ好きでしょ？

玉袋　大好きだよ。でもよ、前回の『kamipro』の北斗とかデビル雅美のインタビュー読んでよ、もう出つくしたんじゃねえかとも思ったんだよな。

ガンツ　ノンフィクションとして掘り下げる作業としてはですよね。

玉袋　ただ、変態としての目線で語れば、まだまだ語りようがいくらでもあるんじゃねえか、とも思うんだよ。だからよ、座談会を始めるにあたってまず最初にハッキリさせておきたいのは、俺はバイソン木村でヌイたことがある！ってことだよ（キッパリ）。

ガンツ　ダハハハハ！　なぜハッキリさせる必要があるのか（笑）。

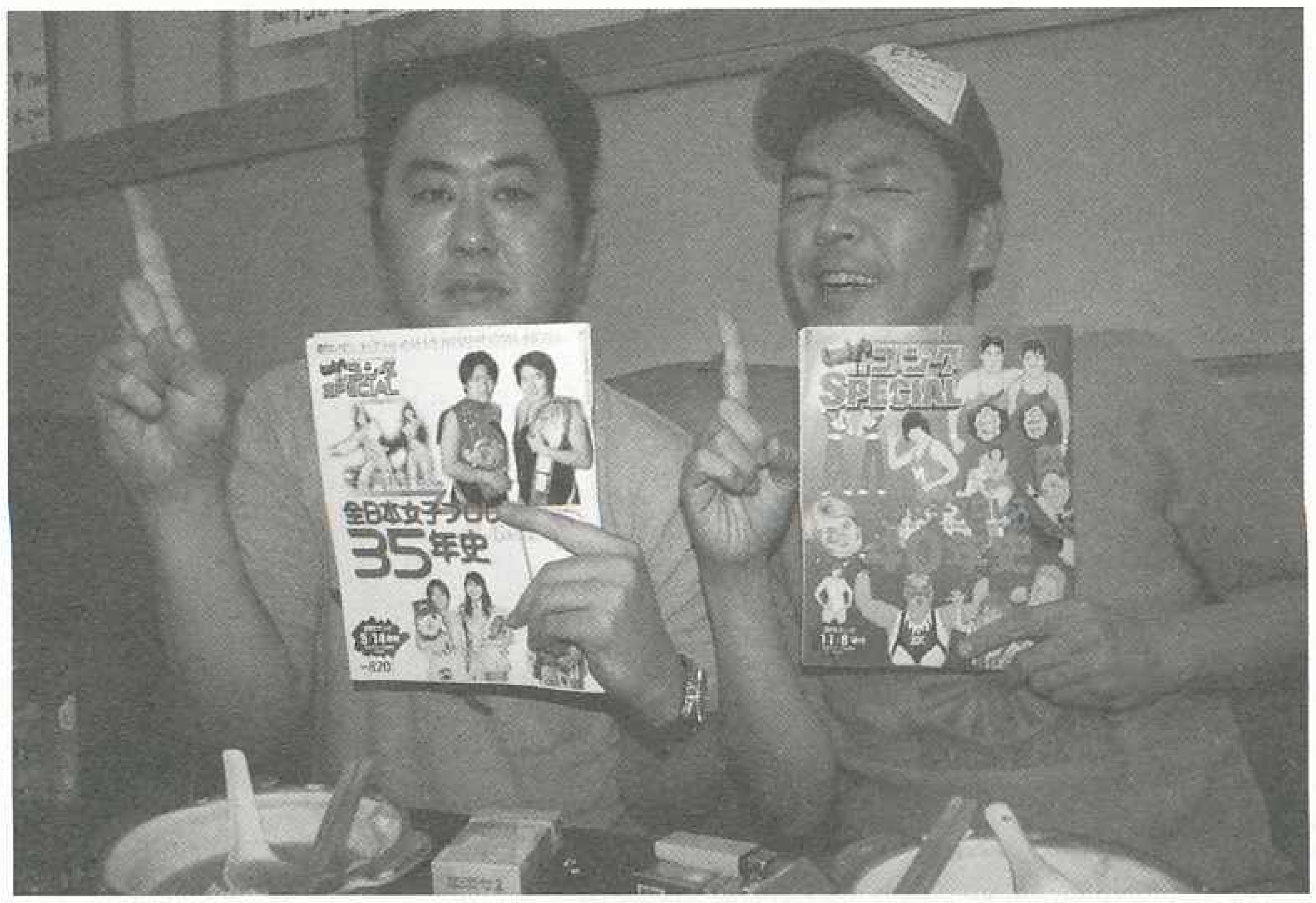
椎名　俺はデビル雅美でありますよ。

玉袋　デビルであるか！

椎名　いじめられてる側で（笑）。

ガンツ　じゃあ、バイソンの場合はトンファーで殴られたいって感じですか？（笑）。

椎名　バイソンはワンレガースのコスチュームがいいんだよね。あれで挟まれたい（笑）。



椎名基樹
1968年、静岡県出身の42歳。本誌の人気長寿連載コラム『サムライ三昧』でもおなじみ、ライター・構成作家。真剣勝負にあくなきこだわりを持つが、強い女にもとにかく目がない変態。

玉袋筋太郎
1967年、東京都出身の42歳。ご存知、浅草キッドの片割れ。子どもの頃から蔵前に通った変態プロレスエリート。新刊『絶滅危惧種見聞録』は、プロレス者もマストバイ！

堀江ガンツ
1973年、栃木県出身の36歳。本誌変態座談会主宰者。小さい頃から熱狂的なプロレスファン&UWF信者として鳴らす変態。しかし、その一方でクラッシュ時代から全女をこよなく愛する男。

玉袋　バカだね～。でも、わかるよ。

ガンツ　なんでわかるんですか（笑）。そういえば女子プロレスラーの写真集ってなぜか売れますよね。

玉袋　そうなんだよな。でも、こっちはわざわざ写真集買わずに、『週プロ』のカラーページで充分なんだよ。

椎名　安いなあ（笑）。

玉袋　でも黙ってるだけで、密かにこの俺の発言に賛同してくれる男たちは必ずいるはずだよ。

――カミングアウトしろ、と（笑）。

椎名　そうですよね。何が活字プロレスだって（笑）。

――まあ、『週プロ』で女子プロのページを編集してた宍倉ジチョー自身が真っ先にカミングアウトしてましたからね。「ハッキリ言って、誰のヌードが見たいかと言えばバイソンである」って（笑）。

玉袋　あれは名言だよな。

ガンツ　なぜ、そこで言う必要があるのかという（笑）。

玉袋　でもよ、そんなエロ目線だけじゃなく、全女は最高だったよな。

椎名　もちろんプロレスとして最高ですからね。全女自体が、もうきわめて特殊な集団で、ほかのどのジャンルにもない魅力があったから。狂ってるし。

玉袋　狂ってるんだよな。俺なんてよ、たけし軍団なんだから、女子プロレスラーとの絡みなんていくらでもあるからよ。ジャガー横田に肩外されてるからね。

ガンツ　肩外されたんですか⁉

玉袋　コブラツイストで外されてんだよ。ジャガーのコブラ、あれは〝殺し〟だよ。

ガンツ　それはどういうシチュエーションなんですか？

玉袋　昔、テレビ朝日でやってた『特捜TV！　ガブリンチョ』っていう番組で共演したんだよ。田代（まさし）さんが元気な頃にやってた番組。そこで絡んで、最終的に俺がコブラかけられたんだけど、おもいっきり極められて肩外されたんだよな。

椎名　ジャガーはヤバいって言いますもんね。

玉袋　しかも、結婚前のジャガーだからな。その外れた肩を治してくれたのが中山ドクターさだから。

ガンツ　リングドクターに（笑）。

玉袋　それ以外にもいろいろ絡んだぜ。ダンプ、飛鳥、ブル、アジャ、ぬまっち。

ガンツ　ぬまっち、いましたね（笑）。

玉袋　あとジャパン女子旗揚げのときの『ザ・ガンバルマン』だよ。デビューしたてのキューティー鈴木が緑の水着着ててよ、「こんなかわいいこがいるんだ」と思ってね。それで俺はやられ役でキューティーとスパーリングやってキャメルクラッチを極められたんだけどよ。正直に言おう、ボッ○してたよ。

一同　ダハハハハ！

椎名　ジャッキー佐藤の前でも邪気には勝てなかった（笑）。

玉袋　うまいね、どうも。ほかにも、いろいろ仕事したよね。そのなかで、若手のつらさとか目の当たりにしてるから。アジャ・コングが若手をかわいがりしてたりとかさ。カメラが回ってないとき、俺たちに厳しさを見せつけるように、おもいきり蹴ったりしてたんだよ。

椎名　へえ。

玉袋　あれは見ていてつらかったなあ。○○は円形脱毛症でハゲができてたからね。

椎名　女子プロっていうのは閉じた空間ですからね。でも、そこから狂気が生まれて、凄い団体になったんだと思う。だって、北斗が若手時代に首の骨を折ったのって、セカンドロープからのツームストンなんでしょ？

ガンツ　雪崩式ツームストンパイルですね。

椎名　ありえないよね。

玉袋　ありえねえよ。死んじまうって！

椎名　男のプロレスには相手にケガ


90年代の女子プロ人気は、アジャとバイソンが、ユニバーサルにゲスト出場したところから始まった。左端が宍倉ジチョーも太鼓判を押すバイソン。

ブル中野はあの久米なにがしも黙らせるほどの生き様だったよな

させないことが名誉という、アメリカンプロレスから来た価値観があるけど、きっと当時の全女にはそれがないんだよね。

玉袋　えげつねえな、女子プロは。

ガンツ　だからクラッシュ全盛の頃、前田日明が「俺が見てもヒヤヒヤする」って言ってたんですよね。当時は〝過激なプロレス〟新日本プロレスをさらに過激にしたのがUWFという認識だったわけじゃないですか。そのUWFの前田が「危険だ」って言うんだから、どんだけ過激なんだろうって思いましたよ。

玉袋　UWFより全然過激だよな。やっぱり閉鎖されてる中だからそこまで進化したんだろうな。

椎名　あと「プロレス」じゃなかったんでしょうね。「全女のプロレス」っていう別ジャンルだったんでしょう。

玉袋　全女は乱暴だよな。バット吉永と鳥巣朱美の格闘技戦をやらせたりとかかな。あれガチンコだろ？

椎名　バットの格闘技戦ありましたね〜。

玉袋　メデューサvsアジャの格闘技戦っていうのもあったからね。二人ともボコボコに殴り合って、血だらけになっちゃうんだよ。

ガンツ　松永兄弟はガチンコ好きなんですよね。そして意味がわからないのは、プロレスのタイトルマッチを最後の勝敗だけ、押さえ込みのガチンコにしたりしてるんですよね。

玉袋　だからきれいなブリッジが必要になるんだろうな。

ガンツ　なぜガチンコ、全女用語で「ピストル」が存在するかといえば、男だったら「いまはこいつを上げなきゃ」とか「今回は寝てくれ」とかが通用するでしょうけど、女には通用しなかったんじゃないかと思うんですよ。

玉袋　女はそうかもしんねえな。

ガンツ　「私のほうが上」「負けたくない」という感情をコントロールするには、ガチンコでやらせるしかなかったんじゃないかって。

玉袋　女性はそういう生き物だからね。そういう人たちのプロレスなんだから、そりゃすげえよ。

椎名　全女のレスラーって、なんか身体張って生きてるっていう感じが凄くする。

ガンツ　全国巡業をしてた時代の女子レスラーって、普通に考えて凄まじい生活ですよね。

玉袋　年間200試合以上やってたわけだろ。すげえよ。

ガンツ　しかも上下関係がもの凄く厳しいなかで、24時間、365日集団生活みたいなもんですからね。

椎名　女性が闘うのってわざわざやる必要がないことをやってるのが凄いよ。

玉袋　長谷川咲恵にもそれを感じたな。本来なら闘う必要ねえじゃんっていう。

椎名　かわいかったですよね。

玉袋　じゃあ、正直に言ってくれ。長谷川咲恵にも世話んなったか？

椎名　もちろんです。

玉袋　よろしい。

ガンツ　なんの話ですか（笑）。

椎名　長谷川咲恵は、あの水着がよかったんですよ。もう萩原聖人をどんだけ呪ったことか！

ガンツ　ダハハハハ！　ありましたね、熱愛疑惑（笑）。

玉袋　あの野郎がなぜか解説席にいるんだよな。

ガンツ　長谷川咲恵のパートナーだったデビー・マレンコもよかったですよね。

玉袋　そりゃそうだろ。デビーはいいぜ。名前からして「マレンコ！」っていうぐらいなんだから。

一同　ダハハハハ！

椎名　くだらねえ（笑）。

玉袋　これ記事にならねえだろ（笑）。でも、そういう見方をしてるやつもいるってことだから。女子プロにそれがなくなっちまったから、ビーチバレーとかに人気取られちゃってんだから。浅尾にいっちゃってんだよ。

椎名　あれはそうですよね。腹筋LOVEですよ！

玉袋　でも、結局はそうだろ？　始まりはストリップなんだから、そういう要素がないわけないんだよ。

椎名　でも、もちろんちゃんとプロレスとしても観てるから、よけいおもしろいし、よけい好きなんだよね。

玉袋　だから家族がいないときに観るんだよな。日曜の午後に全女の放送があった頃は、親が「法事があるよ」とか言ってんのに「俺は行かねえ」って言って、全女観てるんだから。

椎名　試合観ながら大熱狂は大熱狂ですよね。

玉袋　そりゃそうだよ。

椎名　北斗晶なんて、ホントにプロレスラーとして最高だもん。

玉袋　北斗は完璧だよ！

椎名　ノーザンライトボムなんて、最高の発明技でしょう。

玉袋　俺は豊田真奈美の場外へのムーンサルトも嫌いじゃないよ。

椎名　それと走ってトップロープに



天井知らずに過激さを追求していったブルとアジャの抗争は、デスマッチながら神々しさすら感じさせる聖戦へと昇華していった。

プロレス変態座談会

飛び乗って、そのままプランチャとか。超カッコいい！

玉袋　豊田は天才だよな。だから、なんか豊田真奈美を観ながら清水ミチコを思い出しちゃうんだよ。ルックスは全然違うんだけど、ああ、天才ってこういう人なんだなって。

ガンツ　豊田のジャーマンが凄いんですよ。黒水着になる前のジャーマンなんてもう凄い。初代タイガーのデビュー戦以上に高く持ち上げて、グニャッて曲がるみたいなブリッジ！

玉袋　あのグニャ感がいいんだよな。

ガンツ　あのジャーマンは男にはできませんよね。

椎名　技の話でいうと、デスバレーボムの発明ぶりも素晴らしいよね。

玉袋　でも、三田えっちゃんもいいけど、下田美馬もよくねえか？

椎名　いいですね。

玉袋　ここで正直に言っておくと、下田美馬にもお世話になりました。椎名は？

椎名　もちろんです。世話になりっぱなしです。

玉袋　でも、○○は京子が一番いい女だって言ってたよ。もの凄くいい仕事するって。

ガンツ　なんの話ですか！(笑)。

椎名　井上京子も天才だよね。

玉袋　豊田が柔の天才で、京子は剛の天才だよな。

ガンツ　実際、京子はリアルにメチャ強いらしいですね。だからシュートボクシングにも出てるんですよね。

玉袋　パリンヤーとやってるんだよ。

椎名　パリンヤーとやってるの⁉

ガンツ　そうなんですよ。オカマムエタイ戦士ってイロモノみたいですけど、オカマ＝ホントは男ですからね。普通に日本人キックボクサーのチャンピオンクラスが全然敵わないような、本物のムエタイ戦士と女がやってるんですからね。普通、そんなの怖くてできないですよね。

玉袋　やらねえよ。パリンヤーは本物だもん。ムチャだよな。でも「やれ」って言われたら、やっちゃうんだよな。「全女がイチバン」って言うのももわかるよ。

ガンツ　これって男のプロレスラーが「ヒョードルとやれ」って言われるどころじゃないですよね。

玉袋　そういや、パリンヤーは一度『未来ナース』に出したことあったな。美白の鈴木その子さんのところに連れていって、「パリンヤーは肌が浅黒いのが悩み」とか言って、タイ人なんだからあたりまえなんだけどよ。パリンヤーの顔に白いファンデーション塗っちゃってな(笑)。

椎名　くだらねえ(笑)。

玉袋　あと、アジャ、ブルと『お笑いウルトラクイズ』に出たこともあるんだよな。最後の「字読みクイズ」で、アジャとブルが試合してるんだけど、ホントに凄い試合しちゃってな。流血戦で大変だったんだよ。一切、お笑いの入る隙間なかった。これはポリシーなんだなって思ったよ。

椎名　バラエティとはいえ、試合はとなれば本気なんでしょうね。

ガンツ　やっぱりブル様は凄いですよ。クラッシュもダンプもいなくなって、自分がやるしかないって立ち上がって、自らを怪物化させるためにステロイドまで打ってたっていうんですからね。

玉袋　ベビーフェイス志望だった少女が、あんだけのヒールになったんだもんな。金網の青春だよ。

ガンツ　ブルは一回『ニュースステーション』で特集組まれたんですよ。

玉袋　あったな、観たよ。

ガンツ　凄くいい特集で。また久米宏が『ニュースステーション』でプロレスの映像が流れると、必ずバカにしたコメントしてたじゃないですか？

玉袋　そうなんだよ！　あの人ってさプロレス嫌いなんだろうな。前田vsカレリンのときもそうだったからな。『ニュースステーション』だけはガチなのかよ？

ガンツ　ダハハハ！　その久米宏がブルの特集のあとだけ、うなってましたからね。

玉袋　その久米なにがしも黙らせる生き様なんだよな。あの頃はよかったよ。完全に男子プロレスを凌駕してんだから。俺たちがプロレスに求めるもののすべてが当時の全女にはあったんだよ。90年代に入って新日本がなくしちまったものを全部、全女は持ってたからね。あの厳しい世界で年間200試合やってよ。逃げ出す人もたくさんいたんだろうけど、あのなかで生き残った人はハンパじゃねえよ。

椎名　しかも、ほめられないことをやってるんだもん。そこが凄いんですよ。

玉袋　世間様にはほめられねえんだよな。うしろ指をさされたりするんだから。「あそこの娘さん、プロレス行っちゃったんだってねえ」なんて言われてな。そこが切ねえんだよ。山田太一のいまや幻のドラマ『輝きたいの』だって、女子プロのそこにしびれたんじゃねえかな。

椎名　黄金期の新日本プロレスは「市民権」とか言って、社会の認知を求めていたわけでしょ。でも、全女はそんなの超越してたからね。こっちのほうが全然過激なんだよ。社会的認知なんていう生温かいものはいらないんだもん。凄い世界だよ。

ガンツ　ヒール特集のときダンプにインタビューしたんですけど、あらためて「すげえな」って思いましたね。だってリングを降りても「いい人」である姿を見せちゃいけないわけじゃないですか。

玉袋　そうだよ。江頭2：50と一緒だよ。私生活でも江頭でいなきゃダメなんだよ。

ガンツ　たとえ地元に帰っても、人の目があるところは全部悪役でいるっていうんですからね。

玉袋　ダンプに関しては一ついいエピソードがあるんだよ。大昔の話だからね！　ダンプが悪役で成功して、一時期、バラエティ番組とか席巻してたときがあったじゃない？　で、根はいい人じゃない？

椎名　そうなんですよね。

玉袋　それである日、バラエティ番組のロケで逆バンジーをやる企画があったんだよ。大竹まことさんが出てた番組でね。で、見るからに軽薄そうなディレクターが、「ほかの出演者じゃなくダンプを逆バンジーにかけたい」みたいに言ってきたんだよ。でも、あきらかに危ねえ仕事でよ、周りは「大丈夫か？」って言ってたらしいんだよな。

ガンツ　安全が保障されない仕事だったんですね。

玉袋　それでもディレクターは「大丈夫ですから、ダンプさんで」みたいなこと言って、やらせたんだってよ。で、いざやったら、やっぱり逆バンジーで勢いつきすぎて、クレーンの滑車の部分に頭ぶつけちゃって大流血だってよ。

一同　ええ〜〜！

玉袋　それでダンプはディレクターに泣きながら言ったんだって。「私が



"10代の女の子"たちが悪役となって、日本中の憎悪を集めていた、よく考えれば凄まじい集団である極悪同盟。彼女たちはまさにプロだった。

北斗vs神取は、小林まことと先生の漫画くらい男をグッとこさせるよ

悪役だからやらせたのか、おまえは」って。血だらけになりながら「これでいいんだろ」って言ってたって。それを見た大竹さんがキレて、「言っただろ、危ねえって！」「ダンプだったらいいのかよ！」って、その場でディレクターをシメたらしいけどね。

椎名　悪役レスラーなんか、何やってもいいと思ってるヤツだったんだ。

玉袋　そうなんだよ。「あたしだから、こんなふうになってもいいんだろ」って。悲しいよな。そういうもん背負って生きてるんだよ。そういう意味で井田真木子さんの『プロレス少女伝説』もよかったよな。しびれたよ。

椎名　神取いいっすよね。天龍戦とかとんでもないじゃないですか。

ガンツ　天龍の顔面パンチでお岩さんになるんですよね。冗談抜きで、男と男の闘いですよ。

玉袋　すげえよな。北斗戦の神取なんて最高だよ。「よっ！　チータ！」って言いたくなるよ！

一同　ダハハハハ！

玉袋　男をあれだけ乗せてくれんだからな。小林まことと先生のマンガくらいグッとこさせられたよ。

椎名　女が男をやるほうが、男らしくなるよね。ないものを求めるから。

玉袋　男らしいんだよ。早坂好恵ちゃんが大ファンだったんだよな。で、早坂好恵ちゃんは、全女の○○○○に口説かれてたんだけどな。

ガンツ　そんな知られざる話がありましたか（笑）。

玉袋　神取といえば、ジャッキー佐藤とのセメントマッチだけどよ、そのパートナーのマキ上田でくだらねえ話があるんだよ。

ガンツ　どんな話ですか？

玉袋　昔、『まっ昼ま王!!』っていう、『笑っていいとも！』の裏でやってた番組があったんだよ。視聴率0パーセント台を記録したことがある伝説の番組。

椎名　0パーセント！　凄い（笑）。

玉袋　で、俺ら浅草キッドは金曜日担当で、テリー（伊藤）さんが演出で演者もやってて、ダブルこうじ（今田耕司、東野幸治）が司会で、いま考えりゃ豪華だよな。

ガンツ　そのメンツで0パーセントって逆に奇跡ですね（笑）。

玉袋　で、そこにもう一人、神田正輝が雇われ店長みたいに、何もわからねえでいてよ。あるとき、「あの人はいま」みたいなコーナーでマキ上田さんが登場したんだけど、ちょっと福田和子的な感じだったんだよ。

ガンツ　それは○○クリニック的なチェンジですか？（笑）。

玉袋　うん。で、スタジオが出演者から観客まで、みんな「そこは触れちゃいけないな」っていう雰囲気になったんだよ。ところが神田正輝が「上田さん、いま昔の試合映像を見せてもらって、こうしてお会いして、私は何に感動したかといえば……顔が変わった！」だって。

一同　ダハハハハ！

椎名　言っちゃったんだ（笑）。

玉袋　「美しくなったなあ」「生まれ変わったみたいだ」だって。悪気はないんだよ。無意識の殺人者だよな。

椎名　悪気はないんだけどバカなんだ（笑）。

玉袋　『旅サラダ』おそるべし！　スタジオが凍りついたもん。「顔が変わった。目が違う！」だもん。あれは間抜けな空間だったよ。

椎名　間抜けといえば、堀田祐美子も間抜けだったんでしょ？

玉袋　出ました！　自由連合！

ガンツ　やたらカタかったらしいですよね。カタいから、対抗戦要員になったらしいですけどね。

椎名　身体も大きいしね。

ガンツ　でも、いま考えても対抗戦ってヤバいですよね。

玉袋　ホントにケンカだもん。そりゃ、4・2横浜アリーナだって帰りの電車がなくなるのもわかってても行くよ。

椎名　行きましたか。いいな～。俺、行ってないんですよ。

ガンツ　横浜アリーナの前に、川崎市体育館で対抗戦第一弾があったんですけど、あれも最高でしたよね。

玉袋　ガンツはそれも行ってんのか？

ガンツ　行ってます。

玉袋　やっぱり変態だよ。何がリングス、PRIDE、UFCだよ。完全に女子プロマニアだよ。でも、それぐらいのものがあったよな。対抗戦はホントに燃えたよな。

ガンツ　我々が大好きな、新日本vs UWFみたいなもんなんですよ。ケツは決まっていたとしても、どっちが強いかっていうことを勝手にやってたわけじゃないですか。

玉袋　しかも、女のほうがよりえげつねえんだよな。だからリアリティショーになってるんだよな。どこまで譲るんだとか、どうなるかわからないんだよ。

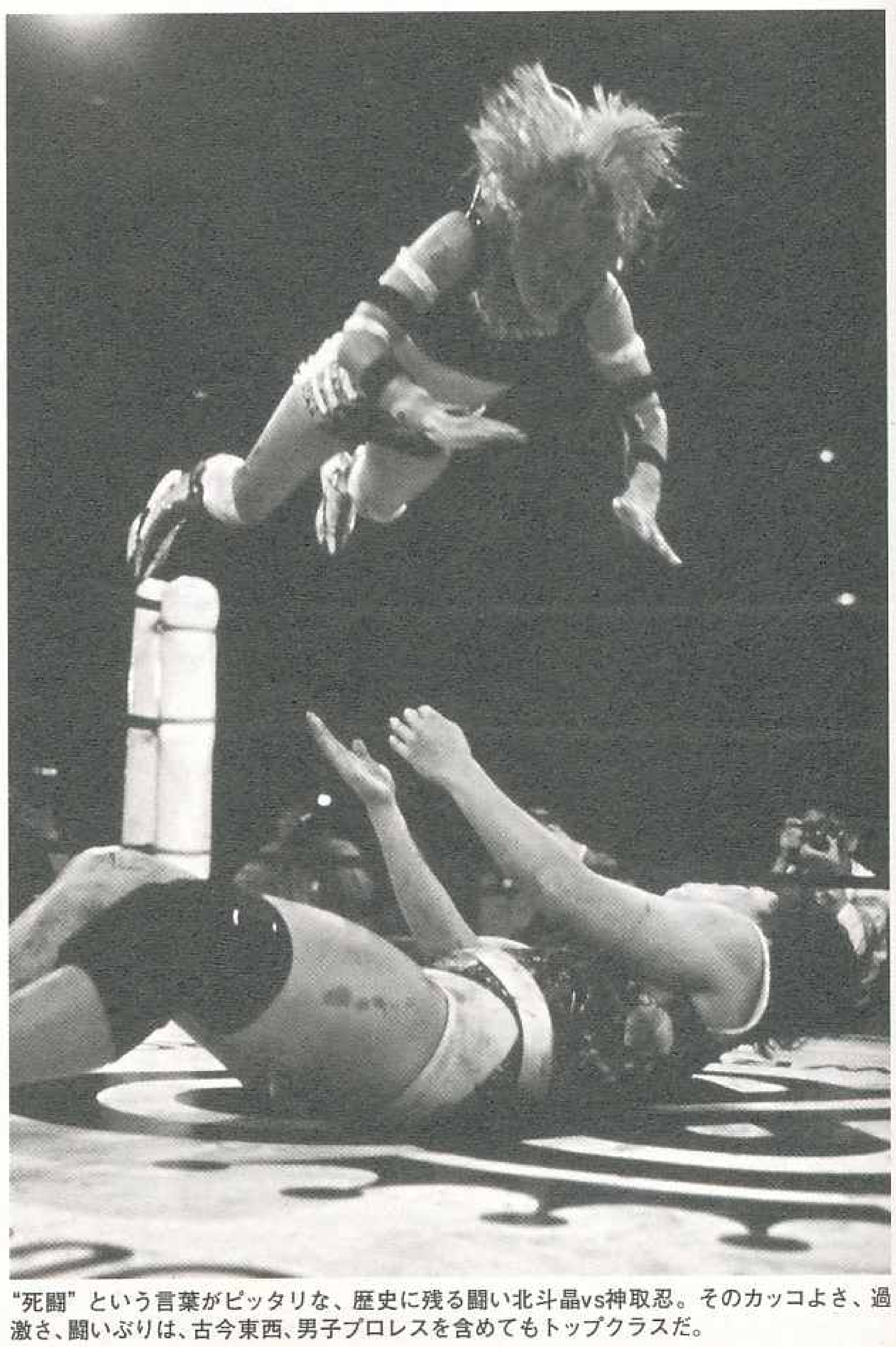
ガンツ　演出なしのリアリティショーですよね。

玉袋　だから秋元康がプロデュースなんてしなくてもいいんだよ。そりゃジャパン女子は全女に勝てねえよ。俺はあの頃の全女を全部録ってたんだよ。でも、ブルーレイ買ったあと、VHS全部捨てちまったんだよ。バカだよな。俺は『全日本女子プロレス中継』は試合も好きだけど、それ以外の合宿とかマラソン大会とか、食べ歩きが好きだったんだよ。

ガンツ　番組構成が最高ですよね。理想の『ギブUPまで待てない!!』というか。

玉袋　あの1時間半っていうのがよかったんだよ。終わったら、『中央競馬ダイジェスト』が始まってな。だから、あの最終日曜日だけは、飲みの誘い全部断ってたから。自分でサントリーレッド持ち出して、じっくり飲みながら観るのが楽しみだったから。

ガンツ　女子プロって、男子より幻想ありますよね。男のプロレスはミスター高橋本が出たあと、ファンもみんなわかった気でいるじゃないですか。でも、女子ってどこまでいって



"死闘"という言葉がピッタリな、歴史に残る闘い北斗晶vs神取忍。そのカッコよさ、過激さ、闘いぶりは、古今東西、男子プロレスを含めてもトップクラスだ。

もわからないですよね。

椎名　わかんない。男である俺たちが理解できない構造があるよ。

ガンツ　デビルがいまになって「タイトルマッチは全部ガチンコでした」とか、ホントかよって。いまだに、底が丸見えの底なし沼ですよね。

玉袋　あのデビルのインタビューはしびれたよ。最高だよ。

ガンツ　で、デビルはいま田舎に帰って何をやってるかって聞いたら、生活がもう映画『レスラー』と同じなんですよ。

椎名　そうなんだ……。

ガンツ　だから女子プロレスラーの人生ってフィルムで映画を録りたくなりますよね。ビデオじゃなくて。

玉袋　そう、フィルムだよ。焼かなきゃダメだよ。HDになった『水戸黄門』なんて味気ない！　フィルムで撮った東野英治朗時代の『水戸黄門』のほうが味があるみたいにさ。女子プロレスラーは全員フィルムの映画だよ。いまこそ全女のDVDとか出してほしいよな。

ガンツ　サムライTVだって、一番おもしろい番組は、どう考えたって『全女クラシック』じゃないですか。

玉袋　そう！『全女クラシック』だよ！

椎名　あれ3時間ぐらいやるんだよね（笑）。

玉袋　最高だよ！　焼酎1本空けちゃうよ！　そうそう、今度『kamipro』で三宅アナのインタビューしてくれよ。俺、前号でジャストミートのインタビュー読んでよ、次は三宅さんだろって思ったもんな。長坂アナはもう出られねえからよ。

ガンツ　三宅さんはPRIDEのメイン実況でもありましたけど、インタビューするなら、全女の話ばっかり聞きたいですね。

玉袋　そりゃそうだよ。三宅さんも『全日本女子プロレス中継』出身を誇りにしてるからね。

椎名　そうなんですか？　フジテレビのアナウンサーのトップが。素晴らしいね。



全日本女子プロレスという最狂のプロレス団体を彩った、歴代の女子プロレスラーたち。それぞれの生き様は、まさに俺たちが愛して見上げる"プロレスラー"だ。

玉袋　寝食をともにしてるようなもんだったって。年間200試合のなかで、どんだけ三宅さんが現場に行ってたかってことだよ。

ガンツ　浅草キッドが浅草のストリップ劇場出身なのと、同じような感覚なんでしょうね。

玉袋　同じだよ！

ガンツ　全女をやってた時代があって、いまの俺がある、みたいな。

玉袋　俺、このあいだ映画の仕事でフェリーニの『道』を観たんだけどさ、全女も『道』だな。

ガンツ　古き良きサーカスのロマンと哀愁、強さと悲しさが全部ある、みたいな。

玉袋　女子プロって凄いよね。すぐにメランコリーになりがちな俺たちの琴線に絶対触れてくるよな。映画『レスラー』を観たとき「やられた！」って思ったけど、全女のレスラーは一人一人が『レスラー』の物語を持ってるからね。

椎名　男のプロレス以上に世間に認められない世界なんだから。そこが悲しくも美しいよね。

ガンツ　『レスラー』が公開されたとき、玉ちゃんが「外人レスラー名鑑」見ながら「この一人一人に『レスラー』以上の物語がある」って言ってましたけど、全女はまさにそうですよね。

玉袋　いま聞いてて鳥肌立ったよ。切なくて、たまんねえよ。全女版の『レスラー』みたいな映画があったら、間違いなく泣くよ。だけどいまの子たちってかわいそうだよな。全女が観れなかったんだもん。全女のレスラーたちは、人の切なさとか儚さ、輝きっていう旬を全部見せてくれたじゃない。いまのヤツらはどこにそれを求めればいいんだよ。

俺たちにとって女子レスラーはいくつになっても〝姉さん〟だよ！

ど変態座談会

椎名　だからいま女子プロレスって壊滅状態だけど、なんとか盛り返してもらいたいね。まだ女子レスラーいるじゃん。植松（寿絵）とか超切ないけど、いいレスラーだよ。

玉袋　俺はフランス座っていうストリップ劇場の出身なんだけどよ、踊り子さんたちはね、ババアも若い人もいたけど、みんな俺にとって〝姉さん〟なんだよ。俺が女子プロに求めていたのは、そこかもしれねえな。俺は女子プロレスラーはみんな〝姉さん〟だと思ってる。哀愁とやさしさと人生をひっくるめてな。

ガンツ　強い人たちですよね。

玉袋　強いよな。俺、フランス座を辞めて〝姉さん〟たちとの生活がなくなって、猛烈に寂しかったんだよな。それで女子プロを観てよ、「〝姉さん〟たちここにいたんだ」と思ったんだよ。この人たちも〝姉さん〟だって。そういう気持ちで観てたのかもしれないな。

椎名　頭が上がんない感じですよね。

玉袋　いくつになってもそうなんだよ。俺もよ、新宿のクラブハイツっていうキャバレーで飲んでたらさ「赤江くん」とか声かけられてよ、よく見たら昔フランス座で歌ってた姉さんなんだよ。クラブハイツで歌ってたんだよな。俺にとってはいくつになっても一生〝姉さん〟なんだよ。だからよ、女子プロレスラーもみんな俺たちにとって〝姉さん〟だよな。

ガンツ　いやあ、なんかきれいにまとまりましたね。一時はどんなことになるかと思いましたけど（笑）。

玉袋　ど変態座談会だもんな。

椎名　でも、女子プロは両方があるのがいいよね。ヨコシマな気持ちと、真剣に観る気持ちと。だから、より燃えるんだと思う。

玉袋　だからよ、結局、俺たちは〝姉さん〟にヌイてもらいたいってことなんだろうな。

ガンツ　やっぱり、そういうオチですか（笑）。

玉袋　そうだろ、椎名？

椎名　もちろんです。

ガンツ　今回もありがとうございました（笑）。

【10年5月6日／都内・「加賀屋」中野坂上店にて収録】

椎名基樹のサムライ三昧

第49回

『青木vsメレンデスの深夜ラジオ的楽しみ』



「ニコニコ動画」などを通じ、日本のファン3万人がリアルタイムで見た青木vsメレンデス。そのこっそり、しかし熱く観戦するスタイルはかつての熱い時代を感じさせるものではあったが……。

ヒョードルvsブレット・ロジャースもそうだったが、ネットの生中継で観戦する格闘技の試合は妙な高揚感がある。『ニコニコ動画』で生中継された、青木真也vsギルバート・メレンデスのストライクフォース・ライト級タイトルマッチも、画質の悪さにはいささか（いやかなりか）閉口しながらも、何かいけないものを見るような感覚と、世界中の「好き者」の注視を肌で感じるような錯覚を楽しみながら観戦した。

自分が特別なことをしているようなこの感じは、中学生の頃布団の中で、AMラジオで『オールナイトニッポン』を聴いた体験にも似ている。そう考えれば、画質の悪さは、AMラジオの電波受信の悪さに通じ、特別性を高めるのに一役買っているのかもしれない。

この試合の意義も、ネットの生中継独特の特別性と合致している。それはつまり、この試合は世界最高の舞台PRIDEを奪われてしまった日本のMMAファンにとって、せめてDREAMで行なわれているライト級の闘いだけは、世界基準のレベルであることを確認して、再び情熱を持って日本のMMAを見ることができるかどうかの試金石になるということだ。日本のMMAファン難民が、一縷の望みを託して、放送状況の悪い画面にかじりついたわけだ。格闘技ファンにとって特別な気分とは、いつだって難民状態だったりする。

ボクシングのビッグマッチ風に試合のサブタイトルを筆者が勝手につけるなら「PROVE IT（証明せよ！）」だ。それは、日本のMMAライト級が世界レベルであり、そして青木真也の唯一無比のスタイルが、現在のアメリカのシーンでも通用するかの証明でもある。

かくして、証明されたものは、「あれ？オレってば、また幻想を見ていたの？」という自分のあいかわらずの甘さなのであった。ガックシ、とほほ。私（格闘技ファン）ってなんで甘いんだろう（by山田花子）である。

負けるにしても、青木はあまりにいいところなく負けてしまい、逆に「あれ？いままで青木ってどうやって勝ってきたっけ？」と不思議に思うくらいだった。それほど、メレンデスの寝技に付き合わず、スタンドの打撃で勝負する、今日流の戦術に、あっという間に青木の万策尽きてしまった感じがした。立ち上がれと命じられるとわかっていながら、猪木・アリ状態の下で「おしり歩き」をする姿がそれを象徴しているようだった。


青木はいままで同じような戦術の選手に鮮やかに勝ってきているわけだから、あの姿は非常に奇異に映った。それが、試合後にネット等で沸き起こったらしい、「金網・リング論争」につながったと思われる。しかし、金網とリングで、発揮できる実力がまったく違うなんてまったくナンセンスだ。MMAの本質や選手の実力の意味を、あまりに安易にとらえている。

桜庭やミルコ、ヴァンダレイ、五味の例を出すまでもなく、MMAにおいて敗戦は、その後の急下降につながることがほとんどだが、いままで青木に限っては、不思議とまだ底が見えぬ感じがして、実際その後も変わらず、勝ち続けていた。しかし、今回の敗戦は、青木の幻想がファンからも対戦相手からも消えそうな、そんな気さえがする。

今回の試合で寝技に付き合ってもらえぬことは誰もが想像しただろう。筆者は、その状況で青木のムエタイの力に期待していた。それはもちろん本人が「ムエタイって楽しいでしょ～」と豪語したからだ。しかしギルバート戦で見せた左ミドルは威力がなく、あれでは足をつかまえて倒してくれと言わんばかりだ。実際、青木もそれを感じて、左ミドルを出せなくなったように見えた。サウスポーに構えた選手にとって、左ミドルは最大の武器だと、青木本人がDEEP解説で語っていたのにもかかわらずだ。はたして、いずれ青木は、相手の動きを止めるような本当のムエタイの左ミドルを蹴れるようになるだろうか？　そういう身体のパワーがあるだろうか？　とても疑問である。いずれにしても、スタンド状態の改善が青木には必要なはずだ。頭のいい選手だから、独自の技の組み立てを練り上げて、ニュー青木になることを期待したい。

話題変わって、DEEPで行われた、MIKUの引退エキシビションは、とても切なかった。「男だったらまだ続けたかも」というMIKUの言葉が切ない。エキシビションの相手を務めた、藤井惠と8月に対戦が決まっていたらしいが、それを避けるように引退を決めてしまったようだ。藤井惠とは親友らしく、闘った後その先がない状況で、MMAのルールで闘うのはとてもつらいことなのは想像できる。もう証明する理由もないのだから、闘えないのは当然だ。ただ、あそこまで強くなるには、並大抵の努力ではないはずで、未来がないという理由でそれを捨てざるをえないのは切ない。プロディジーで入場して、あの打撃型のMMAスタイル！　超きまっていた。最高だった。もう、こんな選手出てこないだろう。お疲れさまでした。押忍！

最後に『UFC113』でライトヘビー級王者に輝いたマウリシオ・ショーグン。強かった。思えばPRIDE幻想が完全に崩壊したのは、ショーグンのフォレスト・グリフィン戦の敗戦だった。誰も止められないと思っていたショーグンが一本負けするなんて信じられなかった。しかし、今回の勝利で日本のファンの見ていたあのハリケーンのような強さは幻じゃなかったことを証明してくれた。それにして、最後のライトハンド・クロス、漫画みたかったな。すげえ！



自宅侵入男にお手柄フォール勝ち!

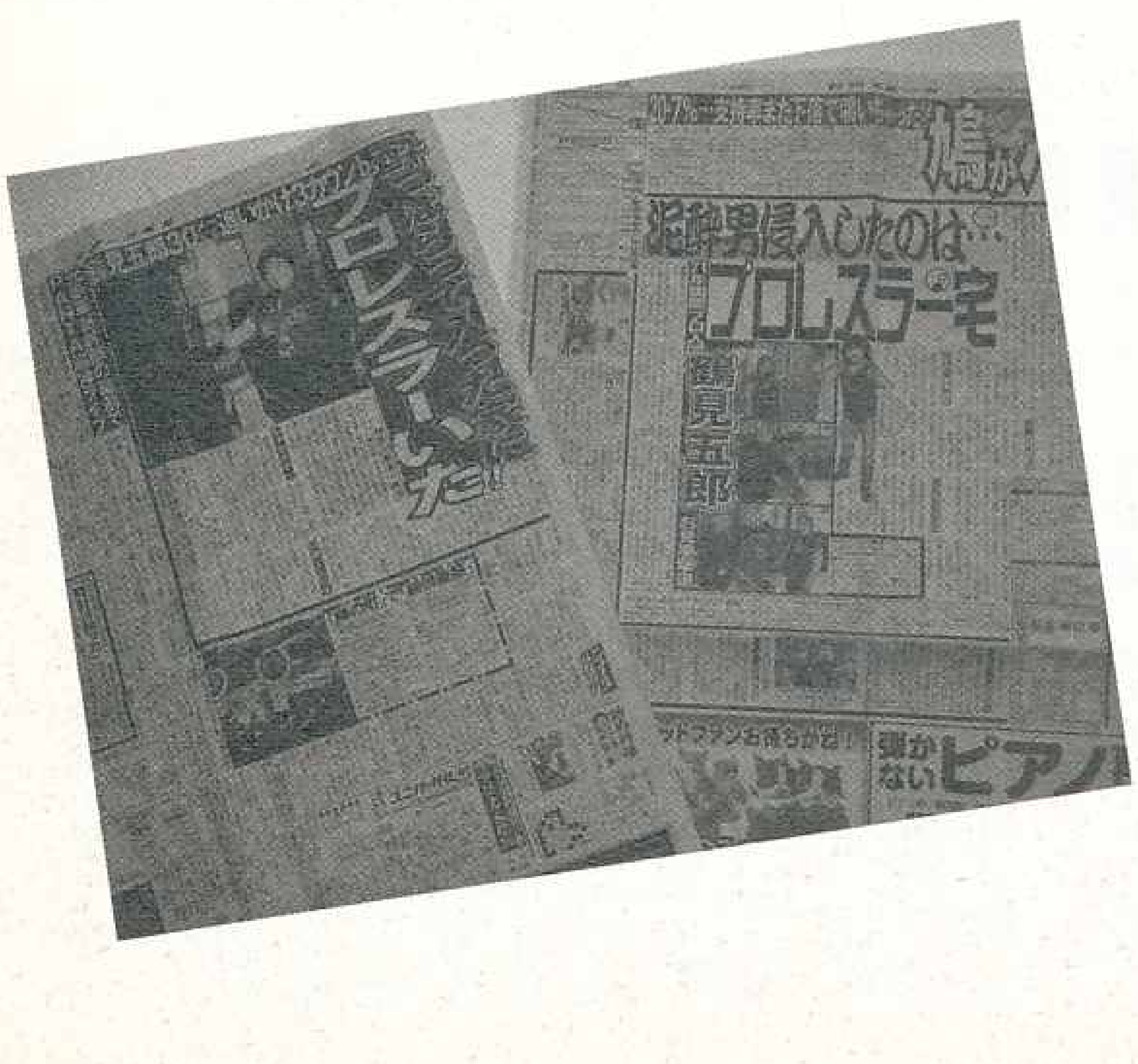
その一部始終を"茅ヶ崎最強親子タッグ"が激白!!

「街の平和は俺たちが守る！」

鶴見五郎&ゆうに（長男）

事件は4月29日、シーサイドタウンの茅ヶ崎で起こった！
あの鶴見五郎の自宅に不審者が侵入、それを鶴見が息子とともに取り押さえたというのだ。
プロレス界はもとよりニュース番組や一般紙でも報じられるほどの騒ぎとなったこの事件を、
グッドルッキングな親子が振り返る！ 街の平和はゴローにおまかせ!!

聞き手／鈴木佑



――いや〜、鶴見さん、驚きましたよ！　今日は自宅に不法侵入した男を取り押さえた事件について詳しく聞かせてください！

鶴見　そんなの俺だって驚いたよ（笑）。

――まず、犯行時に鶴見さんは就寝中だったとか？

鶴見　あのね、俺は普段からけっこう酒を飲むんだけど、あの日はちょうど休肝日で早めに寝てたんだよね。たしか23時とかだったかな。

――そのとき自宅にご家族は？

鶴見　息子と二人っきりだったんだけど、最初に俺が気づいたのよ。俺の部屋の前で深夜の2時ぐらいに「ガタン！」って物音が聞こえてさ、のぞき込んだら男が黙って突っ立ってるの。だからおかしいなと思って「なんだ？」って言ったら、「いや、すいません！」って言って逃げやがってさ。で、息子が「オヤジ、どうした？」って声かけてきたから、「おい、泥棒だ！　とにかくなんでもいいから、追っかけろ！」ってね。

――それで息子さんはすぐに追いかけた、と？

ゆうに　はい、パジャマに裸足で、そのまま何も持たずに追いかけました。

――怖くはなかったですか？

ゆうに　それはなかったんですけど、犯人の正体がわからないし、近くに車が停めてあって仲間が待機してる可能性もあったんで、ちょっとは警戒しましたね。

――捕まえたのは家のすぐそばだったそうですけど、時間にしてどのくらいで？

ゆうに　いや、もう2分くらいだったと思いますよ。なんか、追いかけたら犯人が息切れして突っ立ってたんですよ。だから最初に「おまえ、空き巣か？」って聞いたら、「はい」って答えて（笑）。

――それはまたずいぶんアッサリ観念したんですね（笑）。

ゆうに　で、「おまえ、アルコールでも飲んでんのか？」って聞いたら「はい」、「クスリでもやってんのか？」って聞いたら「すいません！」って感じでしたね。

――鶴見さんはそのあとに駆けつけたわけですね。

鶴見　うん、俺は靴を履いてたから（笑）。まぁ、でも犯人がグループだったらやばいから早めに行ったんだけど、もう現場に着いたときには息子が犯人を捕まえてたのよ。

――で、鶴見さんがゴロー・スープレックスから押さえ込んだ、と？

鶴見　いやいや、逆にケガでもさせたら過剰防衛になるから、そんなことはしないしない！

――失礼しました（笑）。それにしても、ゆうにさんはかなり落ち着いて対処したわけですけど、格闘技経験とかあるんですか？

ゆうに　いや、ほとんどないです。

――なんだか見た目は「茅ヶ崎生まれ、ヒップホップ育ち」って感じですよね。

ゆうに　え、どういうことですか？

――「悪そうなヤツはだいたい友だち」というか（笑）。

ゆうに　あぁ、いかついってことですか？　それはよく言われます（笑）。

鶴見　前に俺のジムがあったときは、コイツにも少しだけグラウンド技術とか教えてたけどね。

――おお、それはランカシャー仕込みの？

ゆうに　いやいや、そんな本格的じゃないです（笑）。

――しかし、その犯人も鶴見さんの家に



かつてメカマミーに対抗してメカゴローに変身した鶴見。その裏拳は一撃で岩をも粉砕する威力を誇り、いまもってマット界最強として語り継がれている。犯人もよりによってそんな男の家に入ってしまうとは……。

入ったのが運のつきというか。

鶴見　まあね。でも、あとから警察に聞いたんだけど、犯人は泥酔してて自分が何やったか全然覚えてなかったらしいよ。

ゆうに　見た目は普通のサラリーマンって感じでしたね。捕まえたときも「はい」と「すいません」しか言わなかったし。

鶴見　たぶん何を聞かれてるかわかんないから、「はいはい」言ってたんじゃないの？　何しろ「空き巣か？」って聞かれて「はい」ってすぐに答えちゃうんだからさ（笑）。

――ホント、酔った勢いというか出来心なんですかね。計画性のある空き巣は犯行前にそんな飲まないですよね（笑）。

鶴見　なんか犯人の会社が近くにあって車も置いてあったんだけど、飲んで運転できなくなったから、車の中で寝ようとしたらしいんだよ。そうしたらどういうわけか俺んとこに入ってきちゃって。たぶん、寝れるところを探してて思わず侵入しちゃったんじゃないのかなぁ。

――じつは国際プロレス時代からの鶴見さんのファンで、お宝グッズを狙っての犯行だったんじゃないですか？

鶴見　ハハハハ！　まぁ、写真のパネルとかはウチの壁中に貼ってあるけどさ。

――たとえば、かつて鶴見青果市場を恐怖のドン底に陥れた怪奇レスラーの抜け殻を盗もうとしたとか？

鶴見　あぁ、マミーのヤツとかは物置に入れてあるけどね（笑）。さすがにそんなもの好きいないでしょ！

――失礼しました（笑）。で、通報してすぐに逮捕となって一件落着した、と？

鶴見　いやいや、そこからが大変だったんだよ！　息子は家に残ったんだけど、俺は事情聴取で茅ヶ崎警察署まで呼ばれて朝まで付き合わされちゃったからね。「犯人を捕まえるのは大変なことなんで、ちゃんと証言してください」って言うもんだからさ。

凶悪（？）事件発生から犯人捕獲までを 徹底検証



本邦初公開？ これが鶴見五郎61歳の部屋の様子。事件時、鶴見は手前のベッドで寝ていた。もし犯人がバーベルに気づいていれば、中に屈強な男がいると知って犯行にはおよばなかったかも？



そのまま犯人は鶴見の部屋付近へ。引き戸を開けようとする物音に気づいた鶴見は、最初は鍵を忘れて玄関から入れない娘さんが、自分の部屋まで回ってきたのだと思ったとか。



犯人が侵入した鶴見宅横にある駐車場のブロック塀。同所では事件の2週間前に車が壁を破損させる事故があり、事件当時はすんなり鶴見の自宅敷地内に入り込むことができる状態だった。

――じゃあ、全然寝る間もなくって感じですか？

鶴見　そうよ。3時に警察が来たんだけど、それから朝の6時頃までず～っと事情聴取。5～6人に順番に聞かれたんだけど、同じことを何回も何回も聞くもんだからまいっちゃったよ。たぶん、言ってることに間違いがないか確認してるんだろうけどさ。で、ようやく帰ってちょっと横になってたら、今度はフジテレビが来たのよ。

――やっと寝れるかと思ったら（笑）。それは警察の発表を受けてってことですかね。

鶴見　うん、取り調べのときに「これ、広報に出していいですか？」って聞かれたんだよね。それはたぶんマスコミにリリースするってことなんだろうけど、俺は意味がよくわかんなかったから「どうぞ」って答えちゃってさ。まぁ、でも次の日とかに来るならまだしも、朝来られたからちょっときつかったよな～（しみじみと）。

――で、同時期に高木三四郎さんが、鶴見さんから「家に泥棒が入って捕まえた。ニュースに出るから見てくれ」って電話があったことをツイッターでつぶやいたら、今回の事件が一気に広まっちゃって（笑）。

鶴見　そうか、それで『日刊スポーツ』と『スポーツ報知』も来たのかもしれないな。その二つもその日のうちの取材だったから、ホント寝れなかったよ。

――ちなみに高木さん以外のレスラーに今回のことを報告しました？

鶴見　あとは佐野（直）とかかな。

――ゆうにさんもお友だちに言いました？

マミーの抜け殻を狙っての犯行？ そんなもの好きいないでしょ！

ゆうに そうですね。いや、テレビ局が来たときに僕は寝てたんですよ。で、起きたらちょっと大事になってたんでビックリしましたね。あぁ、オヤジって話題になるんだなぁって（笑）。

――ダハハハ！ とりあえず今回の事件にまつわる取材も落ち着いた感じですか？

鶴見 そうね。あと、昨日あれが来たな、関西のバラエティ番組。「高木さんから聞いたんですけど、映像流していいですか？」っていうから撮らせてあげて。なんて番組だったか……忘れちゃったな。

――忘れちゃいましたか（笑）。事件についていろいろと知り合いからも連絡あったんじゃないですか？

鶴見 ちょこっとだけね。あとはこのへんの店に行くと言われるよね、「大変だったね」って。そういえば澤（宗紀）から着信があったな……出なかったけど。

――出ませんでしたか（笑）。これでメディアでの露出も増えたわけですし、今回の事件に絡めて試合のオファーがあるんじゃないですかね？

鶴見 いやあ、いまのところとくにないですよ。ただ、今日（5月4日）は『マッスル』があるじゃない？ 「会場に来てください」って高木から連絡があったんだよ。何やるかも聞かされてないんだけど。

――話をもらったのはいつですか？

鶴見 二日ぐらい前。

――じゃあ事件後ですし、確実にネタにされますね（笑）。あと、明日のNEOのバトルロイヤルに「おんな鶴見五郎」って選手が出るみたいですよ。

鶴見 ハハハハ！ まぁ、プロレスっていうのは、なんでもありだからさ。

――鶴見さんもメカゴローに変身したこともありますしね（笑）。

鶴見 あったねえ。もう、お客さんに楽しんでもらえるならなんでもありなんですよ。

――あと、事件とは全然関係のない話なんですが、これも高木さんのツイッターで知ったんですけど、鶴見さんは試合があっても誰にも着替えるところを見せないとか？

鶴見 なによ、それ？ どういうこと？

――いや、単純にそういうポリシーなのかな、と（笑）。

鶴見 違う違う！ たとえば自分で興行をやるとさ、キップ切りやらイス並べやら全部やらないといけないでしょ？ だから面倒だし、最初から全部コスチュームを着ていくのよ。

――は～、単純に効率を考えてのことなんですね。

鶴見 そうよ。DDTでも高木には「早めに来てください」って言われるけど、こっちだってヒマじゃないからいつも時間ギリギリで行くのよ。だから先に着替えだけは済ませてるの。あとはシューズを履けばすぐ試合ができるわけだし。

――それは昔からなんですか？

鶴見 そうそう。初めはあれよ、国際プロレスにジャンボ鶴田が試合で来たときかな。もともと俺らは会場で試合コスチュームに着替えてたんだけど、鶴田はホテルで先に着替えて、その上にジャージを羽織ってたのね。それを見て「あぁ、そういうことやってんだ、全日本は」って思ったのがきっかけなのよ。

――ああ、そういうことなんですね。

鶴見 うん。全日本はそういうのが普通だったみたい。会場行ったらあとは練習するだけだから、時間も無駄にならないし。

――なるほど～。じゃあ高木さんは誤解してますね。裸を他人に見せないということで、「鶴見五郎女性説」を唱えてましたから（笑）。

鶴見 ハハハハ！ そんなわけないじゃない、俺には息子だって娘だっているんだから。

――あ、そういえば鶴見さんの娘さんが凄い美人だって評判を聞いたんですよ。なんでも去年のプロレス大賞に同伴したら話題になったらしいじゃないですか？

鶴見 ああ、そう（ニンマリ）。あれは一番下の娘なんだけどね。

――いくつになるんですか？

ゆうに 20歳ですね。で、僕と妹のあいだにもう一人弟がいるんですけど。

鶴見 プロレス大賞のときは、娘に「連れてって」って言われたんだよ。そしたら俺の娘だって知らないヤツらが、「鶴見のスケベヤローが若い女連れてきた」とか思ったんじゃないの？（笑）。

――ダハハハ！ 今日はその自慢の娘さんは？

鶴見 いまは出かけてるけど、「『マッスル』に一緒に連れてって」って言ってたよ。

――じゃあのちほど会場で親子写真を撮らせてください！ というか、お子さん



鶴見に気づかれるや、泥酔して千鳥足ながらも必死に逃げた犯人。茅ヶ崎ギャングともいうべき迫力ある風貌のゆうにさんに追いかけられ、きっと気が気じゃなかったことだろう。



鶴見宅近辺の路上で早々と力つき、挙動不審気味に立ちすくんでいた犯人。そこに「おまえ、なんか持ってるのか?」と警戒しながらも、ゆうにさんはジリジリと近寄っていった。



犯人が無抵抗なのがわかると、ゆうにさんは両手首を持って捕獲。ちなみに今回の事件についてDDTには問い合わせが相次いだとか。「俺、べつに所属じゃないのに高木には悪いことしたな」（鶴見）。



そして3分後に遅れて鶴見が到着すると、ゆうにさんは犯人の携帯電話から警察に通報。あわれ犯人の逃走劇もあえなくジ・エンド、こうして茅ヶ崎の平和は守られたのだった!



「崎の平和は俺たちが守る！」

「街の平和は俺たちが守る!」

たちもけっこうプロレスが好きなんですか?

ゆうに　そうですね、僕と妹は大好きですね。

——なるほど～。ゆうにさんにとって、鶴見さんはどういうお父さんですか?けっこうプロレス界の中では常識人と言われてますけど……。

鶴見　(さえぎるように)いや、そう言われるんだけどさ、ウチだと女房や子どもたちからは「変わったオヤジだ」って言われてるよ。フフフ。

ゆうに　なんかえらく短気なんですよ、自己中で。

——手をあげられたこととかあります?

ゆうに　まぁ、僕がちょっとワルかったときなんかにガンってやられたことはありますけど。

鶴見　うそうそ、やってないよ。手出したらすぐ女房が怒るからさ。家族からバッシング浴びて俺だけ孤立しちゃうから(笑)。

ゆうに　まぁ、そんなに厳しいわけではないんですけど。逆に厳しかったのは剛さんですね。

——え、剛竜馬さんですか?

ゆうに　はい。小さいときに「挨拶はきっちりしろ」とかよく言われたりしましたよ。

鶴見　剛は一時期、よく子どもを連れてウチの興行とか家なんかに遊びに来てたんだよ。

——へ～、家族ぐるみの付き合いだったんですね。

ゆうに　そうですね。

——じゃあ剛さんが亡くなられたときはショックでした?

ゆうに　はい、もちろん。もう憧れてましたから。なんていうんですかね、その人格っていうか……。

鶴見　ハハハハ!

——お父さんが不謹慎にも笑っちゃってますけど(笑)。

鶴見　いや、亡くなったのにこんなこと言うのもなんだけど、彼はわりとトンパチっていうか、けっして常識人ではないからね(キッパリ)。

——ダハハハ!　さて、鶴見さんの今後の活動予定もお聞きしたいんですが?

鶴見　まぁ、オファーがあったら顔出すとか、そのぐらいよ。正式には引退してないんだけど、去年、足の骨を折ってからは体調的にね。ヒザも痛めてて、まだ治ってないからさ。



5.4『マッスルハウス9』で鶴見は鶴ティモ校長として、控室からお金を盗んだマミーを捕獲するという今回の事件のパロディで登場! セリフは一切ないにもかかわらず、その存在感は群を抜いていた。

まぁ、「飲んだら飲まれるな」ってことだよ でも犯人にはキツいお灸になっちゃったね

——とりあえず今年のDDTの両国大会には早々と参戦が発表されてますね。

鶴見　まぁ、それは去年の両国大会のときから高木に言われてることだから。

——あのときは高木さんとタッグを組むはずだったのに、鶴見さんが遅刻しちゃったんですよね。

鶴見　いや、日にちをカン違いしちゃってさ。俺はまさか「日曜日にやるわけない」と思ってたの。ほら、会場使用料って休日は高いじゃない?　だから平日やるって勝手に思い込んでて。そしたら高木から電話がかかってきて「いまどこですか?」って言うから「家だよ」って答えたら、「今日、試合ですよ!」ってさ。

——結局、試合時間には間に合わなくて。

鶴見　そうそう。とりあえず支度してすぐ出たんだけど、やっぱり無理だったね。で、「今年は遅刻しないでください」って言われてるんだけど、それってのは「遅刻してくれ」ってことなんだよ(笑)。

——お約束みたいに(笑)。

鶴見　まぁ、もうしないけどさ。

——では、最後に今回捕まった犯人に対して贈る言葉をお願いします!

鶴見　まぁ、「飲んだら飲まれるな」ってことだよね、フフフ。でも、聞いたらそんなにたいして飲んでないのよ。焼酎6杯に中生がジョッキ2杯ぐらいらしいから。

——鶴見さんからしてみれば、全然飲んだうちには入らない、と。なんでも、警察には「できれば寛大な処置を」ってお伝えしたとか?

鶴見　そうそう。だって見た感じもホント、普通のサラリーマンなのよ。たまたま間違って入ってきちゃって、俺がプロレスラーだからってこんなニュースになっちゃってね。ちょっとキツいお灸だったかなって思うよね。

——なるほど。まぁ、とりあえず今日の『マッスル』で今回の事件がどんなふうにネタにされるのか楽しみにしてます!

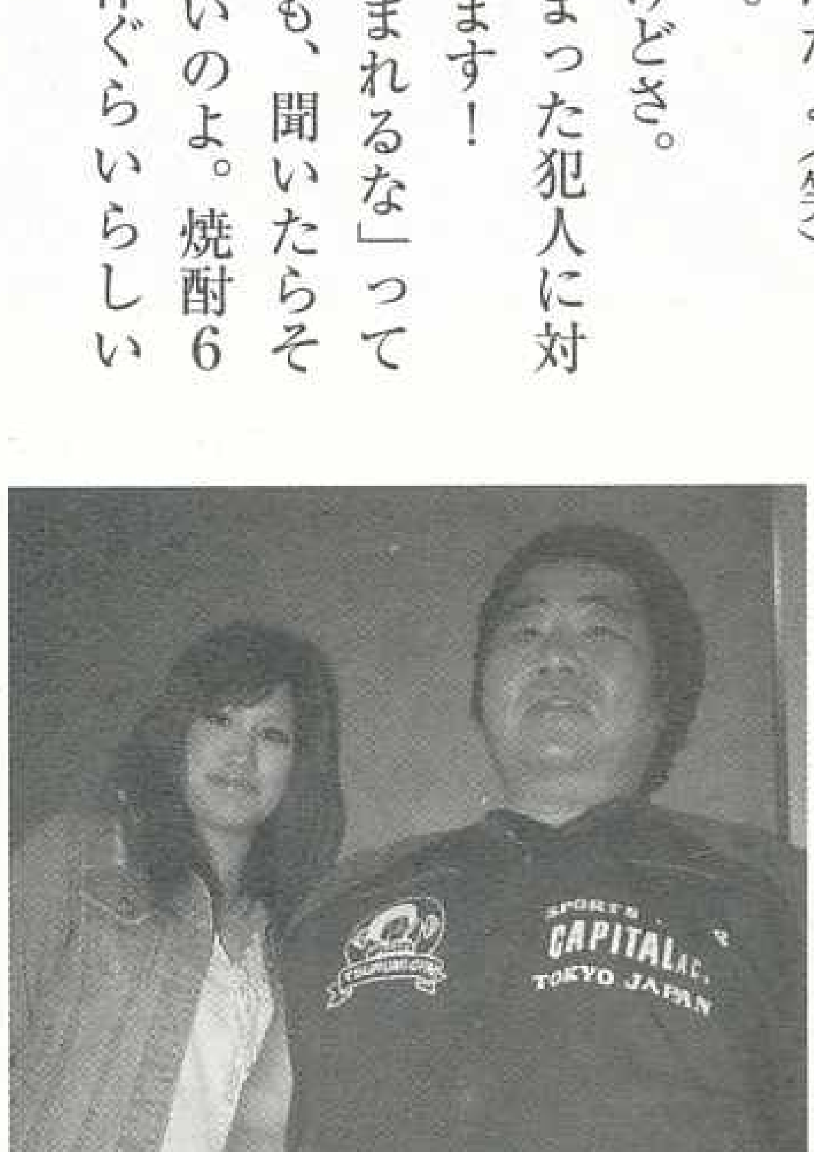
鶴見　もう、お客さんが楽しんでくれればなんでもいいよ。

——あ、最後にもう一つ。鶴見さんはツイッターはやらないんですか?

鶴見　無理無理!　俺は機械っていうかメカには弱いんだから。自分はメカゴローなんてやったけどね(笑)。

——ダハハハ!　今日はありがとうございました!

【10年5月4日/神奈川県・茅ケ崎にて収録】



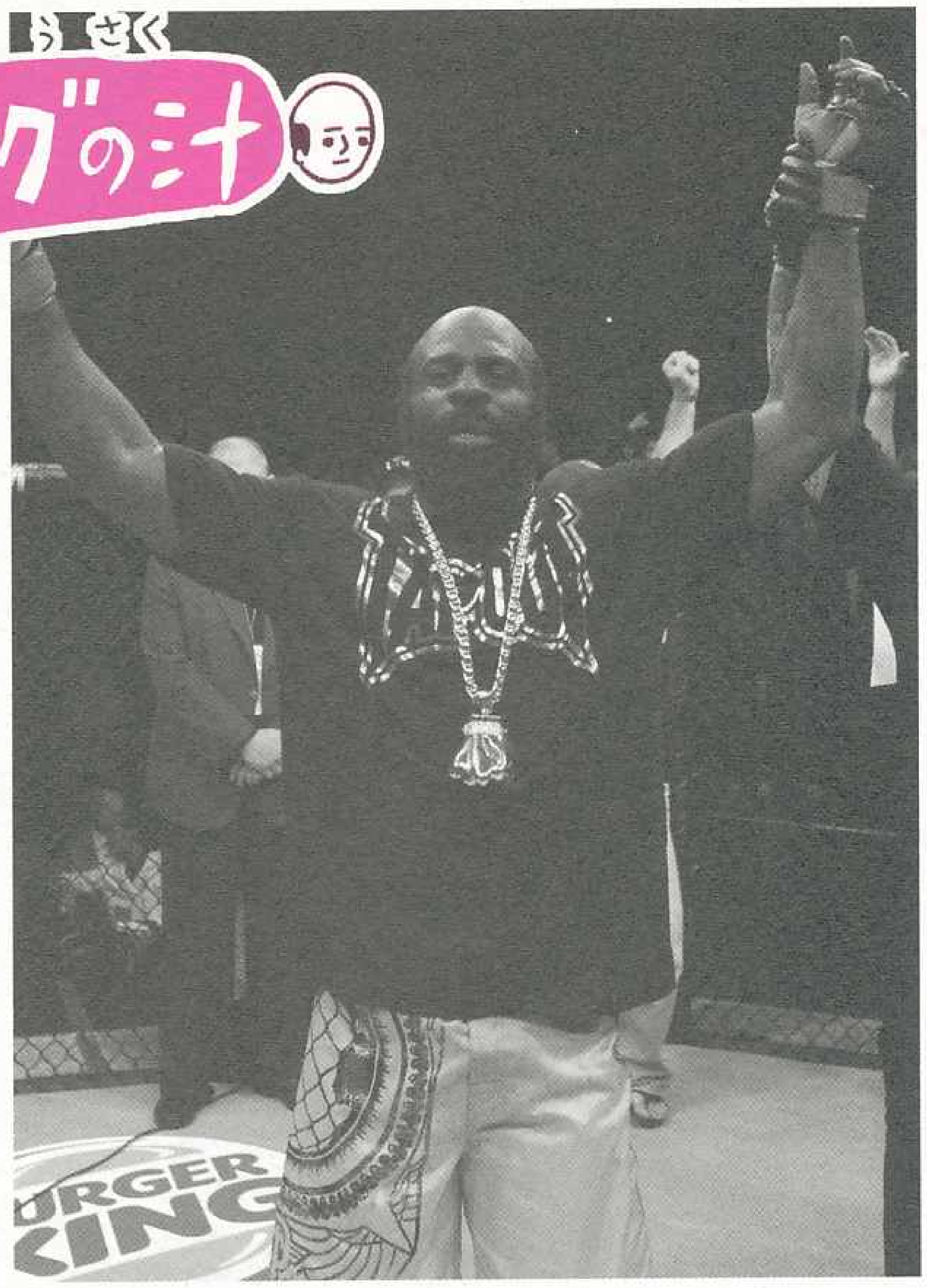
つるみ・ごろう■本名・田中隆雄。1948年11月12日、神奈川県出身。アマレスの実績を引っさげて国際プロレスに入門。同団体崩壊後は全日本、SWSと渡り歩く。その後はインディー団体を転々とし、『マッスル』では鶴ティモ校長としての顔も持つ。隣は鶴見自慢の娘であるエリナさん(20歳)。ズバリ、金星なんである。

第54回

さよならキンボ おめでとうショーグン

花くまゆうさく

豆リングの汁



WOWOWで放送中の『TUF』のヘビー級シリーズがおもしろい。こないだ観た第5週目の回（ウェズ・シムズが肩固めで落ちた回）なんか、おもしろすぎ。各キャラのおもしろエピソードをいろいろ散らし、最後はシムズがあっさり落ちるという番組的にも見事なオチで完璧。

それにしてもシムズの吹き替えの声の演出は見事！　初めの週、あの声で一言しゃべったの聞いただけで噴いちゃった。ただ、今シリーズ唯一の不満は、試合になると音声が実況席になること。アメリカのテレビ番組を観てる雰囲気が台なしな感じで残念です。

『UFC113』。キンボ、初めの三角絞めこらえたの感心。ショーグンの寝技もあいかわらす感心。最後もレフェリーが止める前に自分から攻撃止めたのが美しくてカッコいい。

この前の大会のメインで、試合を成立させようと最終ラウンド突っ込んでいったデミアン・マイアの姿もグッときた。アンデウソンの戦法にダナは激怒してたが、日本にはもっとつまらない漆谷がいる。今月の修斗JCB大会どうなるかしら？



Hanakuma Yusaku
◎『アドベンチャーランドへようこそ』に胸キュン。

4月25日、吉田秀彦選手の引退記念興行を観に日本武道館へ行ってきました。

この大会はエンセン（井上）がひさしぶりに試合するっていうんで、前から応援に行こうとは思ってたんだけど、それだけじゃなくて、やっぱり吉田さんの最後の試合っていうこともあって会場に行きたかったんだよね。

俺と吉田さんって、あんまり関わりがないように思われるだろうけど、じつは何度かちょくちょく一緒に練習させてもらったりしてたんだよね。吉田さんが総合格闘技に転向したばかりの頃は、髙田道場でスパーリングをやらせてもらったり。その後もTKのジムなんかでよく一緒になって、練習してたんだよ。ここ最近は一緒に練習する機会もなくなっちゃったけど、吉田さんは凄く力が強かったことをよく覚えているよ。

だから最後ということで「お疲れさまでした」って伝えたかったんだよね。吉田さんは俺より歳は一つ上だけど、同年代の選手が引退するっていうのは、やっぱり寂しいからね。試合前にちょっと会って、軽く挨拶させてもらったよ。

で、試合の感想だけど、最後の腕十字は取られちゃってもよかったんじゃないかな〜。これは俺がプロレスラーだからそう思うのかもしれないけど、やっぱりこれからをカズに託すわけだし、判定負けするより、あの体勢まで持っていかれたら、腕を取られてもよかったかなって。カズの今後にとったら、吉田さんから一本取ってるのと取ってないのとでは、けっこう差があるとも思うからね。

でも、とにかく吉田さんには「お疲れさまでした」って言いたいね。

あとエンセンの試合だけど、復帰戦でしっかり勝てて、まずはほっとしたよ。

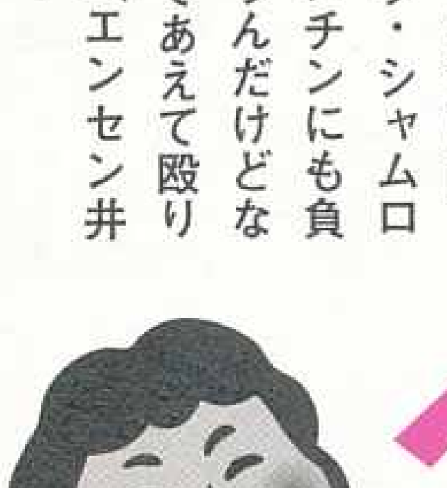
ただ、エンセン本人は、試合前から「殺したい、殺したい」「殴りたい、殴り合いたい」って言ってたから、殴り合う前に本能的に寝技にいって終わっちゃったんで、試合後ストレスがあったらしいよ。

組んで倒したあと、殴り合うためにわざとスタンドに戻そうとも思ったらしいけど、極めにいっちゃったのが心残りだって。それはそれでエンセンらしいよね（笑）。

あと、エンセンは最初に殴りにいったとき、自分が目をつぶってしまったのがショックだったらしい。そんなこともあって、完勝だったけど、ストレスが溜まったらしいから、もう1試合ぐらいやるんじゃないかな？　エンセンはファイトマネーが高いから、なかなか試合を組むのが難しいかもしれないけど（笑）。

エンセンも本当はもう試合はしないつもりだったらしいんだけど、本人としては一昨年に大麻で捕まって、日本にいられなくなりそうだったとき、応援してくれた人がたくさんいたんだって。その人たちのためにも、もう一回、復活する姿を見せたいと思って、じつは去年の修斗（VTJ）での復帰の話が進んでいたらしいんだよね。VTJってエンセンとも縁が深いからさ。でも、そのときはまだ入管の問題で、試合ができなかったらしい。だから、今回の『アストラ』っていうのは、タイミング的にもよかったんだよね。

でも、エンセンってなんでそんなに殴り合いたいのかな？　エンセンって寝技はホントに強いから、殴り合わないほうが絶対いい結果になると思うんだけど。冷静に闘ってたら、フランク・シャムロックやボブチャンチンにも負けなかったと思うんだけどなあ。でも、そこであえて殴り合うからプロの「エンセン井上」なんだろうね。



金ちゃんのどこまでやるの？

●第46回● エンセンの復帰戦の巻

Hiromitsu Kanehara
◎本音炸裂コラムほぼ毎日更新中!
金原弘光オフィシャルHP
http://www.hiromitsu-kanehara.com/



オイオイオイ！　タツヤ・カワジリが編集部に来たって話じゃないか！　ちょっと待ってくれよお。なぜ編集部の野郎どもはタツヤのベストフレンドであるこのオレサマを呼ばないんだい!?　え？　タツヤに呼ばれてない時点でベストフレンドじゃないって？　……確かにそうだな。って、オレを落ち込ませるのだけはホントにやめてくれよお。

MAY号へのお便り紹介

よくも悪くも五味隆典選手の記事が気になりました。ギラギラした五味が観たいのですが……。チャレンジャーとしての五味が一番五味らしいのですが、なんとも言えないですね。
【神奈川県・大内和彦さん・会社員・27歳】

Dなんだよお。カズヒコのコメントはなんだか寂しげじゃないか。タカノリ・ゴミはそんなにギラギラが足りなかったのかい？　しかし、ギラギラといえば、ギンギラギンにさりげなくってのはいったいどういう意味だい？

ミラノコレクションA.T.のインタビューを読んでプロレスラーの印象が変わりました。たいへんな努力家の人だったんですね。なんでも新弟子に戻ってやらなくては成功はないですよね。新しい人生も頑張ってください。そして、ターザン山本！さんも新弟子に戻って頑張ってください。
【神奈川県・廣木和宣さん・会社員・45歳】

Dカズノリはいつもハガキをくれるけど、たまにはいいこと言うじゃないか！　確かにターザンというオールドボーイは、何も知らないオレから見ても出直したほうがいい気がするな。クックックック。



「ターザン山本！邸に潜入！」の記事がおもしろかった。ターザンの家にあったビクトル古賀先生の本は、正直私が買い取りたかったです。
【北海道・安部正典さん・フリーター男・37歳】

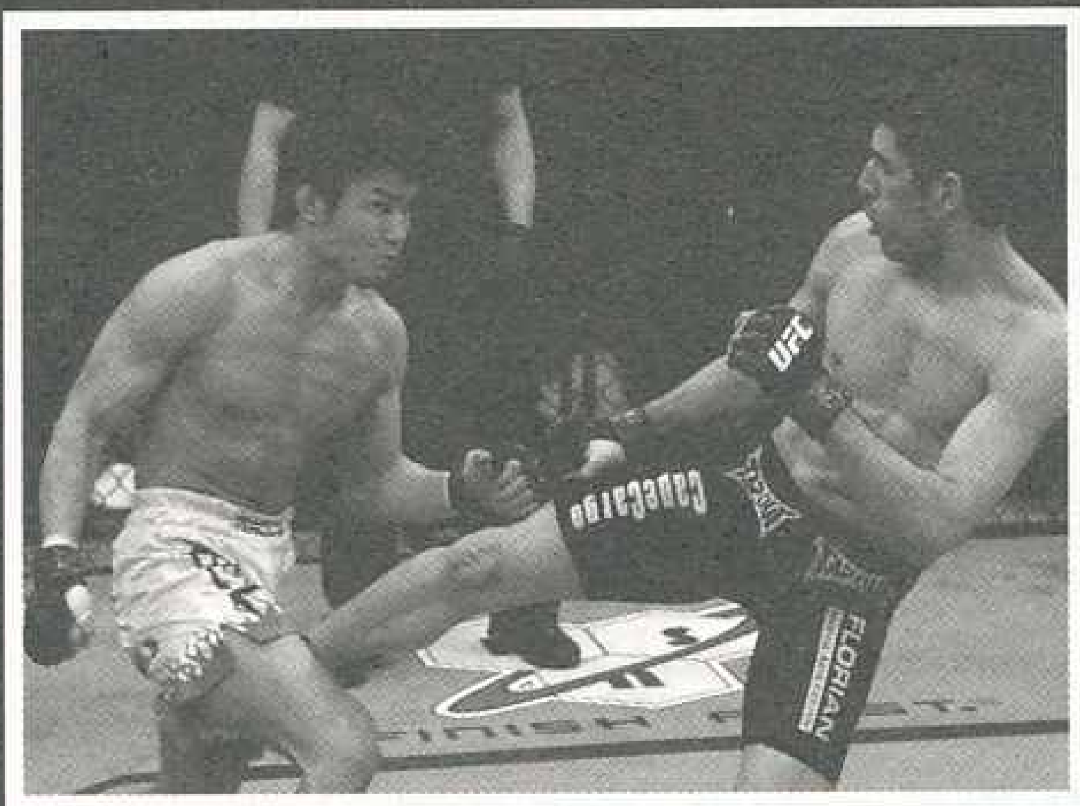
Dユーはそんなことを言っていると、本当に買わされるから気をつけろよ！　しかし、『kami-pro』のホームページのフォトニュースでアップされてたターザン山本！邸のアクセスは、ここ最近では群を抜いていたらしいな！　アッハッハッハ！

川尻達也の記事がおもしろかった。奥さんに当たってしまうくらいイラついているんですね。もう少し読みたい記事内容でした。次号でぜひ!!
【茨城県・鈴木エリさん・会社員・27歳】

Dエリがそう言うと思って今号でもタツヤ・カワジリにインタビューしているから読んでくれよな！　しかし、タツヤはなかなか龍馬の格好が似合うじゃないか。オレとどっこいってところだな！　え？　いいかげんにしろ!?

長島☆自演乙☆雄一郎インタビューがおもしろかった。MAXが終わって初めての格闘技雑誌のインタビューだったので読みたかった。ほかの格闘技雑誌と違って、コスプレ姿なのも高評価！
【神奈川県・渡辺三楽さん・会社員・32歳】

Dジエンオツというボーイは得体の知れないコスプレをするそうじゃないか。しかし、コスプレした格闘家がK—1 MAXの王者だなんて、いったいジャパンはどんなことになってるんだい？



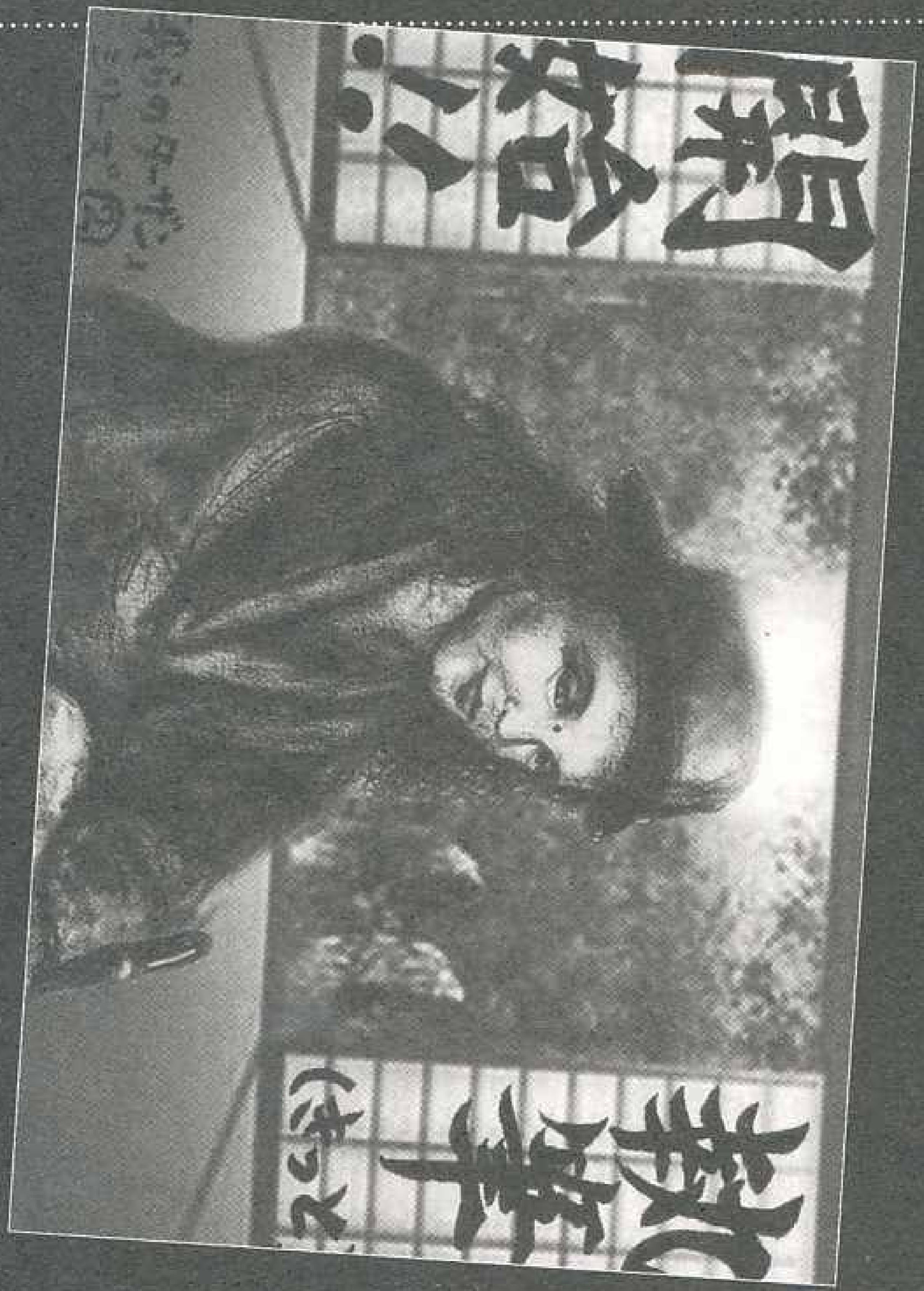
俺たちの五味隆典座談会がおもしろかった。PRIDEの頃の〝火の玉ボーイ〟、その当時の五味の強さを知っているがゆえの愛のムチ。五味の実力はこんなもんじゃないと皆思ってる。一皮むけてくれという思いが伝わります。
【長野県・矢崎佳和さん・会社員・33歳】

Dおっと、ここでもタカノリの話かい？　しかし、タカノリはまったく『kami-pro』のインタビューに出てないらしいじゃないか。え？　取材できない？　よし！　それならオレがつないでやるぜ！　まずはサーフィンからだな。アッハッハッハ！

MAY号 おもしろかった記事 RANKING

NO.1 五味隆典
NO.2 タイガー戸口
NO.3 郷野聡寛×SRCグリーン
NO.4 ミラノコレクションA.T.
NO.5 ターザン山本!邸潜入

おいおい、タイガー戸口とSRCグリーンが混在している雑誌なんて、まったくわけがわからないぜ。しかし、ここ最近の『kamipro』は増刊号を出しすぎてて、どの記事がどの号に載ってるのかわからなくなってきたぜ。それはそうと、『kamipro』編集部は忙しいはずなのに、オレにはまったく仕事が回ってこないな。いったいどういうつもりなんだい？



熊本県・佐藤ZIVさん／おっと、これは前号でターザンのイラストを4枚も送りつけてきたZIVじゃないか。ターザンが執筆開始!?　わけのわからないことを描いてるヤツは逆さに載せてやるぜ！

大阪府・英加直純さん／これはこれは、ナオズミはひさしぶりの投稿じゃないのかい？　いったい、オレに挨拶もなく何をやってたんだい。しかし、あいかわらずナイスな切り絵だな。また頼むぜい！



オレも参院選に出馬してやるぜ。誰でもオファーしてくれ!



ファンキーでクレイジーなアイツが
読者のメッセージを
Check it out!!

"読者ペイジ" ジャクソン

146号へのお便り紹介

北斗晶はナンバーワンだ。現役時代はともかく、引退後も女子レスラーとしては最高の成功例だと思う。
【北海道・佐藤稔さん・学校事務・43歳】

D 成功か……。なんていい言葉なんだい。しかし、確かにホクトというミセスはテレビに出まくってるよな。一つくらいオレが代打で出てもいいような気がするんだが。……いや、いいよ。ユーたちはどうせ速攻で否定するんだろ？

武藤敬司特集がおもしろかった。当時のプロレスはよく知らないが、記事を読んでいるだけで、武藤敬司幻想が抜群にアップした。プロレスも天才的なうえに、真剣勝負でも最強かもしれないとなると、これはたまらない。20歳くらい若返ってほしいと思う。
【東京都・新撰組！さん・会社員・40歳】

D おっと、これはナイスな意見じゃないか。ホント、ケイジ・ムトウが20歳若返ったら、いまのマット界はどんでん返しになるかもだよな！ 考えただけでゾクゾクするぜ！

金ちゃん&高山に加えて、エンセン井上が登場した『Uインター外伝』がおもしろかった。当時は相当、六本木に行ってたんだなあと関心した。しかし、こうなったら六本木の話だけでいいから安生に話を聞いてみたい気もする。
【東京都・司令長官さん・自営業・40歳】

D そうだぜ！ ミスター・アンジョーはいい話をいっぱい持ってるのに、ちっとも『kamipro』に出ないって噂じゃないか。ぜひ六本木話を聞かせてくれよお。



146号のおもしろかった記事はザ・グレート・カブキの「マッチメイカーが語るSWS舞台裏の真実」です。私は『週プロ』読者でしたので、当時はSWSに対してネガティブなイメージでしたが、まさかアンダーテーブルマネーとは驚きです。
【兵庫県・春名義行さん・会社員・43歳】

D プロレスってのはそういうのがあるからおもしろいっていうヤツはたくさんいるよな。とくに変態世代は垂涎ものなんじゃないのかい？

え？ なんでそんな難しい言葉知ってるのかって？ ユーはなかなかいいところに気がついたな。やっとオレのジーニアスさに気づいたか！

高野拳磁伝説がおもしろかった。PWCはよかったです。昔、観に行ったことがありますが、ロビンやミスターヒトなんかもいたような気がします。90年代は一番プロレスにはまっていた時期で、なつかしいです。
【静岡県・松本学さん・会社員・40歳】

D しかし、ミスター・スギサクというヤツは、いい歳していったい何を語っているんだい？ まったくこっちがおかしくなっちまいそうだぜ。しかし、一つの青春をケンジ・タカノに捧げるというのも、案外悪くないかもな！

デビル雅美インタビューがおもしろかった。「すべての試合が勝ち負けが決まっている」ということを否定してくれたので、ありがたかった。やはりガチンコもあったのでうれしかったです。
【神奈川県・佐々木学さん・会社員・44歳】

D すべての勝ち負けが決まってないからこそ、プロレスがおもしろいんじゃないか！ 最近はそういう色気のある試合はやってるのかい？

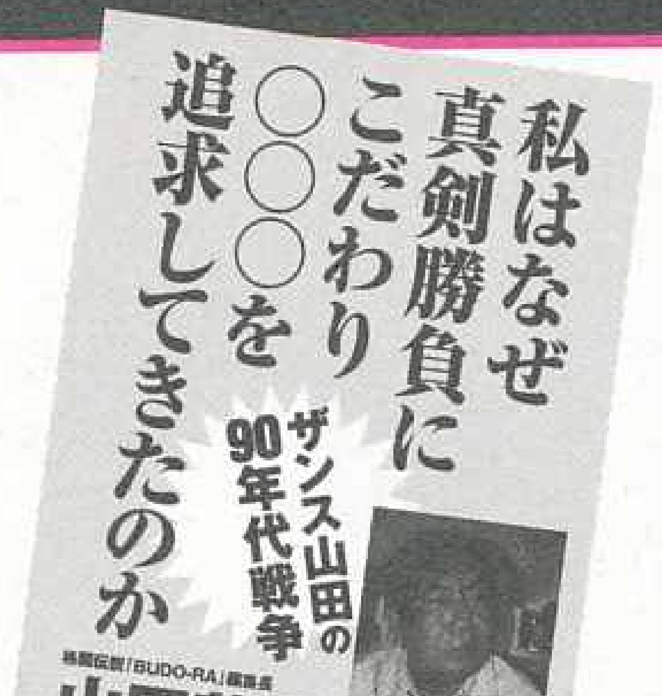


kamipro146号
おもしろかった記事
RANKING

NO.1 北斗晶
NO.2 武藤敬司
NO.3 ザ・グレート・カブキ
NO.4 福澤朗
NO.5 谷川貞治

やっぱりミセス・ホクトがトップだったか……。聞くところによると、なかなかプロレスのことを語らないミセス・ホクトは、阿修羅チョロの最後の仕事だというのを聞いて出てきてくれることになったそうじゃないか。阿修羅チョロってヤツは気づいたらパトロールをしているようなヤツだったが、ちゃんとやるときはやるんだな。アッハッハッハ！

お詫びと訂正



なんと！『kamipro』No.146でインタビューに答えてくれたレジェンドエディター エイジ・ヤマダの肩書きが間違ってたって話じゃないか。まったく、編集さんは何をやってるんだい？ とんだ●●●雑誌だぜ！ 正確には「『BUDO-RA BOOKS』編集者」ってことだそうだぜ。懐の深いミスター・ヤマダだったからよかったものの、今度からはくれぐれも気をつけてくれよな！（怒）。

衝撃ショット！

タツヤ・カワジリがご乱心!? 龍馬セットの見本も凄い！



おっと、この写真はいったい何が起こってるんだい？ え？ リョウマ・サカモトのコスプレセットだって？ Oh! 編集部員のスズキィが東急ハンズで買ってきたってヤツだな。このモデルもどうかと思うぜ。さすがのオレでも断るけどな！ しかし、そんなコスプレをタツヤは進んでやったって話じゃないか。まったく、タツヤってヤツはなんてナイスガイなんだ。しかし、見本ほどじゃないが、タツヤもズバリ言ってへんだぜ！ アッハッハッハ！

おハガキ募集!!

おハガキ、どんどん送ってくれよ！
ケータイからでもOKだぜ!!
どんな意見、感想、苦情、抗議、お悩み、ダメだしでも、ぜーんぜんキャッチするから安心しろって！ 待ってるぜ！
こんな情報も24時間どんとこい！ってヤツだ。
- 譲ってほしいもの
- タレコミ情報
- 選手に対するコメント、試合の感想
- その他、オールOKだ!!

以上、すべてのお便り・イラストのあて先は
〒162-0805
東京都新宿区矢来町41-1
ザ・フタガミハウスNo.1
kamipro編集部「八百長」係まで。

携帯サイト『kamipro Move』からの投稿もできます。

kamipro books

驚ガク！ 衝ゲキ!! kamipro booksシリーズ！ 死闘インタビューの歴史的目撃者になれ!!

PRIDEはもう忘れろ！



フジテレビショックから始まった
日本マット界激動の歴史を追う！

フジテレビショックは日本格闘技界に何をもたらしたのか？ 本誌でおなじみのライター橋本宗洋が送るMMAクロニクル。本書は、本誌携帯サイト『kamipro Move』で好評連載中の週刊コラムを厳選収録したものである。PRIDE凋落の時期からスタートした連載は、あらためてPRIDEの存在意義、役割を見つめ直し、そしてPRIDE消滅後、それでも生き続ける格闘技のおもしろさを綴っている！

B6変型判　336ページ
定価=1,680円（本体1,600円+税）

悪役道 ヒールたちのブルース



悪の道を歩けるのは
選ばしれ者のみ！

"悪の道"に精通する豪華16名が珠玉の"ヒール哲学"を激白！ 反則攻撃、挑発行為、ラフファイト、モンスター、エゴイスト、アナーキスト、アンチヒーロー……。悪とは何か？ 悪役とは何か？ 本書は因縁の内藤大助戦に勝利を収めた亀田興毅をはじめ、『kamipro』誌上に掲載されたさまざまな悪役のインタビューを厳選収録。時代に憎まれし、ヒールたちのブルースを聴け！

B6変型　304ページ
定価=1,890円（本体1,800円+税）

新日本プロレス学習帳



"業界の盟主"の魅力を
凝縮したインタビュー12連発！

★鈴木みのる&獣神サンダー・ライガー★小林邦昭★平田淳嗣★金本浩二★山本小鉄★新倉史祐★田中秀和★中西学★天山広吉&金原弘光★マサ斎藤★永田裕志★中邑真輔

『kamipro』に掲載された新日育ちのレスラー&関係者のインタビューが一冊に！ これを読めば老舗団体の過去・現在・未来がまるわかり！

B6変型判　320ページ
定価=1,680円（本体1,600円+税）

魔王 秋山成勲 二つの祖国を持つ男



秋山成勲なのか
チユ・ソンフンなのか——。

2006年12月31日大晦日、秋山成勲vs桜庭和志戦で発生したクリーム塗布事件。この一件以降、秋山は日本では悪質な反則選手、片や韓国では悲劇の元・在日韓国人と、評価が真っ二つに分かれた。本書籍は秋山成勲が、柔道界での挫折ののち、総合格闘技家としてデビューして"魔王"と呼ばれる怪物に至るまでを検証するノンフィクションだ。

B6変型判　264ページ
定価=1,680円（本体1,600円+税）

生前追悼 ターザン山本！



え、ターザンが死んだ!?
90年代プロレスを徹底検証！

★浅草キッド★いしかわじゅん★堀辺正史★更級四郎★松本晴夫★杉山頴男★谷川貞治★山口日昇★金沢克彦★市瀬英俊★小島和宏★菊地成孔★Oka-Chang★原タコヤキ君★椎名基樹 ほか

『週刊プロレス』編集長として辣腕を振るった山本さんの人生を通して、90年代プロレスブーム、はたまたプロレスという生き様を振り返る！

B6変型判　304ページ
定価=1,470円（本体1,400円+税）

PRIDE機密ファイル 封印された30の計画



ついにその秘密のベールを解禁!!
PRIDE幻の超極秘プロジェクト!!

★高田vsヒクソンの前座に前田日明登場!?★長州力、橋本真也、船木誠勝の参戦計画★ホイスvsケアー消滅の計画★PRIDEが小錦獲得に動いた!?★"皇帝"ヒョードルを二度破った男 ほか

その消滅から早2年——世界最高峰のリングに封印された30の計画を発掘！ さらに青木真也、三崎和雄ら6大インタビューも同時収録！

B6変型判　296ページ
定価=1,680円（本体1,600円+税）

U.W.F.変態新書



ダメな大人たちへ捧げる
"変態"とUWFの晩餐！

★UWF★前田日明★船木誠勝★高田延彦★桜庭和志★ターザン山本！★キン肉マン★PRIDE★プロレス★変態とは何か？（菊地成孔スペシャルインタビュー）★変態解説

プロレス界の一大潮流となったUWF。そのUWFに人生を学び、人生を狂わされた変態的プロレスファンたちが、UWF神話を語り倒す！

B6変型判 296ページ
定価=1,680円（本体1,600円+税）

八百長★野郎



ミスター高橋本から7年……
"呪いなき"時代のプロレス再入門書!!

★マッスル坂井★大槻ケンヂ★菊地成孔★森達也★杉作J太郎★ミスター高橋★菊池孝★高木三四郎★ハチミツ二郎★鶴見亜門★プロレス業界初"台本"全文掲載！

カミングアウト当事者から元ファンの知識人まで総動員してプロレスを再考！ "プロレスの向こう側、『マッスル』"の世界に迫る！

B6変型判　296ページ
定価=1,680円（本体1,600円+税）

底なし沼 活字プロレスの哲人 井上義啓 一周忌追善本



井上義啓とは底が丸見えの
底なし沼である——!!

★『週刊ファイト』&『SRS・DX』激筆再録★『猪木は死ぬか』、『不在証明あるいは猪木へのレクイエム』★新間寿★夢枕獏★ターザン山本&吉田豪★『kamipro』ラスト喫茶店トーク ほか

"活字プロレスの父"井上義啓氏の一周忌追悼本!! 氏を偲ぶインタビューや、人生最後の旅模様を振り返るエピソードも収録！

B6変型判　312ページ
定価=1,680円（本体1,600円+税）

吉田豪のセメント!! スーパースター列伝 パート1



吉田豪インタビュー11連発!!
インタビュー本の最濃傑作！

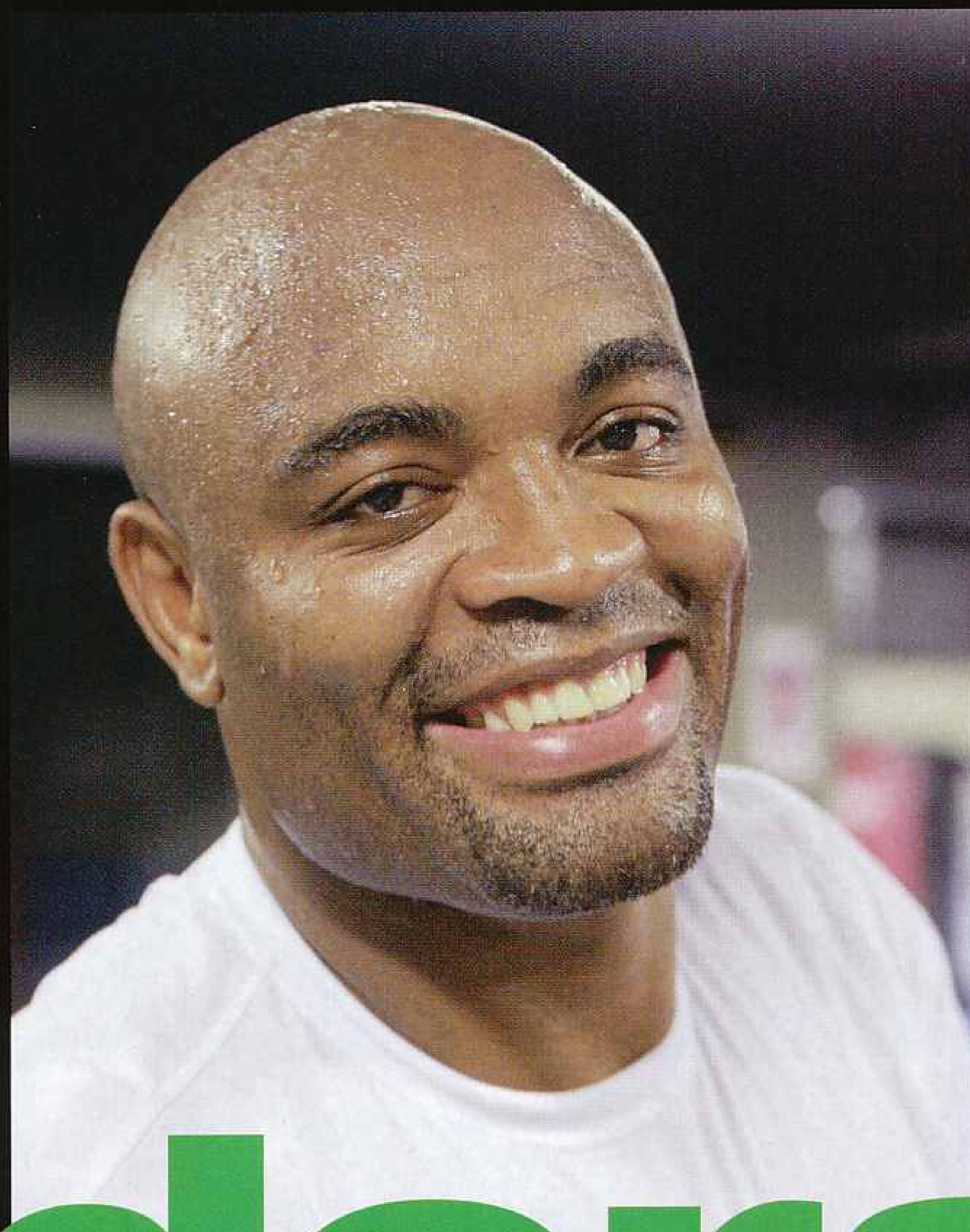
★ストロング小林★阿修羅原★康芳夫★倉持隆夫★サムソン・クツワダ★猪木快守★イーデス・ハンソン★田中健一★小川宏★鶴見五郎★田代まさし

プロインタビュアーの吉田豪が、『紙のプロレスRADICAL』誌上で聞き手を務めたロングインタビューの一部を完全徹底再録!!

B6変型判　344ページ
定価=1,890円（本体1,800円+税）

発行／株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555（代表）
発売／株式会社角川グループパブリッシング
［エンターブレイン総合サイト］http://www.enterbrain.co.jp/

パウンド・フォー・パウンド最強の男か？　悪のファンタジスタか？



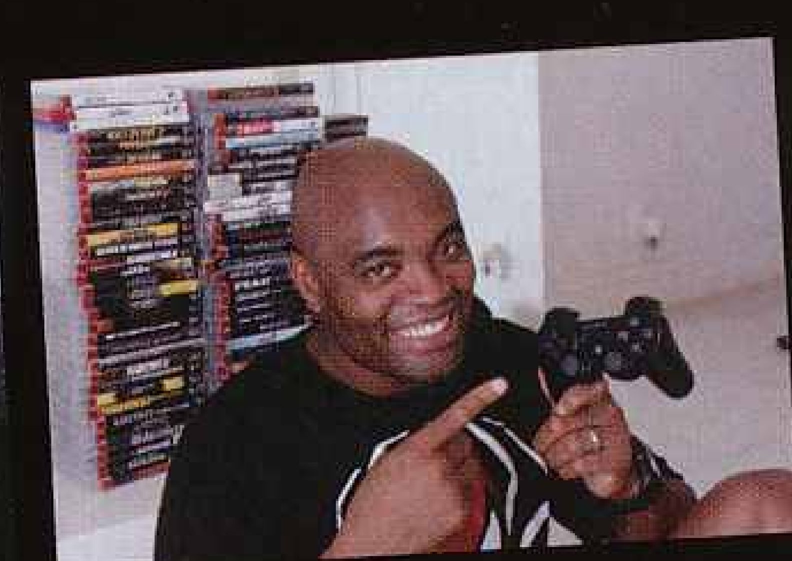
Anderson Silva

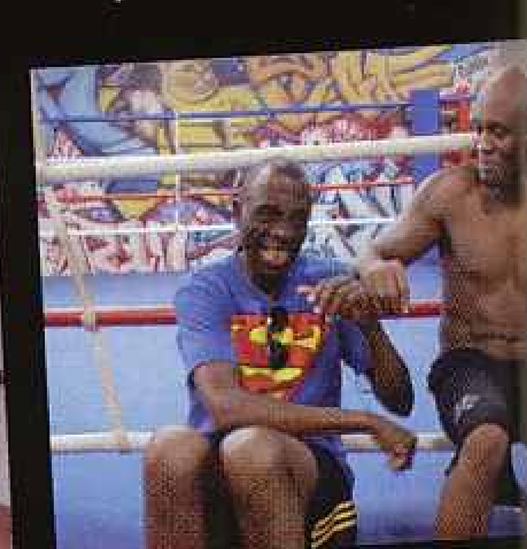
アンデウソン・シウバ











知られざる闇と優しき素顔

ダナ・ホワイトが「パウンド・フォー・パウンド最強」と認める、世界最強の男アンデウソン・シウバ。
しかし、英語のインタビューに答えることはじつにまれで、彼が何を考えているのか、ミステリーに包まれている。
本誌ではそんなアンデウソンの知られざる真の姿と本心を、旧知のブラジル人記者マルセロ・アロンソにリポートしてもらった。

文&写真／Marcelo Alonso　訳／石井史彦　構成／堀江ガンツ

1993年に設立されたUFCで、ホイス・グレイシーはさまざまなジャンルの格闘家を連続8人葬ることによって柔術の有効性を示し、世界を驚かせた。

その後、MMAというスポーツが進化したこともあり、このUFC8連勝という記録が破られることを想像することは難しい状況だったが、15年後についにその日がやってきたのである。

すでに修斗、ケージレイジ、そしてUFCのタイトルを制覇していたアンデウソン・シウバは、不可能と思われていたホイスの記録を破ってしまったのである。

『UFC101』では一つ上の階級元王者であるフォレスト・グリフィンをも4分足らずでKO。アンデウソンはこうして、世界でベストのパウンド・フォー・パウンドの称号を得たのである。

アンデウソンの考え方は試合で勝利を得るのと同様に、ケージの外でもほかのチャンピオンたちと比べて非常に印象的である。対戦相手を選ばない、ファイトマネーに関して不平を言わない、自分の限界をテストするためにチャレンジを惜しまない。

そういうアンデウソンでも『UFC112』のデミアン・マイア戦で、論争を巻き起こす行為を行なってしまい、ファンやボス(ダナ・ホワイト)を怒らせてしまった。

以下のレポートは、現在最も興味をそそるファイターをより理解しようという企てである。そのために彼の毎日のトレーニングルーティンのあいだ同行し、彼のコーチ、友人、対戦相手のインタビューを通して、アンデウソン・シウバの人生および魅力に触れたいと思う。

生い立ち、運命、MMAファイターへ

アンデウソン・シウバは、ブラジル最大の都市サンパウロで貧しい家族のもとで生まれた。そして経済的な理由から4歳のときに両親に追い出されるようにクリチバにいる叔母に引き取られていった。叔父が警察官だったということで、アンデウソンも警察官にさせようと、家族で共謀したことがあきらかだった。

幸運なことに年長の従兄に韓国のマスター・カンのジムへテコンドーを訓練させるために連れていかれたことによって、アンデウソンの運命は変わり始めた。

「身体が小さくて細いのに悩んでいたんだけど、年上の仲間たちと一緒にいるためにもテコンドーを始めたんだ」と回想するアンデウソンの運命はその時点から変わったのである。

「ジムに払うお金なんてなかったけど、マスター・カンはジムを掃除する代わりに練習することを許してくれたんだ」

このようにして今日最も偉大なMMAファイターの一人である男のキャリアがスタートしたのである。

カン・アカデミーで8年間修行したあと、3年間は友人ホドリゴ・ビダールとイスラエル・ゴメスに連れられ、エジマール(フジマール・フェデリゴのジムの黒帯)にムエタイを学び、エジマールがクリチバを去ったあとの7年間は、シュートボクセのトレーナーの一人、ファビオ・ノグシのもとでトレーニングに明け暮れた。

「彼からはブラックベルトを授かっただけでなく、人間として大切なことを学んだんだ」と、アンデウソンが認めている。

アンデウソンは参加した最初のクラスからノグシに目を見張られた。

「彼は生まれながらにして闘いに対しての才能を身につけている。彼は



すべてのことに関してオープンマインドであったこともあり、新しいテクニックを習得するのが非常に簡単だったようだ。それがいま、オールラウンドのファイターになる原点だったんだよ」

誇り高いマスター・ノグシは当時のことを思い出す。そのノグシはいまシュートボクセからは離れている。

アンデウソンの素早い上達ぶりはすぐにシュートボクセ本部にいるフジマールの耳にも伝わり、シュートボクセ内で行なわれたムエタイのトーナメントにてフジマールの一番弟子であった、ジョゼ・ペレ・ランディとタフな2試合をすることになった(1試合目はアンデウソンが勝ち、2試合目はペレが勝った)。

このペレ・ランディとの対戦の直後に、アンデウソンはマトグロッソで行なわれたMMAトーナメントに参戦。3連勝で優勝し、MMAデビューを飾ることになる。

アンデウソンは「私が勝ったあと、マスター・ノグシにシュートボクセ本部で練習するように誘われて、本部に移籍したんだ」と語ってくれた。

それからのアンデウソンは午前中はマクドナルドで働き、夜はシュートボクセの本部で厳しい練習を"Aチーム"のメンバーの一員としてペレ、ネルソン・デ・カストロ、ヴァンダレイ・シウバらと一緒に行なうようになった。

ただ、フジマールがプロモートした『メッカ・バーリ・トゥード』のデビュー戦では、ルイス・アゼレード(現シュートボクセ所属)に判定負けを喫してしまう。これを機に、それまでおろそかだったグラウンドに磨きをかけて、のちの『メッカ』シリーズで、ベテラン強豪ファイター相手にKO勝利を重ねていった。

これらの印象的なKOシーンにより、2001年3月、日本で行なわれた修斗に招聘され、国際的なMMAシーンへのデビューをはたすことになる。結果は加藤鉄史に判定勝ちを収め、同時に当時の修斗チャンピオンであり、MMA無敗の桜井"マッハ"速人との試合を確約された。

「この試合に勝ちチャンピオンになれれば、マクドナルドでの仕事を辞め、プロフェッショナル・ファイターとしてのキャリアが開けることはわかっていた」と、アンデウソンは当時を振り返る。

アンデウソンがこの試合を完全にコントロールして判定勝利を収め、桜井からベルトを奪取したことで日本の観衆は落胆した。

そのときからマクドナルドでハンバーガーを売る仕事を辞め、彼はMMAファイターとしての才能を伸ばすことに専念し始めた。

「トレーニングが自分の仕事であると真剣にとらえ決断したのは、人生のなかでとてもタフな瞬間だった」

そのときより毎日2回、またフィジカルのトレーニングも取り入れ、BTT所属の柔術黒帯ホアン・カルネイロを撃破する。アンデウソンはその直後に『PRIDE・21』で"ブラジリアンキラー"アレックス・スティーブリングの対戦オファーを受けることになる。

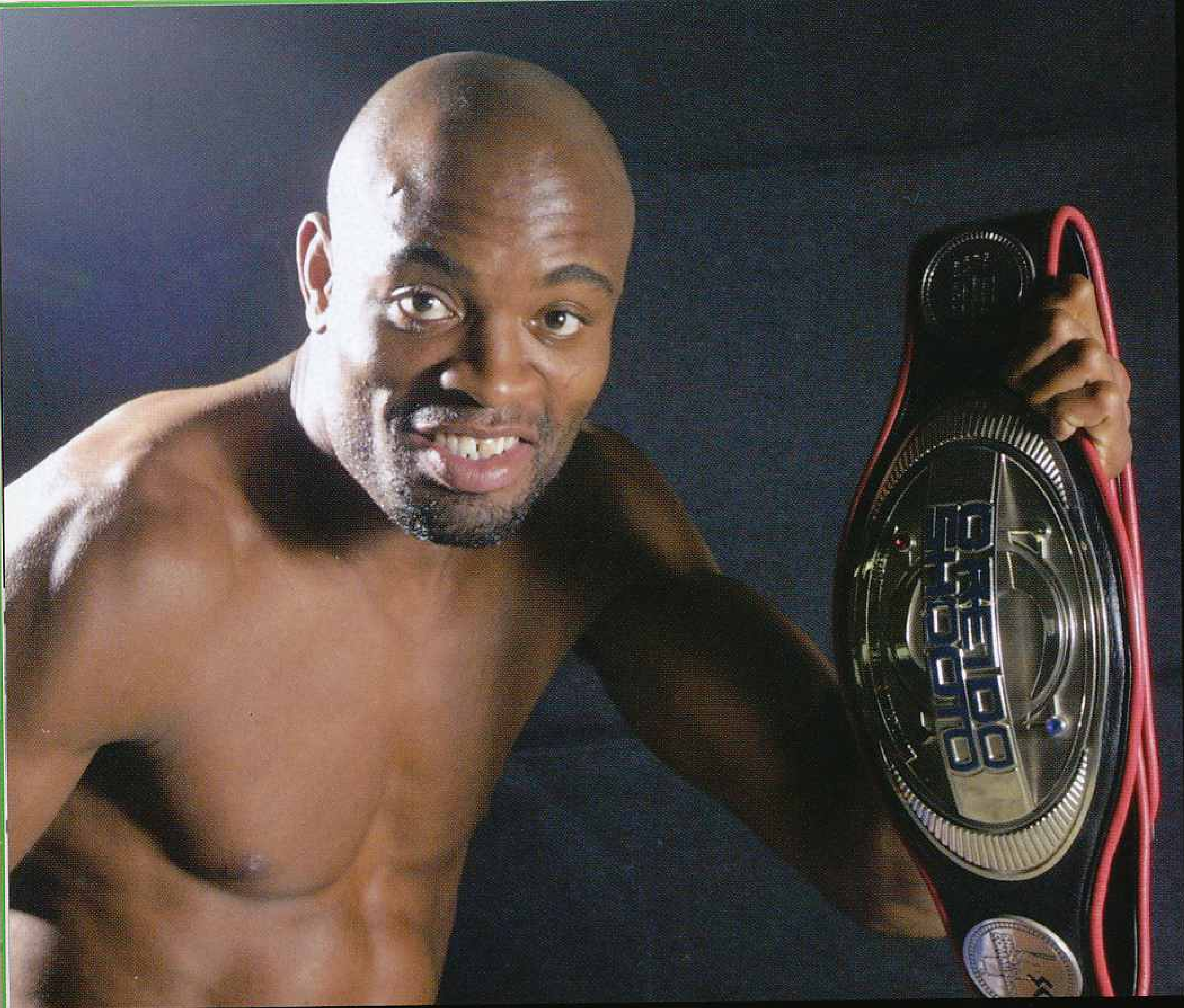
"The Brazilian Killer"ターミネーター

スティーブリングがブラジル人ファイターから6戦連勝を飾った直後から、彼の試合用のムエタイショーツの前には"The Brazilian Killer"、うしろには"Royce Who?"と書かれるようになった。

その傲慢な"ブラジリアンキラー"に4発のパンチ、2発のキックを浴びせ、目の周りには17針の負傷を負

あいだ同行し、彼のコーチ、友人、対

あとの7年間は、シ



わせマットに沈めたあと、恥ずかしく思ったスティーブリングから、そのムエタイショーツは献上された。当時アンデウソンは『TATAME』マガジンの取材を受け、そのショーツとトロフィーを持っている写真がカバーページを飾った。

その後、『PRIDE・22』では自分より体重の重いアレクサンダー大塚から判定勝ちを収め、『PRIDE・25』では、カーロス・ニュートンをフライングニーキックでKOしてしまった。

その歴史的な瞬間は、いまミノタウロ・トレーニングセンターの壁に記念として飾られている。

その3カ月後、アンデウソンは『PRIDE・25』で日本人ファイター高瀬大樹にサブミッションを極められてしまう。そのときにチャンピオンになるためには、もっとグラウンドを学ばなければいけないということを最悪の方法で知ることになった。

また、この高瀬戦がシュートボクセの選手として最後のものとなった。

シュートボクセからチーム・ノゲイラへ

PRIDEでの初めての敗戦を味わったあと、シュートボクセとの金銭的な意見の相違のためにチームを去ることを決意した。

その後6カ月間、試合が組まれないままですごすことになる。

「人生のなかで最も厳しいときだった。お金も使いはたし4人の子どもを育てなければいけなかった。そんななか手を差し伸べてくれたのが、ミノタウロ・ノゲイラだった」

ミノタウロはアンデウソンの試合のマッチメイキングに奔走した。PRIDEで試合をすることはシュートボクセ代表の力でかなわなかったので、韓国で行なわれた『グラジエーターFC』に参戦し、ジェレミー・ホーンに判定勝利を収めた。

その後、イギリスのケージレイジに参戦。ケージでのトリックを学び始め、2004年は地元のアイドル、リー・マーレイに勝利。ケージレイジを征服したあと、アンデウソンは3連勝。元チームメイトのペレ・ランディは、その闘いぶりを観て「こんな美しいエルボーでKOするなんて観たことがない。彼がすでに世界のベストのストライカーであるということを証明している」と、当時語っている。

UFCでのすべての記録を破ること

UFCでの闘いは2006年6月に行なわれた『UFCファイトナイト（UFN）』でクリス・レーベンをヒザ蹴りにより倒したときから始まった。そしてその4カ月後には『UFC64』で当時の王者リッチ・フランクリンとベルトを賭けた試合が組まれた。

それまで19試合中18のKO勝利を収めていたリッチは、アンデウソンに「ストライキングゲームから逃げるなよ」と忠告し、「勝者はUFCのベルトだけでなく、MMAにおけるベストストライカーの称号を得るんだ」と試合前に語っている。

アンデウソンがその答えを出すのに3分とはかからなかった。スタンドゲームを完全に制したブラジリアンは連続したヒザ蹴りによりチャンピオンをKOしたのである。

「UFCのベルトを巻くことを夢見て、どんな苦しい状況にも耐え忍んできたけど、その夢がかなった瞬間、キャリアのなかで最も大きな感情が一気に湧き出してきて、涙をこらえることができなかったんだ」

新チャンピオンは涙のわけを説明した。

フランクリン戦後、トラビス・ルターにエルボー、ネイサン・マーコート戦ではヒザ蹴りと、すべての試合をKOかサブミッションで勝利を重ねていった。PRIDE二階級王者だったダン・ヘンダーソンでさえ、2ラウンドで絞め落とされている。

このことはアンデウソンがUFC、修斗、ケージレイジ、そしてPRIDEの4つのベルトを獲得したのと同時に、UFCでの記録を塗り替え始めていた。

「チャレンジし続けることがモチベーションを高めてくれるんだ。だからライトヘビー級で試合をしたい」というアンデウソンの要望により、ダナ・ホワイトはヘンダーソン戦の4カ月後に、ジェームス・アーヴィンとの試合を組んだ。

ライトヘビー級での新しいチャレンジに直面することになったアンデウソンは、さらにハードなトレーニングを行ない、アーヴィンを1分以内で沈めてしまった。

その驚くほど見事な勝利後、スパイダーはモチベーションを失なってしまい、初めて「引退」という言葉を口にするようになってしまった。

「すべてやることはやったし、身体がそろそろやめにしたいって言っているんだ。引退の前の最後の試合の契約をしたい」

その後の2試合となったパトリック・コーテ、ターレス・レイチ戦では、観衆が期待しているような、それまでの試合と異なり、積極性に欠け、試合をコントロールしていてもKOはできなかった。

“刺激”を求めている男

しかし、評論家のようなルックスを持つ元ライトヘビー級王者フォレスト・グリフィンは、アンデウソンに対し素晴らしい影響を与えた。

グリフィン戦の2週間前、本誌はリオデジャネイロにあるXジムのオクタゴンで、MMAトレーナー、ジョセル・ディスタクによって行なわれる「刺激トレーニング」を取材している。

「アンデウソンは刺激によって動かされるファイターなんだよ。対戦相手が挑発すればKOで応えるんだ。グリフィン戦ではそれが見られるよ」

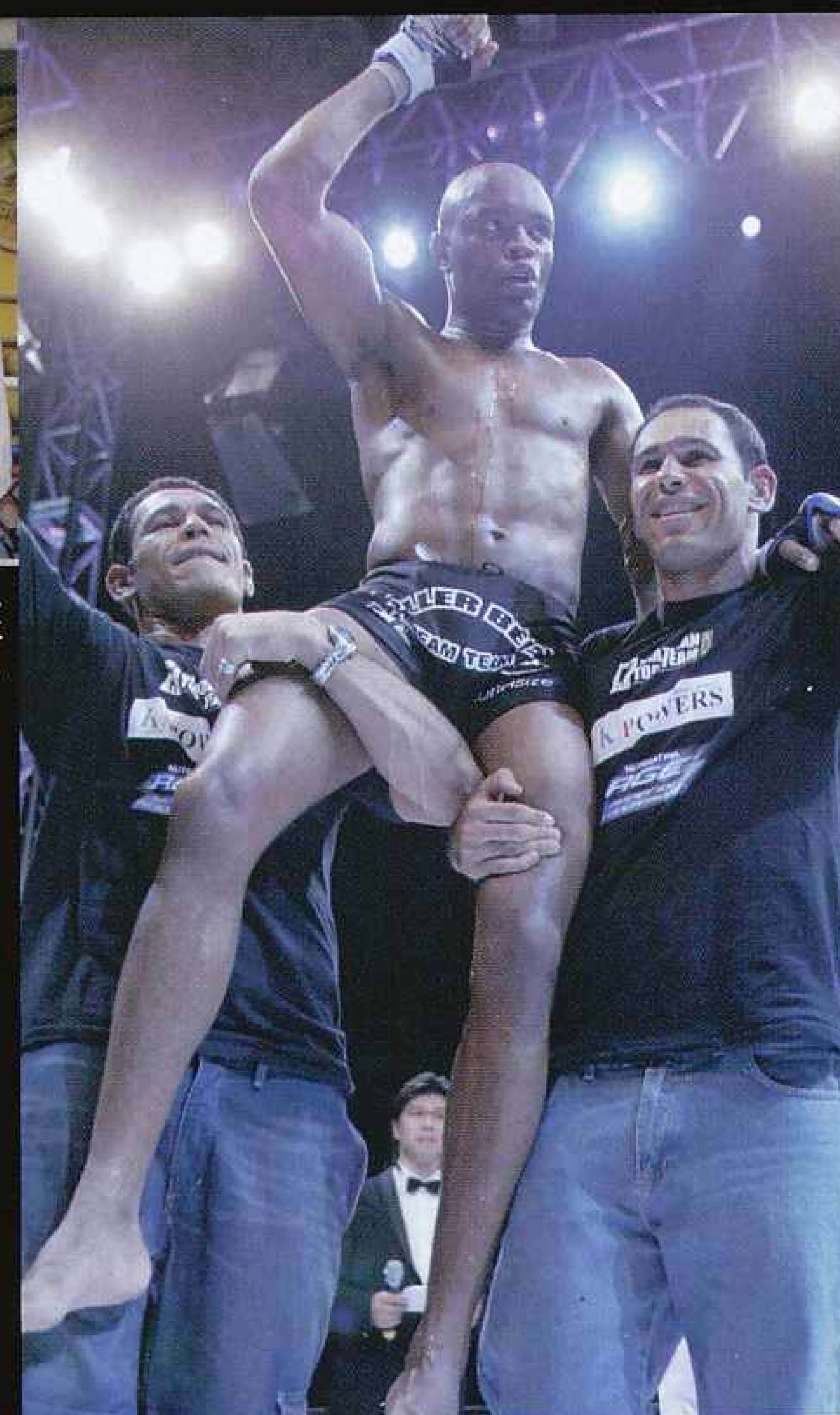
Anderso

とトレーナーは約束してくれた。
　トレーニングは、4人のスパーリングパートナーが止まることなく、30秒間隔で休むことなく攻め続け、アンデウソンは一人で闘わなければならないものだった。このトレーニングでアンデウソンは防御の動きを確認すると、わざと顔にパンチをもらい、その威力をどのように吸収するのか、またフラフラの状態でどのように反応したらいいのかを確認するだけでなく、自分でヒザ蹴りを入れダウンをしたときにどのように立ち上がればいいのかといったトレーニングを始めてしまった。
　それを見ていたトレーナーたちは狂気じみた声で「そんなことはやめろ！　手を上げるんだ！」と叫んだが、アンデウソンは常に穏やかな表情のままそのトレーニングを終え、「これは私にとって朝食のようなものだよ」とコメントしている。
　「刺激トレーニング」の結果はちょうどその日のスパーリングと同様に、グリフィンを3分23秒でKOすることで出た。彼のキャリアで最も美しいパフォーマンスとなったグリフィン戦のあと、ダナ・ホワイトやファンは、今後どのようなチャレンジを与えることでアンデウソンのモチベーションをキープさせられるのかが、大きな課題となってしまった。

次なるターゲット

　アンデウソンの衝撃的な勝利のあと、ダナ・ホワイトにとっての大きな問題はロースターだった。すでにミドル級のトップファイターたちを根こそぎKOしているチャンピオンに対し、どれだけ試合への意識を高められるのか。
　ダナは最終的な案として元トレーニングパートナーを含む3人のブラジル人の名を挙げた。ライトヘビー級のリョートとショーグン。ミドル級のビクトー・ベウフォートである。
　チャンピオンはリョートとの試合の可能性に関しては完全に否定している。〝親友〟だからである。「リョートは友だちなんでその可能性はないよ。彼のことは大好きだし、お互いに殴り合うなんて無理だよ。お金の問題じゃないし、どんな命令だって試合はしない。それにもうベルトを持っているんで2本目は必要ないんだよ」と明言している。





アンデウソンのPRIDE参戦がかなわなくなったあと、手を差し伸べたのがノゲイラ兄弟。韓国の『グラジエーターFC』ではメインでジェレミー・ホーンを破った。

　もし『UFC113』でショーグンがベルトを獲った場合、ダナ・ホワイトはベルトの統一戦を熱望するだろう。ベウフォートはチャンピオンに「挑戦の資格なし」と指摘されてしまっている。
　「ビクトーって誰のことだい？　数カ月前まで私やホドリゴ、ホジェリオと一緒に練習していたヤツかい？　彼は自分を見失なってるんじゃないかな。まずは自分を見つけないと……」と、少し攻撃的だ。
　お金やベルトの数ではアンデウソンの気を惹けないのであれば、どうやって動機づけるのか？　彼の右腕となり経済的な面からトレーニングまですべての面倒を見ていて、最も信頼している親友のジョージ・マルチネスは、「グリフィン戦がそうであったように、新しいチャレンジをさせればベストのアンデウソン・シウバを観ることができるんだよ」とコメントしている。

ブロック・レスナー？

　アンデウソンはヘビー級で試合をすることも検討している。「チャンレンジが大好きだって話しただろう？　それがハードな練習に耐える動機なんだ。もちろんヘビー級はミノタウロの階級なので、興味があるのはスーパーファイト。チャンスがあれば素晴らしいモチベーションになるよ」
　ただ、アンデウソンはヘビー級のチャンピオンとの対戦には興味がないらしく「ノー。ヘビー級チャンピオンの名前がBROCK（非常に大きく固い）ということは知っているけど、そのチャンピオンに試合を申し込むほどうぬぼれてないよ」とジョークまじりに語ってくれた。

無敵

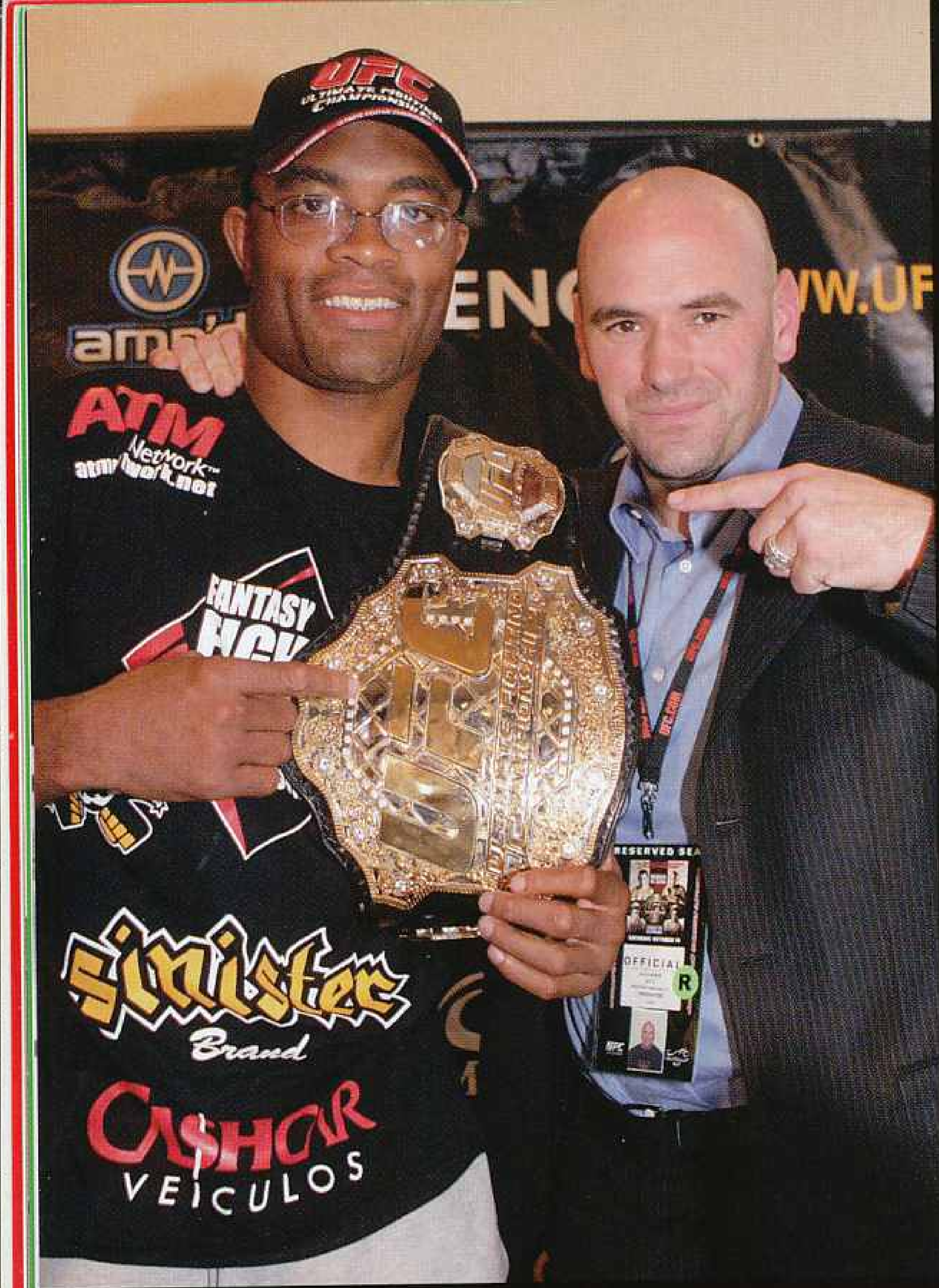
　この5年間、無敗でいるアンデウソン・シウバは負けに直面する可能性についてまったく心配していない。
　「いつかは誰かが私を叩く、それは事実だよ。誰かが私の腕、私の足をサブミッションで極めるだろう。間違いなくそうなるよ。引退する前にそのときが来てもしょうがないんだ。でも、そうならないためにもハードな練習をこなして、試合に備えている。自分よりも素晴らしいファイターがいるかって？　もちろんいるさ。ただ我々がそのファイターがどこにいるか知らないだけなんだよ」
　ただし、右腕であるマルチネスは、そのときが来ないようにアンデウソンは厳しい練習に耐えているとコメントしている。
　「あまりにも厳しい練習を見ていると、ときどき、このままだと身体が壊れてしまうって感じてしまうことがあるんだ。そんなときは実際に8分しか経っていなくても〝10分だよ〟と言っているんだ、だって彼の身体は機械ではないんだからね」

善人、それとも悪者？

　2010年4月10日はUFCが中東地域で初めてのプロモーションを行なうということもあり、MMAにとって歴史的な日となった。その日は、注目を惹くカードとしてヘンゾ・グレイシーvsマット・ヒューズ戦のほか、BJペンvsフランク・エドガー、それにアンデウソンvsデミアン・マイアという二つのタイトル戦が組まれていた。
　そのすべてがまるでメインカードのお膳立てとして、脚本に沿ったように流れていった。8カ月前にグリフィン戦にて忘れられないKOシーンを見せてくれたアンデウソンはオクタゴンによじ登り1万人以上の観衆からの声援に応えたのだが、試合開始のブザーとともにその歴史は逆転してしまった。アンデウソンは対戦相手のデミアンに対し道化師のように振る舞い、侮辱し、きわめて無礼な行動をとったのだ。ダナ・ホワイトは怒りが収まらず4ラウンド目には席を離れ、試合終了後には観衆もブーイングを浴びせた。
　善かれ悪しかれ、多くのファンが古今東西の最高のファイターと考えているブラジル人が、このスポーツの歴史のなかにもう一つの論争の的となる章を書いたという事実は残る。
　あとに続く物語は、チャンピオンの疑わしい態度についての長い議論である。ぜひ読んでほしい。そして、あなた自身の結論を出してください。
　「ムカついたと同時に恥ずかしさで

こそぎKOしているチャンピオンに

よ」と明言している



いっぱいだ。そして、俺はここアブダビのファンに謝罪する。アンデウソンがしたことは許されるものではない。俺はひどい怒りを覚え4ラウンドで席を離れてしまった。この件をどのように対応するのかまだわからないが、アンデウソンはアンダーカードで闘う初のチャンピオンになるかもしれない」（ダナ・ホワイト）

「彼が私に無礼なことをしたか？　そのとおりだ。どこからともなく馬鹿にし始め、それまでの人生で見たことのない侮辱を始めたんだよ。彼のとった態度はこのイベント、試合を観ている観衆のみならず、スポーツ全体に対して悪影響をおよぼしてしまうと思う。少し前まではアンデウソンをMMA界のアイドルとして注目していたし、柔術大会にしか参戦していないときから、彼の試合を興味深く観ていたんだ。しかし、いまは彼を見ると嫌悪と軽蔑の感情を引き起こす。それは誰に対しても決して抱くことがなかったへんな感覚なんだ」（デミアン・マイア）

「アンデウソンは彼のルーツに戻る必要がある。そして、彼が彼であるために、ダナ・ホワイトやファンがそれを要求するからではなく、彼自身から積極的な姿勢を見せるべきだ。彼にはクビになることを恐れず、それらを忠告できるトレーナーを必要としている。アンデウソンはちゃんとしたサポートがあるかぎり、じつに素晴らしいファイターである。私は彼が長いあいだトップに君臨できると確信している』（セルジオ・クーニャ＝元シュートボクセ・トレーナー）

「世の中には制裁を加えてあげないといけない人間がいる。彼は間違いなくそのなかの一人。私には社会の道徳的責任から制裁を加える義務がある。2010年に彼はチェール・ソネンによって制裁を加えられるだろう」（チェール・ソネン）

「アンデウソンは自分の過ちを認めているんだろう？　これはもうチーム内で彼のとった行動について話すことだよ。彼は偉大なファイターだよ、試合のことを考えるとワクワクするんだ。もちろん、そこにはアンデウソンに勝てるという方程式は存在していないけどね」（マウリシオ・ショーグン）

「肉体的に間に合わなかったためにアンデウソンと試合ができなかったことに落胆してる。デミアンは彼に対して尊敬の念を持っていたし、いい試合だったよ」（ビクトー・ベウフォート）

「最初のラウンドはアンデウソンのスタイルを変えながらの攻撃を楽しみながら観ていたんだ。まるでモハメド・アリの動きを観ているようで観客も喜んでくれたんじゃないかな？　でも後半はスマートな闘い方とはかけ離れたスタイルになってしまったし、もしかしたら疲れが出たのかもしれない。どちらにしても喜ばしい態度とは言えないね。少しぐらい疲れていたからって組み合おうとしないのには失望したよ」（グレッグ・ジャクソン）

「アンデウソンは試合後、謙遜しながら自分にも向上させる点があるだろうと話してる。何があったのかというと、試合前からアンデウソンに対してダミアン・マイアが挑発的なことを言っていたのが原因になったんだ」（エド・ソアレス＝マネージャー）

デミアンに対する醜態？　を語る

試合の直後に彼のとった態度について彼の観点からの話を聞いてみた。

「オクタゴンに一歩足を入れると、試合前の数カ月の緊張感が一気に放たれるんだ。私がとった行動は議論を引き起こす結果となってしまった。デミアンは素晴らしいファイターで、私の尊敬のすべてに値する。しかし私は試合に勝つためにやらなければならなかったことをしたんだ。

私はグラウンドでの柔術ゲームにも対応できるが、彼には到底追いつけないレベルなので、自分の屈辱を残してゲームプランを立てたんだけど、試合前にひどい口論があったんだ。でも、そんなことは試合前に忘れ去らないといけないし、心の底からもう二度としないって思っている。私はそれをどのファイターよりもこの試合から学んだと思う」

ミノタウロのサポートをすること

アンデウソンが4カ月ものハードなトレーニングに耐えてグリフィンを破ったあと、その試合が終わったばかりだというのに、ミノタウロのサポートをするため、その足でサンディエゴへ行き、1カ月間キャンプをともにした。しかも、その間の宿泊費はすべて自腹であった。

「ミノタウロがいなかったら、私はすでに引退していたんだ。ミノタウロのためであれば、自分にできることはなんでもする」

ランディ・クートゥアーとの試合に向けたミノタウロのトレーニング最終日、アンデウソンのサポートがどれほど重要だったかを目のあたりにすることができた。

アンデウソンはランディのゲームの効果をかき消す、3つのポジショニングをミノタウロに叩き込んでいたのだ。

「アンデウソンは間違いなくどのファイターよりも進化している。オクタゴンのいくつかの秘密を教えてもらえたのは本当に重要なことだった」

トレーニングを終えたミノタウロはそう答え、アンデウソンが授けた3つのポジションのうち、少なくとも一つは実際の試合で使われた。

厳粛vsユーモア

デミアンに対するアンデウソンの態度を見たほとんどの人は、彼が驚くべきユーモアの持ち主である事実を信じられないかもしれない。

親友でマネージャーのジョージ・マルチネスは言う。

「私は幼児期からアンデウソンを知っている。彼は常に楽しみを作って、いろんな人のモノマネをするのが好きなんだ。彼が深刻なままでいる唯一の瞬間とはトレーニング、または試合のときだけだよ。それ以外は周りのみんなを笑わせているんだ」

ミノタウロ・ノゲイラは「もし彼がファイターになってなかったら、間違いなく素晴らしいコメディアンとして大成功を収めているはずさ。彼は話し方やその声のモノマネをするだけでなく、歩き方や身体の動きを

Anderson

真似るんだ」と、ミノタウロの歩く真似をしているアンデウソンを横目にしながら笑顔で話してくれた。

ミノタウロのほか、ヴァンダレイ・シウバの話し方やファイティングポーズ、フジマール・フェデリゴの声や歩き方、チャック・リデルのお腹を突き出したウイニングポーズ、リョートの動き、ブルース・リーの映画のシーン、カーウソン・グレイシーの話し方、ジャック・スパロウの滑稽な歩き方など、コメディアン顔負けのレパートリーを持っているが、アンデウソンはとても恥ずかしがり屋でもあるため、友人の前でしか披露していない。

「モノマネは得意だけど親友の前でしかしないんだ。だって知らない人の前でやって、馬鹿にしていると思われたくないからね」

MMA界のベストコメディアンは、その理由をそう説明した。

そのように愉快なアンデウソンも、記者会見やインタビューという場になると、「英語を完全に理解できない」という理由から、まったく英語を口にしない無口で無愛想のファイターになってしまいレポーターたちを怒らせてしまう。

ジョルジ・ホジェリオ・カモエスはその理由として「アンデウソンは人見知りをするんで、知らない人と会うと私のほうを見て助けを求めるし、彼のなかにある子どものような純粋な面を見せたがらないんだ」と言う。また「彼が12歳になる息子と一緒に遊んでいるのを見てると、アンデウソンのほうが若く見えるんだよ」と、付け加えている。

警察に対しての情熱

“Nunca serão, jamais serão.”（絶対にでなく、そうである）。

ほとんどのアメリカ人は、『UFC 77』でリッチ・フランクリンから二度目のKO勝利を収めた直後に、ジョー・ローガンが向けたマイクに放たれたアンデウソンの言葉の意味を理解できなかった。

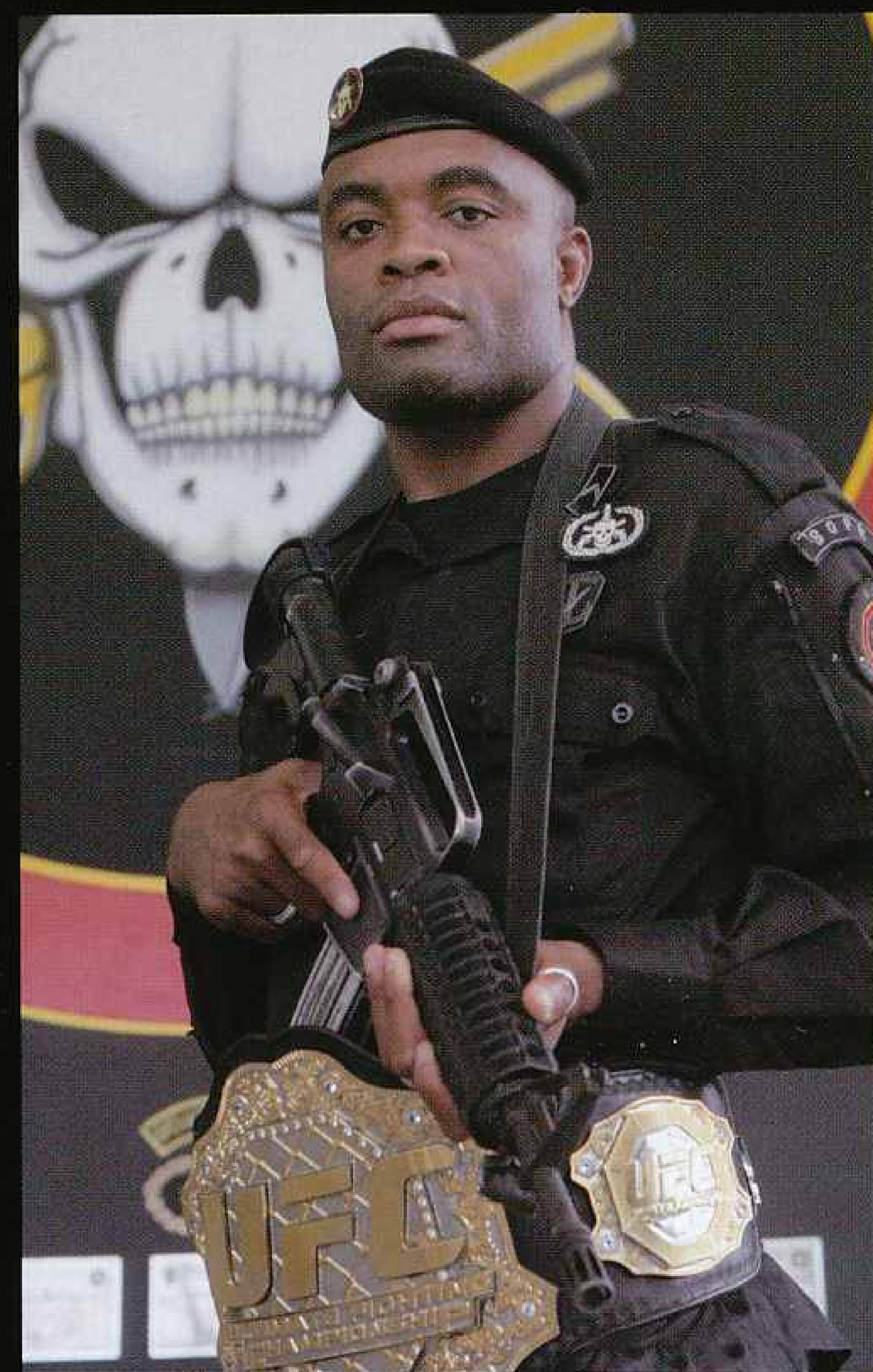
アンデウソンは最高傑作と言われるブラジルの映画『Tropa de Elite』の主人公であるNascimento Captainの影響を受けている一人のブラジル人である。

この映画は、ブラジルのスラム街で麻薬ディーラーと闘うBOPEと呼ばれる警察エリートの現実の話である。

「ボクは警察官一家で育ったこともあり、子どもの頃から警察官になることを夢見ていたんだ」

アンデウソンはBOPEの本部を訪問するための特別な招待状を受け取った1週間後、

「あらゆるブラジル人は、リオデジャネイロのスラムの丘の上に重装備の麻薬ディーラーと闘うために訓練されている世界で唯一のBOPE部隊を誇りに思わなければならない。その本部を訪問できるなんて興奮するよ」



アンデウソンはそうコメントした。

彼のヒーローたちとUFCのベルトを持ってポーズをとったあと、BOPEのユニフォームを着てライフルを持った写真を独占で撮らせてもらえたとき、筆者自身も感動してしまった。

式典のあと、アンデウソンはBOPEで最も厳しいコースとして有名な“Faca na caveira”卒業生のグループにMMAを教えた。

「軍隊は拍手喝采することは許されない。しかし、あなたの屈従とあなたがブラジル代表としてリングに立っていることに対して今日は例外とする」

BOPEの大佐はすべてのオフィサーたちに精一杯の拍手を送るように依頼した。その日からアンデウソン・シウバは、彼の勝利の後、常にBOPEのオフィサーたちに敬意を表するようになった。

アイドルに対する敬意（マイケル・ジャクソンに対する情熱）

フォレスト・グリフィンとの試合の2週間前に、彼を落胆させた悲しいニュースが飛び込んできた。マイケル・ジャクソンの死である。

「私は彼の行動を模倣して成長した。マイケルは私の歴史の一部である。彼は私のアイドルであり、私の人生のみでなく、おそらく闘うスタイルにも影響していると思う。私の部屋には彼の大きいポスターが飾ってあった。彼の死について知ったとき、私は泣いてしまい、二日間は本当に落胆してふさぎ込んでしまった」

PRIDEのリングに上がる際、マイケル・ジャクソンのような服を着て踊ったことがあるUFCチャンピオンは、思い出深く語ってくれた。

「フジマールが、ジムでマイケルを模倣して踊っている私を見たときにそのアイデアを与えてくれて、日本のファンも喜んでくれたんだ」

マイケル・ジャクソンへの情熱は、彼がオクタゴンに入る際にマイケルの大ヒット曲『Ain't no sunshine”（DMX version）』を使っていることから、UFCファンのあいだでも認知されていった。

「昔、ラスベガス空港に到着したときに、ちょうどマイケルがいたんで、マネージャーが一緒に写真を撮ってくれたんだ。私は最初『どうせそのへんのショーに出ているニセマイケルで私をからかっているんだ』と思ったんだよ。それが本物のマイケルと握手をしたっていうことを信じるのに数時間もかかってしまった」

リングの天才は感動の面持ちで語ってくれた。

シウバ、再び平和が（シュートボクセとの問題）

シュートボクセ時代、アンデウソン・シウバとヴァンダレイ・シウバは親友同士であり、最高のスパーリングパートナーであった。しかし、アンデウソンがチームを去り、フジマールがヴァンダレイの名前を盾にPRIDEに対しアンデウソンを使わないよう求めたことにより、アンデウソンはヴァンダレイが彼を守ってくれなかったと思い、怒りを感じてしまった。

「ヴァンダレイは、私が4人の子どもを育てなくてはならない厳しい時期であることを知っているのに、フジマールが私を日本で試合ができないようにすることに同意した。もし、ミノタウロがいなかったら、私はリングを去らなければならなかったんだ」

「しかし、ヴァダレイのUFCデビュー戦となったチャック・リデルとの歴史的な試合のあと、そこにはヴァンダレイに対するわだかまりがなくなっていた自分がいて、リョートと一緒にロッカールームに出向き、賞賛の言葉を投げかけたんだ」

ヴァンダレイはアンデウソンの態度をうれしく思い、「アイ・アム・フリー」と言って、一緒に練習しようと誘ったのである。

ヴァンダレイがミドル級に階級を下げることを決めるまでは、すべてが順調だった。

アンデウソンはブラジルのテレビ

番組で「ヴァンダレイは問題を見つけ出そうとしている」と宣言。それが放映された直後にヴァンダレイは『TATAME』のウエブサイトで、「まだこの階級で試合もしたこともないのに、チャンピオンによって引き合いに出されるのは素晴らしいと思ったよ。誰も果物がとれない木は蹴らないからね」と返した。

また、元パートナーがほかの人間に、かつてのシュートボクセのトレーニングについて話したという事実に不満を持ったヴァンダレイが「どのファイターにもトレーニングのことは、口外すべきではないというルールがあるのさ。トレーニングはトレーニング、トレーニング中に誰々をKOしたとは決して言わないよ。トレーニングにおいて起こることはジムの中に留まらなければならないんだ。だからトレーニングと試合はまったく別物なんだよ」と、アンデウソンの最後の声明を批判するための言葉を吐きだした。

「彼はあまりにも生意気だよ、私は彼がこれを読んでくれることを望んでるんだ……。私は彼を尊敬していて、彼ににについて一言も悪口なんて言ったことなんてないんだ。彼は常にベストフレンドの一人だったし、彼も尊敬してくれていた。その彼がそんなことを言うなんて信じられないんだ。私は彼と闘うためにミドル級に落とすわけじゃないし、そんなつもりはまったくないんだ。

カテゴリーを変更しても思い上がってすぐにチャンピオンと闘う意思は持っていなかったんだ。彼に対峙するにはその前に多くの闘いをする必要があると思う。しかし、彼の最後のステートメントは宣戦布告しているようだ。彼は本物のヴァンダレイを知っているし、私も彼のことを知っている、お互いの失敗もね。いままで彼に対して誰も試練を与えていないし、顔をひどく殴られたこともないようだけど、将来のことは約束されたようなものだから、そのときがくるのを待つことにしょう」と、ヴァンダレイは結んだ。

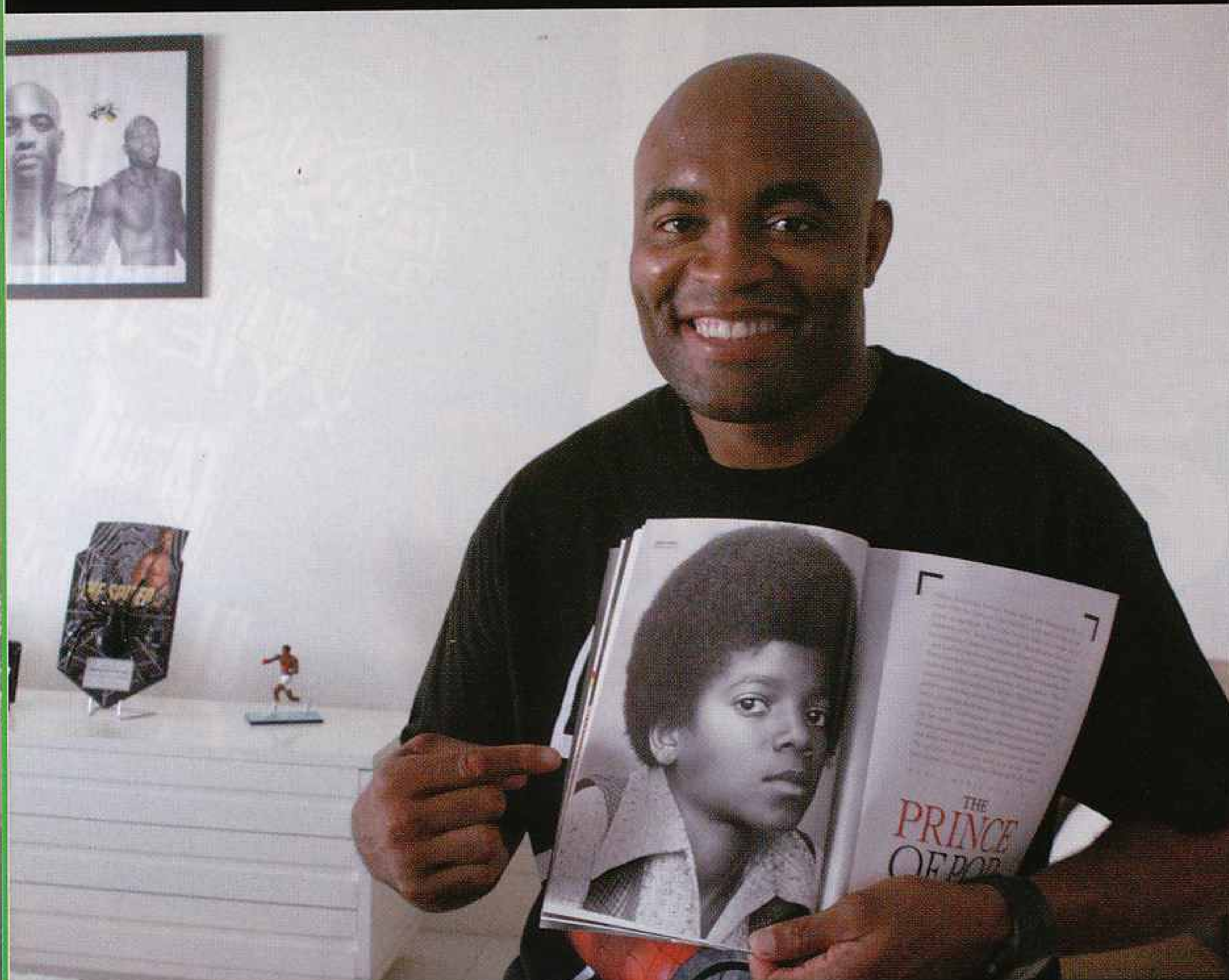
その後、アンデウソンはヴァンダレイとブラジルの記者たちは誤解していると指摘した。

「私はヴァンダレを友人として、またトレーニングパートナーとして常に尊敬していた。彼の試合のときはいつも応援していたし、まして彼と闘いたいなんて一度も考えたこともないんだ」

ポートランドで行われた『UFC102』の舞台裏で、偶然にも彼らが同じレストランに行ったときにそのことは明確になった。

ハファエル・アレージャはアンデウソンをヴァンダレイのところに連れていった。「おまえたちは親友同士だろう？　ある種の誤解があったのは間違いないから、と。そして二人で話をして、抱き合うばかりでなく、お互いに涙まで流したんだよ」ってアレージャは言ったばかりでなく、二人がお互いにトレーニングを一緒にしようと約束したのも見ていた。

アンデウソンはそのことについて触れられたくないらしく、「我々のあいだでは何も起こらないって言っただろう？　ヴァンダレイはちょっとクレイジーだからね（笑）。彼は私の長所も短所も知っているし、私は彼の才能を知っている。我々は一緒なんだよ、ヴァンダレイは驚くべきヤツだよ」と結んでいる。



ANDERSON SILVA■1975年4月14日、ブラジル出身。2000年にブラジルでデビュー。01年に桜井“マッハ”速人を破り修斗世界ミドル級王座を奪取。PRIDEを経て、06年からUFCに参戦。同年、リッチ・フランクリンを破りUFCミドル級王座を奪取。現在UFC10連勝中。パウンド・フォー・パウンド最強とも呼ばれる。188cm、84kg。

アンデウソンについての印象

「偉大な人間、また友人である前に、アンデウソンは完全なファイターだよ。そして彼はフォレストとの闘いにおいて、それを示した。彼はモハメド・アリのように捕まえどころのない動きをしながら、頭を動かさずバックステップしながらKOしてしまった。そんなことができるボクサーなんて、世界でも数人しかいないよ」（ミノタウロ・ノゲイラ）

「アンデウソンはショーマンである。彼が闘うときの印象は、彼が試合の流れを思いどおりにコントロールしていることである。息子も日々上達してきているので、いつかそうなってくれるだろう（町田嘉三）

「アンデウソンのデミアン戦以外のすべての試合を観ると、最も優れたゲームを見せてくれている。いつも落ち着きはらって素晴らしいテクニックを見せてくれる。今日の彼に勝てるファイターは考えられない」（マウリシオ・ショーグン）

引退

多くの人たちは、アンデウソンがUFCのすべての記録を書き換え、ファイターとしてベストのときに、なぜ引退を考えるのか理解できずにいる。

「あと契約で残っている5試合を終えるとき、引退のときが来ると思っている。いままでの人生すべてをトレーニングに明け暮れてきたんだ。そろそろ身体も気持ちも家族と一緒にいたいって感じているんだ」

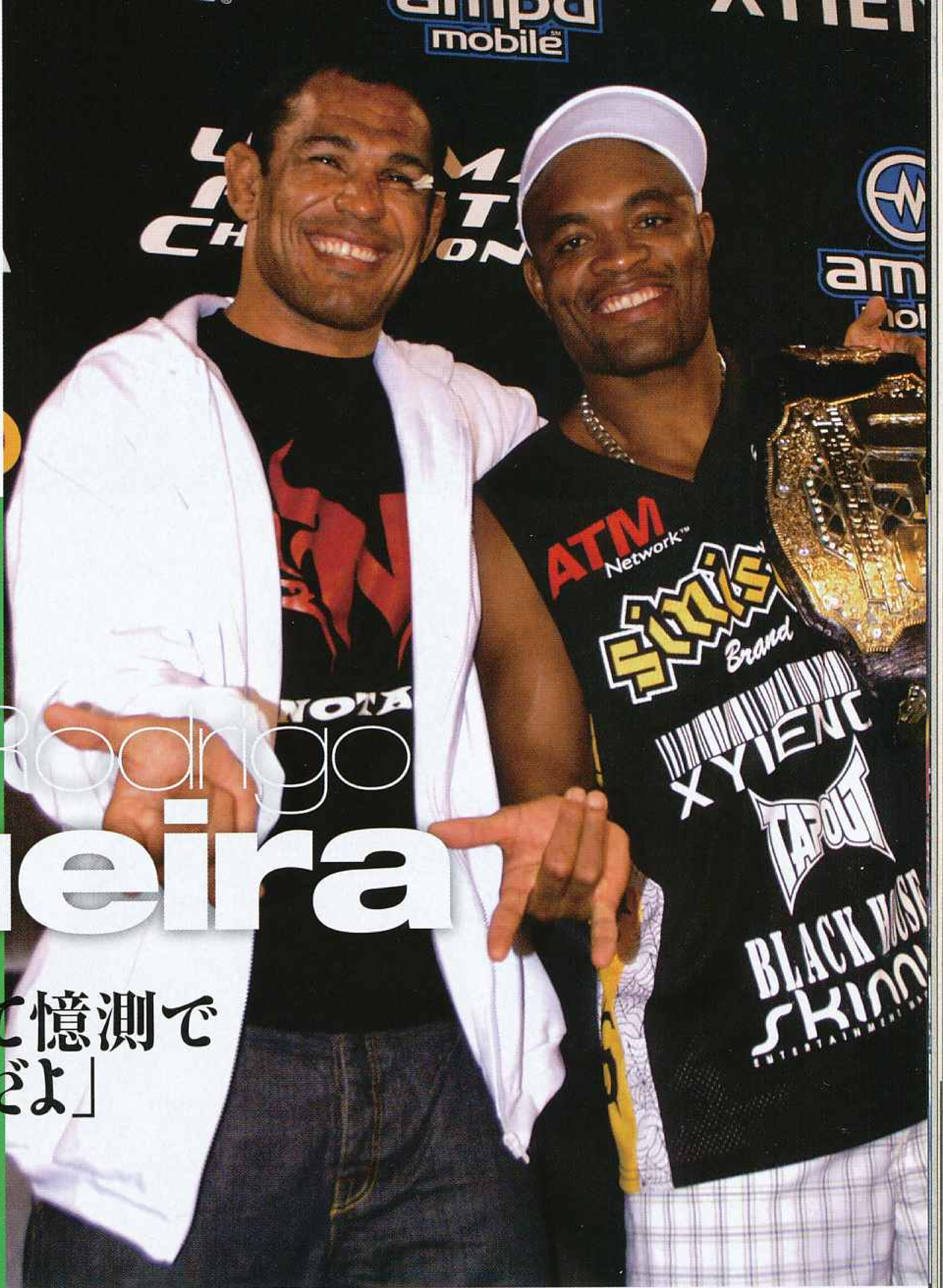
たとえボスであるダナ・ホワイトから億単位のオファーがあってもその気持ちは変わらないとUFCチャンピオンは答えてくれた。

「ビッグボスでさえこの身体や気持ちには命令することができないし、この身体や気持ちに私は従わなくてはいけないんだ。そこにはお金が入り込む余地はない。私は非常に慎ましい人間なので普通の人生で充分なんだ。これまでもお金のために闘い続けていたわけじゃないんだ。MMAでできることはすべてやりとげたしね。これからは次代を背負う若いファイターをサポートしてあげたいんだよ。

数年後にはオクタゴンの脇でポップコーンを食べながら太ったお腹を出して『いけ！　顔にキックを入れろ！　テイクダウンだ！』って言っている自分を想像するだけで笑ってしまうよ」

そう言ってUFCの歴史で最も偉大なチャンピオンは笑顔でインタビューを終えた。

――ケイン・ヴェラスケス戦から2カ月が経ちましたが、体調はいかがですか?
ノゲイラ とてもいいコンディションだよ。来週からは弟のホジェリオがここサンディエゴに来て次の試合に向けたキャンプに入るんで、そのあと数週間はスタンドアップとボクシングのトレーニングに、より多くの時間を割く予定になっているんだ。
――では、あらためてケイン戦を振り返ってください。
ノゲイラ とにかく彼のキックには驚かされたよ。ヘビー級とは思えな



“盟友”が語る素顔のアンデウソンとブラックハウスの今後

Antonio Rodrigo Nogueira

アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ

「アンデウソンに対して憶測でものを言うのは失礼だよ」

アンデウソンがシュートボクセを離脱したあと、手を差し伸べ、そのとき以来の盟友関係にあるノゲイラ。4.10『UFC112』でのデミアン・マイア戦をどう見たのか?

聞き手/堀江ガンツ　通訳/石井史彦　試合写真/Josh Hedges(UFC)

い、ノーモーションからのキックだったからね。グラウンドゲームに持ち込みたかったけど、自分がチャンスをつかむ前にストライキングで攻められてしまったんだ。
――敗因はなんだと思いますか?
ノゲイラ 答えを知っているなら教えてほしいよ。試合前からタフな相手だとはわかっていたけど……。
――あなたやミルコが若い選手に敗れ、ケイン、ジュニオール・ドス・サントス、シェーン・カーウィンが台頭したことによって、「ヘビー級は世代交代された」という声も上がっていますが、どう思いますか?
ノゲイラ 若くて素晴らしいニューフェイスのファイターたちが台頭してきているのは事実だよ。ますますタフな試合になってきたし、勝つためには常に新しいテクニックを習得していかないと難しくなってきている。でも、ヒョードルも含めてボクやミルコの世代は、10年間トップで闘い続けてきたプライドと自信があるからね。まだまだ「世代交代された」って言われないように頑張りたいと思ってるし、そのためにも常にトレーニングを積んでいるんだ。
――今回、サンディエゴにオープンしたジムは、トップに返り咲くために作られたジムですか?
ノゲイラ ジムはホジェリオやドス・サントスらとUFCで勝つための場所としてもちろん重要だけど、同時にUFCで試合をすることを目標としているブラジルの新世代ファイターたちに、アメリカでトレーニングを積むチャンスを与えてあげたいから作ったんだ。
――次世代のためでもあるんですか。
ノゲイラ ボクが若い頃、日本でチャンスをもらったように、いまの若いファイターにもチャンスを与えてあげたいんだ。それがこれからのボクたちの役目だとも思うしね。
――ジムの名前と特長を教えてもらえますか?
ノゲイラ ジムの名前は「ブラックハウス チーム・ノゲイラ」。1万スクエアフィートの広さで、ケージ、ボクシングリング、サンドバッグ、それに2500スクエアフィートのマットが敷かれている。
――ずいぶん広いんですね!
ノゲイラ やはり最高のジムを作りたかったからね。いまはほとんどの時間をサンディエゴですごしているけど、ブラジルには家族がいるんで、会いに行ったり、自分のジムに顔を出したりしているんだ。
――いまジムでは、どんなメンバーが一緒に練習していますか?
ノゲイラ 普段はおもにホジェリオ、アラン・ゴエス、マーク・ムニョスを中心に、そのほか数名のファイターと一緒に練習しているよ。
――先日はUFCアブダビ大会に訪れていたそうですが、感想を聞かせてください。
ノゲイラ UFCアブダビ大会は非常に興味深いものだったよ。あの大会はUFCとして初めて野外アリーナでの開催だっただろう? 外気は夜になっても凄く暑かったんで、ファイターのパフォーマンスにも影響があったんじゃないかと思ってるんだ。また滞在中にアブダビコンバットクラブを訪問するチャンスがあっ

たんだけど、そこには65人もの黒帯
えますか?
になると確信していたからね。
――ダナ・ホワイト代表などは「才能
ケースもまだたくさんあるから一概

アンデウソンは子どもを愛し友だちを尊敬するいいヤツなんだ

たんだけど、そこには65人もの黒帯柔術家が所属していて、アブダビコンバットクラブでのクラスだけでなくUAE内の65校以上の高校でも柔術を教えているらしいんだ、とても素晴らしいことだよ。

――高校で柔術を教えていますか！

ノゲイラ　さすがアブダビですね。UAEはこれからますます格闘技界にとって重要な国になると確信したよ。

――そのアブダビ大会は、メインイベントのアンデウソン・シウバvsデミアン・マイア戦が物議を醸していますが、あの試合の感想を聞かせてください。

ノゲイラ　まずアンデウソンは間違いなく最初の3ラウンドは取ったと思ってる。残り2ラウンドはちょうどボクシングの試合でも見られるように、アンデウソンがデミアンの周りを回りながら距離を取っていたんで、うまく逃げ続けられたという印象が残っているね。

――あの試合でのアンデウソンの態度や発言についてどう思いますか？

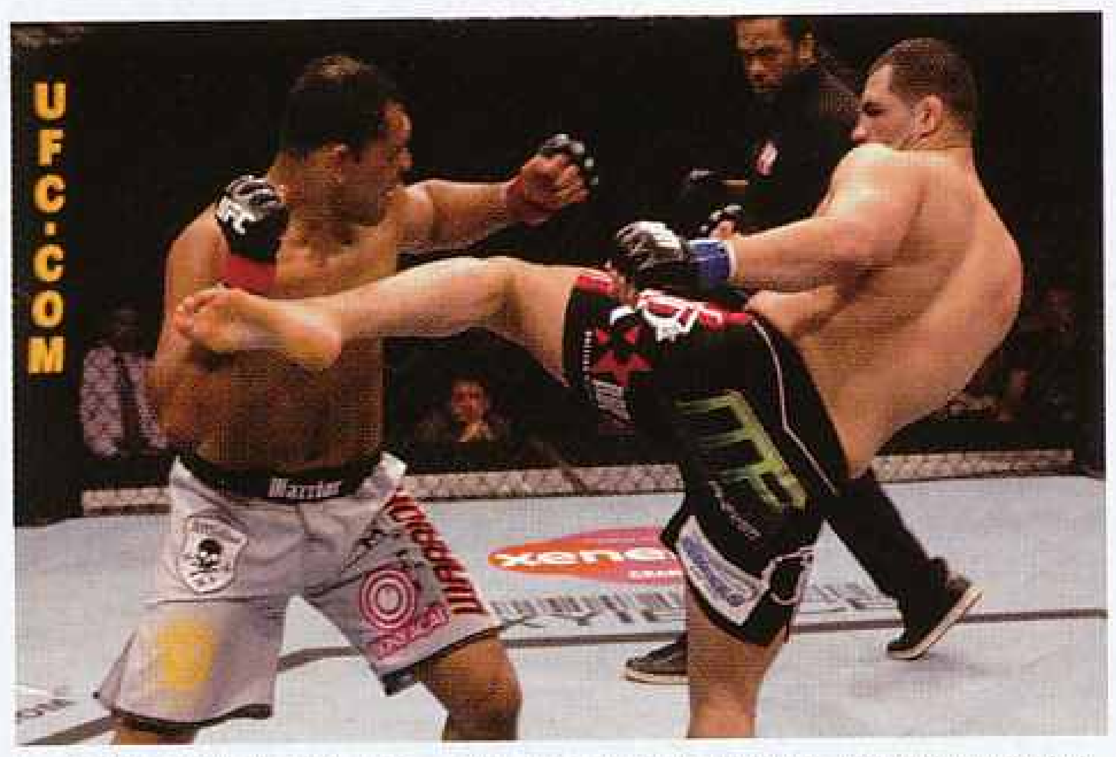
ノゲイラ　う〜ん、ちょっとそれはノーコメントにしてほしいな。ボクとアンデウソンはチームメイトであり、親友同士でもあるからね。どういった意図があったのかは、本当のところは彼にしかわからないことだし、軽はずみなことは言いたくないんだ。

――では、リングを離れたアンデウソンはどんな人物なのか教えてもらえますか？

ノゲイラ　とても素直で、子どもたちを愛している家族想いのヤツだよ。また友だちのことを尊敬する、とても親近感のあるおもしろい人物だよ。

――アンデウソンがシュートボクセを離れたとき、あなたがチーム・ノゲイラに彼を招き入れた理由を教えてください。

ノゲイラ　ホジェリオがサクラバ戦のためのキャンプに入っていたとき、アンデウソンがムエタイのコーチとしてサポートしてくれたんだ。またチームに対してとても誠実で、また一緒にトレーニングをしていくなかで、お互いが助け合える関係を築けていたから、ぜひ一緒にやっていきたいと思ったんだ。それに当時からアンデウソンの持っている素晴らしい才能は認めていたし、いつか世界チャンピオンになると確信していたからね。


2.10『UFC110』でケイン・ヴェラスケスに1ラウンドKO負けを喫してしまったノゲイラ。ヘビー級の世代交代がささやかれるなか、再びトップに這い上がることができるか？

――チェール・ソネンが「アンデウソンは本当は英語がしゃべれるのにしゃべらないのは、アメリカ人やアメリカのメディアをバカにしているんだ」と発言していましたが、どう思いますか？

ノゲイラ　それこそまったく馬鹿げた意見だね。アンデウソンもたしかに日常会話程度の英語はしゃべれるけど得意ではないから、的確に自分の意思を伝えるためにポルトガル語でしゃべっているんだよ。彼はみんなを尊敬しているよ。

――我々はアメリカではなく、日本のメディアですけど、接していて悪い印象はまったくないですからね。

ノゲイラ　そうだろう？　憶測でそんなふうにモノを言うなんて失礼なことだよ。

――またアンデウソンはほかのチャンピオンに比べて、団体に対する忠誠心があまり感じられないという意見もあります。それはやはり、かつてPRIDEを干された経験が関係していると思いますか？

ノゲイラ　団体への忠誠心が感じられないというのは誰の意見なんだい？　そんなことはまったくないし、同意できないコメントだね。ご存知のとおり、UFCと契約した時点でアンデウソンはすでに経験と実績を持ったファイターだったんだよ。日本でも数回試合をしていたしね。アメリカのファンは彼の素晴らしいスタンドの闘いが好きだし、そのファンたちがアンデウソンがUFC無敗であり続ける原動力となっているんだよ。

――ダナ・ホワイト代表などは「才能があるんだから、遊んでないでちゃんと倒しにいけ」と言ってますよね。

ノゲイラ　チャンピオンであり続けるというのは大変なことなんだ。常に対戦相手はその時点で最強の相手だし、その相手に対して完璧な勝利を要求させる。それだけ注目される存在だということだよ。

――わかりました。先日ストライクフォースで行なわれた青木vsメレンデス戦はご覧になられましたか？

ノゲイラ　残念ながらその試合は観ていないんだ。アオキが負けてしまったらしいね。

――得意のグラウンドに持ち込めず、判定負けを喫してしまいました。青木選手がアメリカでもチャンピオンになるには、何が必要だと思いますか？

ノゲイラ　まずはケージで充分なトレーニングを積むこと。ケージとリングでは、試合そのものがまったく異なったものになってしまうんだ。ボク自身、PRIDE以前にもケージで闘っていたことはあったけど、UFCでひさしぶりにケージの闘いをしたら、その違いに苦しんだ部分があったしね。またアメリカのファイターたちは、すでにケージでの経験を積んでいる選手ばかり。試合になれば、その差というのは必ず出てしまうものだからね。

――あなたも含めて、一流グラップラーがなかなか本領を発揮できない状況が続いていますが、この状況についてどう思いますか？

ノゲイラ　オクタゴンの中でもサブミッションで試合を終わらせているケースもまだたくさんあるから一概にそうとは言えないと思う。ただし、対戦者同士のグラウンドのスキルが同等だとした場合、ストライキングにも優れているほうが間違いなく勝利を収めるはずだからね。

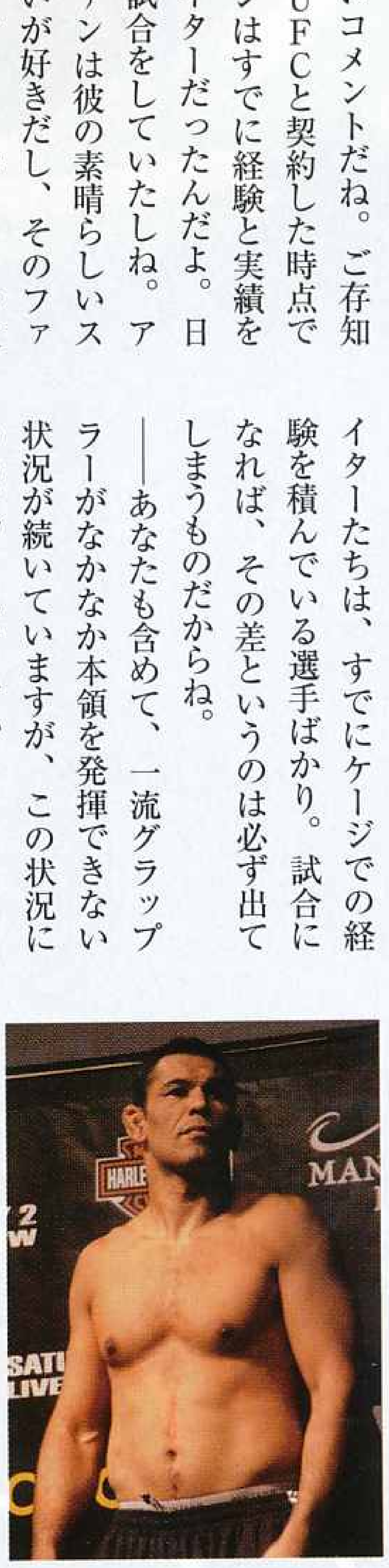
――やはり、いまはグラップラーもストライカー並みの打撃能力が不可欠だと思いますか？

ノゲイラ　もちろんだよ。トップを目指すコンプリートファイターになるためには、グラップリングのテクニックでもより攻撃的なものを身につけなくてはいけないし、同時にストライキングのスキルも上達させることが要求されているんだよ。ボクらがやっているのは、総合格闘技だからね。


――あなたの次の試合はいつ頃になりそうですか？

ノゲイラ　現在UFCで次の試合のスケジュールを調整中なんでまだ何もわからないんだ。でも、再びチャンピオンになる気持ちは、誰よりも持っているつもりだから、前回はガッカリさせてしまったけど、次の試合に期待してほしいね。

【10年5月4日／電話取材にて収録】


ANTONIO RODRIGO NOGUEIRA■1976年6月2日、ブラジル出身。99年にリングスへ初来日。『KOK2000』で優勝。01年よりPRIDEに参戦し、ヘビー級王座を奪取。08年にはUFCでもヘビー級暫定王者のベルトを巻いた。191センチ、108キロ。

――ロサンゼルスでの出稽古中にジムま



ロサンゼルス特訓に
独占潜入！

ヴァンダレイ・シウバ

lei Silva

――ロサンゼルスでの出稽古中にジムまで追いかけてきてしまってすみません。

シウバ 『kamipro』のインタビューはいつでも歓迎だよ。このあいだもらった『MMA Legend（No・2）』も最高だったしね。

――気に入ってもらえましたか？

シウバ もちろん！ 100冊ぐらいほしいくらいだよ（笑）。

――100冊！ 今回は在庫があまり残ってなかったんで、とりあえず5冊持ってきました。

シウバ アリガト、アリガト（日本語で）。

――では、少し遅くなりましたがマイケル・ビスピン戦での勝利おめでとうございます！ この勝利はヴァンダレイ選手にとっても大きなものでしたか？

シウバ ビスピンとの試合は、自分のキャリアをさらに一歩踏み出すためのもので、とても価値ある勝利だったよ。また将来タイトルを狙ううえでも絶対に必要なものだったからね。

――試合時間があと30秒あればKOできたんじゃないかと思いますが。

シウバ 自分でもそう思っている。ビスピンをダウンさせて、パウンドでKOでもサブミッションでも、どちらでもフィニッシュできる状況だったからね。

――あと、最後にビスピンをダウンさせたとき、（ルールで禁止された）サッカーボールキックをぶち込みそうになってましたよね？ やはりまだPRIDEルールが身体に染みついているんでしょうか？

シウバ 確かにビスピンの顔面を蹴り飛ばそうとしていたな（笑）。でも、それはPRIDEルールというより、俺の闘う本能みたいなものだよ。

――そこに相手の顔面があったら蹴って

秋山成勲戦に向け早くも準備万端
“盟友の仇敵”を相手に“怖いシウバ”が帰ってくる！

アキヤマよ、“セクシークリーム”たっぷり塗ってこい！

7.3『UFC116』で日本の格闘技ファン大注目の秋山成勲戦が決定したヴァンダレイ。4月から早くもトレーニングキャンプに入ったヴァンダレイを本誌は独占直撃した。盟友ともいえる桜庭和志とも因縁深い秋山戦をヴァンダレイはどう考えているのか？ またかつてのチームメイト、アンデウソンについても聞いてみた。

聞き手&撮影／堀江ガンツ　通訳／石井史彦



Wander

しまう（笑）。
シウバ　でも、寸前で止められたんだから、それだけ冷静でもあったということさ。
──初めてとなるミドル級での試合でしたが、動きやすさなどはいかがでしたか？
シウバ　とてもいい感じだったよ。時間をかけて食事療法を取り入れてダイエットしたんで、体重を落としたいまでも以前のままのパワーを感じるんだ。次は前回以上のコンディションで試合に挑めるだろう。
──次戦といえば7・3『UFC113』での秋山成勲戦が決まっていますが、ビスピン戦直後の記者会見中に、その場で試合を受諾したことには驚きましたよ。
シウバ　俺はボス（ダナ・ホワイト）が指名した相手なら誰とでも闘うし、ライジングスターであるアキヤマと対戦できることは自分にとっても光栄なことだからね。それにアキヤマとの試合は日本のファンが絶対に喜んでくれるだろう？　だから断る理由なんて何もなかったよ。
──ヴァンダレイvs秋山成勲は、文句なしに日本のファン大注目のカードですよ。ただ、その秋山選手は当初UFCからオファーされていたデミアン・マイア戦を断ってあなたとの対戦を頼み込んだとも聞いています。「舐められた」というような気持ちはありませんか？
シウバ　デミアン・マイアはタフでクレバーなファイターだからね、アキヤマが対戦を避けたのは理解できるよ。でも、アキヤマは、ヴァンダレイ・シウバもタフなファイターであることを忘れてしまったんじゃないか？　まあ、オクタゴンの中で俺を指名したことを後悔させてやるよ。（グラップラーである）デミアンと対戦したら、タップするだけでいいけど、俺と闘ったらヤツの"セクシーな顔"がグチャグチャになるだろうからな（笑）。
──"セクシーヤマ"ですね。やっぱりヴァンダレイ選手も秋山選手をセクシーだと思いますか？（笑）。
シウバ　ノー、好みじゃないよ（笑）。まあ、試合でボコボコにして"俺好み"の顔にしてやるさ。
──世界の強豪と闘ってきたあなたから見て、秋山成勲という選手をどのように評価していますか？
シウバ　アキヤマもトップレベルのファイターたちと対戦し、いい結果を残しているタフなファイターだと思っているよ。

photo by Marcelo Alonso



シュートボクセ時代からの絆があるというヴァンダレイとアンデウソン。ヴァンダレイはPRIDE時代も同門ショーグンとの対戦を頑なに拒んでいただけに、このスーパーファイトが実現する可能性はかぎりなく低そうだ。

おそらく自分のキャリアで対戦した相手でランキングをつけるとすれば、アキヤマはトップ5に入ってくると思う。
──かなりの好評価なんですね。ただ、秋山選手は過去に桜庭選手との試合で、クリームを身体中に塗りたくるという反則を犯したことで、いまだに日本では悪い印象が残っているんですよ。あの件については、どう思いますか？
シウバ　おそらくそのシークレットクリームは、アキヤマがセクシーさを保つために必要だったんじゃないか？（笑）。
──セクシーさを保つためのクリームでしたか（笑）。
シウバ　毎日塗らないとセクシーさを保てないだろうからね。とくにサクラバ戦という大一番だから、より自分をセクシーに見せるために大量のセクシークリームを塗って出てきたんだろう（笑）。
──では、あなたとの一戦も、桜庭戦に勝るとも劣らない大一番ですから、もしかしたら大量のセクシークリームを塗ってくるかもしれませんね（笑）。
シウバ　問題ないよ。いくらでも塗ってきたらいい。俺と闘ったあとはセクシーじゃいられないだろうけどな。
──今回の試合については、日本のヴァンダレイファンはもちろん、桜庭選手やPRIDEのファンもあなたに絶対に負けてほしくないと願っているはずですよ。
シウバ　ノープロブレムだよ！　ファンには「とにかく試合を楽しみにしていてほしい」と伝えてくれ。いま俺は、昔の自分に戻るためにシュートボクセ時代のコーチ、ハファエルのもとで最高のトレーニングができているんだ。俺を長年応援し続けてくれている日本のファンのためにも、アキヤマを必ずKOするから、そんな無駄な心配はしないでくれと言いたいね。
──わかりました。では、話題を変えまして、両者ともにあなたと関わりが深いアンデウソン・シウバvsデミアン・マイア戦はどのようにご覧になりましたか？
シウバ　素晴らしくハイレベルな試合だったと思うけど、アンデウソンがデミアンに対して言ったことは好きじゃないよ。彼のゲームプランはスマートだったけど、言った内容は最低だったな。
──なぜアンデウソンは、あのような言動をしたのだと思いますか？
シウバ　まったく理解できないんだ。彼自身にしかわからないと思うよ。
──あなたが知っている昔のアンデウソンとは別人のようでしたか？
シウバ　アンデウソンは昔から知っている友だちだけど、あんな姿は見たことがないし、想像もつかなかったよ。
──やはり友人であっても、あの挑発的な行動はプロとして認められませんか？
シウバ　態度そのものに関しては問題ないと思う。でも言った内容は絶対に認めるものではなかったということだよ。もし、何も言わずにあの態度だけだったらこんなに騒がれていないと思うんだ。
──もし、あなたがあのような発言をされたらどうしますか？
シウバ　頭にくるに決まっているさ。でも俺はプロフェッショナルだからね、よけいな感情を捨て、フィニッシュすることだけにフォーカスするよ。
──アンデウソンは現在あなたと同じ階級のチャンピオンですが、彼と対戦したい気持ちはありますか？
シウバ　もちろん俺のゴールはチャンピオンになることだけど、彼とは試合をしたくないんだ。ほかの誰かがチャンピオンにな

タカノリ・ゴミが本気で復活したいのなら俺の家に住み込んでトレーニングしてもいい

るときまで、タイトル挑戦を待てばいいだけさ。

——やはり、あなたの信条である、相手を〝ぶっ潰す〟気持ちが友だち相手だと湧いてこないわけですか？

シウバ　そのとおりだよ。そういう気持ちがない試合をするなんて、ファンにも失礼だし、ヴァンダレイ・シウバの試合が見せられないと思うからね。

——逆に秋山戦だとベストのヴァンダレイが見せられるんじゃないですか？

シウバ　アキヤマとは一言も話したこともないし、友だちでもなんでもないから、相手をぶっ潰すベストのヴァンダレイを約束するよ。

——かつてPRIDEで〝主食日本人〟というニックネームが付けられていたことはご存知ですか？

シウバ　ハハハ、そうなのかい？（笑）。確かに昔はベストの日本人ファイターを次々と倒していたからね。まあ、アキヤマはジャパニーズであり、コリアンでもあるから、よりおいしいんじゃないか？（笑）。

——韓国風味の日本食ですか（笑）。

シウバ　そして俺自身は気持ちとしては、ジャパニーズ・ブラジリアンだと思っているからね。日本のファンのためにも、必ずKOするよ。

——ほかの日本人ファイターについても聞かせてもらいたいのですが。まず五味選手のUFCデビュー戦、ケニー・フロリアンとの試合はどう思いましたか？

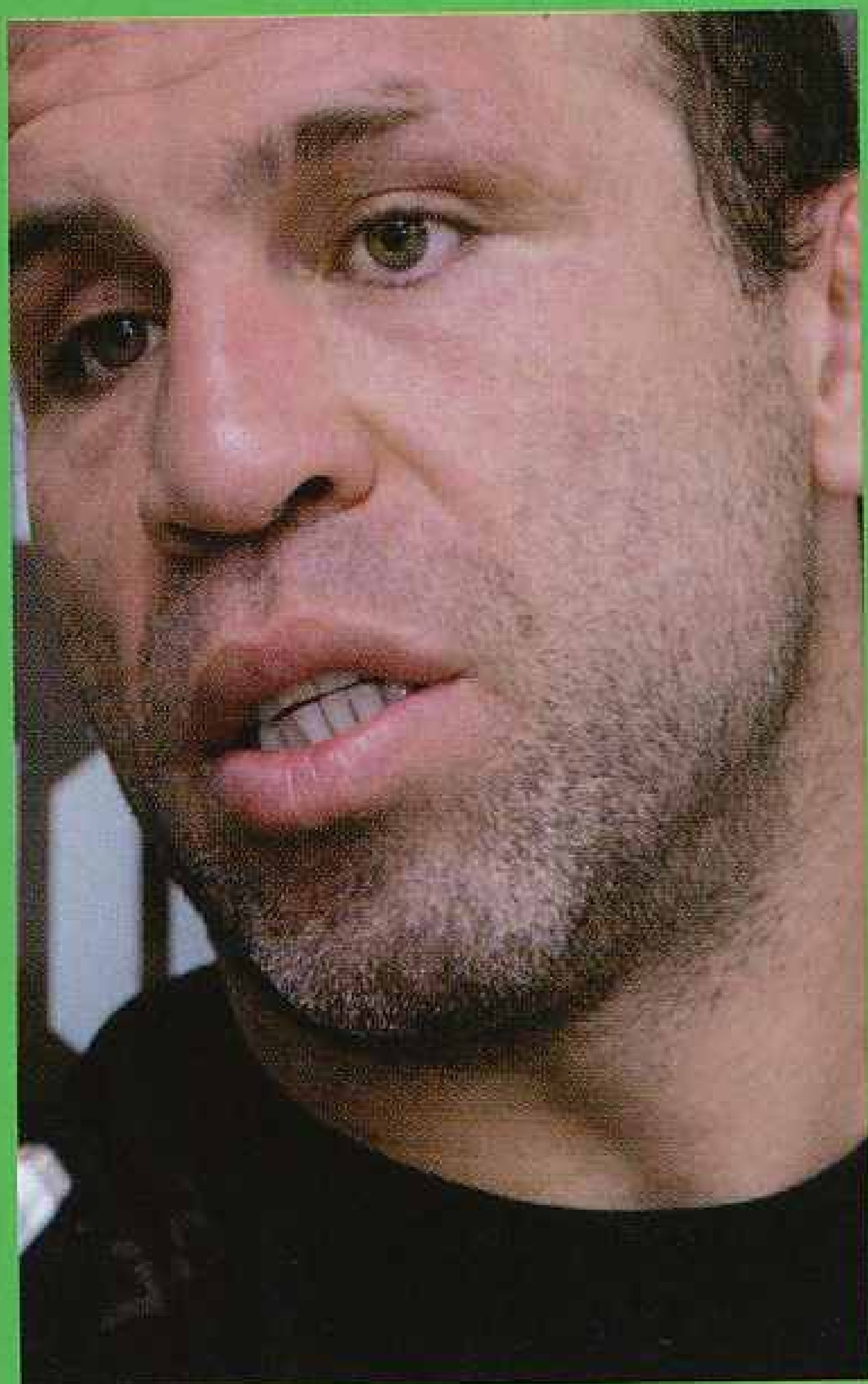
シウバ　試合を観ていないんで、内容についてはコメントできないんだよ。でも、話を聞くかぎり、ゴミはここ数年あまりいい練習ができてないんじゃないか？　ゴミが本気で復活したいなら、俺のジムにトレーニングに来たらいい。コーチのハファエルと一緒にトレーニングすることで、いろんなアドバイスができると思うんだ。それに俺のジムにはボクシング、レスリング、柔術とMMAに必要なコーチがすべて揃っているからね。

——練習環境としては、日本よりはるかに上ですよね。

シウバ　ゴミはまだケージにも慣れてないだろうからね。俺のジムにはUFCで使用しているものと同じケージもあるから、彼が望むなら歓迎するよ。

——やはり五味選手の復活には、UFCのためのしっかりとしたトレーニングが必要不可欠ですか？

シウバ　もちろん。俺にハファエルというマスターがいるように、ゴミにもマスターとなる人がいないとダメだろう。ゴミがプライムタイムに見せてくれたワールドベストの〝オールド・スタイル〟を復活してほしいんだ。



WANDERLEI SILVA■1976年7月3日、ブラジル出身。96年にブラジルでデビュー。99年からPRIDEに参戦し、PRIDEミドル級絶対王者と呼ばれる。07年からUFCに戦場を移し、ラスベガスに自身のジムもオープンした。180cm、84kg。

——ヴァンダレイ選手同様、トレーニングを基盤をアメリカに移すというアイデアも有効だと思いますか？

シウバ　生活環境を変えるというのはとてもいいことだと思うんだ。本当に真剣になってトップに返り咲くための練習したいのなら、俺の家にホームステイしてもらったっていい。

——自宅の部屋を提供してくれますか！

シウバ　その代わり、ジムと家の往復で、食事と練習の時間しかない生活になるけどね。それくらいシリアスになる気持ちがあるなら、喜んでサポートするよ。

——あとは五味選手次第ということですね。では、もう一人の日本人トップファイター、青木選手のストライクフォースでの試合はご覧になりましたか？

シウバ　ああ、テレビで観たよ。まずアオキはスタンドアップの練習をもっともっとしなくてはいけないね。もちろん彼の柔術は驚くべきものだけど、ここアメリカにはレスリングのバックグラウンドを持ち、スタンドアップに優れた選手がたくさんいるから、柔術という最高の武器を殺されてしまうんだよ。

——青木vsメレンデスやアンデウソンvsデミアンのように、一流グラップラーが相手にアウトボクシングで距離を取られてしまい、ポイントを奪われる傾向が続いていますが、どう思いますか？

シウバ　それはゲームプランとして正しいものだと思うよ。ファイターはプロなんだから、そのルールを理解して、また対戦相手によって戦略を立ててくるのは当然のことだからね。

——ただ、あなた自身の試合でも、対戦相手がアウトボクシングをする選手が多くなっていますよね？　それによってKOが減ってしまう懸念があるのですが、このスポーツにとってどう思いますか？

シウバ　それだけすべてのファイターがタフでレベルが上がってきて、倒しにくくなってきたということだよ。だから俺も過去の栄光にあぐらをかくことなく、そういう相手でもKOできるようにトレーニングしているんだからね。

——今年に入ってから自分の調子が上がっている実感はありますか？

シウバ　リアリー・グッドだよ！　これからアキヤマの試合に向けてさらに調子が上がっていくだろう。

——ベストのコーチとも再合体して、ようやく最高のヴァンダレイを見せる状態が整ったっていう感じでしょうか？

シウバ　まさにその通り。いま〝普通のヴァンダレイ〟に戻ったところなんだよ。

——これまでUFCに来てからしばらくは、普通な状態ではなかった、と。

シウバ　PRIDEからUFCに戦場が変わり、ジムも住む場所もすべて変わったからね。ようやくトレーニングに集中できるようになったんだ。いままでの自分の人生がトレーニングで明け暮れてたように、これからもひたすらトレーニングを行なっていくだけだよ。

——では7月が、ヴァンダレイ・シウバの大復活祭となることを期待してます！

シウバ　俺は大観衆の中で、プレッシャーがあればあるほど燃えるんだ。最高のショーを見せてやるから期待してくれ！

【10年4月20日／米国カリフォルニア州、キングスMMAにて収録】

Wanderl

元シュートボクセのコーチが語る

ヴァンダレイとアンデウソンの

過去と現在

Rafael Cordeiro

ハファエル・コルデイロ

「アンデウソンはUFC王者になって勘違いしているのかもしれない」

元シュートボクセのヘッドコーチとして知られるコルデイロ。現在はヴァンダレイ、ファブリシオ、ババルらを指導しているが、大一番を控えた彼らの状況、そしてかつての生徒であるアンデウソンについて聞いてみた。

聞き手&撮影／堀江ガンツ　通訳／石井史彦



ハファエル　今日は私のジムに来てくれて感謝しているよ、アリガトウ。

——こちらこそ取材させていただきありがとうございます。今日のトレーニングはヴァンダレイ、レナート・ババル、ファブリシオ・ヴェウドゥムという3人のトップファイターが集まっていましたが、彼らの状態はどうですか？

ハファエル　とてもいい感じで仕上がっていて、3人ともいますぐにでも試合ができるんじゃないかというほどさ。ババルはさらにテクニックに磨きがかかっているし、ヴァンダレイも7月のアキヤマ戦に向けてキャンプに入ったところ、ファブリシオは最高の状態でキャンプを終えるところなんだよ。

——3人それぞれ大一番が近づいていますもんね。

ハファエル　だから最高のメンバーがお互い助け合ってトレーニングしているところなんだ。

——では、まずファブリシオは6月24日にあのヒョードルと対戦予定ですが、この試合のポイントはどこにあると思いますか？

ハファエル　グラウンドゲームに持ち込めるかどうか、その一点にかかっているよ。ファブリシオは柔術で二度も世界を制覇しているんだよ。グラウンドに持ち込めば、かなりの確率でファブリシオが勝つと信じている。そのため、いまキング・モーからレスリングのテクニックを徹底的に学んでいるところなんだ。

——続いてヴァンダレイは7月3日に秋山成勲戦が決まっていますが、こちらは何がポイントになりますか？

ハファエル　まずはコンディショニング。それとムエタイになるだろうね。

——それは秋山選手の打撃も評価しているということですか？

ハファエル　そのとおりで、彼のスタンドアップは非常に優れているし、私から見ても「いいセンスをしているな」と思うよ。ただ、ヴァンダレイのパンチにはヘビー級のパワーがあるからね。その強さはミットを持っている私が一番わかっている。ヴァンダレイにとってアキヤマは相性がいい相手だから、素晴らしいKOシーンを見せられるんじゃないかと期待しているんだ。

——どんなところで相性の良さを感じますか？

ハファエル　アキヤマはスタンドアップの闘いを好む、ちょうどユウキ・コンドー（近藤有己）と同タイプのファイターだからね。きっとあのときのようなKOで決めてくれるはずさ。

——なるほど。確かに近藤選手とファイトスタイルで共通点が多いですね。秋山選手の長所と弱点はどこだと思いますか？

ハファエル　常にコンディションがいいところだね。試合に最高の状態で挑むというのは、さすが柔道のトップアスリートだと感心しているんだ。弱点は言えないけど、試合のカギはキックやパンチを織り交ぜたムエタイのテクニックになると思っているんだよ。だからコンディショニングとムエタイを重視したトレーニングを取り入れているんだ。

——では、秋山戦はかなり期待してよさそうですね。

ハファエル　ぜひ期待してくれ。日本のファンがよく知っている、あの恐ろしく強いヴァンダレイが帰ってくるからね（ニッコリ）。

——では、そのヴァンダレイとかつての同門で、あなたの生徒でもあったアンデウソン・シウバとデミアン・マイアの試合についてもうかがいたいのですが。

ハファエル　アンデウソンは誰もが認めるベストファイターだよ。ただ、今回の試合に関しては対戦相手であるデミアンにひとかけらの尊敬の念も持たなかったね。試合前に二人のあいだで何があったのかは知らないし、仮にアンデウソンが激怒するよ

うなことがあったとしてもオクタゴンの中にそれを持ち込んではいけないよ。プロフェッショナルなトップファイターとしてね。

――アンデウソンの闘い方は、シュートボクセ流のアグレッシブな闘い方と異なりますが、昔からそうなんですか？

ハファエル あのディフェンシブなゲームは昔からアンデウソンのスタイルなんだよ。「もっとアグレッシブに攻めよう！」と何度もアドバイスしたけど、ヴァンダレイやショーグンとは異なったスタイルなんだ。でも、彼はリーチも長いし、長い足でのキックも得意なんで、あの長所を活かした素晴らしいスタイルを作り上げたと思う。彼は今後も長いあいだタイトルを防衛するだろうね。

――アンデウソンの態度や言動が今回問題視されていますが、昔からあのようなことを言ったりするタイプだったんですか？

ハファエル いや、あんなアンデウソンを見るのは今回が始めてなんだ。とても信じられない気持ちだよ。ご存知のとおり、我々はシュートボクセで長いあいだ一緒だったけど、そんな態度をとったことは一度もないんだよ。ノーガードのパフォーマンスは試合の駆け引きの一つでもあるから問題ないけど、対戦相手に尊敬の念を持たなかったり、とくに大観衆の前で言ってはいけない言葉を使うのは私自身大嫌いなんだ。実際になぜそうなったのかは知らないけれど、もっと対戦相手のことを冷静に考えるべきだったと思う。

ショーグンはアンデウソンと闘うことがあるかもしれないけど、ヴァンダレイはないよ



ラスベガスから出稽古にやってきたヴァンダレイを加え、ロサンゼルスにあるアフリクションジムで指導するコルデイロ。現在はハンティントンビーチに開いた自身のジム「キングスMMA」と両方でプロのコーチとして活躍している。

――普段のアンデウソンはどんな人物なんでしょうか？

ハファエル グッドパーソンで、たまにジョークを言ったりと一緒にいて楽しいヤツだよ。いまはUFCでチャンピオンになって勘違いしている面もあるかもしれないけど、根はいいヤツなんだ。間違いなくあんな言動をするなんて考えられないグッドパーソンだよ。

――なぜ今回、変わってしまったのでしょうか？

ハファエル アイ・ドント・ノー……。いまは一緒に練習してないから想像でしかないけど、可能性としては周りの友人やコーチに関係しているのかもしれないね。彼にはテクニック面だけじゃない、精神的な支柱となるコーチが必要なんじゃないかな。〝こういうことをしちゃいけないよ〟とか、〝対戦相手はリスペクトしなさい〟とか、MMAに関することだけじゃなくてプロフェッショナルなファイターとしての教育をしないとね。もしUFCのチャンピオンになったんでなんでもできると思ってしまったんだったら悲しいね。

――強すぎるがゆえに傲慢になってしまったのではないか、と。

ハファエル 「自分は一番だ、一番はなんでもできるんだ」とか思ってしまったのかな……。本当は一番になったら逆にみんなから注目されていつも見られているんだから、オクタゴンの中でも外でもチャンピオンとして恥ずかしくない態度をとらなければいけないんだけどね。ヴァンダレイを見てごらん？　そんな態度を対戦相手にとったことがあるかい？

――ありませんね。それにリング外の態度も、みんなが口を揃えて素晴らしいと言いますよね。

ハファエル そうだろう？　だからファンにも、そして戦争のような闘いをした対戦相手にも、試合後には好かれると思うんだ。

――一時、ヴァンダレイやあなたといった旧シュートボクセ勢とアンデウソンのあいだで、感情的なもつれがあったと聞いていますが。

ハファエル そんなことはないし、いまでもたまに話をしたりする仲だよ。おそらくアンデウソンがシュートボクセを離れたとき、メディアの前でお互いに好き勝手なことを言ったときもあったからそうとられたんだろうね。仮にショーグンは将来、アンデウソンと試合をすることがあるかもしれないけど、ヴァンダレイはアンデウソンとの対戦を友だちということで避けると思うんだ。二人はそういう仲なんだよ。

――ということはショーグとアンデウソンのあいだはそんなに良い関係ではない、と？

ハファエル アンデウソンはリョート・マチダと一緒にトレーニングをしているからね。それによショーグンとの関係は断たれたんだよ。

――ではヴァンダレイの階級であるミドル級の王者はアンデウソンですが、そのタイトルマッチは将来的にも実現しませんか？

ハファエル お互い闘いたくないはずだよ。でも、ダナが大金を積んで実現させようとしたら……。とにかくどうなるかなんて、いまの時点では誰にもわからないことだよ。もちろん個人的には、二人の友情を考えると観たくないし考えたくもないカードだけどね。

――でも、もし実現してしまったら、ヴァンダレイを勝たせるための作戦をあなたが考えるわけですよね？

ハファエル 考えたくないけど、そうなるだろうね。

――いまのところアンデウソンの倒し方を誰もわからない状態ですけど、やはりずっとアンデウソンを見ているあなたは彼の弱い点、強い点を誰よりもわかっているという自負はありますか？

ハファエル 12年間も一緒にいたんだ。もちろん彼のことはなんでも知っているよ。ただし、私の生徒を彼と闘わせる試合は受けたくないし、誰に頼まれようと試合に関する彼のことは話すことなんてできないよ。あの12年間を壊したくないんだ。ヴァンダレイだって、同じ思いなはずさ。

【10年4月19日／米国カリフォルニア州、キングスMMAにて収録】

DREAMライトヘビー級GP 出場のはずが……
好漢ババルが日本再上陸を熱望！

Renato "BABALU" Sobral
レナート・ババル

「ファイターとしての故郷・日本で闘えるのが本当に楽しみなんだ」

DREAMライトヘビー級GP出場のため、ストライクフォースから送り込まれることが内定していたババル。本誌はGPへの意気込みを聞くべく取材したが、その後なんとライトヘビー級GP開催延期が決定！ 残念だけど、ババルの日本への思いだけでもここにお届けします。

聞き手／堀江ガンツ　通訳／石井史彦



RENATO "BABALU" SOBRAL■1975年9月7日、ブラジル出身。99年にリングスへ初来日し、KOKトーナメント準優勝をはたす。01年にはヒョードルとリングスヘビー級トーナメント決勝を争った。 その後、UFC、アフリクションなどで活躍し、08年にはストライクフォース世界ライトヘビー級王者となったが、昨年ゲガール・ムサシに敗れ王座陥落した。185cm、95kg。

――いま、ヴァンダレイ、ファブリシオらとの練習を見せてもらいましたが、かなり充実した練習ができているようですね？

ババル　ああ、ひさしぶりに日本で闘うことが決まって、気合いが入ってるんだ。興奮してるよ。

――日本での試合がそんなに楽しみですか。

ババル　もちろんだよ！　日本にはいい思い出しかないからね。ファイターを尊敬してくれる日本のファンも大好きだし、長いあいだ会ってなかったレフェリーのワダさん（和田良覚）など、昔の仲間に会えるのも楽しみだしね。

――和田さんと会うのが楽しみですか（笑）。

ババル　俺はこの10年、ブラジルやアメリカからテレビの映像を通して、PRIDEやDREAMを観てきたけど、そこで自分が闘うってことが現実になるんだから、そのことを考えただけで興奮してしまうんだ。まだ試合まで1カ月はあるけど、いまから日本に行くことが待ちきれないよ（笑）。

――ただ、ひさしぶりの日本での試合ということで、リングとケージの違いや、ルールの違いなど、日本とアメリカの異なる部分について心配なことはありませんか？

ババル　まったく心配なんかしてないよ。何が起こるかわからないから人生はおもしろいんだと思う。だから先の心配なんてしてないさ。

――今回、そして以前練習を見せてもらったときもロングスパッツを着用してましたけど、もしかして日本での試合でも穿く予定ですか？

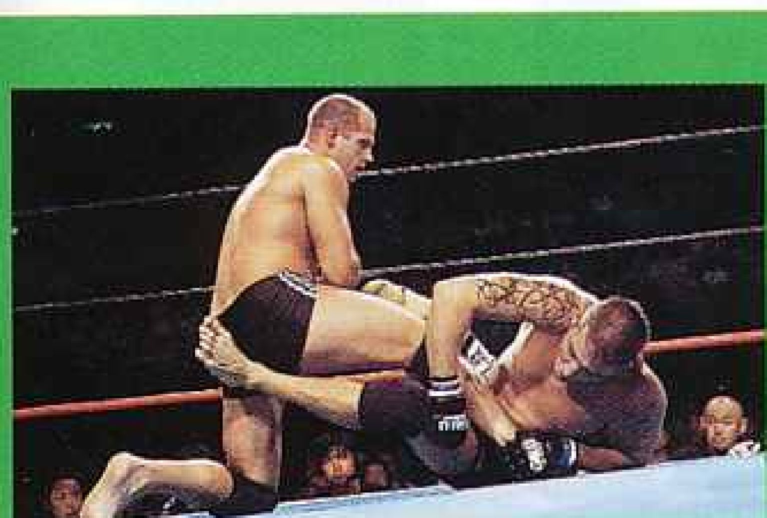
ババル　ノー、ノー。今日は月曜日だからだよ。

――なんで月曜日だとロングスパッツを穿くんですか？

ババル　俺はじつは甘いものが大好きなんだけど、普段はケーキやブラウニー、キャンディーなんかを食べるのを我慢してるんだ。太らないためにね。でも、週末だけは食べていいことにしてるんだよ。だから月曜日の練習は短時間で汗をかいて、身体の中から不要なものを排出するために、ロングスパッツを穿いてるんだ。前回のインタビューも月曜日だっただろう？　だからスパッツを穿いてたんだよ。

――そんな理由でしたか（笑）。

ババル　まあ、日本ではロングスパ



[01.8.10 リングス]
東京・有明コロシアム

× vs エメリヤーエンコ・ヒョードル
(2R終了 判定 0-3)

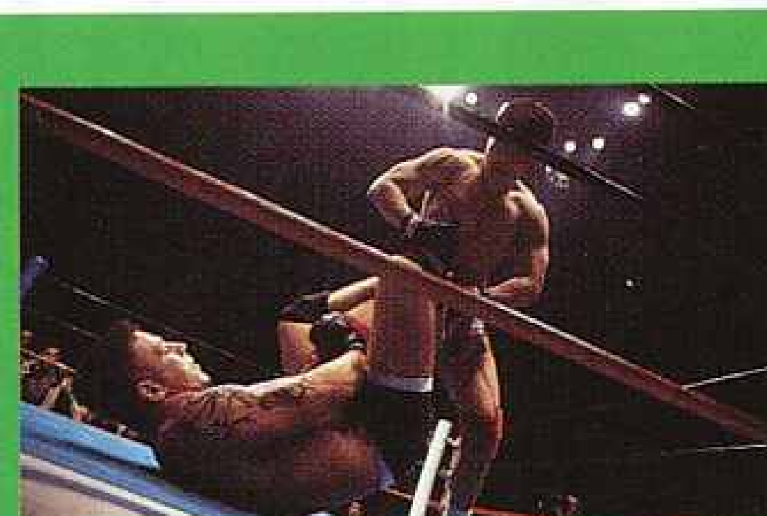
リングスヘビー級トーナメント決勝で皇帝に判定負け。実力者ババルを破ったこの試合からヒョードルの強さが知れ渡り始めたのだ。



[00.6.15 リングス]
東京・代々木第二体育館

○ vs 金原弘光
(2R終了 判定 3-0)

リングスのメインで金原と対戦し、判定勝ち。ババルは高阪剛にも勝利しており、田村、金原、高阪のリングス3強を総なめにしている。



[00.2.26 リングス]
東京・日本武道館

○ vs 田村潔司
(2R終了 判定 1-0)

KOK準決勝でエース田村と激突。田村はヘンゾ・グレイシーに勝った直後だったが、体格で勝るババルが試合を優位に進め判定勝ち。



[99.10.28 リングス]
東京・代々木第二体育館

○ vs グロム・ザザ
(2R 1分11秒 アームロック)

KOKトーナメント1回戦でグルジアのザザと対戦。ザザは"柔術怪獣"モラエスを倒し名を上げた選手だったが、ババルは見事に一本勝ち。

DREAMという素晴らしいショーに出場できることが楽しみなんだ

ッツ着用がOKだし、スポンサーがつけば、スポンサーロゴをつけるスペースがたくさんあるロングスパッツを穿いて闘いたいけどね（笑）。

——DREAMライトヘビー級GPでは、誰が一番ライバルになりそうですか？

ババル 俺はチャンピオンを目指してるんだから、誰と対戦しても闘えるような準備をしているよ。すでに"WAR"に出陣する心構えはできてるんだ。

——ストライクフォース・ナッシュビル大会で行なわれた、ムサシvsキング・モーの試合はご覧になりましたか？

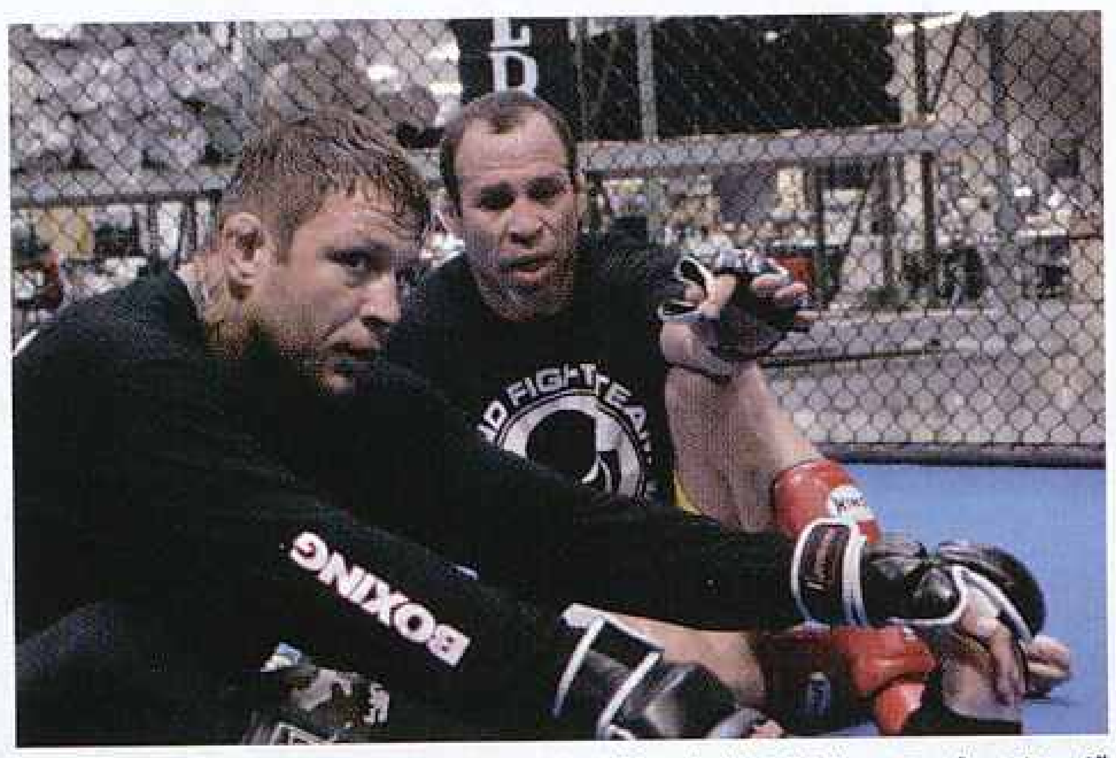
ババル 残念ながら観ていないんだ。週末は子どものお守りをしていたんでね。でも、録画してるんで、彼らの動きをチェックするためにも、あとで観てみる予定だよ。エンターテインメントのショーを観る気持ちじゃなくて、ファイターの弱点や危険な動き、またどんなときにミスを犯しているかなど、じっくりと分析したいんだ。そんな分析は、子どものお守りをしながらできないからね（笑）。

——ムサシが負けたことについては、驚きはありましたか？

ババル ノー、まったく驚かなかったよ。キング・モーが勝つことはわかっていたからね。モーはいつも練習をともにしている仲間なんで、彼の実力を知っているし、モーがテイクダウンしてムサシをコントロールするだろうと予想していたんだ。キング・モーは素晴らしいレスラーであり、MMA界のライジングスターなんだよ。

——DREAMという団体についてどのような印象がありますか？

ババル DREAMは毎回テレビで観ているけど、とてもナイスなショーだと思ってるよ。前回の大会では、友人であるジョシュ・バーネットも参戦していたしね。ジョシュはDREAMのお気に入りの点を、会うと毎回のように話してくれるんだ。だから、今回は日本に戻れるだけでなく、そのDREAMの素晴らしいショーに出場できることが凄くうれしいんだ。


取材に訪れた日、ヴァンダレイと立ち技、寝技の激しいスパーリングをしていたババル。アグレッシブな闘いぶりと、極めの強さは日本マット向き。ぜひ近いうちに来日してほしい!

——試合に向けての練習で、今日はヴァンダレイとのスパーリングが一番多くの時間を割いて行なわれていましたが、彼との練習は、どういった点がとくにためになりますか？

ババル ヴァンダレイは試合経験が豊富なだけでなく、練習そのものの経験も豊富なファイターだからね。彼はみんなをリードしてくれるし、彼の持っているテクニックを惜しみなく教えてくれて、自分だけじゃなくみんながレベルアップできるよう心がけてくれてるんだよ。それに彼は「キング・オブ・ザ・KO」だからね。KOするためのテクニックや、試合に使えそうなトリックまで教えてくれるんだから、本当に感謝しているよ。

——日本ではアメリカ以上に、KOや一本で試合を決めることが求められますけど、あなたももちろんKO、一本を狙っていきますか？

ババル もちろん、いつでもフィニッシュを狙っているよ。ハッキリとした試合数は覚えてないけど、ここ15試合ぐらいの試合結果は、すべて俺がサブミッションを極めたか、きれいにKOされたかのどちらかのはずだよ（笑）。

——極めるか、倒されるか、でしたか（笑）。

ババル 4試合前の試合では極めきれなくてポイントでの勝利になったんだけど、それ以外はここ数年、判定になったことがないんじゃないかな。俺は試合にただ勝つだけじゃ満足しないんだ。早いラウンドでのKOか一本こそが、最高の快感だからね。

——9年ぶりの日本になりますが、どんなレナート・ババルを見せたいですか？

ババル 一番見せたいのは、この9年間で成長した姿だけど、ルックスは10年前のままの姿を見せたかったんだけどね（笑）。年齢的にちょっとオッサンにはなったけど、ファンのみんなには、昔と変わらない"ハートとリスペクト"を見てもらいたいね。試合を通じて、ファンに対する敬意を感じてもらいたいんだ。

——では、ひさしぶりの日本での試合、期待してますよ。

ババル ありがとう。俺も待ち遠しくて仕方がないよ。日本のファンにメッセージを送っていいかい？

——ぜひ、お願いします。

ババル みんな元気かい？ ひさしぶりにみんなに会えるのが楽しみだよ。見かけはちょっと歳をとって、タトゥーの数も増えたけど、ハートは9年前とまったく変わらないババルのままさ。ファイターとしてはよりテクニックを身につけたし、子どももできて人生に変化もあったけど、いまのババルのすべてをお見せしようと思ってるんで、ぜひ会場に応援に来てくれ！

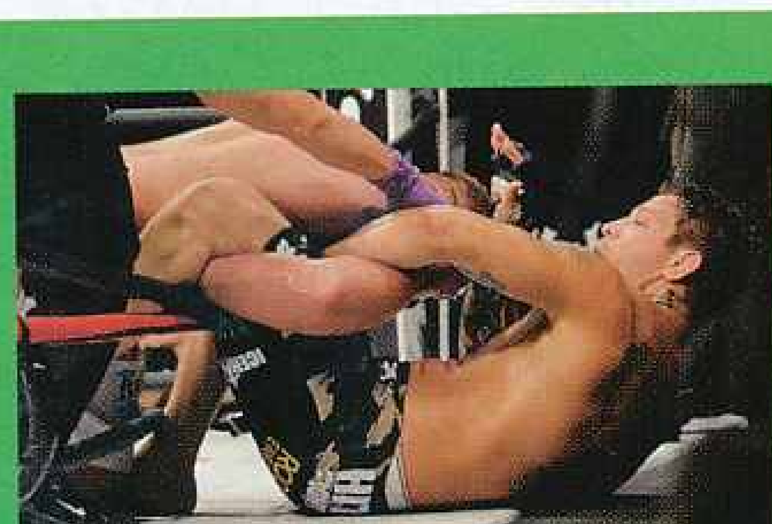
【10年4月19日／米国カリフォルニア州、アフリクションジムにて収録】

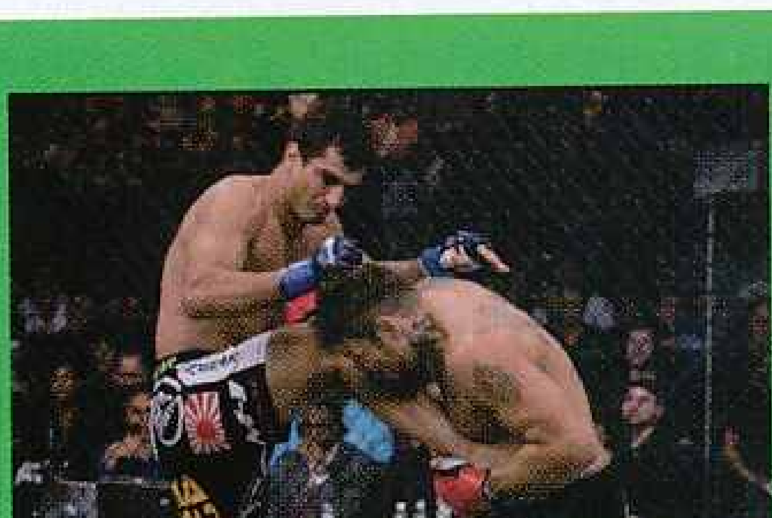
このように、ひさしぶりの日本での試合を本当に楽しみにしていたババル。しかし、DREAMライトヘビー級GPは企画見直し等があり、ババルの来日自体も延期となってしまったようだ。しかし、DREAMとストライクフォースの提携関係もあり、7月か9月の大会に参戦する可能性は充分。

10年前と同じハートを持ち、技術的に成長したレナート・ババルの試合が近々、日本で観られることに期待しよう！


[06.8.26 UFC62]
米国ネバダ州ラスベガス、マンダレイベイ・イベントセンター
× vs チャック・リデル
（1R 1分35秒 TKO）
03年半ばからMMA10連勝を挙げたババルは、当時絶頂期にあったリデルの持つライトヘビー級王座に挑戦。しかし王座奪取はならなかった。


[07.8.26 UFC74]
米国ネバダ州ラスベガス、マンダレイベイ・イベントセンター
○ vs デビット・ヒース
（2R 3分30秒 アナコンダチョーク）
試合前に舌戦を繰り広げたヒースを絞め落としたババルだったが、タップ後も技を解かなかったため、UFCから契約を解除されてしまった。


[09.1.24 アフリクション]
米国カリフォルニア州アナハイム、ホンダセンター
○ vs ソクジュ
（2R 2分37秒 アナコンダチョーク）
PRIDE末期に彗星のように現われたソクジュと対戦。寝技で優位に立ち、最後は得意のアナコンダチョークで一本勝ち。実力をあらためて証明した。


[09.8.15 ストライクフォース]
米国カリフォルニア州サンノゼ、HPパビリオン
× vs ゲガール・ムサシ
（1R 1分0秒 TKO）
ストライクフォース世界ライトヘビー級王座初防衛戦でムサシを迎えたが、スタンドの打撃とパウンドで秒殺KO負けし、王座転落した。

&THE GREAT SASUKE



STEVE "LIPS" KUDLOW

ROBB REINER

ANVIL &T



DVD『アンヴィル！～夢を諦めきれない男たち～』発売記念

東北の英雄が憧れのロックスターと感動のご対面！



ザ・グレート・サスケ アンヴィル来 ヘヴィメタ

ライブハウス『kamipro』へようこそ！(ヒムロック調)。ということで、自身のドキュメンタリー映画が話題となったHM/HRバンドのアンヴィルと、映画愛好家として、また最も映画に影響を受けやすいレスラーとして有名な我らのサスケが合体！　さぁ、ヘッドバンギングしながらお読みくださいイェイ！

構成／鈴木佑　撮影／菊池茂夫

現在活躍する人気バンドに大きな影響を与えながら、自らはブレイクの機会を逸したままだったメタルバンドのアンヴィル。そんなアンヴィルを主人公とした映画『アンヴィル！～夢を諦めきれない男たち～』は08年1月にサンダンス映画祭に出品され、多くの人々から熱狂的な支持を獲得。あのマイケル・ムーアも「ここ数年のドキュメンタリーで最高傑作」と賛辞を送り、世界各国の映画祭でも盛大な拍手を送られた。
　日本でも多くの反響を呼び、マット界でもこの映画に心を揺さぶられた男が一人――その名はザ・グレート・サスケ！　サスケは自分のブログで「これはみちプロファンなら『レスラー』に引き続き観てほしい作品」と大絶賛。
　そこで今回はジャパンツアーで来日したアンヴィルのスティーヴ"リップス"クドロー（ヴォーカル兼ギター）、ロブ・ライナー（ドラム）、グレン・ファイブ（ベース）の3人とサスケによるコラボ対談を実現！　夢をあきらめきれないすべての人に捧げちゃいます！

サスケ　はじめまして！　いや～、今日はお会いできて光栄です！　私は『アンヴィル！～夢を諦めきれない男たち～』を観て、皆さんが夢をあきらめずに挑戦する姿に非常に感銘を受けたんです。映画館にも二度ほど行ったんですが、二回とも号泣してしまいましたから！

リップス　そうかい、そいつはこっちも光栄だね（ニッコリ）。ところで君はレスラーとしてグッドガイなのかい？　それともバッドガイ？

サスケ　一応、これでもベビーフェイスでやってます（笑）。



夢のためにカッコ悪いところを含めすべてさらけ出すオヤジたちの姿が、どうしてこんなにもカッコいいんだろう？『アンヴィル！～夢を諦めきれない男たち～』（通常盤）は3,980円（税込）で発売中！



昨年の映画公開に合わせて『ラウドパーク』に来日したアンヴィルは、今年4月には映画のDVD発売時期に合わせてジャパンツアーを敢行。各地でメタラーたちを熱狂させた。

私もプロレスと同時並行でバイトしていたので感情移入できました（サスケ）

ロブ　覆面ヒーローなんだね（笑）。アメリカや海外でも試合したことはあるの？

サスケ　10年ほど前にWWEやECWに上がったことがありますね。

グレン　オレはプロレスが大好きだから君の試合を観た記憶があるよ。

サスケ　ホントですか？　それはうれしいな～（しみじみと）。

ロブ　レスラーの知り合いだと、俺たちはクリス・ジェリコと仲がいいんだよ。

サスケ　あ、そうなんですか。それはどういったつながりで？

リップス　彼がアンヴィルの長年のファンだったらしくてね。今回の映画を観たあとに、わざわざ「凄く感動した」って俺たちに連絡をくれたんだよ。とってもナイスガイさ。

サスケ　ジェリコはミュージシャンとしての顔も持ってますしね。

グレン　そうそう。それに俺たちと同じカナダ人だからね。何かシンパシーを感じてくれたんだと思うよ。

ロブ　そもそもプロレスとロックは共通点がたくさんあるからな。エンターテインメントとして観客を熱狂させるのはもちろん、ツアーに出て最悪なプロモーターに出くわすなんてところも似てるんじゃないか？（笑）。

サスケ　そのとおり！　映画のなかでリップスがギャラを払おうとしないプロモーターにつかみかかるシーンがあったじゃないですか？　私もイギリスで試合をしたときに同じような目に遭ったんで、いたく共感しましたよ（笑）。

リップス　ハハハハ！　それなら俺もプロモーターに詰め寄ったかいがあったかな（笑）。

サスケ　ほかにもいろいろ印象的な場面はあったんですけど、映画の冒頭でリップスがアルバイトで給食の配達をしてるシーンにも感情移入しましたよ。私は東北出身なんで、凍って滑りやすくなってる道で給食を一生懸命運んでる姿にはグッときましたね！　それに私も若い頃はプロレスと同時並行でアルバイトもやってたので、自分を重ね合わせて観ることができたんです。

ロブ　なるほどね。自分が愛してることをやり続け、そして夢を実現させるには生活のためにバイトをしなくちゃならないこともあるからな。でもラッキーなことに、俺たちもやっとバイトをせずに音楽だけに専念できるようになったんだよ。50歳をすぎてやっとな（笑）。

リップス　もう俺も給食のバイトはしてないよ（笑）。映画のおかげで人生が180度変わったんだ。

サスケ　おぉ、それは素晴らしいですね！　なんでも、この映画の監督だったサーシャ・ガバシとは昔からの知り合いだったとか？

ロブ　そうだね。じつは82年からの知り合いなんだ。だから30年近い付き合いになるな。

リップス　当時の彼はまだ15歳の少年でアンヴィルのファンだった。だから、その

やってます（笑）。

映画のおかげで人生が180度変わった。もう俺たちもバイトはしてない（リップス）

ときのファンの視点からこの映画は作られているんだよ。

サスケ　アンヴィルの歴史をずっと見てきた人物が作ったからこそ、あれだけの感動を呼ぶドキュメンタリー映画になったんでしょうね。

リップス　俺たちは今回の成功をカルマみたいなものだと思ってるんだ。自分たちがやってきたことが返ってきたっていうかね。15歳のサーシャが楽屋を「ファンです」とノックしてきたときにちゃんと大切に扱ったからこそ、数十年経ってこういうことになったんじゃないかってね。

ロブ　こう見えてもアンヴィルは昔からファンを大切にしてきたんだぜ（笑）。

サスケ　私も大切にしないといけませんね（笑）。しかしファンといえども、ドキュメンタリーとしてず～っとつきっきりでカメラに追いかけられることに抵抗はなかったですか？　私だったら途中で「もう撮るな！」ってイヤになっちゃうと思うんですよ。

リップス　サーシャのことは友人として凄く信頼していたし、この映画で俺たちのことをコケにするようなことはないって思ってたからね。最初にこの話を持ってきてくれた時点で、俺たちを成功に導くための手助けをしようとしてくれてるのがわかったから、彼には「自由に撮っていいよ」って伝えたんだ。

サスケ　なるほど～。リップスとロブがレコーディングスタジオで「もうこのまま解散するんじゃないか？」っていうぐらいの大ゲンカをしてましたけど、ああいう極限状態のときにカメラがつきっきりでも問題はなかった、と？

ロブ　もう撮影が始まってからはカメラの存在は意識してなかったな。

リップス　あの映画は80分くらいだけど、実際のところは約2年間も撮ってたんだ。だから気づいたらカメラがいてあたりまえになってたんだよ（笑）。

サスケ　自然にすべてをさらけ出すようになってたんですね。

グレン　まぁ、映画じゃ使用されなかったけどクレイジーなシーンもあったぜ。たとえば、スタジオのキッチンでロブがアリをスプーンで延々と殺してたりね（笑）。

ロブ　リップスに「それで食べるんだから、ちゃんと洗っとけよ」って言われたっけな（笑）。

サスケ　ハハハハ！

リップス　使われなかったシーンはたくさんあるから、たぶんサーシャはもう一本サブの映画が作れるんじゃないか？（笑）。

サスケ　さて、映画はアンヴィルが日本の『ラウドパーク』というライブイベントに招かれてハッピーエンドというかたちで終わりますが、そもそもアンヴィルの初来日というと84年の『スーパー・ロック'84イン・ジャパン at西武球場』になるんですか？

ロブ　いや、単独でも83年に来てるからそのときは再来日だね。でも、あのときのライブは凄い盛り上がりだったのを覚えてるよ。俺たちのほかにボン・ジョヴィやホワイトスネイクも参加してね。

ANVIL & THE GREAT SASUKE

サスケ　あの当時、私は高校生だったんですね。で、私の友だちが何人か西武球場に観に行ったんですけど、みんな「アンヴィルがダントツに凄かった！」って言ってましたよ！　バンドをやってた同級生連中はみんなアンヴィルを崇拝していましたから。

ロブ　俺たちはその当時からボン・ジョヴィなんかと比べてハードコアなメタルをやってたから、そういうものが好きなファンは喜んでくれたんじゃないかな。

グレン　ボン・ジョヴィはアンヴィルみたいにバイブレーターを使ってギターを弾いたりしないからな（笑）。

サスケ　ガハハハ！　そんなことやるのはアンヴィルだけですよ（笑）。なので、私の記憶の片隅にはずっとアンヴィルという名前が残っていて、今回の映画の話を聞いたときに「え、あのアンヴィル？」って凄く驚いたんですね。ホント、プロレス界でもなかなか例を見ないビッグカムバックだったと思います！

ロブ　そう言ってもらえると凄くうれしいね。あのライブから06年まで、俺たちはずっとくすぶってたから日本に行くことができなくてな。

リップス　でも、日本のファンからも「来てほしい」という手紙はもらってたから、ずっと行きたいとは思ってたんだよ。

サスケ　その思いが20年以上の時を経て、『ラウドパーク』でかなった、と。

ロブ　あのときの『ラウドパーク』はホントに感動したよ、大勢のファンが熱狂してくれてね……（しみじみと）。じつはアンヴィルの出演時間は午前中だったから、さすがにファンは集まらないんじゃないかって心配してたんだよ。で、俺たちがステージに上がる前にサーシャがどのくらい観客がいるか確認しにいったんだ。そのときにサーシャは満員の光景を前に胸がいっぱいになって、目を真っ赤にしながらバックステージに戻ってきてね。

サスケ　サーシャはずっと撮り続けていたわけですし、やっぱり感慨深かったんでしょうね……。

リップス　俺は満員だなんて知らないから「どうして目を赤くしてる？」って彼に聞いたんだ。そうしたらサーシャは「この

©Niko Tavernice for all Wrestler Photos





昨年は映画『レスラー』にすっかり影響されてしまったサスケ。そのときも今回と同じように「『レスラー』はみちのくプロレスだ」と言っていたが、もしかして今後はまさかのアンヴィルギミックも……!?



ANVIL & THE GREAT SASUKE

ざ・ぐれーと・さすけ■本名・非公表。1969年7月18日、岩手県出身。新日本プロレス学校を経て、90年3月にユニバーサル・プロレスでデビュー。現在はみちのくプロレス会長として、さまざまなリングで活躍中。また、小見川道大にも負けぬ愛猫家としても知られている。180cm、88kg。サスケブログアドレス→http://ameblo.jp/thegreatsasuke/

ANVIL■ 1973年、カナダにてスティーヴ・“リップス”・クドローとロブ・ライナーによって結成。96年にベースとしてグレン・ファイブが加入。昔からミュージシャンやファンからは「パワーメタルの父」「スラッシュメタルのゴッドファーザー」と認知され、メタリカやスレイヤーなど彼らに影響を受けた多くのバンドが栄光を手にしている。

好きなことをひたすらやり続ける。それが夢をあきらめない原動力（ロブ）

ライブは最悪なことになる……」って言いやがってね（笑）。

サスケ ハハハハ！ みなさんをビックリさせようと思ったんでしょうね。

グレン そういうこと（笑）。で、俺たちは「大丈夫だよ、サーシャ。500人しかいなくても俺たちは楽しめるから。心配しないで」って伝えたんだ。それでステージに出てみたらあの大観衆だったってわけさ。

リップス あのときの『ラウドパーク』はこれまででもっとも感動したライブの一つだね。俺は1曲目で観客席に降りていってギターを弾いたんだけど、そこでステージを振り返ってロブと目を見合わせたんだ。「いったい何が起きたんだ？」って二人で目で語り合ってね。

サスケ 私も皆さんとまったく同じような感動を味わったことがあるんですよ。みちのくプロレスを旗揚げした当初、東北エリアで200〜300人ぐらいしかお客さんが来ないことが1年続いたんですね。でも2年目に東京大会を開催したら、いきなり5000人くらい集まったことがあったんです。そのときはもう入場時から号泣してましたから（笑）。

グレン そうか、君もアンヴィルみたいなんだな（笑）。

サスケ そうなんです、ボクは『アンヴィル！〜夢を諦めきれない男たち〜』を観たときに「これはみちのくプロレスだ！」って思ったんですよ！ どんなに困難が目の前にあったとしても、ライブでファンと触れ合うことの素晴らしさを追求することと、それこそがエンターテインメントの本質だと思うんです。あの、この映画の邦題は『〜夢を諦めきれない男たち〜』ですけど、アンヴィルにとって夢をあきらめない原動力ってなんなんでしょう？

ロブ それはやっぱり好きなことをとにかくひたすらやり続けるってことかな。それこそ金儲けがしたいなら、べつにミュージシャンじゃなくてほかの仕事を考えるべきだと思う。でも、俺たちにとってはロッカーとして、ステージに立つことで得る喜びは何事にも代えられない大きなものなんだよ。それこそ売れてないときはライブに出演するのに、自分たちでバイトして貯めたお金を払ってでも演奏する機会をもらってたしな……（しみじみと）。

リップス だから、たとえミュージシャンとして成功しなかったとしても、自分が一番愛してることを続けるっていうのは凄く幸せなことだと思うんだ。結果がどうであれ、やっぱり好きなことを突き詰めていくことが大切なんじゃないかな。見てくれよ、俺たちなんか50歳をすぎてやっとこうして成功をつかみ始めたんだ。あきらめが悪いっていうのも、そんなに悪いことじゃないだろ？（笑）。

サスケ いや〜、説得力があります！ 今日は非常に勉強になりましたね。私も自分の夢だったこの道をもっともっと追求していきたいと思いました。みちのくプロレスもアンヴィルを見習って頑張ります！

【10年4月19日／都内・某所にて収録】


飛んで飛んで20年!
ザ・グレート・サスケ
プロレスデビュー20周年記念出版!!
サスケ流「2010年代のプロレスのあり方」を
悩めるコミックレスラー・マッスル坂井が受講!
プロレスにまつわる諸問題は解決したのか!?
+マッスル坂井
編集者デビュー第一弾
「坂井さん、何かお悩みでも
あるんですか?」(サスケ先生)
「そっ、そんなのレスラーなんですから
悩みだらけですよ!」(坂井)
「最近はケガを怖がるレスラーが
多いですよね。『じゃあ、おまえらは
何をやりたいんだ』って!」(サスケ先生)
「う、うわっ!　す、すいません!!」(坂井)
全国書店にて
絶賛発売中!!
B6変型判／328ページ
定価=1,890円(本体1,800円+税)
ザ・グレート・サスケの
飛ぶ教室
ザ・グレート・サスケ 著
マッスル坂井 編



話題沸騰中の
情熱ファイターが本誌初登場!
引きこもり時代から
なぜか裕木奈江まで
激語り!!

「僕はプロレスのおかげでいままで生きてこれました」

ファイヤー原田

5.2『K-1 MAX 2010 Japan Tournament 1st Round』で才賀紀左衛門に敗北するも、その比類なき存在感で会場の一番人気を獲得したファイヤー原田、35歳。このK-1のニューキャラクターのコク深い半生に迫る!　さぁ、Into The Fire!!

聞き手&撮影／鈴木佑　試合写真／羽根田直人

――原田さん、いまやK―1の63キロ級を代表する人気者になっちゃいましたね！

原田　いやもう、ホントすいません、そんなたいした人間でもなんでもないのに。なんかホントに、はい（必要以上に恐縮して）。

――才賀紀左衛門戦のあとに入院してたそうですけど、その後の体調のほうは？

原田　ちょうど昨日の夜に退院したんですけど、試合中に肋骨を2本折ってしまって、完治までには2ヵ月かかると言われまして。僕の場合はどんなに疲れてようが前に出るのが信条なんですけど、試合の途中からは声も出なくなっちゃってホント情けなかったです。

――試合後のコメントでも号泣されてましたね。

原田　いやもう、やっぱり選手って勝つことでしか周りの方々に恩を返すことができないですし、ましてやあれだけの大舞台に上げていただいたのに……。試合前にバックステージまで僕への声援が伝わってきて、もの凄く力をいただいたんですね。それであの結果ですから、ホント情けない以外になんの言葉もないです、はい（うつむきがちに）。

――でも、実際にあの日の会場を一番沸かせたのは原田さんですから。

原田　いやいや、全然、そんなとんでもないです！　なんか周りの方にもそう言っていただいてちょっと戸惑ってしまって、正直なところ、試合後は引退も考えたんです。

――そこまで思いつめましたか！

原田　はい、でも、やっぱり「勇気を

僕はミスター高橋本が出るまで
プロレスをガチだと思ってたんです

もらった」と言ってくださる方々もいて、もちろん厳しい意見もあるんですけど、僕なんかでもまだ応援してもらえるなら頑張ろうかな、と。

――ちなみに試合中の紀左衛門さんの挑発はどう思いました？

原田 いやまぁ、ホントに僕はこういう感じの選手なんで、もう、ええ。

――こういう感じの選手ってどういうことですか？（笑）。

原田 もう、簡単に言えばバカにされやすいというか（笑）。でもそれは全然かまわないんです、それで皆さんに楽しんでもらえるのならば。僕はプロっていうのは選手が持ち味、やりたいことをリングでさらけ出すことだと考えてるので、紀左衛門選手のああいうビッグマウスも素晴らしいと思いますし、それで僕が活かされた部分もありますし。リングはもちろん技術を競う場でもあるんですけど、同時に生き方や人間力を競う場だと思ってるんで。

――そういう原田さんのプロ意識のもとになってるものってなんなんですかね？

原田 ああ、それはもう完全にプロレスですね！（キッパリ）。

――あ、今日一番の声の張りですね（笑）。なんでも相当プロレスがお好きだとか？

原田 はい、大学時代からプロレスをずっと観続けてきまして。そもそものきっかけは94年の『第1回SUPER J−CUP』を、たまたま深夜にテレビで観てたんですね。で、ザ・グレート・サスケさんがギリギリのところで闘っている姿を観てたら、もうなんだか涙が止まらなくなっちゃって。それで一気にプロレスにハマって、90年代はメジャーからインディー、女子プロまでなんでも観るようになりましたね。

――もうドップリだったんですね。

原田 はい。やっぱり選手とお客さんが闘いを通じて感動を共有するという部分に引きつけられまして。もちろん専門誌も買ってましたし、バックナンバーも古本屋やプロレスショップで揃えて。あの、「プロレスについて考えることは喜びである」っていう言葉があったじゃないですか？

――ああ、お元気だった頃のターザン山本！さんのお言葉ですね（笑）。

原田 いや、まぁ、はい（笑）。いわゆる活字プロレスというか、そういうのって凄く大事だと思うんですよ。たとえば、いまの格闘技は技術のレベルは凄く上がってますけど、何か考える喜びみたいなのが少ないかなっていう気がするんです。もちろん勝ち負けが一番大事なんですけど、それ以上の語れる人間ドラマみたいなものがプロレスにはあると思ってまして。

――原田さん、プロレスを語りだすと熱いですね～。

原田 いやもう、当時は東北まで青春18キップで『ふく面ワールドリーグ戦』を観に行くほどでしたから（笑）。

――いわゆる'密航'ってやつですね。





煽りVで不器用ながら格闘技に対する愛、謙虚な気持ちを語り、場内の期待を一身に集めた原田だったが、1Rの紀左衛門のバックスピンキックで肋骨を負傷してしまう。

原田 そうです、それです、密航です！ いやもう、そんなふうに言っていただいて、なんだかありがとうございます（深々とお辞儀）。

――なんでお辞儀するんですか（笑）。そういえば紀左衛門戦の前にサスケさんから応援メッセージをもらってましたよね。

原田 そうなんですよ、もう憧れの人からだったんで凄くうれしくて。

――そのときに号泣してたのを『YouTube』で観てちょっとビックリしたんですよ。それと同時に「この人は信用できるな」と（笑）。

原田 いやもう、ホントありがとうございます（恐縮しながら）。あの、僕は何もしてない頃に95キロまで太ったことがあったんですね。でも、サスケさんが一時期ヒールになったときはホントにショックで悲しくて、一気に25キロも痩せましたから。

――え～、どれだけ純粋なんですか！

原田 いやもう、僕はホントにミスター高橋さんの本が出るまではプロレスはガチだと思ってたんで……（恥ずかしそうに）。

――ダハハハ！

原田 高田延彦選手がヒクソン・グレイシーに負けたときなんか、僕は東京ドームで30分間立てなかったですからね。あと、高橋本に長州力選手がG1クライマックスで途中欠場したときの理由が、ケガじゃなくてただ長州選手が休みたかっただけみたいに書いてあったのも凄いショックで……。だって、G1も毎年両国で観てましたから。

――その本がきっかけでプロレスを卒業しようとか思いませんでした？

原田 一時期は若干離れたんですけど、でもやっぱり人間ってよしあしを含めてあるから人間だと思うんですよね。そういういろんな人間らしさを内包してるという意味で、僕はやっぱりプロレスの奥深さが好きなんだってことに気づきまして。いまだにプロレスにはいい夢を見させていただいてるというか、プロとしてホントに勉強になりますし。

――ちなみにキックを始めたのはいつぐらいなんですか？

原田 ちょうど僕がキックをやり始めた頃に高橋本が出たんです。だから逆にキックをやってなかったら自分の心の拠りどころはプロレスだけだったんで、もっとショックを受けてたかもしれないです（笑）。

――重症になってたかもしれない、と（笑）。

原田 いや、ホントにプロレスがあったから僕はここまで生きてこれたぐらいなんです。それまでは私生活も凄くつまんなかったというか、僕は引きこもりだったんで……（しみじみと）。

――引きこもりだったというのは有名なエピソードですけど、それは具体的に時期としては？

原田 大学のときですね。もう家でプロレス観てるかゲームやってるかだったので、さっきお話ししたように体重も95キロまで太っちゃって。もう、歩くより転がるほうが早いぐらいというか（笑）。

――その時期は人との交流もあまり？

原田 いやもう、ほとんどないです。

ちょっとした麻雀仲間ぐらいはいるんですけど、ちゃんとした友だちというのは全然いなくて。
――ちなみに中高生のときはどんな感じだったんですか？
原田　そのときもやっぱり友だちができないんですよね、作るのが苦手というか……。一応、大好きな『スクール☆ウォーズ』の影響でラグビー部に入ってたんですけど、部活でもどうしても浮いちゃって。やっぱりこういう人間だからか、へんなヤツで終わっちゃうみたいです、ハハハ。
――「自分は人と違う」っていう自覚は昔からありました？
原田　それはけっこう子どもの頃からありましたね。協調性が足りなかったのか、気づいたら人としゃべるのが苦手になっていて。中2のときにイジメられてたこともあったんですけど、そのときなんかは一番地獄でしたね。もう、ホントにまったく話す人がいないんですよ。クラスが「アイツとは話さないほうがいい」みたいな雰囲気だったというか。
――それはツラいですね……。
原田　でもなぜか登校拒否にだけはならなかったんですね、高校までは一回も学校休んだこともないですし。だからなのか、その反動で大学に入って一人暮らしを始めたら、あっという間に引きこもりになっちゃって（笑）。
――へんな話ですけど、女の子と接したりっていうのは？
原田　あぁもう、全然話さなかったですね。生まれてからずっと、いわゆるクラスでいう「イケてないグループ」だったので（笑）。たぶん、まともに話すようになったのは27歳でキックを始めるようになってからです。キックのジムに入って、ようやく普通にいろいろな人と接することができるようになって。ホント嘘偽りなく、僕はキックに救われた男なんです。
――そもそもキックを始めたきっかけというのは？
原田　もともと自分のなかには強くなりたいという気持ちが凄くあったんですね。やっぱり心も身体も弱い人間だったんで、せめて誰かを守れるくらいにならないといけないなって。でも、最初は総合格闘技がやりたかったんです。それで当時の職場の近くにJ-NETWORKのジムがあって、そこは寝技のクラスも週に一回あったんで通いだしたんですけど、実際始めてみたら立ち技にハマってしまって。
――キックの水に合ったわけですね。
原田　はい。それでアマチュアの試合に出ることになったんですけど、そのときにジムの仲間たちに「頑張れ、頑張れ」って応援してもらえたんですね。それまでは人に「頑張れ」なんて言われたことがなかったんで、凄く感動してまた涙が止まらなくなっちゃって（笑）。自分が頑張ることで人が笑顔になるってことがこんなにうれしいものなのか、と。やっぱりその経験は僕の原点になってますね。
――ちなみに原田さんはもともと涙もろかったんですか？
原田　そうですね。昔はしょっちゅう泣いてて、ヘタするとロードワークしてるときにも涙が止まらなくて。
――なんでですか（笑）。
原田　いやもう、自分でもわからないです（笑）。あとは引きこもってる頃なんかは家で寝ながら天井見てるだけで泣けてくるんですよ。もう不安だとか絶望だとかで胸がギューっと締めつけられるような思いがして。
――その不安というのは先のことを考えたりして？
原田　そうですね、「このまま一生一人なんだろうな」とか（笑）。ホントに暗いことしか考えないんですよ。もしくは電車に乗ってると、目の前にカップルとか家族連れとかいるじゃないですか？　なんかそれを見てるだけでもう涙が止まんないんですよ。
――え～、それまたなぜ？
原田　いやもう、「幸せってちゃんとこの世界にもあるんだな」って（笑）。
――ダハハハ！
原田　もう、人と交流がないからあの頃はちょっとおかしくなってたんでしょうね。でも、キックをやるようになってからは初めて人と深く接するようになって。キックを通じていい仲間を見つけて、楽しい時間や場所があるってことがわかったんでホントによかったです、はい。
――キックを始めたのは27歳ということですけど、プロに転向するときに年齢は気にならなかったですか？
原田　あの、僕の場合は27歳になってから人とちゃんと触れ合うようになったんで、普通の人よりも感覚が10年ぐらい遅れてる感じなんですね。だからいまだに僕は二十歳のような気持ちというか（笑）。
――気持ちはK-1ユース世代と変わらない、と（笑）。
原田　いやもう、はい（笑）。それと、僕はあんまり自分を人と比べないようにしようっていうのがあるんです。やっぱり27歳から始めたということで、練習量なんかでも若い人にはかなわないですし。でも、練習してるほうが必ずしも勝つわけではないというか、リングはホントに人間力が出る場所だと考えているので、僕は自分に合った練習や自分の信じた道を貫いていきたいと思っていて。人と自分を比較すると、やっぱり僕なんかはどうしてもマイナス思考というか、卑屈になる場合があるんですよ。僕は35歳で一応ジムの会長をやらせてもらってますけど、全然僕なんかよりも素晴らしい方が周りにはたくさんいますし。だから人と比べず、でもその代わり甘えずに頑張ろうっていうのが、自分のポリシーとしてありますね、はい。……なんだかすいません、ホント長々と脈絡のないこ



愛しの裕木奈江の写真集を食い入るように見つめていた原田。熱狂的なファンだけに、トリビアを語りだしたら止まらない！「まだ彼女がそんな有名じゃない頃に田原俊彦主演の『逃亡者』っていうドラマの第1話にコンビニ店員で出てたんですよね。あとは……」（以下省略）。

女性と一緒にプロレスを観に行く、それが僕のずっと抱いてる夢です

とを、いやもう（恐縮して）。

——いえいえ（笑）。ちなみにいま原田さんのジムには女性会員の方は割合的にどのぐらい？

原田　そうですね、3〜4割ぐらいですかね。加盟しているJ−NETWORK自体が初心者の方や女性の方歓迎というかたちでやらせていただいていることもあって、はい。

——いまは会長という立場ですし、女性とは普通に接してる感じですか？

原田　いやもう、はい、そのへんはホントにおかげさまで大丈夫です。会長で挙動不審というわけにはいかないので（笑）。

——こういう言い方は失礼ですけど、原田さんは愛されキャラというか、女性人気がありそうな気もするんですけどね。

原田　いやいやいや！（必要以上に恐縮して）。たぶん僕の場合は、男に見られてないっていうか、ペットみたいな感じで。でも、僕はどんなかたちであれ、そういうふうに人に楽しんでもらえるのがうれしいので、はい。

——あの、先ほどゲーム漬けだったという話でしたけど、いわゆる恋愛シミュレーションゲームとかやってました？

原田　ああ〜！　いやもう、恥ずかしながら凄いドンピシャでハマってました、はい（赤面しながら）。

——ダハハハ！　『ときめきメモリアル』とかですか？

原田　そうですそうです！　あれなんかはホントにプレイステーション版、セガサターン版とか、いろんなバージョンをコンプリートしてましたね、はい。……あんまりこういうこと言っちゃうと会員さんにへんな目で見られるかもしれないんでアレですけど（笑）。でも、これも自分を正当化するようですけど、ああいうゲームをやってたから多少女性に免疫ができたというか、普通に接することができるようになったのかなとも思うんですよね（真顔で）。

——ワンクッションあったからよかった、と（笑）。なんでも原田さんは理想のタイプは芸能人でいうと裕木奈江なんだとか？

原田　いやもう、はい、そのとおりです（照）。ちょうど引きこもってた頃に『北の国から』を観ていたら裕木さんが出演していて、雨の中でピザを拾ってるシーンを観たときになんか「守ってあげたいな」と思ってしまって。テレビドラマの『ポケベルが鳴らなくて』も観ていて、裕木さんをイジめる役の男性がいたんですけど、テレビの前で「許せん！」とか思いながら拳を握ってましたから（笑）。あとはCDショップでお店の人にお願いして、店頭に貼ってあった裕木さんのポスターをもらって部屋にずっと飾ったりしてましたね。ただ、写真集はちょっと恥ずかしくて手が出なかったんですけど……。



ふぁいやー・はらだ■1974年8月14日、埼玉県出身。03年10月19日、J-NETWORKでプロデビュー。08年4月、自身が会長を務めるファイヤー高田馬場ジムをオープン。今年5月にK-1初参戦。「One for all , all for one」をモットーとし、そのまぶしいばかりのファイヤースマイルと、何かの儀式のようなファイヤーダンスで人気を博す。170cm、60kg。

——あ、ちょうどよかったです。今日は「ファイヤー原田を励まそう」というテーマもあったので、プレゼントとして裕木奈江のファースト写真集を持ってきました（笑）。

原田　うわ〜、懐かしいですね〜！（声を裏返しながら）。いやもう、ありがとうございます！　うれしいです、ホント！　ありがとうございます！

——じつは裕木奈江ってヌード写真集も出してるんですよね。そっちのほうがよかったですか？

原田　いやいや、そんなヌードだなんて僕にはちょっと刺激が！　いや、でもホントきれいです……（ウットリと写真集を見ながら）。

——性格的にはどんな女性が好みなんですか？

原田　いやもう、僕は基本的にダメな人間なんで、そこも含めて全部受け入れてくれるような人がいいですね。その代わり、僕はそこに甘えずしっかり頑張る、と。あの、僕にはずっと抱いてる夢があって、それは女性と一緒にプロレスを観に行くことなんですけど。

——なるほど〜、じゃあウチで募集しますか（笑）。

原田　いやいやいや、「アイツ、メディアを使って何やってんだ」ってなりますから、ホントに、はい（笑）。

——でも、今回K−1に出て注目を集めたことでますます人気が上がるんじゃないですかね。

原田　いやもう、そんなことはないです（恐縮して）。あの、マジメな話をすると、僕に対して「頑張ってて凄いね」って言ってくれる人もいるんですけど、僕はそんなことよりも愛する家族がいて、それを命懸けで守ろうとする人のほうが全然立派だなって思うんです。人間の幸せというのは僕は家族に一番あると思うんで、その点で自分はまだまだ未熟ですから。

——ちなみにそういったご予定というのは？

原田　まったくないですね！（キッパリ）。まだ僕にはその資格がないというか、いまやっとキックを通じて人生を学んでるっていうのが凄くあるんで。僕はまだまだ修行中の身なんで、はい。

——ホントに謙虚なんですね（笑）。さて、今後もK−1に上がりたいという気持ちは？

原田　今回せっかくK−1に上げていただいたのに、まだ僕はその恩を返せてないんですよね。やっぱりそれはK−1のリングで勝たなければ返せないと思うんです。だからあんな試合をした身でこんなこと言うのは申し訳ないですけど、もう一回チャンスをいただければうれしいですよね。K−1のリングで勝利のファイヤーダンスを踊って、K−1を通じていろんなお客さんと喜びを分かち合いたいと思います、はい。

——もともとダンスはお好きなんですか？　かなり独創的な動きですけど（笑）。

原田　いやもう、本能のおもむくままです。よく昔、友だちがいないんで一人でカラオケに行って、必ず振り付けして踊ってたんでそれが元なのかもしれないです、はい（笑）。

——ダハハハ！　では次回はファイヤーダンスを見れることを期待してます！

原田　あぁ、いやもう、ありがとうございます！　ホントありがとうございます！（必要以上に恐縮して）。

［10年5月11日／都内・ファイヤー高田馬場ジムにて収録］

誰かこの男を止めてくれ!? さわやかな顔して暴言三昧!!



「ファイヤー原田？ 次やったら下の歯も折ってやりますわ！」

K−1の極ワルプリンス

才賀紀左衛門

K−1 MAX63キロ級に大ヒール誕生!? ファイヤー原田戦で一夜にして悪名をとどろかせた才賀紀左衛門。その一戦を振り返ってもらうと出るわ出るわ、さらなる暴言の数々！ モンちゃんが言っちゃった！

聞き手／鈴木佑　撮影／吉場正和　試合写真／羽根田直人

——もしも〜し、こちら『kamipro』ですけど紀左衛門さんですか？

紀左衛門　あぁ、ひさしぶりの取材ですねえ。もっと僕のこと取り上げてくれなアカンのちゃいます？

——ハハハ、あいかわらずですね。今日は紀左衛門さんが一夜にして大ヒールになったファイヤー原田戦を中心に話を聞きたいと思いまして。

紀左衛門　もうそれ、周りからもいろいろ言われましたわ！「なんかおまえ、イジメてるみたいだったぞ」って（笑）。ていうかね、ファイヤー原田って、あれは素なんすか？

——え、どういうことですか？

紀左衛門　なんか見てて「コイツ、シラジラしいな」思うて。これが素じゃなく計算だったら「相当性格悪いな」って。

——あなたが言いますか（笑）。

紀左衛門　いやいや、僕なんかは正直やから言いたいこと言うてるだけですよ。

——煽りVで「63キロ級は華がないおっさんばっかりだ」とか言いたい放題でしたけど、紀左衛門さんこそあれは素なんですか？

紀左衛門　ああ、僕は素ですよ。ていうかね、ほかの63キロ級の選手ってみんないい人っていうか、キャラが地味でしょ？ だからなんでも素直に言う僕が「盛り上げな」っていう意識はありますけどね。

——とくに原田さんについて「負のオーラを感じる」って言ってたのが「ヒドいなぁ」って思ったんですよ（笑）。

紀左衛門　いや、なんか「僕、やられに来ました」みたいな感じやなぁって（笑）。ていうか僕ね、昔はヤンチャで凄いイジメっ子やったんすよ。だから僕がファイヤー原田とやったら「イジメてるように見えるんちゃうかな」って思ってたら、案の定そうなってしもうて。

——場内も原田さんに声援で、紀左衛門さんにはブーイングでしたね。

紀左衛門　ブーイングはむしろうれしいですよ、それだけ注目されてるってことやし。それに僕が勝ったら「この連中は応援してる選手が負けてどんな気持ちになるんやろ」って思うし（笑）。

——ブーイングを屁とも思ってないみたいですね〜。

紀左衛門　まぁ、少なからず僕のことを大阪から応援に来てくれてるファンもいるんで、そういう人らのためにしっかり勝って盛り上げたいとも思いますしね。あのね、ファイヤー原田が引きこもり代表だったり、自演乙がオタク代表の格闘家みたいになってますけど、それやったら僕は大阪のヤンチャの代表ですよ。

——ヤンチャの代表、ですか？

紀左衛門　そうそう。ヤンチャなヤツって、みんなから邪魔者扱いされるじゃないっすか？ 肩身の狭い思いをしてるっちゅうか。でも、格闘技にのめり込んで頑張ってるヤツらもいっぱいいるんで、僕はそういうコらのためにもやったろうかなって。そういえば、ファイヤー原田って入院してるんでしょ？

——試合中に肋骨を骨折したみたいですよ。

紀左衛門　へ〜、それでも最後まで立ってたわけやからやっぱり気合い

聞き手／鈴木佑　撮影／吉場正和　試合写真／羽根田直人

入ってるんやな〜(しみじみと)。そのへんは凄いと思いますよ、「コイツ、おっさんのくせにやるなあ」みたいな。でも「まぁ、しょせんおっさんやからな」って感じですけど(笑)。
——ダハハハ！　う〜ん、二人は見事に正反対のキャラですし、できれば名勝負数え歌みたいにまた再戦も観たいですけどね。
紀左衛門　ああ、いいんじゃないっすかね！　何回やってもいいと思いますよ。その代わり、次やったときは入院じゃ済まないっすよ。というか、向こうは僕とやりたくないんじゃないっすかね？　今度やったら僕、下の歯も折ったりますよ！
——ホント、イジメっ子体質ですね〜。で、今回は勝ったものの、まだ次のトーナメントに進出が決まったわけじゃないんですよね。
紀左衛門　そうそう、そうなんですよ〜。『kamipro』でも僕が出れるように煽ってくださいよ。僕、石川直生をドツいてやりたいんすよ！
——ほ〜、なんでナオキックなんですか？
紀左衛門　アイツ、カッコつけてるだけやから。でも逆に「凄いなあ」って思いますけどね。なんであんな才能もセンスもないのに「あの自信はどっから出てくんのや」みたいな。
——うわ〜、メチャクチャ言いますね(汗)。
紀左衛門　だって若くもないじゃないですか、もう31とかでしょ？「俺が63キロ級を引っぱる」って言ったって歳なんやから、「はよう引退しちまえ」みたいな感じですわ。僕や久保優太、卜部弟とか若くて伸びしろがある人間が頑張っていけばいいんですよ。

次はナオキックとやりたいですわ ホンマ、ETみたいな顔しやがって

——まぁ、石川選手は前々から「『Dynamite!!』にキックルールで出たい」ってアピールしてますし、それこそ「いましかない」って気持ちが「自分が引っぱる」って発言につながってるんじゃないですかね。
紀左衛門　そんなん、「いましかない」と思うんやったら大月晴明さんみたいにやられ際を考えな。「俺に負けたら引退してくれよ」って感じですわ。ホンマ、ETみたいな顔しやがって(笑)。
——いやいや、石川さんはあのオスカープロモーション所属のモデルでもあるんですから。
紀左衛門　あんなんがなれるんなら「誰でもモデルなれるんちゃうか？」って思うてまいますよ。
——でも、63キロ級はイケメン揃いって言われてるじゃないですか？　エース候補の上松大輔選手も『Men's egg』の読者モデルですし。
紀左衛門　いや〜、『Men's egg』って、なんかバッチいでしょ？
——ダハハハ！　バッチい(笑)。え、どういうことですか？
紀左衛門　なんかギャル男とかってバッチくないですか？　あんなん恥ずかしいですわ。
——紀左衛門さんはギャル男ではないんですか？
紀左衛門　よう言いますわ！　一緒にしないでくださいよ。僕は純粋にオシャレですから。ていうかね、K−1ってなんでもかんでもイケメンてつけすぎなんですよ。
——イケメンは自分だけでいい、と？



ファイヤー原田戦では試合中に涼しい顔で両手を広げたり、アゴを突き出したりと挑発行為を繰り返したモンちゃん。しかし、試合後もまったく悪びれるところはないからさすが。コイツはワルだぜ！

紀左衛門　まぁ、そのへんは人それぞれ好みっちゅうもんがあるんでね、フフフ。
——イヤらしい言い方しますね〜。あ、そういえばファイヤー戦後に谷川さんにお説教されたらしいじゃないですか？
紀左衛門　あぁ、怒られちゃいましたね、ハハハ！　なんや「武士の情けとしてあれは倒さなきゃダメだった」って言うてましたわ。確かにね、僕がスタミナ切れてすっきりKOできなかったのも悪いですけど、あんだけ守りに入られたら攻めるほうもしんどいですわ。でも次はやっぱり、谷川さんの期待にしっかり応えたいなって。
——谷川さんはK−1ユースがお気に入りでしたけど、紀左衛門さんは自分でかわいがられてると思います？
紀左衛門　いやぁ、僕は全然かわいがられてないっすよ、フフフ。谷川さん、いっつも顔見るごとに怒るんですよ。たとえば「紀左衛門、性格悪いよ。性格って試合に出るよね〜」って。「いや、性格じゃなくスタミナが切れただけやから」とか思いながら聞いてますけど(笑)。
——あんまり反省してない(笑)。
紀左衛門　でもそうやって、気にかけてくれるのはうれしいっすよ。やっぱり僕からしたら谷川さんって、昔からK−1に出てる人やから何回会っても緊張しますしね、フフフ。
——本当かな〜？　あの、いまK−1って存続危機なんじゃないかって話もありますけど、紀左衛門さんみたいな若い人はそういうのを聞くとどう思います？
紀左衛門　やっぱりそこは自分の手でなんとかしたいなって思いますよ。自分で言ったらあれなんすけど、僕はヤンチャしてたから、K−1がなかったらロクでもない人間になってたと思うんすよ。だからホンマにK−1のおかげでいまの自分がおるって思うんです。そういう意味で今回のメンバーのなかでは自分が一番K−1が好きやと思うし。歳は若いけど、こっちはK−1甲子園の第1回目から出てるんやから、ほかのメンツと比べてそのぶん愛情はありますよ。
——よかったです、最後に優等生発言が出て。
紀左衛門　いやいや、これは本音っすよ。だからね、そうやって石川直生みたいな中途半端なヤツが出てきたらね、「何が俺が引っぱるじゃ、おまえしばくぞ！」って思いますよ。
——次の標的はナオキックだ、と。
紀左衛門　ナオキックとやりたいなあ。なんべんもおもいっきりドツキたいわあ。ホント、『kamipro』で煽ってくださいよ。ね？『kamipro』最高！　フフフ。
【10年5月10日／電話取材にて収録】



さいが・きざえもん■1989年2月13日、大阪府出身。幼少時代から空手を始め、その後大成塾に入門。K−1初登場は07年『Dynamite!!』でのHIROYA戦。ジャニーズ系の顔立ちからは想像できないような毒舌キャラで、今後63キロ級のキーマンとなること必至？　168センチ、60キロ。



これぞ雷電サプライズ!!

バンタム級トーナメント出場者公募、入江涙のメジャーデビュー!!

SRC新展開

センゴク・ライデン・チャンピオンシップ!!　すなわちSRC!

これまで雷電といえば、『週刊少年ジャンプ』で連載されていた『魁!!男塾』に登場する三面拳随一の使い手が代名詞だった。ちなみに本誌は作者の宮下あきら先生に「雷電とは何か?」をテーマにインタビューを申し込んだが、あたりまえのように断わられました。

ま、そんなことはどうでもいい。

いま『SRC』には、「う〜ん、雷電!!」と絶叫したくなるような〝ライデン・サプライズ〟が次々に起こっているのをご存知だろうか――!?　これからは雷電といえば、SRCなのだっ!

まず雷電発表な一つ目は、SRCは新ブランドの『SRC ASIA』を立ち上げ、7月4日にディファ有明に進出。そこでバンタム級(61・2キロ以下)トーナメントを開催するが、なんと出場者は前代未聞の公募で行なわれることになったのだ!

誰でも出られるかといえば、そんな山口日昇みたいなことはない。

詳しい出場資格はオフィシャルホームページなどを各自調査していただきたいが、トーナメントは16人制。1回戦のファイトマネーは10万円(2回戦時には増額)、優勝賞金は300万円!　このような新機軸の試みは格闘技界にどんな影響を与えるのか注目なのである。

そして二つ目の雷電発表は、あの入江秀忠の参戦!

苦節12年、〝涙のカリスマ〟がついにメジャーイベントに足を踏み入れる!

……と、書いたところで全国のイリエマニアから矢のような突っ込みが入ったことだろう。「我らが入江は『戦極の乱2009』に出てたじゃないか?」と。

しかし、あれはオープニングファイトなんですよ、皆さん。

さらに驚くことに、今回は向井代表いわく「ファンや関係者にヒアリングした結果、参戦を決めた」そうなのだ!　ヒクソン・グレイシー戦実現やメジャーイベント参戦のために署名運動を頻繁に行なってきた入江だが、そんなヒアリングでこうも簡単に決まるのは複雑なんだが……。それにしてもいつの間にそんなヒアリングを!?

とりあえず、日本のメジャーイベントにして次々に新機軸を打ち出しているSRCの雷電な仕掛けは今後も見逃せない!　入江のアカペラは聴けるのか?　もちろん宮下あきら先生にも引き続き取材オファーをするぜ!　ライデンッ!!

(文/民明書房)

金原vsサンドロがメイン!

『SRC13』

東京・両国国技館
6月20日(日) 開場13:00 開始15:00

対戦カード

金原正徳 vs マルロン・サンドロ
泉浩 vs イ・チャンソブ／真騎士 vs ホドリゴ・ダム
菊田早苗 vs Yasubey榎本／川村亮 vs 入江秀忠

チケット料金(全席指定・消費税込)

VIP席¥100,000(特典つき)／ロイヤル雷電シート¥50,000(特典つき)
マスRRS席¥40,000／マスSS席¥20,000
雷電シート¥9,000(パンフレットつき)／S席¥5,000

お問い合わせ

株式会社ワールドビクトリーロード info@src-official.com

「肉を斬らされて骨を断たれた」な読者プレゼント

kamipro PRESENTS

応募要項

ハガキに応募券を貼り、①～⑧の質問の答えをご明記のうえ、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定いたします。ただし、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますのでご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます(商品は2010年6月25日(金)頃発送予定です)。

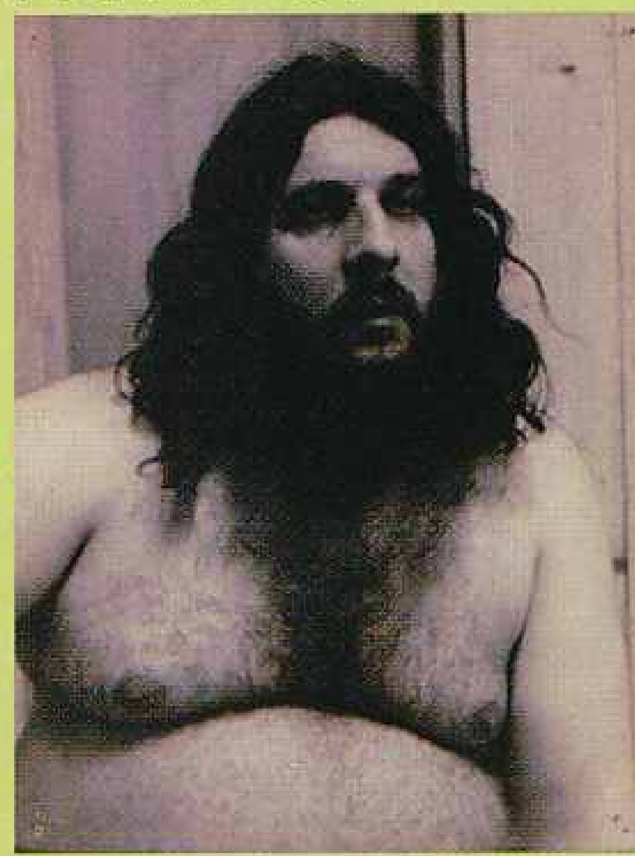
【質問事項】①郵便番号・住所・電話番号②氏名③年齢・職業④希望商品⑤おもしろかった記事&その理由⑥つまらなかった記事&その理由⑦ケージで見てみたいカードといえば?⑧あなたがkamiproに望むことは?

【宛先】〒162-0805
東京都新宿区矢来町41-1 ザ・フタガミハウスNo.1
(株)ツー・スリー内『kamipro』編集部
「サブタイトルは"BUZAMA"」係まで

※応募締切は2010年6月11日(金)当日消印有効

PRESENT*01

1名様



グレート・アントニオ日本プロレス公式パネル

[闘道館]

今回、闘道館が提供してくれたお宝グッズは、60年代に実際に日本プロレスの会場などで使われていた密林王グレート・アンオニオのパネル！ こちらは百田家の秘蔵品だ。

闘道館■http://www.toudoukan.com/

PRESENT*02

1名様



サイン入り

映画『アンヴィル! ～夢を諦めきれない男たち～』
アンヴィル&ザ・グレート・サスケ サイン入りポスター

[非売品]

夢の対談が実現したアンヴィルとサスケの4人のサイン入りポスター！ プロレスファンはもちろん、メタラーもヘッドバンギングしながらドシドシ応募を!

『アンヴィル!～夢を諦めきれない男たち～』公式サイト■http://www.uplink.co.jp/anvil/

PRESENT*03

1名様



菊野克紀直筆サイン色紙

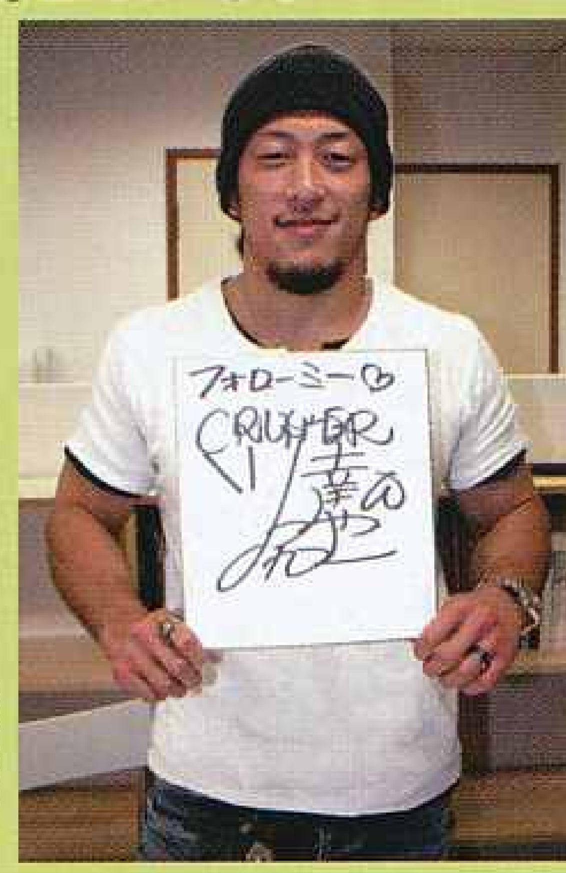
[非売品]

ファイター以外に会社経営者としても奔走する菊野からは、ヒーローになるためのポリシーである「輝魂」のフレーズ入りのサイン色紙！ 押忍!!

菊野克紀オフィシャルウェブサイト■http://www.kikunokatsunori.com/

PRESENT*04

1名様



川尻達也直筆サイン色紙

[非売品]

本紙の特集に感化されてツイッターを始めた川尻のサイン色紙には「フォローミー」の文字が！ ちなみにクラッシャーのアカウントは「CRUSHER_MMA」。

クラッシャープロジェクト■http://crusherproject.com/

PRESENT*05

1名様



JJサニー千葉直筆サイン色紙

[非売品]

とてもマジックで書いたとは思えない"世界のサニー"の達筆すぎるサイン色紙！ 落款まで入った一枚はもはや芸術作品の領域。ぜひ家宝にどうぞ!

サウザンリーヴス・ハリウッド 京都■http://jacwest.com/index.html

PRESENT*06

1名様



FRONT

澤宗紀 Tシャツ BLACK

[NO NEED NEW／¥3,675(税込)]

さまざまな団体で活躍中、ランジェリー武藤としても知られる澤宗紀のTシャツ！ 背中にはNO NEED NEWのロゴをプリント。サイズはM。

NO NEED NEW■http://www.no-need-new.com/

PRESENT*07

1名様



FRONT

ノスタルジック・アルティメットボーイ Tシャツ

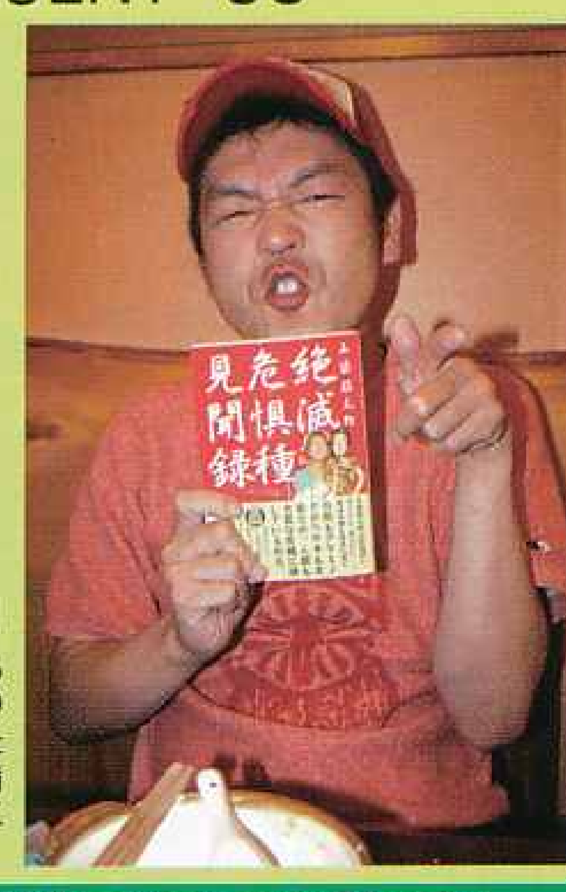
[アートジャンキー／¥3,990(税込)]

アートジャンキーからは「昭和の格闘技界を背負い、21世紀MMAに果敢に挑戦する」という、どこか懐かしい究極少年のTシャツ！ サイズはL。

アートジャンキー■http://www.artjunkie.jp/

PRESENT*08

1名様



単行本
『絶滅危惧種見聞録』

[廣済堂出版／¥1,365(税込)]

変態座談会でおなじみの玉ちゃんが、愛してやまない日本の絶滅危惧種たちを訪ね歩いた珠玉の一冊！ 玉ちゃん節満載のエッセイが心にぐっとくること間違いなし。

廣済堂出版■http://www.kosaidoakatsuki.jp/shuppan/

PRESENT*09

1名様



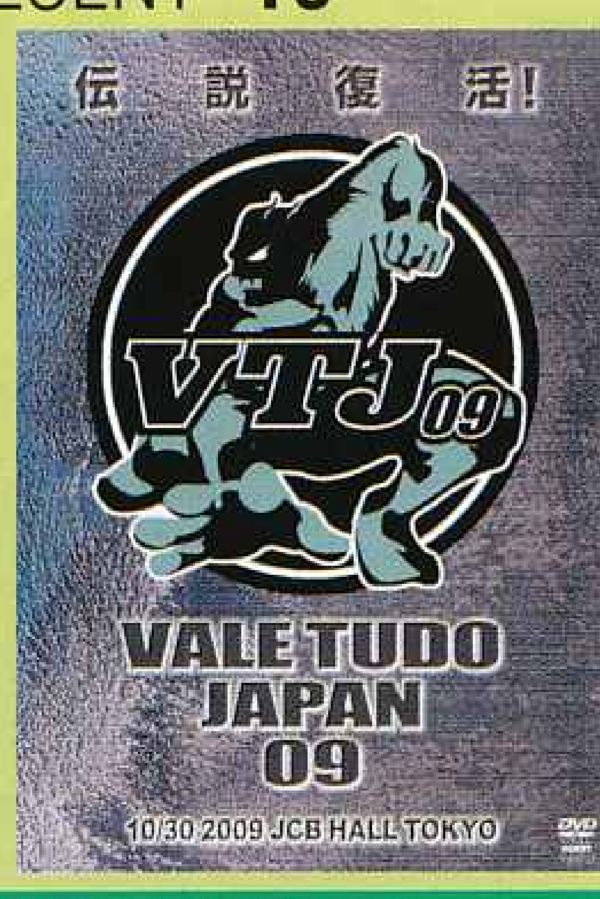
DVD
『息吹～最終章～』

[クエスト／¥5,880(税込)]

団体の垣根を越え、吉田万里子が主宰してきた女子プロレス「息吹」。2009年の第27回～第33回大会までと感動のフィナーレ「息吹FINAL興行」を全試合収録。

PRESENT*10

1名様



DVD
『VALE TUDO JAPAN 09』

[クエスト／¥5,880(税込)]

昨年、10年ぶりに復活したバリ・ジャパの激闘をDVD化！ 五味隆典vsトニー・ハービー、リオン武vsアレッシャンドリ・フランカ・ノゲイラ戦などを収録。

PRESENT*11

1名様



DVD
『ジャック・ブリスコ&ペニー・バナー』

[クエスト／¥5,040(税込)]

スーパースターの往年の勇姿と現在の素顔を追った感動のドキュメント。今回は"南部の麒麟児"ジャック・ブリスコと"リングの牝豹"ペニー・バナー編。

クエスト■http://www.queststation.com/

kamipro147 応募券
ヤスベイ

ちぎって持ってっちゃダメだぞ!!

こちらでも毎週プレゼント実施中!! **http://kamipro.com/**

kamipro 紙のプロレス
No.147
2010年6月5日 発行

発行人
浜村弘一
編集人
斉藤慎一
青柳昌行
編集統括本部長
ジャン斉藤
編集スタッフ
堀江ガンツ
松下ミワ
スズキィ
八木賢太郎（ボード手入れのため非番）
終身名誉バイザー
吉田 豪
助っ人
ジャイ子
編集次長（アバパネもう一丁）
松林 貴
デザインGM
出田 一（TwoThree）
デザイン班長
金井ヒサくん（TwoThree）
デザイン
松坂マツくん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
鐘田やっちゃん
白木みのる（以上、TwoThree）
カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
吉場正和
山口比佐夫
戸成嘉則
タイコウクニヨシ
梅木麗子
金山フヒト
丸山剛史
神楽坂名物
入江"五十番"肉まん（TwoThree）
雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠
業務部
樽本"CTP化成功"義之
編集庶務
原 正典
山内ユリコ
編集チアガール
金川"ナツコ"奈津子
安部"クリン"悠子
テイスティング会マダム
廣橋久美子
発行所
株式会社エンターブレイン
〒102-8431
東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555（代表）
発売元
株式会社角川グループパブリッシング
〒102-8177
東京都千代田区富士見2-13-3
印刷
図書印刷株式会社
協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS
FightSport

■広告掲載のお問い合わせは下記まで
株式会社エンターブレイン
スポーツ企画編集部 ☎03-3265-7166

本書の内容、不良品交換等についてのお問い合わせは下記の窓口までお願いいたします。なお、内容につきましては記載以上の詳細につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

[カスタマーサポート]
☎0570-060-555
（受付時間／土日祝祭日を除く 12:00〜17:00）
メールアドレス support@ml.enterbrain.co.jp

●個人情報の取り扱いについて
本書にお寄せいただいたハガキ、各種のお問い合わせに関連してご提供いただいた個人情報につきましては株式会社ダブルクロス、および株式会社エンターブレイン（URL: http://www.enterbrain.co.jp/）、それぞれのプライバシー・ポリシーの定めるところにより、取り扱わせていただきます。



次号特集テーマは

骨折!?

※特集内容は超高確率で変更になります。

NEXT ISSUE

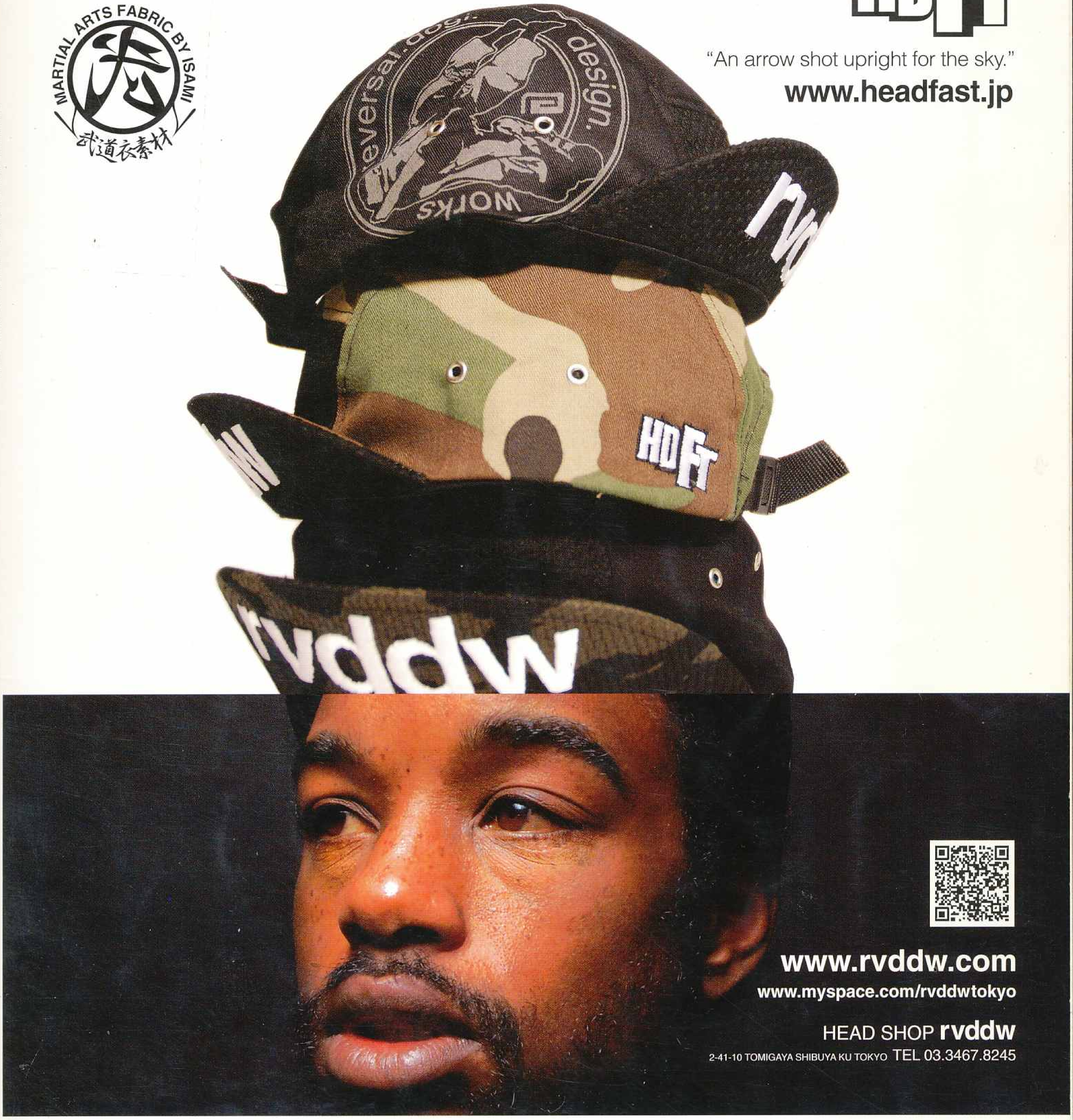
5.29『DREAM.14』徹底詳報

No.148は6月23日（水）発売予定!

※地域によっては多少発売が遅れることもあります。踏み倒すことはありません!

No.147
2010年6月
発行人
浜村弘一

kamipro
2010 147
幕末的格闘時代をサバイブせよ!!
開国するぜよ!
2010年6月5日
発行人／浜村弘一　編集人／斉藤慎一、青柳昌行
発行所／株式会社エンターブレイン　〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)
発売元／株式会社角川グループパブリッシング　〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3
enterbrain



9784047265547

特別定価：本体895円＋税
雑誌 61971-83 Ⓗ2010.09
Printed in Japan 図書印刷株式会社

ISBN978-4-04-726554-7
C9476 ¥895E
1929476008954

「FEG危機説」を断固否定!!



大会速報、選手ブログは携帯で!
kamiproMove

2010
147
特別定価 940yen

出でよ、マット界の坂本龍馬!
幕末的格闘時代をサバイブせよ!!

開国するぜよ!

kamipro 2010 147
「山口も決して無責任な男じゃないんです」(坂田亘)

kamipro 2010 147
幕末的格闘時代をサバイブせよ!!
開国するぜよ!

2010年6月5日
発行人/浜村弘一　編集人/斉藤慎一、青柳昌行
発行所/株式会社エンターブレイン　〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)
発売元/株式会社角川グループパブリッシング　〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3

eb! enterbrain





特別定価:本体895円+税
雑誌 61971-83 Ⓗ2010.09
Printed in Japan 図書印刷株式会社